

2022 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—



2023 年 3 月

関西大学総合情報学部

はじめに

本報告書は、高槻市と関西大学が共同で、高槻市民を対象に実施した令和4年度市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」の成果を取りまとめたものです。この調査は、関西大学総合情報学部で開講している「社会調査実習」(2022年度)の授業の一環として行われているもので、当授業の受講生が、調査票の設計からデータの入力作業まで、実施全体に大きく関わっています。たとえば、春学期には、受講生各自の関心から調査テーマを設定した上で調査票の設計を行います。そして、秋学期には、調査票のデータ入力と分析、最終報告書の執筆を行うことで、社会調査の実施に必要となる一連の過程を経験します。

このような背景から、例年、この調査では、大学生らしい自由な発想の調査テーマが選ばれる特長があります。今年度も、睡眠時間と生活の質、SNSと友人満足度、性格によるコミュニケーション手段の違い、森林レクリエーション活動への選好、共生社会についての認知、新型コロナウイルスの感染不安など、若者にとって身近なものから、地域や社会の問題に関わるものまで、多様で独創的なテーマが並びました。これらの調査結果は、単に一つの地域の市民調査という枠を超えて、学術的にもさまざまな知見を提供するものだといえるでしょう。

本調査は今回で12回目となります。過去の11回の調査では、回収率が60%前後を推移しており、今回も60.7%の回収率を達成できました。前々回、前回に続き、コロナ禍という状況で6割という回収率は非常に高い水準だといえます。これは関係各位の皆さまのご協力があったからこそ、成しえたことです。まず、関西大学総合情報学部の松本渉先生には、調査の準備から報告書の取りまとめまでのすべての段階で、毎回、的確で丁寧なご助言をいただきました。本調査を無事終えることができたのは松本先生にご尽力いただいたおかげです。また、ティーチング・アシスタントの西田尚紀さん、スチューデント・アシスタントの正木篤宏さんと廣森海斗さんには、これまでの社会調査の経験やスキルを活かして、受講生に寄り添った立場から様々なサポートをしていただきました。

この「社会調査実習」の授業では、大規模な郵送調査を実施する都合上、時間的制約のなかで、社会調査の一連の過程を一つずつ進めていく必要があります。受講生の皆さんには、調査テーマの設定、データ入力作業、データ分析と報告書執筆などすべての段階で、熱心に粘り強く、調査や作業に取り組んでもらいました。今年度の受講者は7人と少なく、データ入力作業は大変だったと思います。この報告書は、こうした受講生の皆さんの努力によって完成したものといえます。

最後に、本調査の実施にあたり、高槻市市民生活環境部市民生活相談課の皆さま、関西大学総合情報学部オフィスの皆さまに多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。そして何より、本調査にご協力いただきました高槻市民の皆さまに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2023年3月

関西大学総合情報学部教授 阪口 祐介

目次

はじめに		i
第 1 章	調査の概要	阪口祐介・松本渉 1
第 2 章	調査結果の概要	西田 尚紀 8
第 3 章	睡眠が及ぼす精神への影響	岩元 心紀 131
第 4 章	パンデミック下における不安とマスク装着への意識	井谷 勇輝 140
第 5 章	子供のころの習い事が将来に与える影響	中谷 聖哉 148
第 6 章	性格特性とコミュニケーション手段の選択	馬上 太一 155
第 7 章	共生社会認知の動機としての他者理解	今西 凜 166
第 8 章	SNS の利用が友人満足度にもたらす影響	岸 凌太郎 176
第 9 章	森林レクリエーション活動の CVM 分析	今村 勇哉 181
資料		189
予告はがき		191
調査票		193

第 1 章 調査の概要

阪口 祐介・松本 渉

1. 調査の概要とスケジュール

高槻市と関西大学による市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」は、2022(令和 4)年 8 月から 9 月にかけて、高槻市と関西大学総合情報学部によって行われた。社会調査実習の一環として、春学期には調査票の作成が、夏休みには調査票発送作業が、秋学期にはデータ入力、データ作成、分析等が行われた(表 1)。

表 1 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査スケジュール

	日付	授業内	授業外
春学期	4/7	「社会調査実習」前期授業開講	高槻市と関西大学の
	4/14～7/21	調査票の作成	打ち合わせ(随時)
夏休み	7/31		サンプリング
	7/25～8/5		調査票印刷
	8/9	調査票発送準備作業	
	8/22		予告はがき発送
	8/25		調査票発送
	9/9		返送締切日
秋学期	9/22	「社会調査実習」秋学期授業開講	
	9/22～11/24	データの入力・読み合わせ	
	11/24～12/1		データクリーニング
	12/1～12/8	分析方法の習得	
	12/15～1/12	中間レポートの提出・報告	速報版報告書執筆
	1/19	最終授業(最終レポートの提出)	報告書執筆
	1/19～2/28		報告書編集

2. サンプリング

調査対象者：18歳以上85歳未満の高槻市民(1937年8月1日～2004年7月31日出生)

抽出名簿：住民基本台帳（2022(令和4)年7月31日現在）

標本抽出法：層化抽出法

（具体的な手順）

1. 2022(令和4)年6月末現在の人口に基づいて、性別と年齢によって作成された12の層の人口を算出する。次に、その人口の比率に従って、計画標本2,000を各層に割り当てる（表2）。

表2 層化の基準日の人口構成と計画標本の割り当て

	令和4年6月末現在の人口			計画標本の割り当て		
	男	女	男女計	男	女	男女計
18・19歳	3,460	3,269	6,729	25	23	48
20代	16,464	16,640	33,104	118	119	237
30代	17,787	18,140	35,927	127	130	257
40代	24,786	25,500	50,286	177	183	360
50代	24,861	25,276	50,137	178	180	358
60代	17,152	19,361	36,513	123	138	261
70代以上	29,248	37,772	67,020	209	270	479
合計	133,758	145,958	279,716	957	1,043	2,000

2. 各層で割り当てられた人数を系統的に無作為抽出する。

3. 調査実施上の工夫

この調査では、調査および回収を円滑に実施するために、過年度と同様の工夫を行っている。

予告はがきの送付

調査票が届き次第、スムーズに回答できるように調査票発送の3日前に予告はがきを送付した。このように事前に調査の実施を通知することで、調査対象者は心の準備をすることができ、また調査に対する期待感を高められると考えたからである。なお、見やすくシンプルな文面とするため、ご挨拶以外にはがきに掲載した情報は最低限（「近日中に大きな茶封筒（ボールペン入り）が届くこと」「対象者が無作為で選ばれたこと」の2点）にとどめた。今回は8月22日(月)に予告はがきを送付した。

調査票送付日

調査票の送付は、大学の窓口の盆休み終了後、最初の木曜日である 2022(令和 4)年 8 月 25 日(木)に行った。勤め人の夏休みを避けた上で、金曜日頃に調査票を受け取るためである。

同封物

筆記具を探す必要がないようにという配慮から、箱入りボールペンを同封した。また、箱を同封することで封筒の形状を目立たせ、ほかの郵便物に紛れなくなるという効果もある。なお事前にも事後にも金銭的な謝礼は一切行っていない。

調査票の用紙

目立つように、浅黄色(なお前年は若草色)の紙を使用した。また、やや重くなるが、裏面が透けて読みにくならないように厚手の紙を利用した。

調査票における挨拶文

すぐに質問文が目に入るようにするため、挨拶文は 1 ページの上段のみにとどめた。その主な内容は、①調査目的以外に一切利用しないこと、②結果の公表を約束すること、③住所や名前を記入しないことをお願いすることの 3 点である。それぞれ、①安心感の付与、②社会還元の明示、③匿名性の担保を示している。

調査票の構成デザイン

二段組にすることによってスペースを有効に利用し、A4 サイズ 8 ページ(両面)の範囲に収まる調査票とした。文字フォントは、質問文を太字の MS ゴシック、選択肢を MS 明朝としてメリハリをつけた。

封筒

調査票送付用封筒については、A4 サイズの調査票を折り曲げずに済むように、角 2 サイズの糊付封筒を利用した。

一方、返信用の封筒については、ハイシール加工済みの角 2 サイズの封筒を利用した。調査対象者が、回答票を封入して返送しやすくするためである。

催促状(なし)

催促状の送付は行っていない。

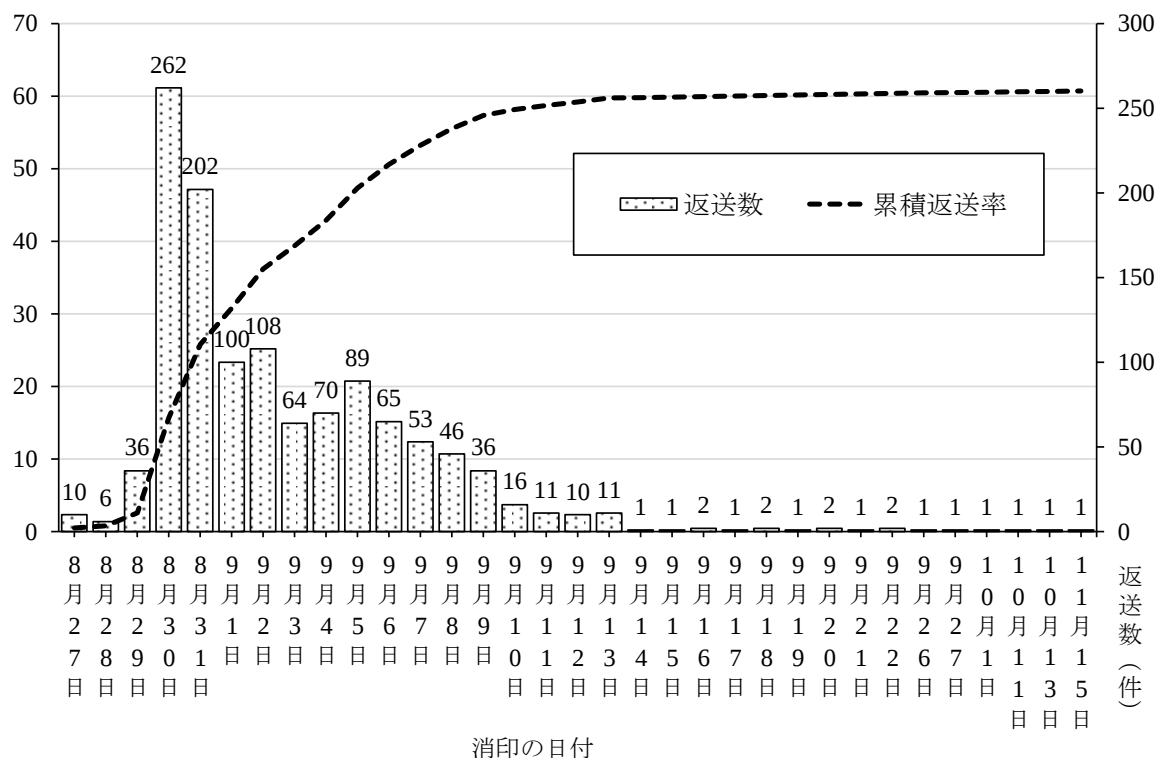
4. 調査票の回収状況

4.1. 返送状況

調査票の返送状況について述べる。図 1 は、消印の日付から調査票の返送状況の経過を示したものである。

最も早い消印は翌 8 月 27 日(土)である。返送日の山が二つみられる。最初の山は、最大の返送数 262 となった 8 月 30 日(火)であり、翌日の 8 月 31 日(水)も返送数 200 と多いことがわかる。これは、調査票受領後におとずれた土日を利用した記入・返送のピークといえる。もう一つの山は、返送数 89 であった 9 月 5 日(月)である。調査票受け取り後のピークの後に、平坦な山が続く返送のパターンがみられる。

累積返送率については、例年と同じく、調査票の返送受け取り期間の前半で返送率が 50% 台後半に達している。累積返送率のグラフ(図 1)が示しているように、回収期間後半に入ってもなおさらに上昇を続け、受け取り締切日頃には返送率が 60% を推移する結果になった。



(注1) 返送数とは、回答票の返送日ごとの件数(日付は消印による)

(注2) 累積返送率とは、その日までに返送された件数の累計を計画標本サイズで割った値

図 1 時系列に見た調査票の返送状況

4.2. 回収率と調査不能の内訳

郵送調査の特質上、締切日の9月9日(金)以降も調査票の返送が続いた。そのためしばらくの間返送を受け付け、11月15日(火)で打ち切った。返送されてきた調査票総数は1,214件であり、無効調査票は0であった。最終的に有効な回答票数を1,214件、回収率を60.7%とした。調査不能の内訳も含めた調査の状況は表3の通りである。

表3 回収率と調査不能の内訳

		件数	(%)
1. 調査不能	尋ね当たらず等	3	(0.2%)
	未返送	783	(39.2%)
	無効調査票	0	(0.0%)
	計	786	(39.3%)
2. 有効回答票		1,214	(60.7%)
3. 計画標本サイズ(合計)		2,000	100.0%

4.3. 回収率の詳細

男女別の回収率については、男性 50.9%、女性 67.4%となり、女性の方が 17%ほど高い(表4)。年齢層別の回収率では、70代以上で 74.9%、60代で 73.2%と高く、年齢が下がるにつれて回収率が低下し、20代で 38.8%、18・19歳で 31.3%まで低下する(表5)。社会調査において、男性よりも女性において、若年層よりも高年齢層において回収率が高くなることは一般的な傾向である。

表4 男女別の回収率

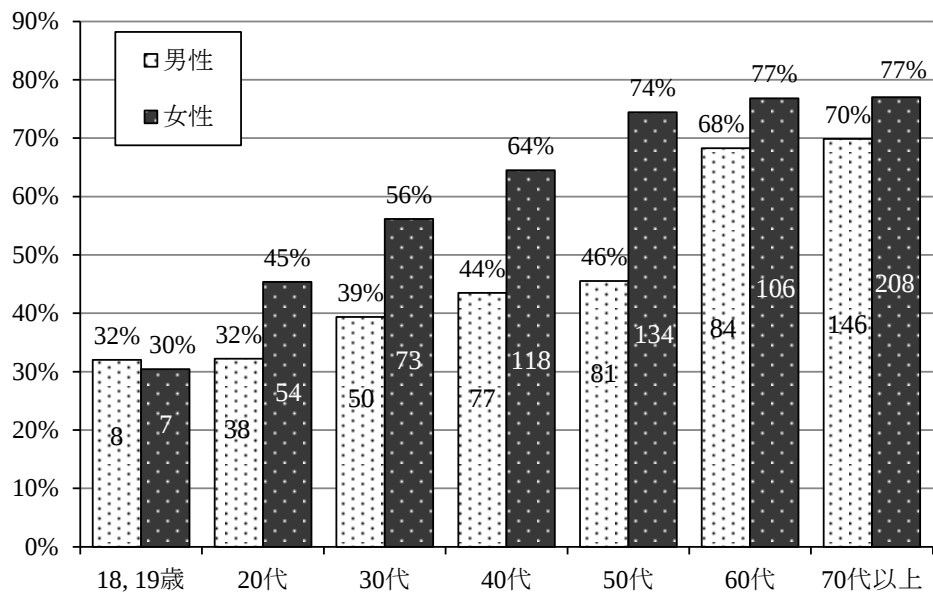
	男性	女性	不明	合計
回収標本	487	703	24	1,214
計画標本	957	1043	—	2,000
回収率 (%)	50.9%	67.4%	—	60.7%

(注) 男女別の回収率の計算には、不明分24が含まれていない。

表5 年齢層別の回収率

	18, 19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	不明	合計
回収標本	15	92	123	196	218	191	359	20	1,214
計画標本	48	237	257	360	358	261	479	—	2,000
回収率 (%)	31.3%	38.8%	47.9%	54.4%	60.9%	73.2%	74.9%	—	60.7%

(注) 年齢別の回収率の計算には、不明分20が含まれていない。



(注1) 棒グラフの高さおよび上側の数字は、回収率をあらわしている。
(注2) 棒グラフの内側の数字は、各層における実際の回収数である。

図2 男女・年齢層別の回収率

5. 回収標本の特徴

前述した男女別・年齢層別の回収率の違いにより、回収標本が母集団からある程度ずれている可能性があるため、その確認を行った。

表6は、母集団における男女・年齢別の人口分布と回収標本における男女・年齢別の人口分布を比較したものである。適合度検定*から、男女・年齢別の人口分布について、回収標本が母集団と乖離していることが統計学的に示されている。とりわけ、20代から50代の男性といった回収率の低い層では母集団よりも過小な人口割合である一方で、60代以上の男性、40代以上の女性といった回収率の高い層では母集団より過大な人口割合である。

高槻市の統計では、世帯人数別の人口分布もわかるので、この点についても回収標本と母集団との間の人口分布の比較を行った(表7)。その結果、この比較においても適合度検定*から両者が乖離していることが統計学的に示された。一人暮らしの多い20代、30代の回収率の低さがここにも影響したと考えられる。

*適合度検定

観測したデータの分布が、理論上の分布にあてはまっているかどうかを調べる統計学的手法。表6と表7では、2022(令和4)年6月末時点での高槻市全体の人口の分布を理論上の分布としている。なお、表6と表7の注釈にある統計量 χ^2 は適合度基準と呼ばれる値で、この値が0の場合二つの分布は同一であり、値が大きいほど乖離していることを示している。 df は、自由度と呼ばれる値(表6と表7では、「性別と年齢」「世帯人員数」の各カテゴリ数から1を引いた数に相当)である。 p は、二つの分布が同一の分布である確率を表しており、統計量 χ^2 と自由度 df から計算されている。

表 6 男女・年齢別の人口分布の比較

性別	年齢	回収標本	%	R4年6月末 人口	%
男性	18, 19歳	8	0.7%	3,460	1.2%
男性	20代	38	3.2%	16,464	5.9%
男性	30代	50	4.2%	17,787	6.5%
男性	40代	77	6.5%	24,786	9.2%
男性	50代	81	6.8%	24,861	8.4%
男性	60代	84	7.1%	17,152	6.2%
男性	70～84歳	146	12.3%	29,248	10.5%
女性	18, 19歳	7	0.6%	3,269	1.2%
女性	20代	54	4.6%	16,640	5.9%
女性	30代	73	6.2%	18,140	6.6%
女性	40代	118	10.0%	25,500	9.4%
女性	50代	134	11.3%	25,276	8.6%
女性	60代	106	9.0%	19,361	7.1%
女性	70～84歳	208	17.6%	37,772	13.3%
合計		1,184	100.0%	279,716	100%

(注1) 表左側の回収標本には、性別または年齢の不明分30件が含まれていない。

(注2) 表右側のR4年6月末人口は、高槻市全体の人口である

(<https://www.city.takatsuki.osaka.jp/soshiki/11/33243.html>) 参照

(適合度検定) $\chi^2=83.8716$, $df=13$, $p<0.0001$

表 7 世帯人員別世帯数分布の比較

世帯人員数	回収標本	%	R4年6月末 世帯人員数別人口	%
1人	142	11.7%	64,843	18.6%
2人	401	33.0%	94,500	27.1%
3人	281	23.1%	76,665	22.0%
4人	239	19.7%	80,908	23.2%
5人	69	5.7%	25,955	7.4%
6人	21	1.7%	4,236	1.2%
7人	5	0.4%	1,022	0.3%
8人	1	0.1%	232	0.1%
9人	1	0.1%	90	0.0%
10人	0	0.0%	30	0.0%
11人以上	3	0.2%	44	0.0%
無回答	51	4.2%	—	—
合計	1,214	100.0%	348,525	100.0%

(注1) 表右側の世帯人数別人口は母集団の分布であり、高槻市の人口

(<https://www.city.takatsuki.osaka.jp/soshiki/11/33243.html>) から算出した。ただし、回収標本が20～84歳で構成されているのに対し、表右側の世帯人数別人口には未成年および85歳以上も含まれている。

(適合度検定) $\chi^2=119.7642$, $df=10$, $p<0.0001$

第2章 調査結果の概要

西田 尚紀

1. 調査対象者の属性

調査票の質問順とは異なるが、はじめに本調査における回答者の属性を確認する。ただし、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。回答者の性別は男性が487人で女性が703人であり女性の方が多い(図1)。年齢は70代が約3割と多く、18歳、19歳と20代は1割未満と少ない(図2)。男女別に年齢を確認してもほぼ同様の傾向が見られる(図3)。

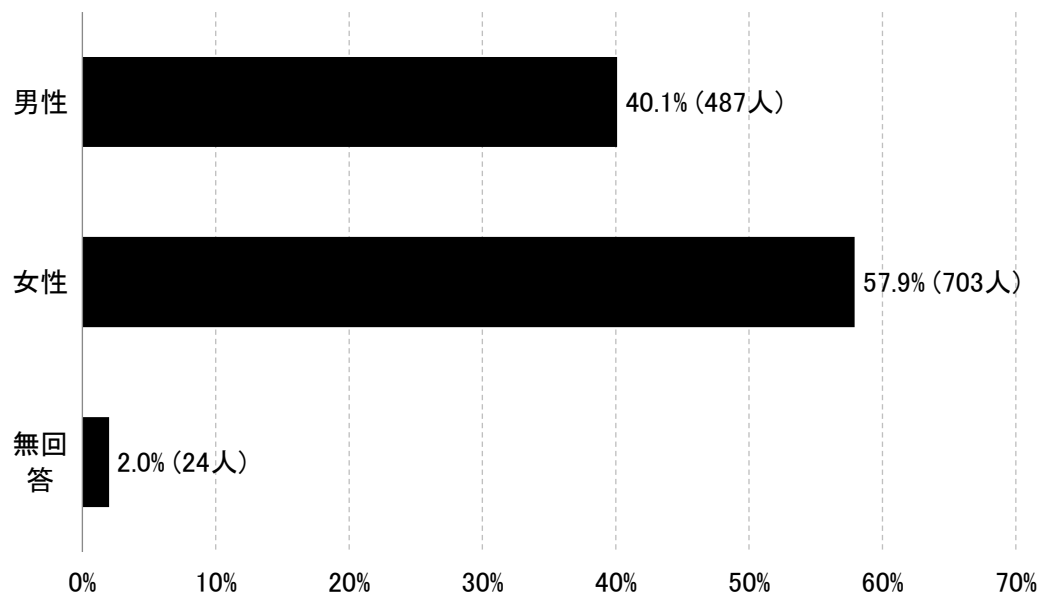


図1 Q40 性別

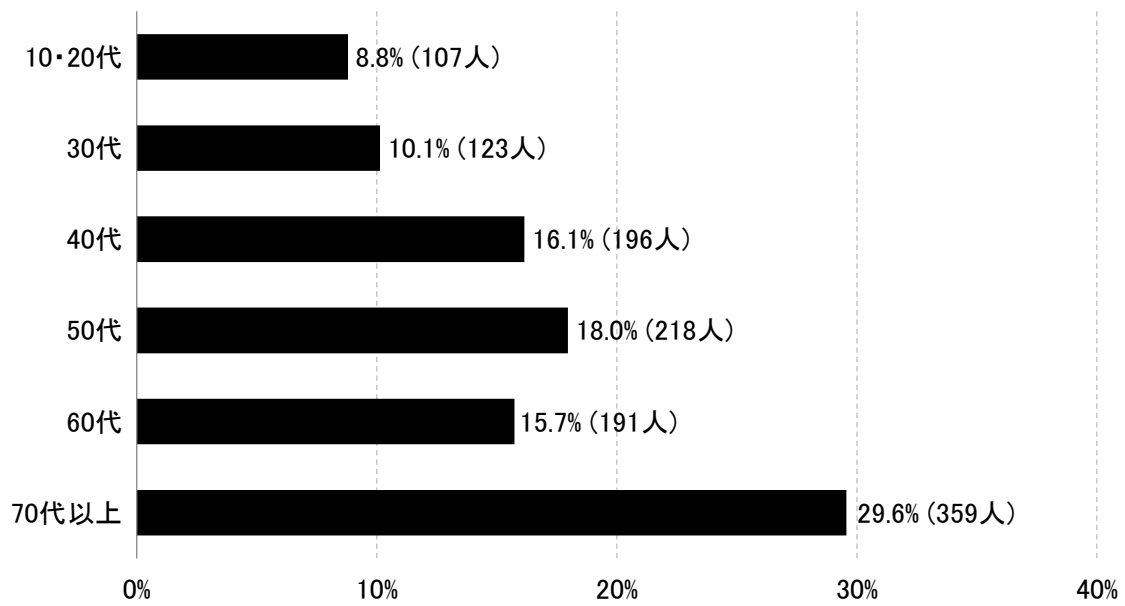


図 2 Q41 年齢

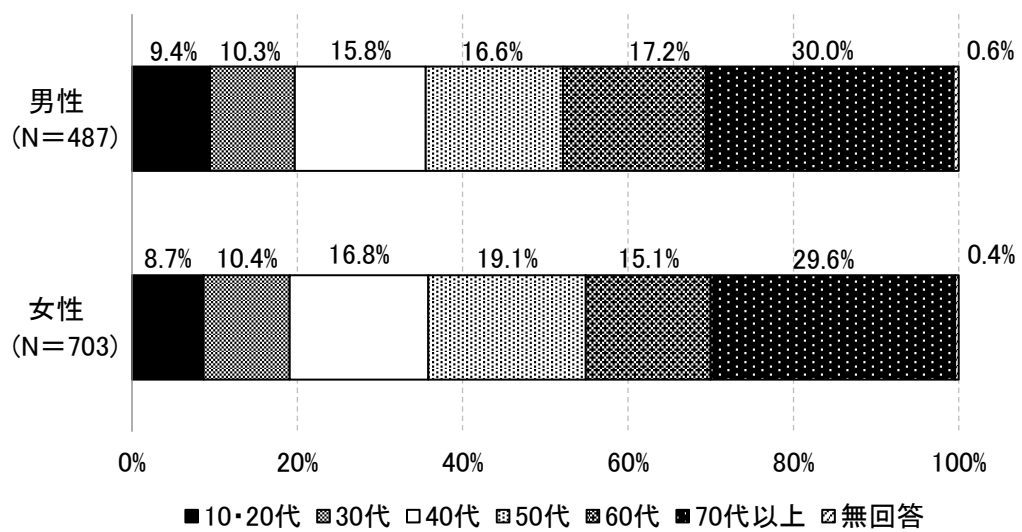


図 3 性別×年齢

以降、基本的にはすべての質問項目に関して性別・年齢とのクロス集計を提示する。ただし、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関して、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。なお、本調査の全回答者数は1,214人である。性別・年齢の内訳については図1と図2を参照のこと。また、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧については本章の最後を参照のこと。

職業は、合計を見ると常時雇用者が30.7%と最も多く、次いで無職が多い。男女別で見ると、男性は常時雇用者が42.9%と最も多く、女性は臨時雇用、パート、アルバイトが25.6%と最も多い。年代別で見ると、60代・70代以上で常時雇用者の割合が大きく減少し、無職が大きく増加している。臨時雇用、パート、アルバイトと回答した人は、40代から60代が2割以上となっている（表1）。

表 1 Q42 職業

(%)												
		常時雇用 の勤め人	臨時雇用、 パート、 アルバイト	自営業主	自営業の 家族従業 者	経営者、 役員	家事専業	学生	無職	その他	無回答	
男 女 別	合計 (N=1214)	30.7	18.5	3.4	0.9	2.1	13.8	3.3	23.1	1.6	2.6	100.0
	男性 (N=487)	42.9	8.8	5.3	0.6	2.7	0.6	3.7	31.6	2.1	1.6	100.0
	女性 (N=703)	22.3	25.6	2.1	1.1	1.7	23.5	3.1	17.2	1.3	2.0	100.0
年 代 別	10・20代 (N=107)	43.0	10.3	1.9	0.0	0.9	1.9	36.4	1.9	2.8	0.9	100.0
	30代 (N=123)	61.0	19.5	6.5	1.6	0.8	6.5	0.8	2.4	0.8	0.0	100.0
	40代 (N=196)	50.0	27.6	4.6	2.0	1.5	9.2	0.0	2.6	1.0	1.5	100.0
	50代 (N=218)	49.1	24.8	3.7	1.4	5.5	7.3	0.0	4.6	1.4	2.3	100.0
	60代 (N=191)	19.4	26.2	2.1	0.0	1.6	19.9	0.0	25.7	2.6	2.6	100.0
	70代以上 (N=359)	1.7	8.4	2.5	0.6	1.4	24.0	0.0	58.2	1.4	1.9	100.0

最終学歴は、男女別で見ると、男性が「大学（旧高専）・大学院」が 47.2%と最も多いのに対し、女性が 25.7%と男性よりも少ない。女性で最も多いのは「高校（または旧制中学など）」であり、35.7%である。また、「短大・高専（5 年制）」は男性が 1.6%と最も少ないのに対して、女性が 19.9%と「高校（または旧制中学など）」や「大学（旧高専）・大学院」に次いで 3 番目の多さである。年代別で見ると、10・20 代が「大学（旧高専）・大学院」が 70.1%であるが、年代が上がるごとに減少傾向にあり、70 代以上が 15.6%である。反対に、10・20 代は「高校（または旧制中学など）」が 15.9%であるが、年代が上がるごとに増加し、70 代以上が 55.7%となっている（図 4）。

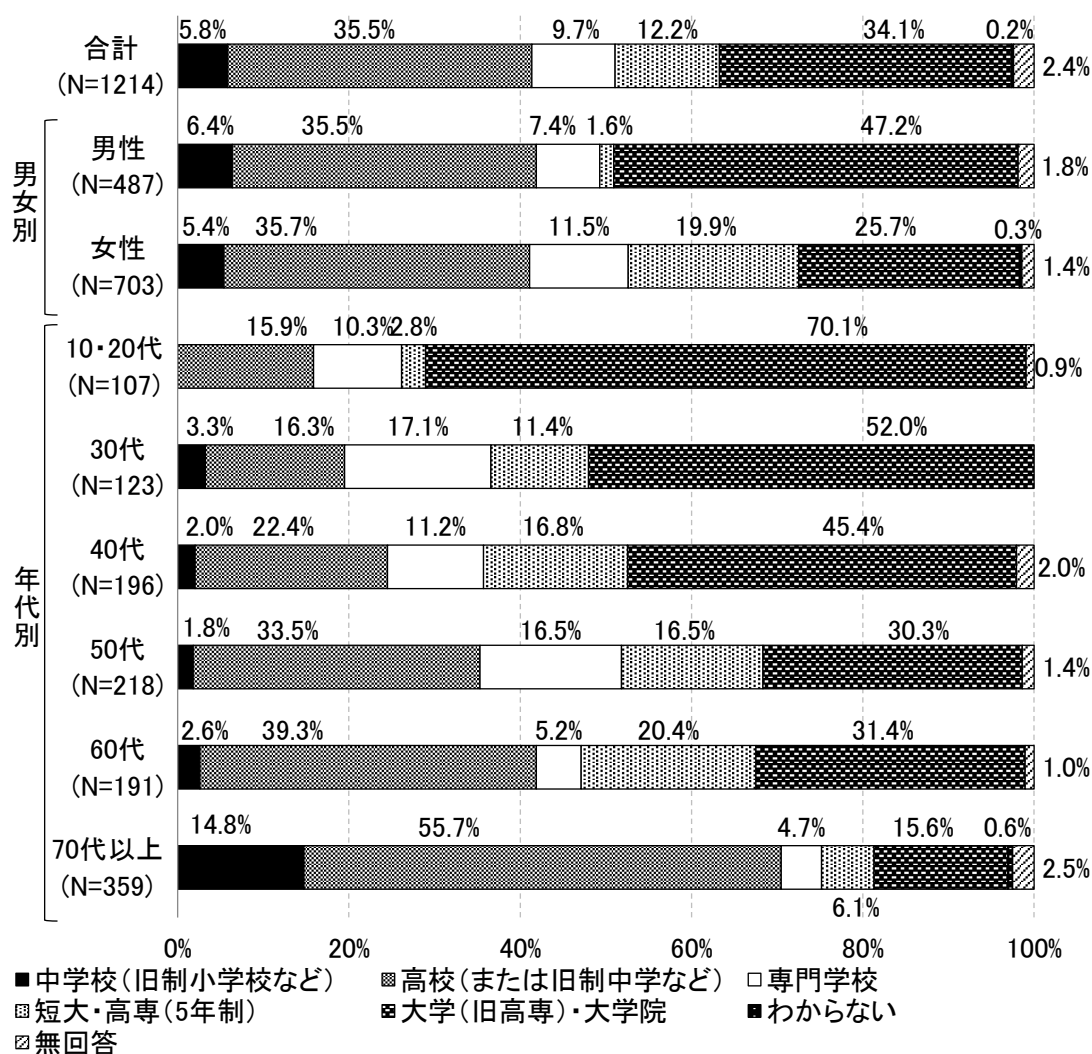


図 4 Q43 最終学歴

居住地域については昨年のおり、単純集計のみを提示する。ここでの地区とは小学校の校区を参考になっている。各地区と該当小学校区は、檜田地区（檜田小学校）、高槻北地区（芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校）、高槻南地区（高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校）、五領地区（五領・上牧小学校）、高槻西地区（郡家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校）、如是・富田地区（芝生・丸橋・寿栄・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校）、三箇牧地区（三箇牧・柱本小学校）である（図 5）。

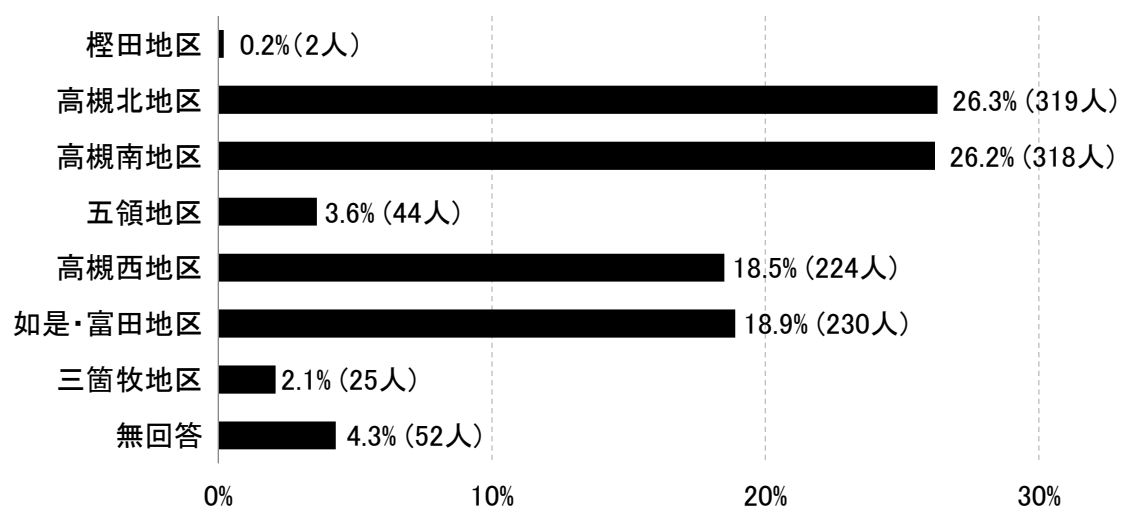


図 5 Q44 居住地域

高槻市内での居住年数に関して、全体の 8 割以上が 10 年以上市内に居住していることが分かる。年代別で見ると、10・20 代が「20 年以上 30 年未満」が 49.5%と最も多く、子どものころから市内に居住していることが分かる。70 代以上が「50 年以上」が 35.4%と最も多い。なお、大きな男女差は見られない（表 2）。

表 2 Q45 市内居住年数

		(%)								
		1年未満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上 40年未満	40年以上 50年未満	50年以上 無回答
男女別	合計 (N=1214)	2.0	3.5	3.2	6.3	13.7	16.6	16.0	21.1	16.4
	男性 (N=487)	2.9	2.5	3.1	6.2	13.8	16.8	16.6	21.8	15.8
	女性 (N=703)	1.4	4.4	3.3	6.5	13.8	16.5	15.8	21.1	16.8
年代別	10・20代 (N=107)	6.5	10.3	4.7	9.3	18.7	49.5	0.0	0.0	0.0
	30代 (N=123)	8.1	10.6	14.6	17.9	13.8	5.7	29.3	0.0	0.0
	40代 (N=196)	1.0	3.6	2.0	13.3	33.2	10.2	10.7	25.5	0.0
	50代 (N=218)	0.5	2.3	2.8	3.7	12.4	25.7	12.8	21.1	18.3
	60代 (N=191)	1.6	2.1	2.1	2.6	6.8	16.8	27.2	25.1	15.7
	70代以上 (N=359)	0.3	0.6	0.3	1.4	6.4	8.9	15.6	30.9	35.4

市民の住居は、男女別・年代別のすべての層で「一戸建て」の方が「集合住宅（アパート・マンションなど）」よりも高い割合である。（図 6）。

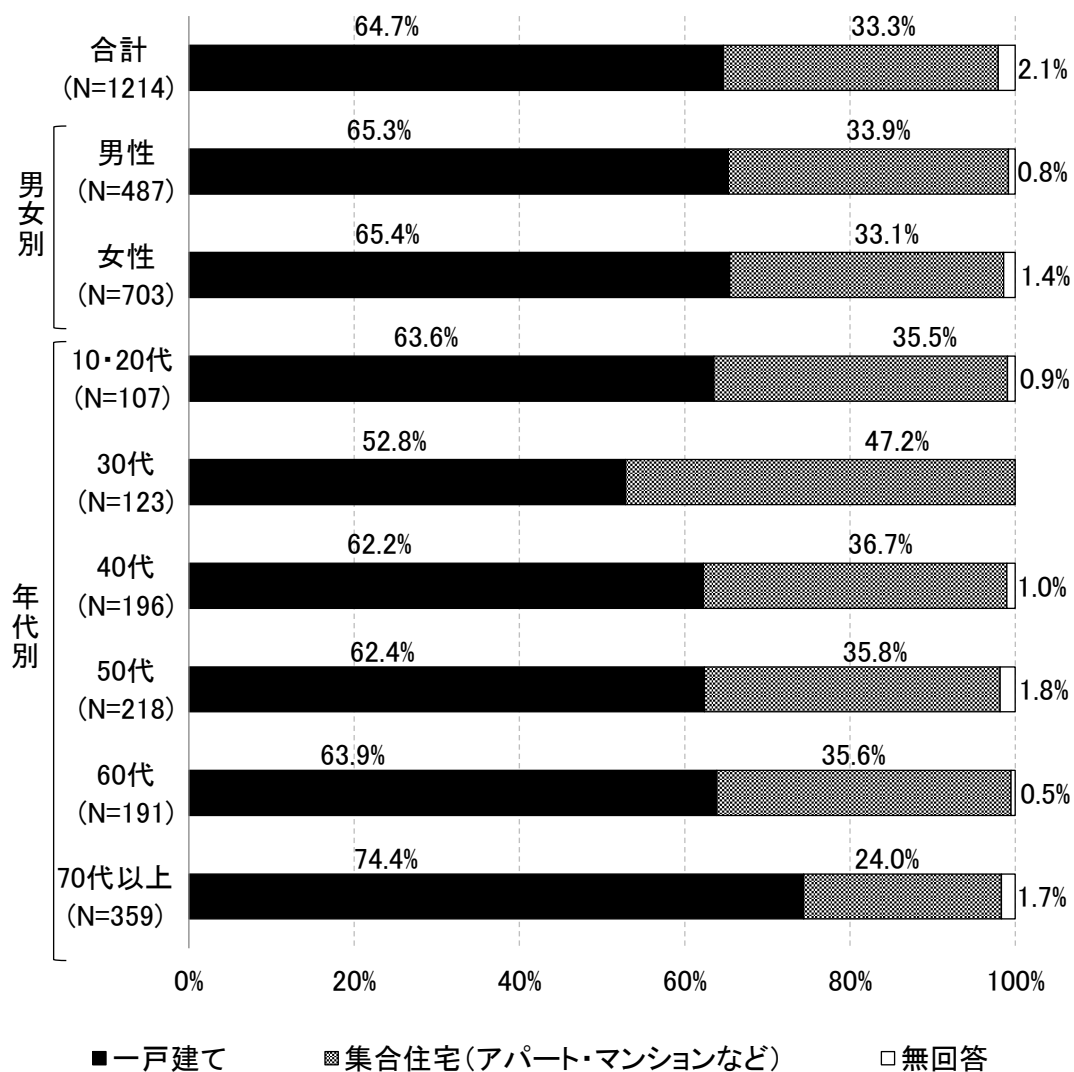


図 6 Q46 住居

居住形態は、男女別・年代別のすべての層で「持ち家」が 6 割以上と最も高い割合である。40 代以上は 7 割以上が「持ち家」である。「民間の賃貸住宅」では、10・20 代が 24.3%と一定割合いるが、年代が上がるにつれて減少傾向にあり、70 代以上で 5.0%になる。「公社・公団等の公営の賃貸住宅」の割合は、70 代以上が 10.3%と最も高く、次いで 60 代の 7.3%である（図 7）。

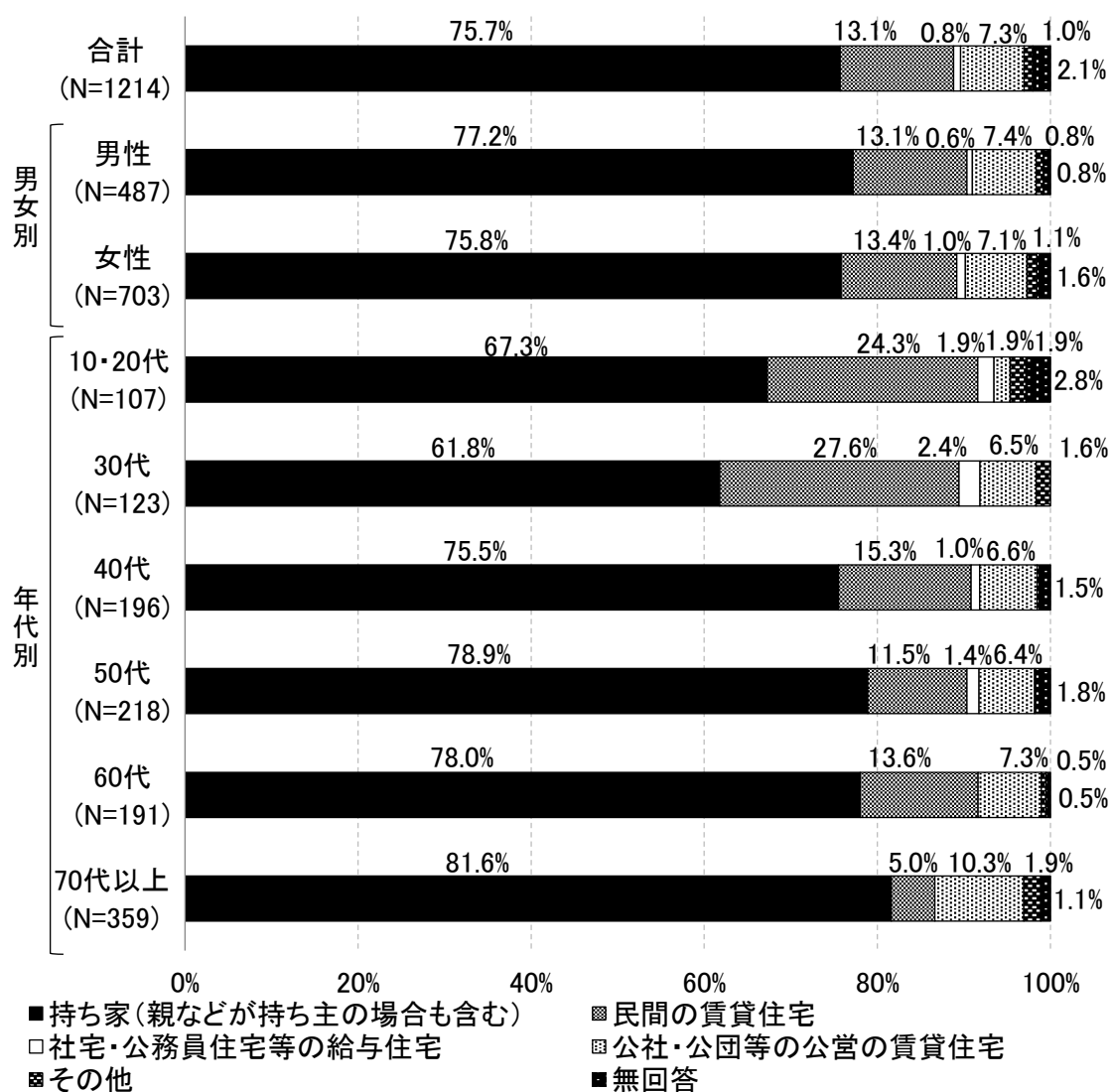


図 7 Q47 居住形態

婚姻状況に関して、男女別・年代別の30代以上の層で、「既婚（配偶者あり）」が最も高い割合を占める。10・20代は「未婚」の割合が8割以上である。男女別で見ると、「既婚（離別・死別）」の割合は、男性で6.4%、女性で16.1%と、女性の方が9.7ポイント高い（図8）。

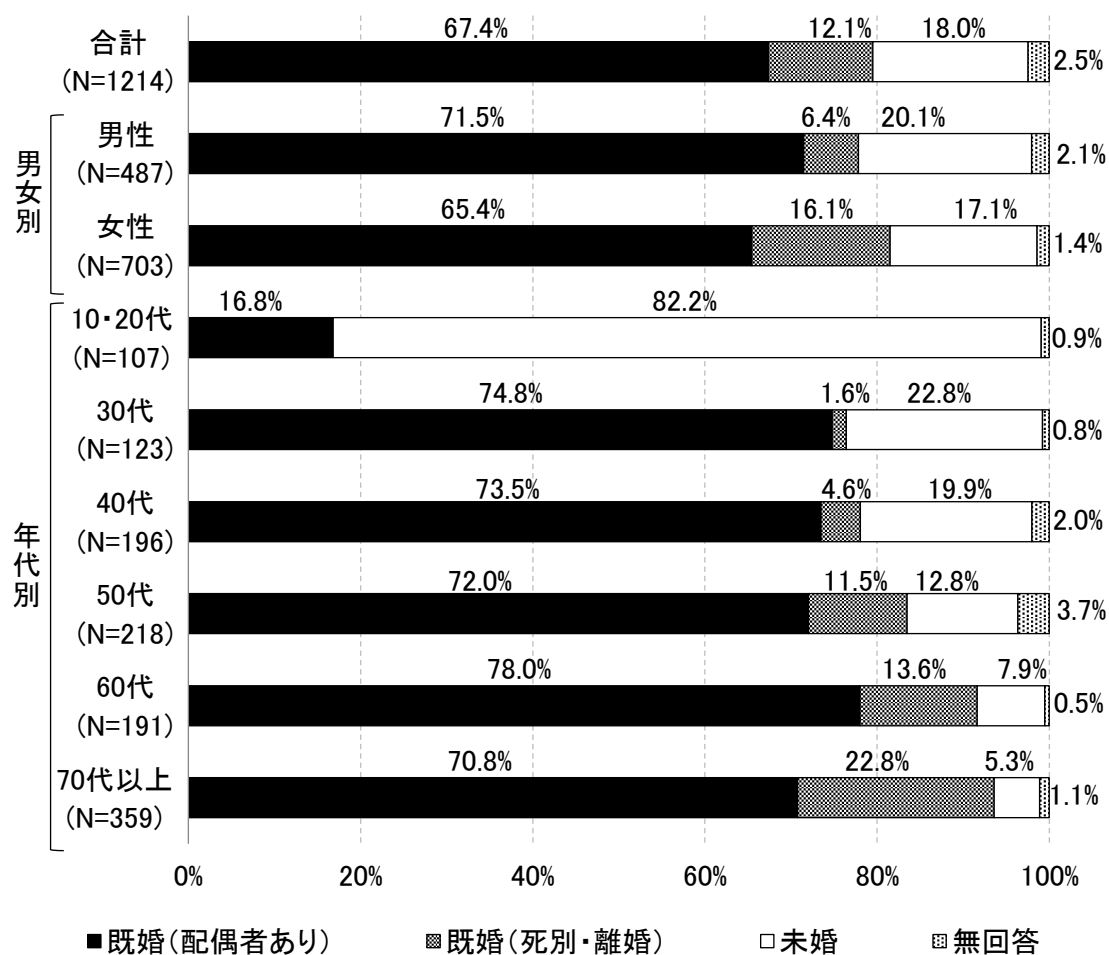


図 8 Q48 婚姻状況

子どもの有無に関して、男女別の各層・年代別の 30 代以上の層で、「いる」と回答した人の割合が「いない」と回答した人の割合より高い。10・20 代は「いない」割合が 8 割以上である。なお、「いる」と回答した人の割合は、女性の方が男性よりも 2.3 ポイント高い（図 9）。

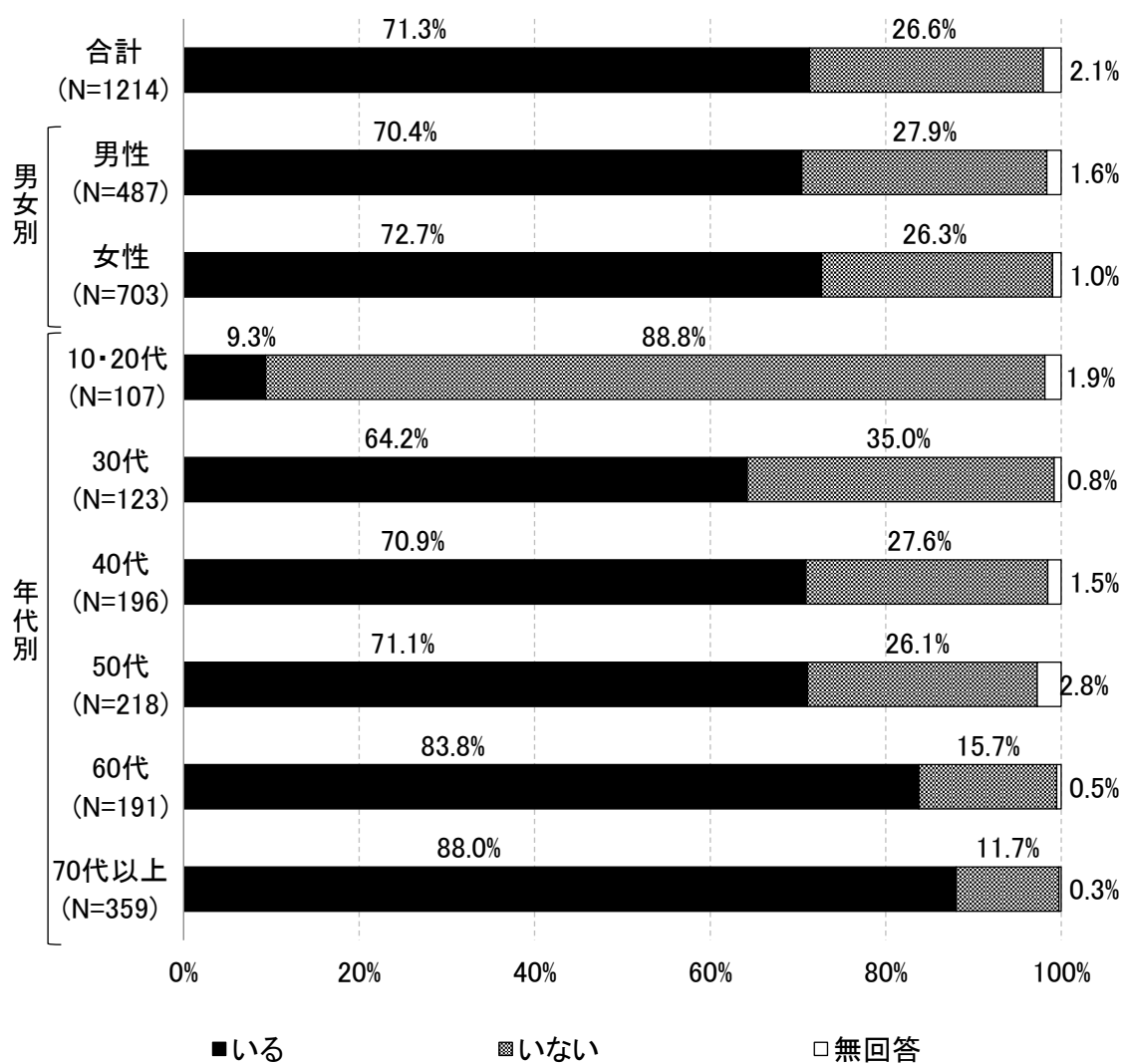


図 9 Q49 子どもの有無

世帯人数に関して、その多くは2～4人世帯である。年代別で見ると、10・20代、30代は3人世帯が最も多い。一方で40代と50代は4人世帯が最も多い。また、70代以上は2人世帯が約5割である（表3）。

表3 Q50 世帯人数

													(%)
		1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	11人	12人	無回答
男女別	合計 (N=1214)	11.7	33.0	23.1	19.7	5.7	1.7	0.4	0.1	0.1	0.2	0.1	4.2
	男性 (N=487)	11.3	34.3	23.2	20.9	4.3	2.1	0.6	0.0	0.0	0.2	0.0	3.1
	女性 (N=703)	12.1	32.4	23.5	19.1	6.8	1.6	0.3	0.1	0.1	0.1	0.1	3.7
年代別	10・20代 (N=107)	3.7	15.9	28.0	27.1	8.4	5.6	3.7	0.0	0.0	0.0	0.9	6.5
	30代 (N=123)	8.1	17.1	30.9	30.1	9.8	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3
	40代 (N=196)	8.2	13.8	20.9	37.8	12.2	3.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6
	50代 (N=218)	9.2	26.6	21.1	29.8	6.0	0.9	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	6.0
	60代 (N=191)	12.0	51.8	23.6	8.9	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	2.1
	70代以上 (N=359)	18.7	49.0	22.0	3.9	2.8	1.1	0.0	0.3	0.3	0.3	0.0	1.7

世帯年収は、合計および男性・女性が「200～400万円未満」が最も多い。年代別で見ると、「わからない」を除いて割合が最も高いのは、10・20代が「200万円～400万円未満」、30代～50代が「400万円～600万円未満」と、年代が上がるごとに年収が高額になっている。ただし、60代と70代以上は「200万円～400万円未満」の割合が最も高い（表4）。

表4 Q51 世帯年収

(%)											
		100万円未満	100万円～200万円未満	200万円～400万円未満	400万円～600万円未満	600万円～800万円未満	800万円～1000万円未満	1000万円～1500万円未満	1500万円以上	わからない	無回答
男女別	合計 (N=1214)	6.0	8.0	24.3	15.6	10.9	9.3	5.9	2.1	8.6	9.4
	男性 (N=487)	4.3	7.2	25.3	18.3	11.7	9.0	7.0	2.1	8.0	7.2
	女性 (N=703)	7.3	8.4	24.0	14.1	10.5	9.7	5.4	2.1	9.1	9.4
年代別	10・20代 (N=107)	6.5	5.6	14.0	10.3	8.4	5.6	6.5	3.7	33.6	5.6
	30代 (N=123)	2.4	0.8	14.6	20.3	19.5	14.6	8.1	1.6	10.6	7.3
	40代 (N=196)	3.6	3.1	12.8	20.4	17.9	16.8	10.2	2.6	6.1	6.6
	50代 (N=218)	5.0	2.3	15.6	13.8	15.1	16.1	10.6	3.2	6.0	12.4
	60代 (N=191)	8.4	8.9	30.4	19.9	8.4	4.7	4.7	1.6	4.2	8.9
	70代以上 (N=359)	8.1	16.7	39.6	12.5	4.2	3.1	0.8	1.1	5.6	8.4

2. 各質問項目の結果

ここからは回答者個人の属性だけでなく、意識や行動などの項目についての結果の概要を示す。ここでも基本的には性別・年齢によるクロス集計を提示する。なお、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関して、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。回答者の性別と年齢の分布については、図 1 と図 2 を参照のこと。

なお、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第 2 位を四捨五入し、小数点第 1 位までを表示している。よって合計%は 100.0%になるとは限らない。

Q1 の生活満足度に関して、男女別・年代別のすべての層で 5 割以上が「満足」または「やや満足」と回答している。年代別で見ると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 71.0%と最も高く、50 代が 59.6%と最も低い（図 10）。

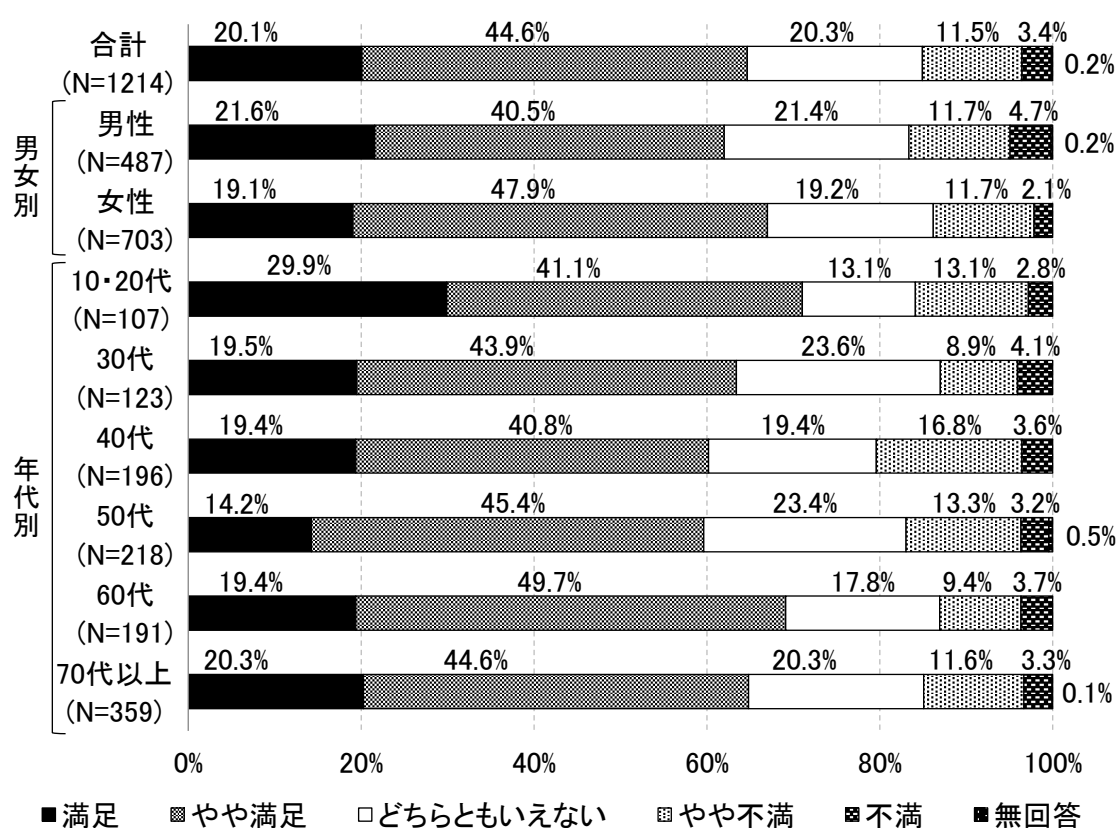


図 10 Q1 生活満足度

Q2 の幸福度に関して、男女別で見ると、男女ともに「幸せ」または「やや幸せ」と回答した人の割合は 7 割程度である。年代別で見ると、「幸せ」または「やや幸せ」と回答した人の割合はすべての層で 6 割を超えており、30 代が 80.5%と最も高い（図 11）。

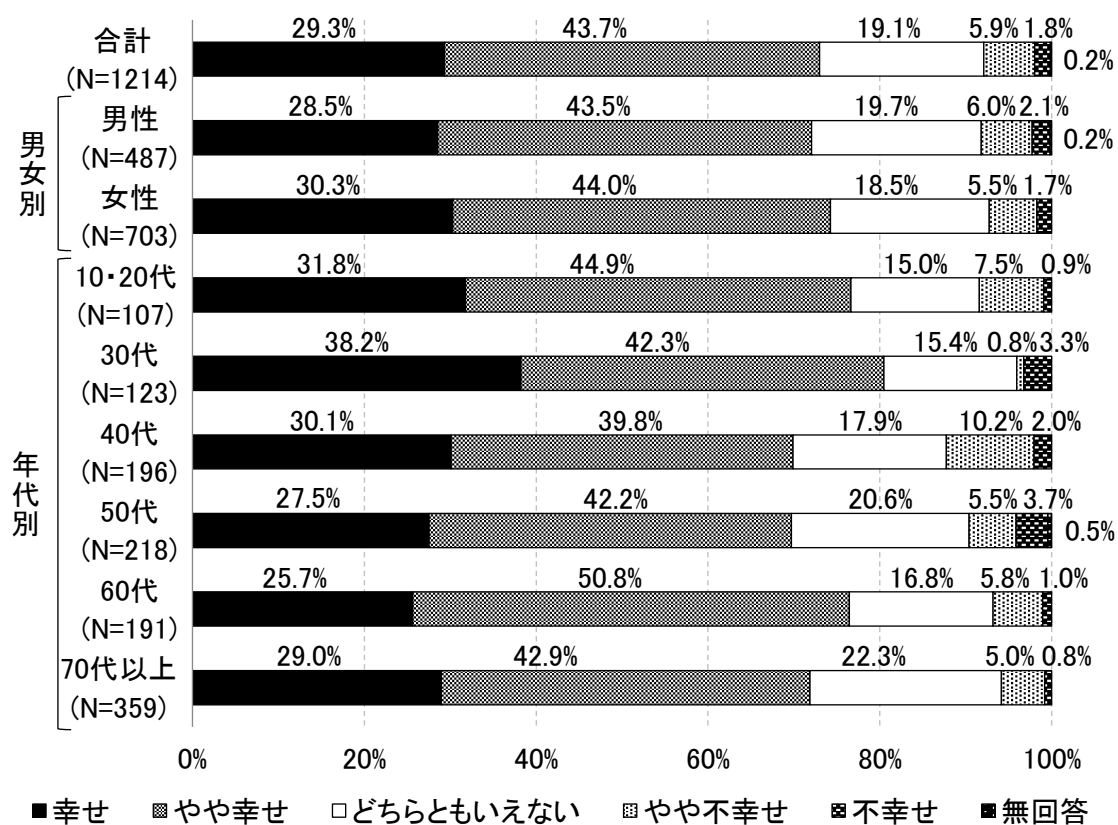


図 11 Q2 幸福度

Q3 の居住地域は暮らしやすいかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が7割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は10・20代が89.7%と最も高い。反対に40代が78.0%と最も低い（図12）。

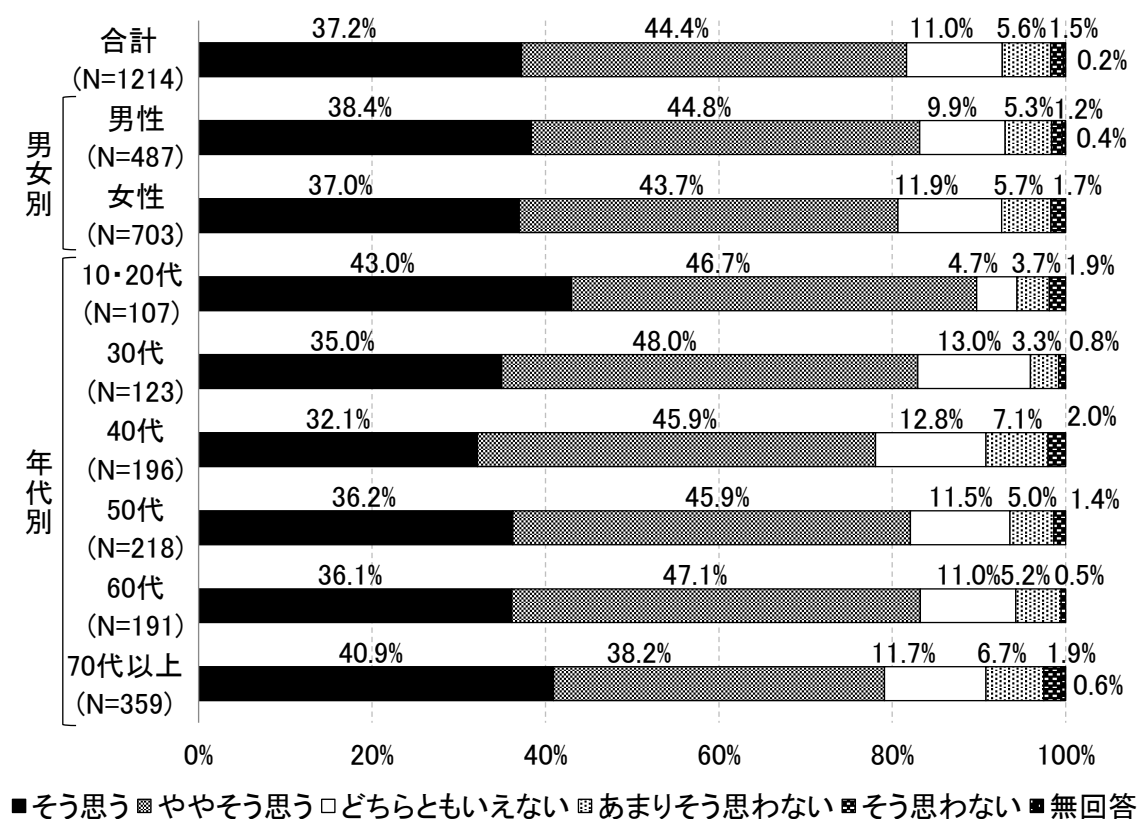


図12 Q3 居住地域は暮らしやすいか

Q4の地域に住み続けたいかに関して、男女別・年代別のすべての層で4割以上が「ずっとと住み続けたい」または「住み続けたい」と回答している。年代別で見ると、「ずっとと住み続けたい」または「住み続けたい」と回答した人の割合は70代以上が68.5%と最も高い。反対に、10・20代は47.7%と最も低い（図13）。

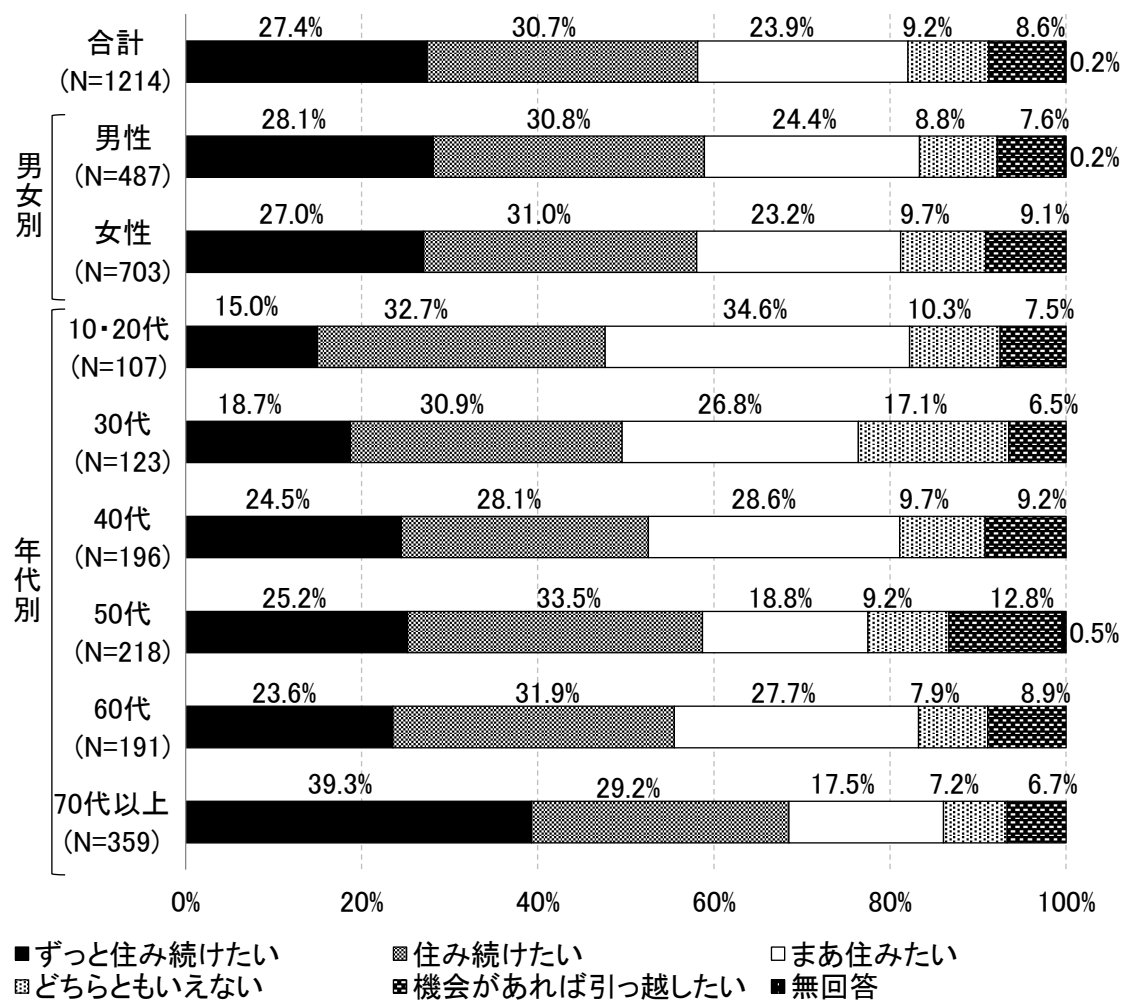
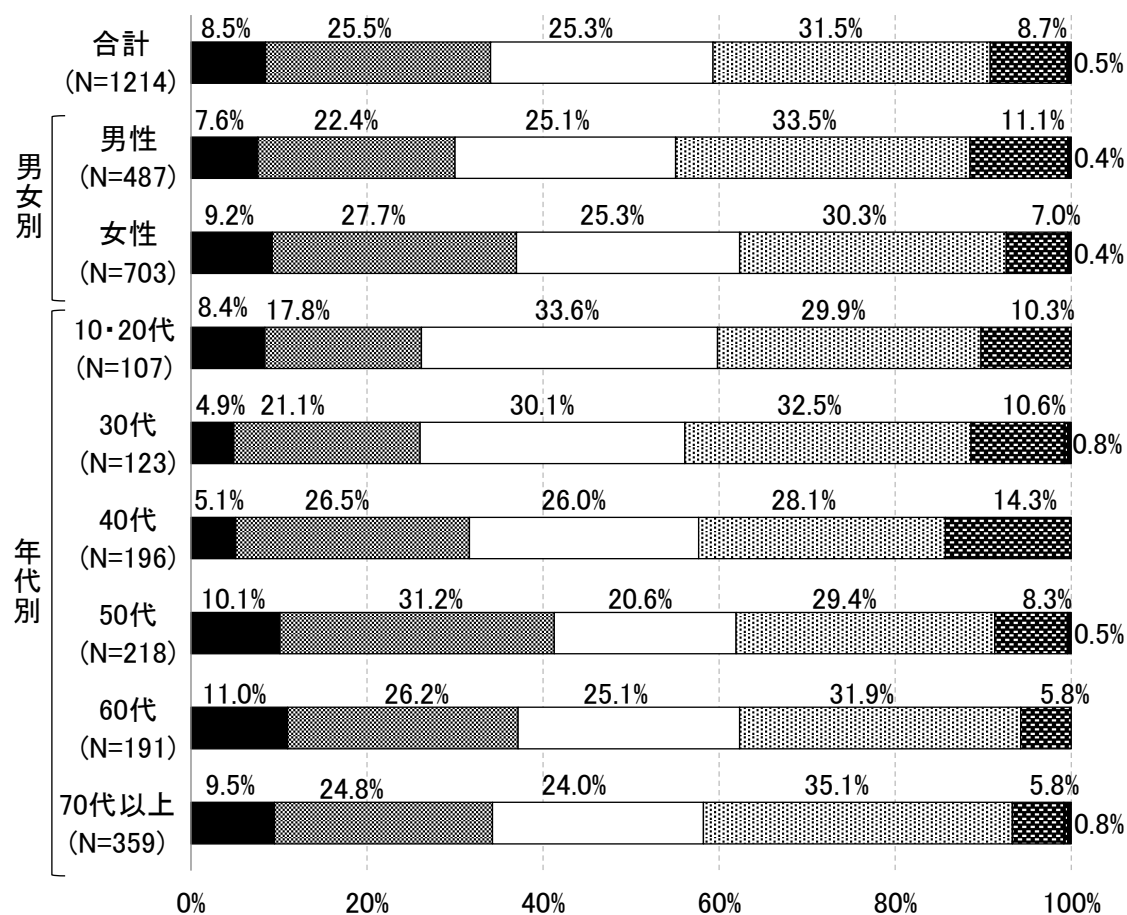


図13 Q4 地域に住み続けたいか

Q5 の高槻市に地域ブランドがあると思うかに関して、男女別で見ると、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合が男性で 44.6%、女性が 37.3%であり、男性の方が 7.3 ポイントほど高い。年代別で見ると、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合は 30 代が 43.1%と最も高い。反対に、50 代と 60 代は 37.7%と最も低い（図 14）。



■ そう思う ▨ ややそう思う □ どちらともいえない ▩ あまりそう思わない ■ そう思わない ■ 無回答

図 14 Q5 高槻市に地域ブランドがあると思うか

Q6 の中心市街地に行く頻度が5年前と比べて増加したかに関して、年代別で見ると、10・20代と30代を除くすべての年代で、「減少した」または「少し減少した」と回答した人の割合の方が「増加した」または「少し増加した」と回答した人の割合よりも高い。10・20代は「増加した」、「少し増加した」と回答した人の割合が45.8%と最も高い。反対に、60代が19.3%と最も低い（図15）。

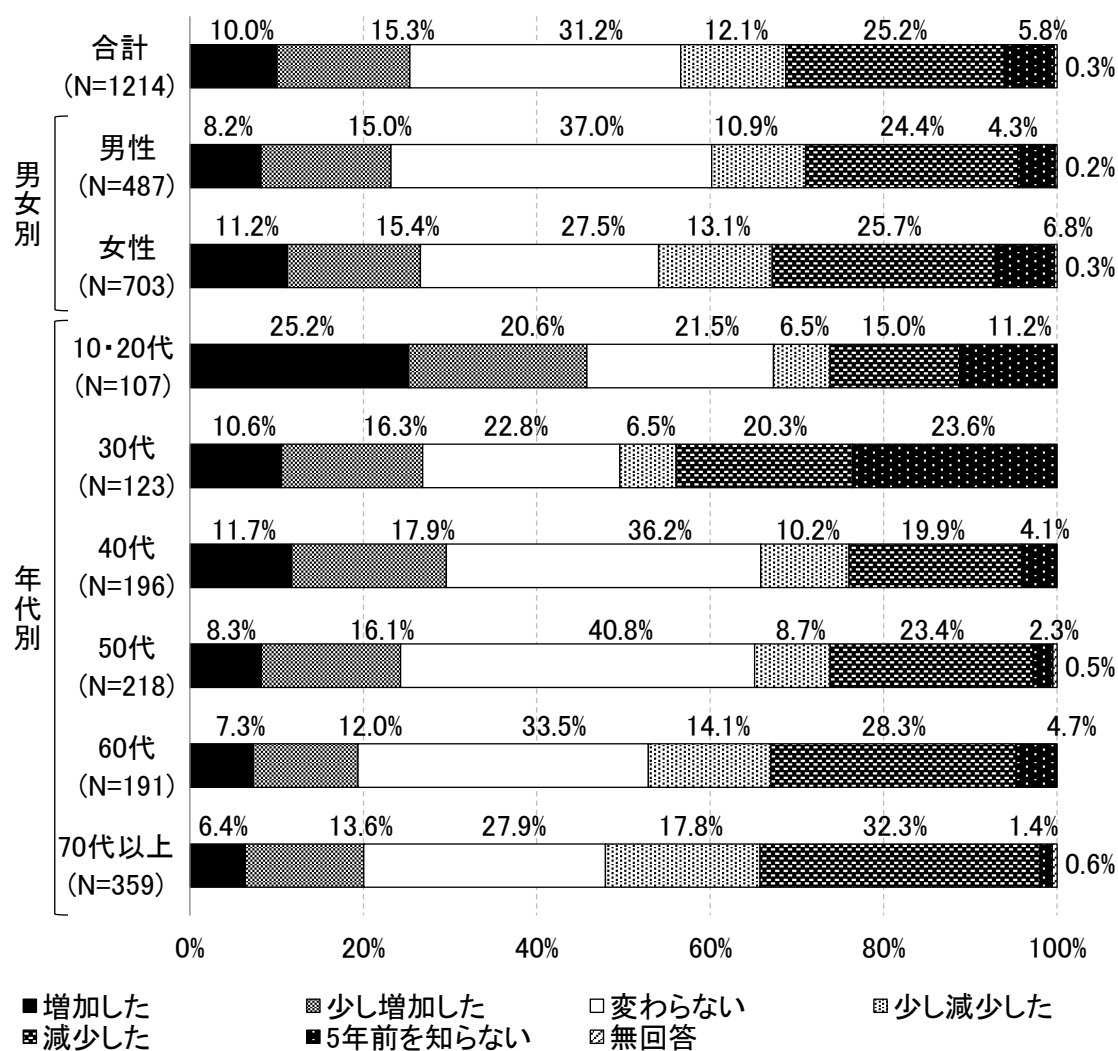


図15 Q6 中心市街地に行く頻度が5年前と比べて増加したか

Q7A～Q7F は、中心市街地において、各項目が5年前と比べて向上したか、低下したかを質問している。

Q7A の5年前と比べた場合の中心市街地の防災面での安全性や快適性に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また男女別・年代別のすべての層で「低下した」の割合が1割以下である。さらに「向上した」の割合を年代別で見ると、30代が2割未満であるが、それ以外の年代が2割以上である（図16）。

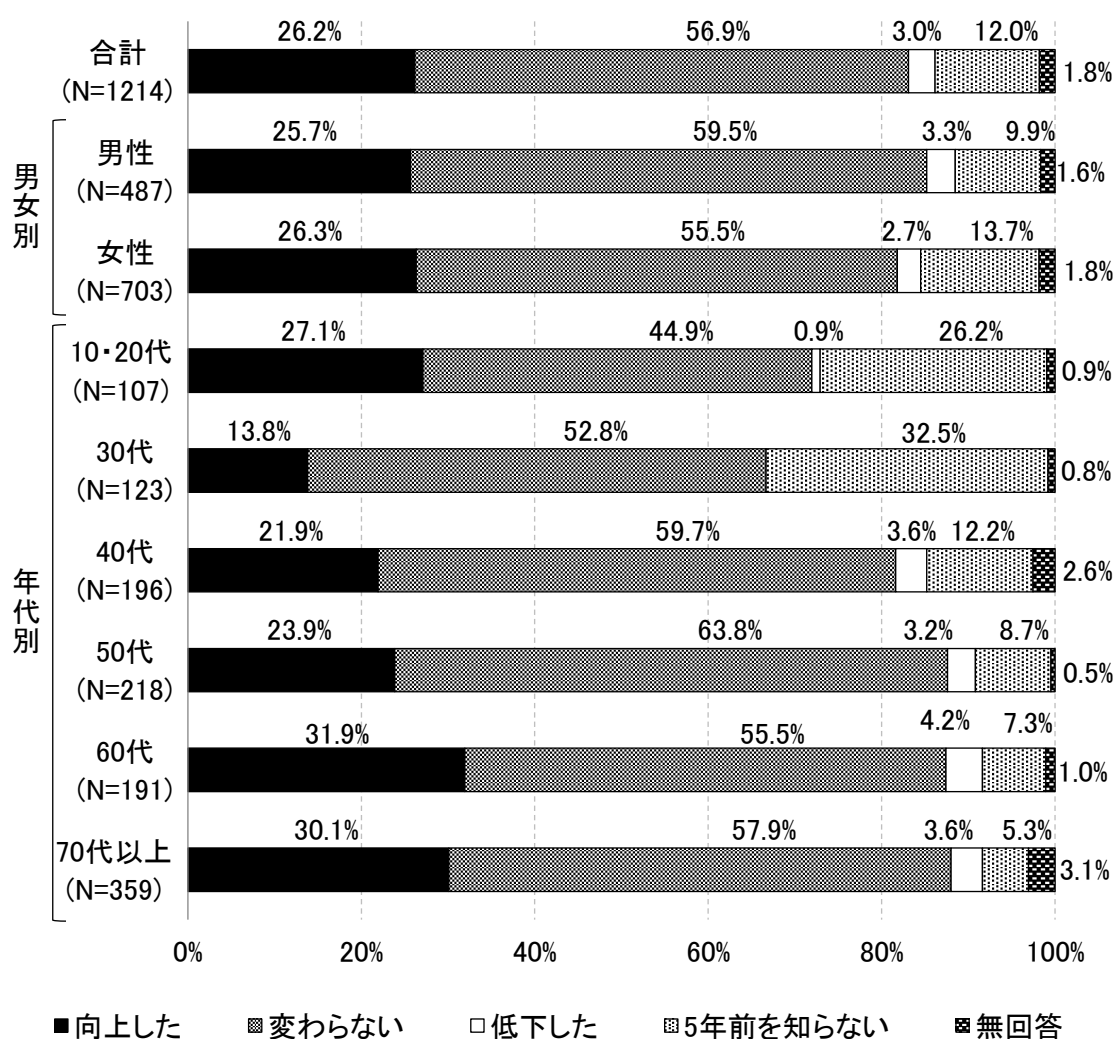


図 16 Q7A 中心市街地で5年前と比べて向上したか（防災面での安全性や快適性）

Q7B の5年前と比べた場合の中心市街地の防犯面での安全性や快適性に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合を年代別で見ると、10・20代が19.6%と最も高く、30代が12.2%と最も低い（図17）。

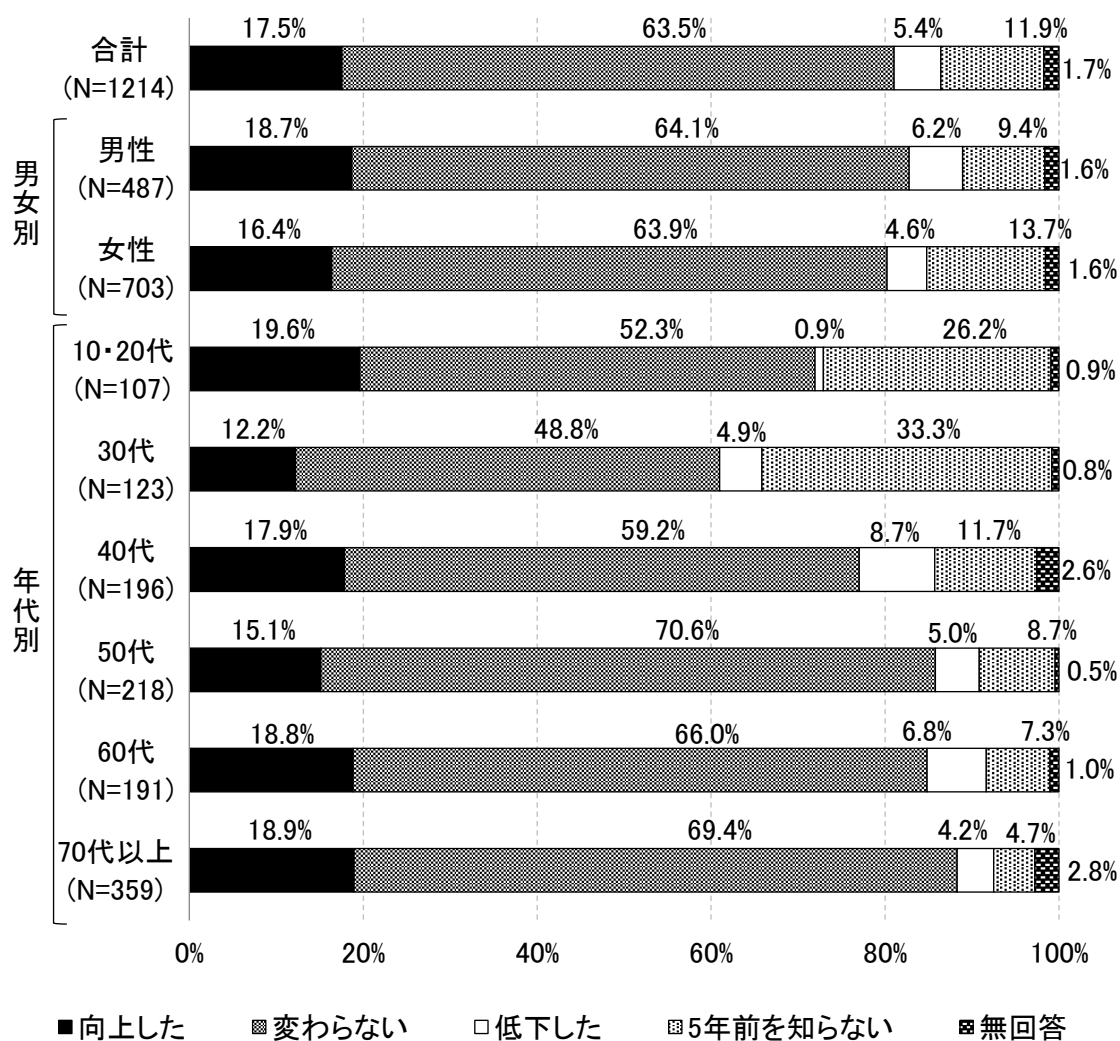


図 17 Q7B 中心市街地で5年前と比べて向上したか（防犯面での安全性や快適性）

Q7C の5年前と比べた場合の中心市街地の居住環境に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また男女別・年代別のすべての層で「低下した」の割合が1割以下である。「向上した」の割合を年代別で見ると10・20代を除くすべての層で約2割である。10・20代は27.4%である（図18）。

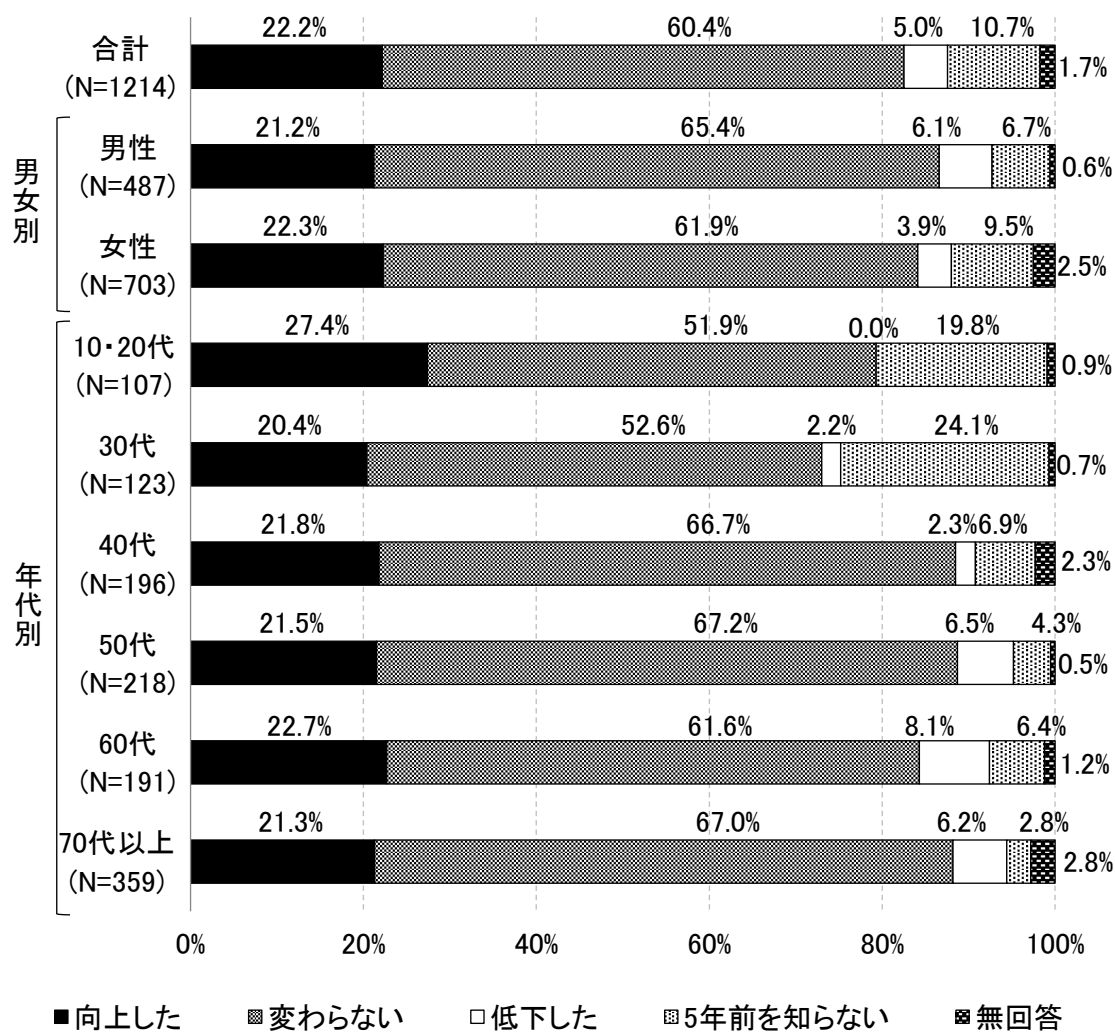


図18 Q7C 中心市街地で5年前と比べて向上したか（居住環境）

Q7D の5年前と比べた場合の中心市街地の公共交通機関の利便性に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合は、男女ともに約2割である。年代別で見ると、「向上した」の割合は、10・20代と70代以上が2割以上であり、70代以上が23.7%と最も高く、反対に60代が15.2%と最も低い(図19)。

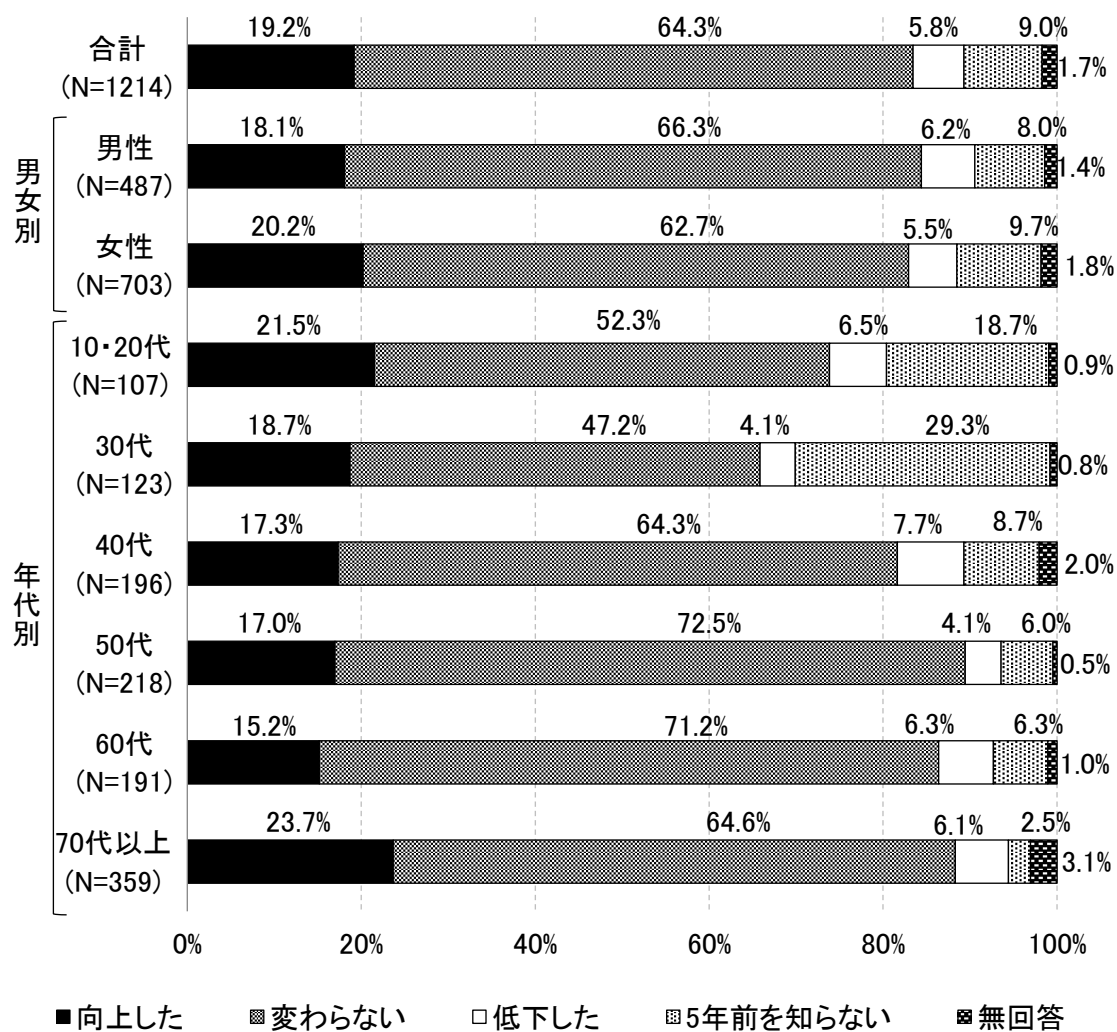


図19 Q7D 中心市街地で5年前と比べて向上したか (公共交通機関の利便性)

Q7E の5年前と比べた場合の中心市街地の歩行者にとっての歩きやすさに関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「向上した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割以上である。年代別で見ると、「向上した」の割合は、10・20代が23.4%と最も高い。反対に70代以上が、13.6%と最も低い（図 20）。

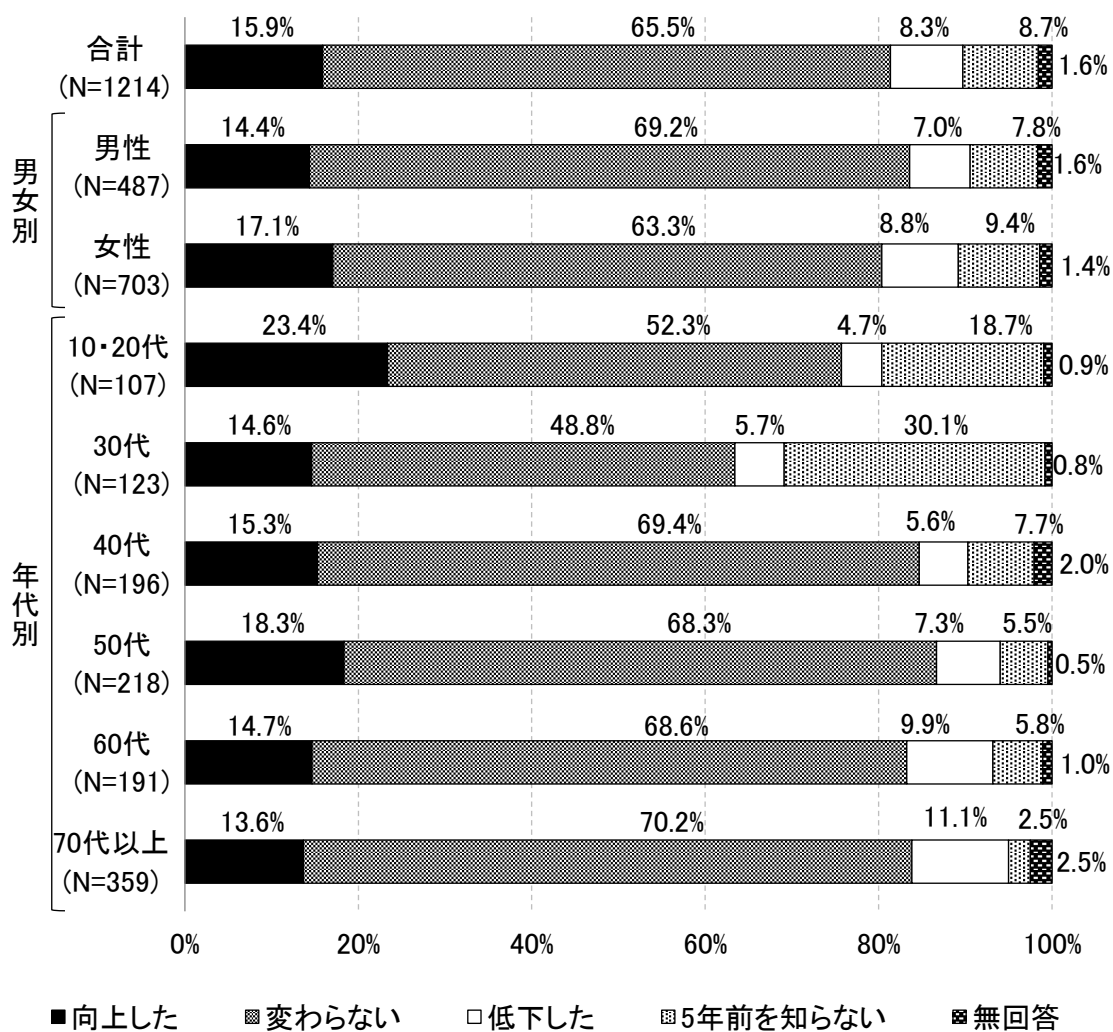


図 20 Q7E 中心市街地で5年前と比べて向上したか（歩行者にとっての歩きやすさ）

Q7F の5年前と比べた場合の中心市街地の風紀や治安に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、年代別で見ると、「向上した」の割合は、50代と60代を除くすべての層で1割以上となっている。「向上した」の割合は、10・20代が15.9%と最も高く、50代が7.8%と最も低い。(図 21)。

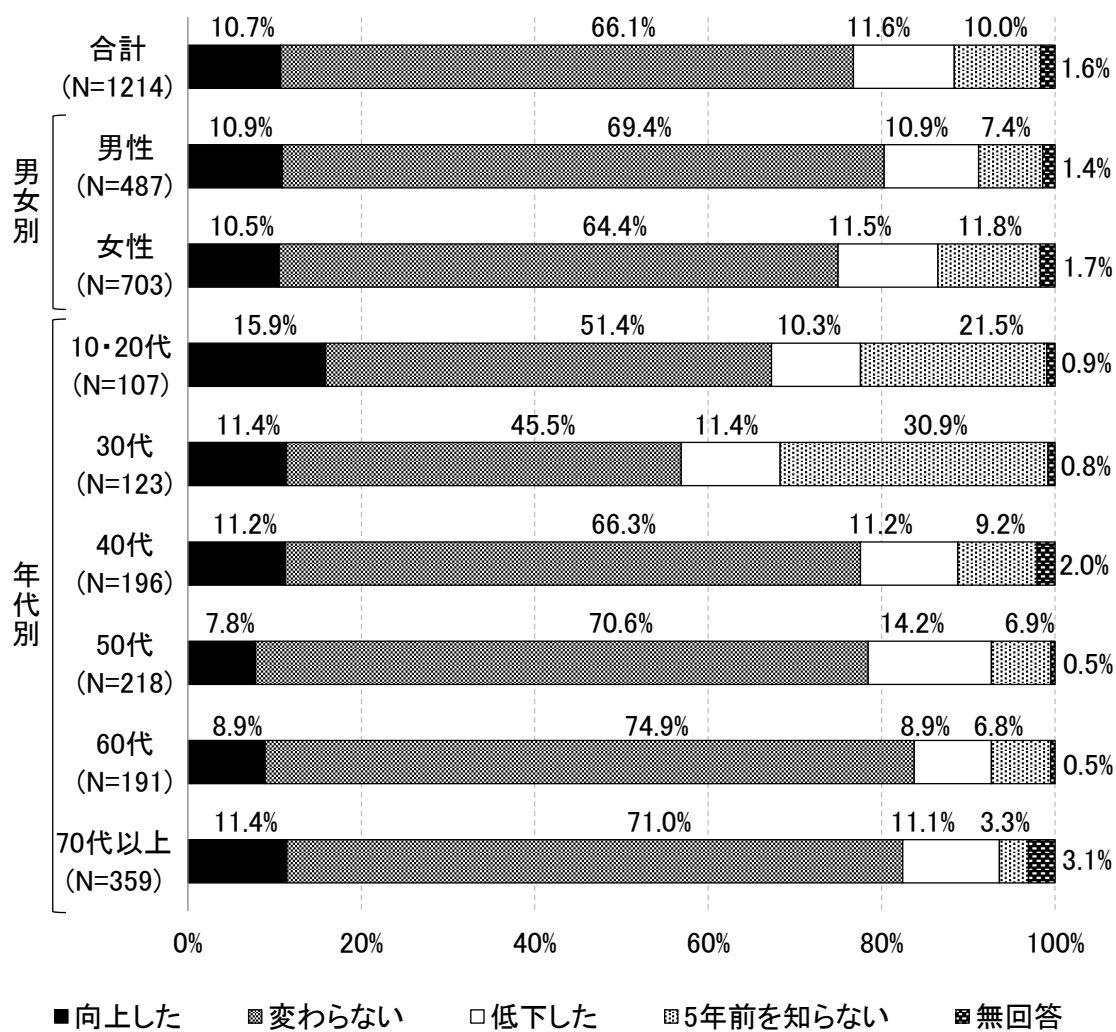


図 21 Q7F 中心市街地で5年前と比べて向上したか (風紀や治安)

Q8A～Q8L が、中心市街地において、それぞれが5年前と比べて増加したか減少したかを質問している。なお、Q8A～Q8K のいずれにおいても、10・20代と30代で「5年前を知らない」の割合が高くなっている。

Q8A の文化活動に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で2割未満である。「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で2割に満たない（図22）。

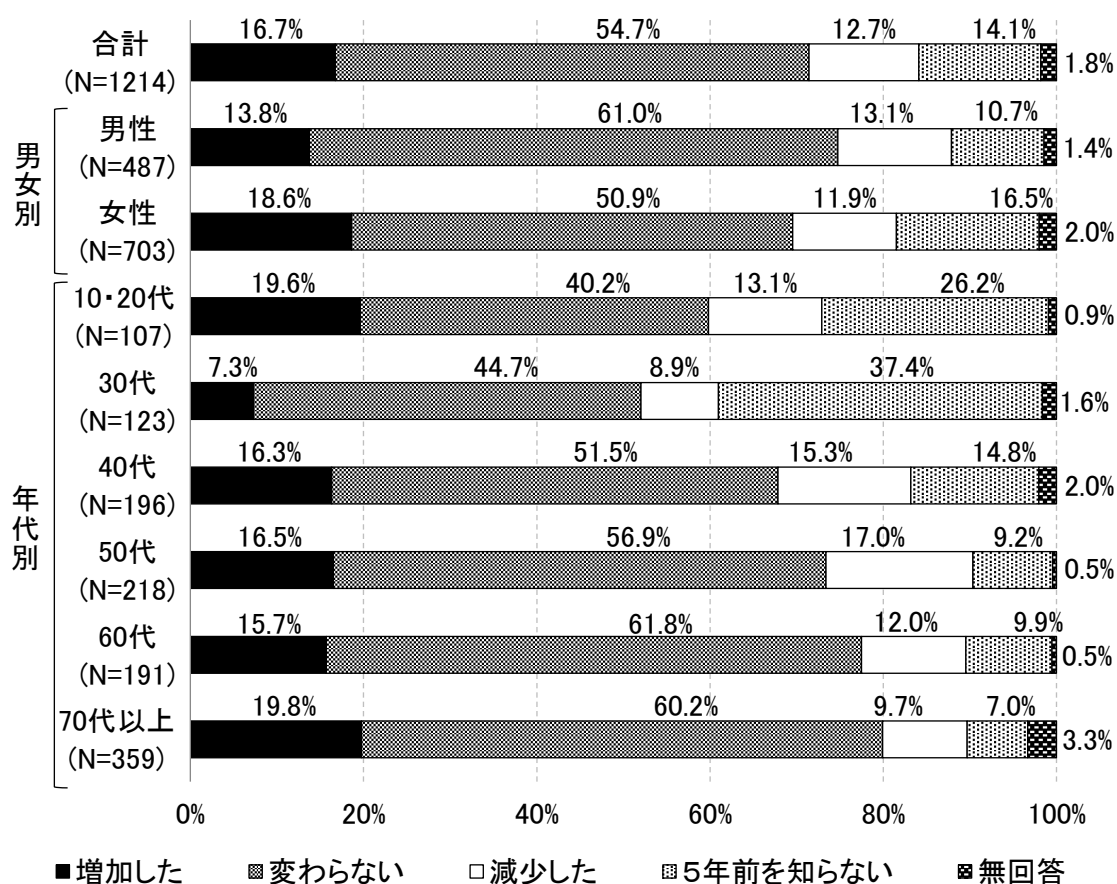


図22 Q8A 中心市街地で5年前と比べて増加したか（文化活動）

Q8B のコミュニティ活動に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、すべての年代で2割未満である。「減少した」の割合も、男女別・年代別のすべての層で2割未満である（図 23）。

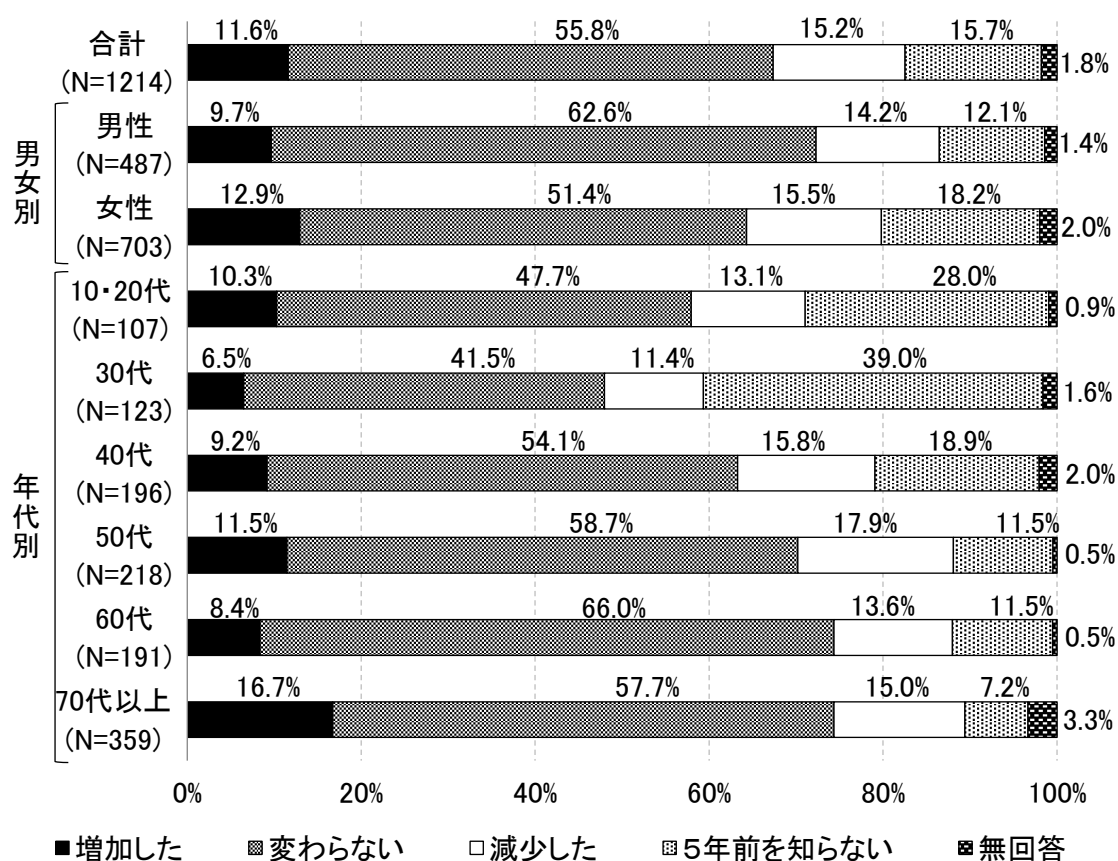


図 23 Q8B 中心市街地で5年前と比べて増加したか（コミュニティ活動）

Q8C の商店街の魅力に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で2割未満である。「減少した」の割合は、30代は12.2%で最低であり、60代は28.8%で最高である（図24）。

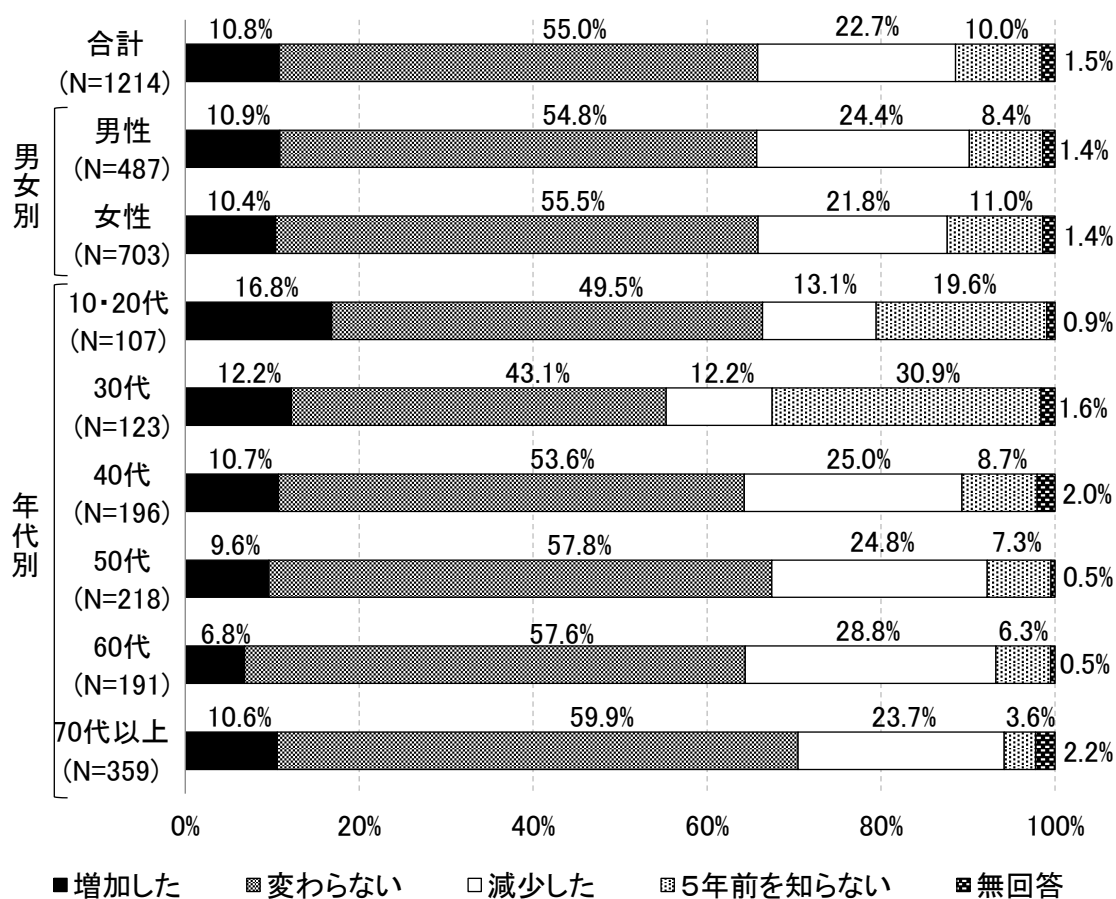


図 24 Q8C 中心市街地で5年前と比べて増加したか（商店街の魅力）

Q8D の百貨店などの大型店の魅力に関して、10・20 代、30 代で「増加した」が、50 代、60 代、70 代以上で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、すべての年代で 2 割以上であり、10・20 代が 43.0%と最も高い。「減少した」の割合は、60 代が 27.7%と最も高く、反対に 30 代が 6.5%と最も低い（図 25）。

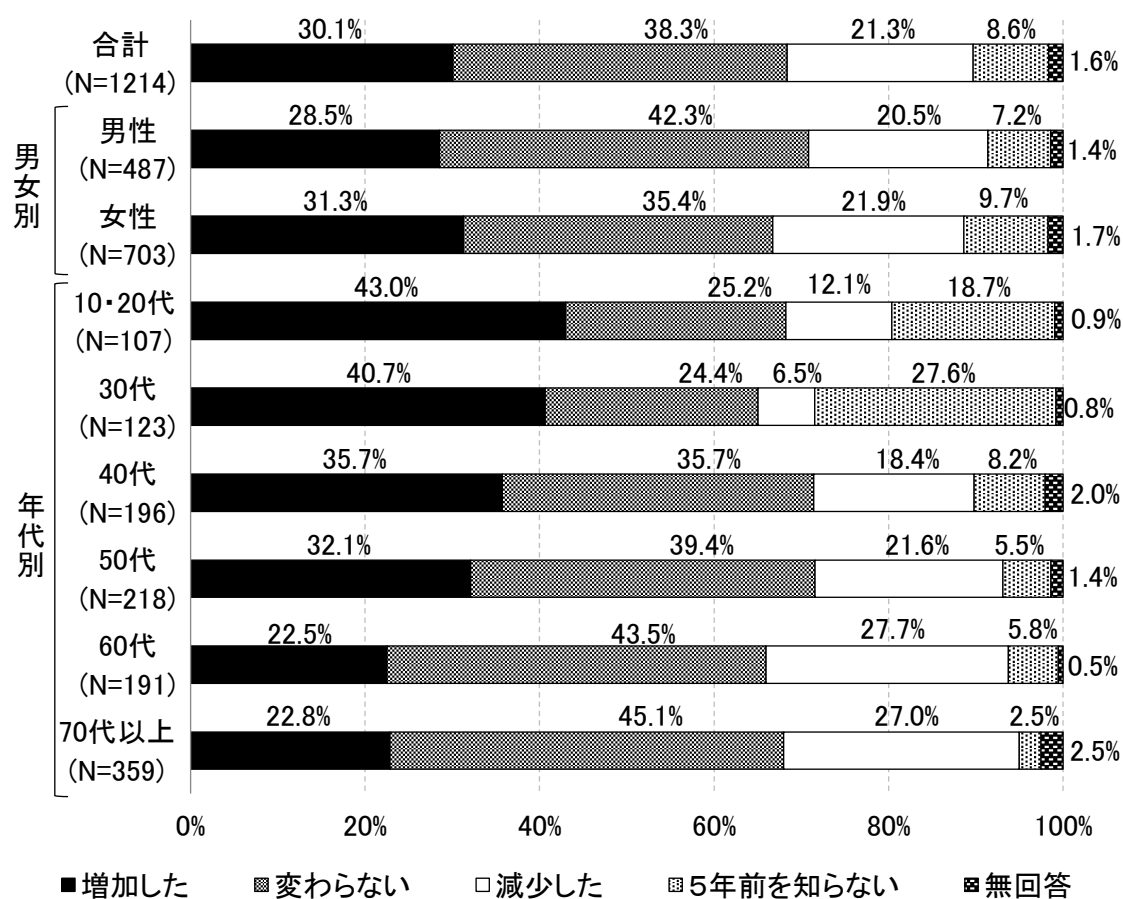


図 25 Q8D 中心市街地で 5 年前と比べて増加したか（百貨店などの大型店の魅力）

Q8E の買い物やイベントでのにぎわいに関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、すべての年代で3割未満である。「減少した」の割合は、30代以下は2割未満であり、40代以上は3割程度である（図26）。

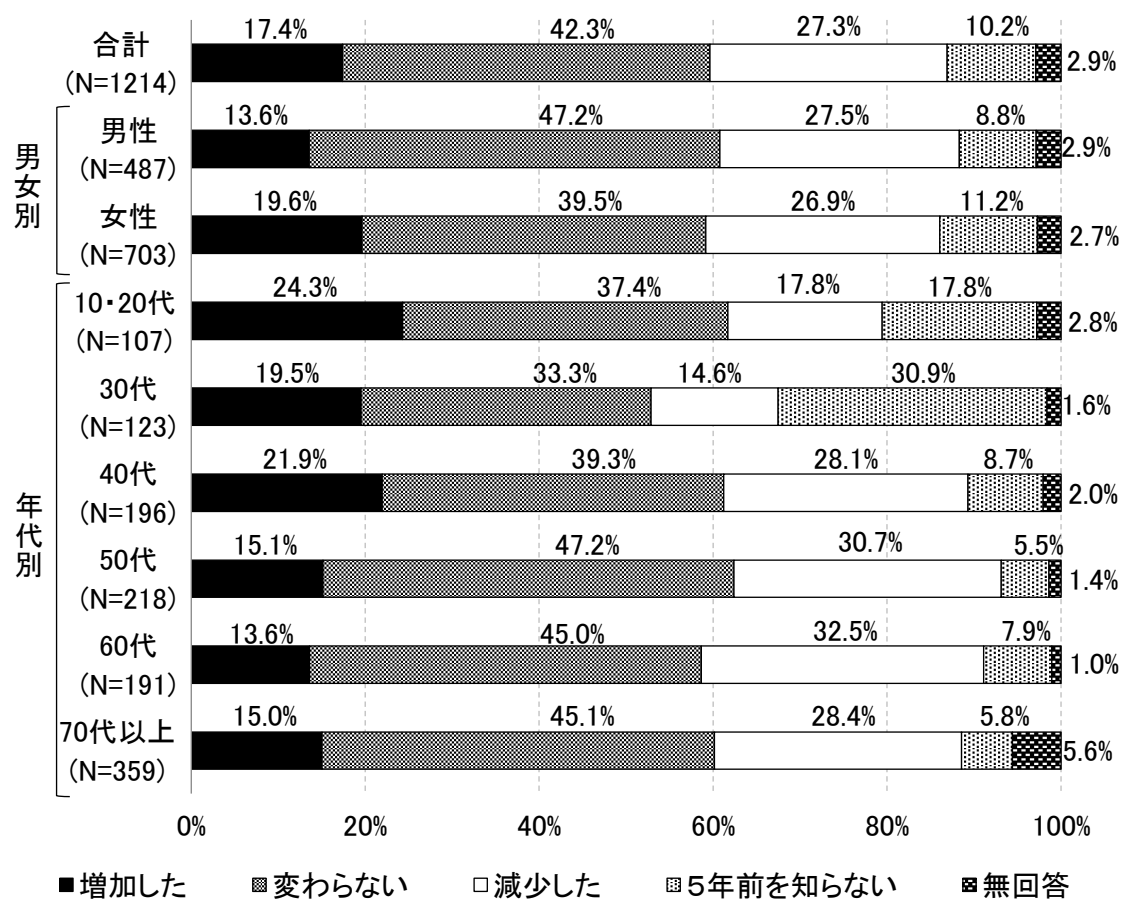


図 26 Q8E 中心市街地で5年前と比べて増加したか
(買い物やイベントでのにぎわい)

Q8F の魅力的な飲食店に関して、30 代を除くすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」の割合は、10・20 代が 33.6%と最も高く、反対に 70 代以上で 13.6%と最も低い（図 27）。

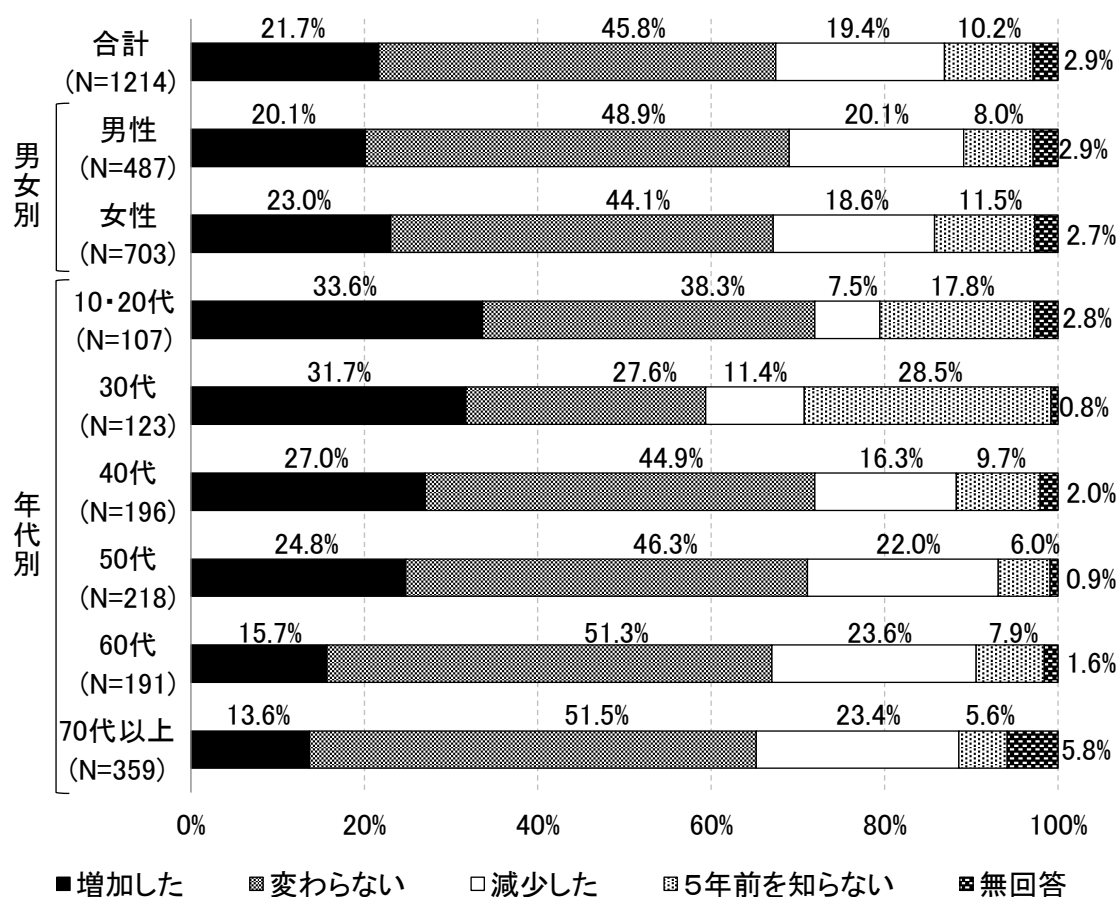


図 27 Q8F 中心市街地で 5 年前と比べて増加したか（魅力的な飲食店）

Q8G のオフィスなどの業務施設に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、年代別の 10・20 代の 10.3%を除くと男女別・年代別のすべての層でいずれも 1 割未満である（図 28）。

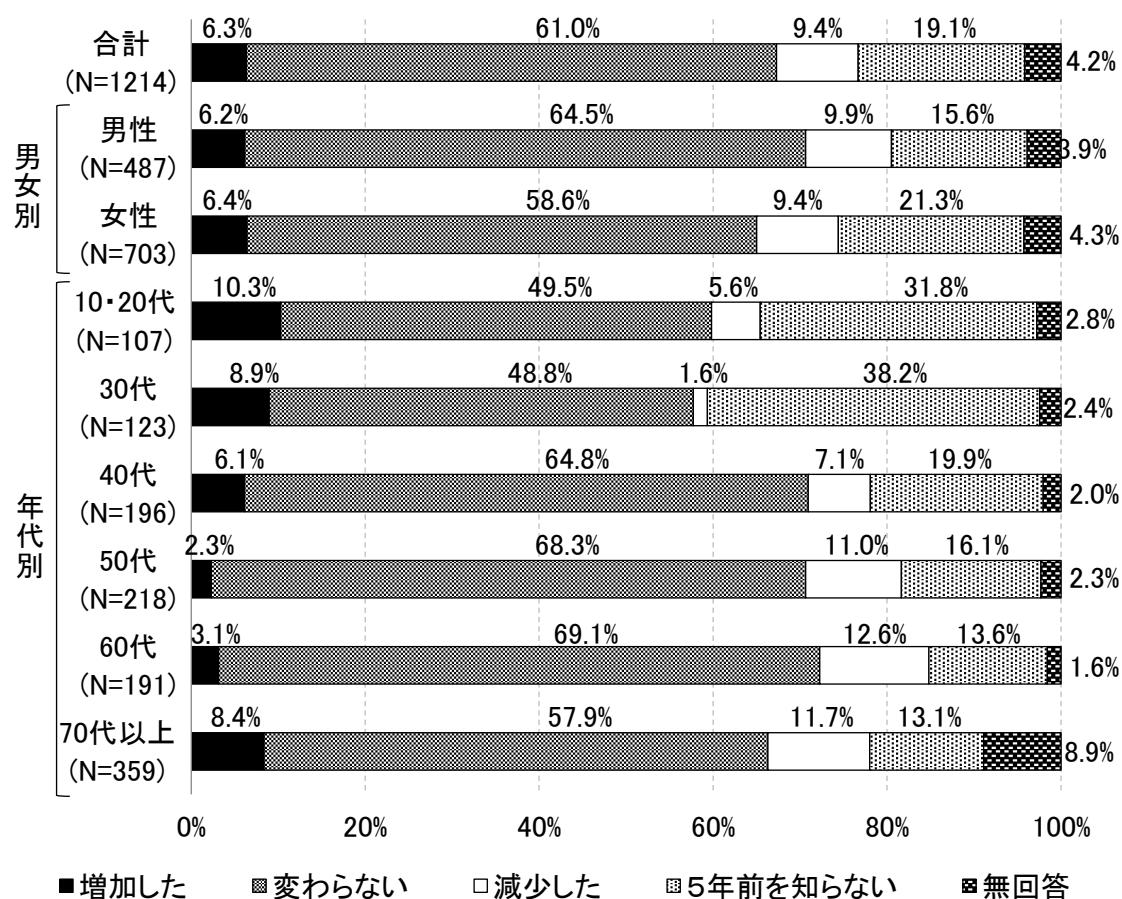


図 28 Q8G 中心市街地で 5 年前と比べて増加したか（オフィスなど業務施設）

Q8H の病院などの医療機関に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、年代別で見ると、「増加した」の割合は40代、50代、70代以上は2割を超えているが、30代は17.9%と最も低い。「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である（図 29）。

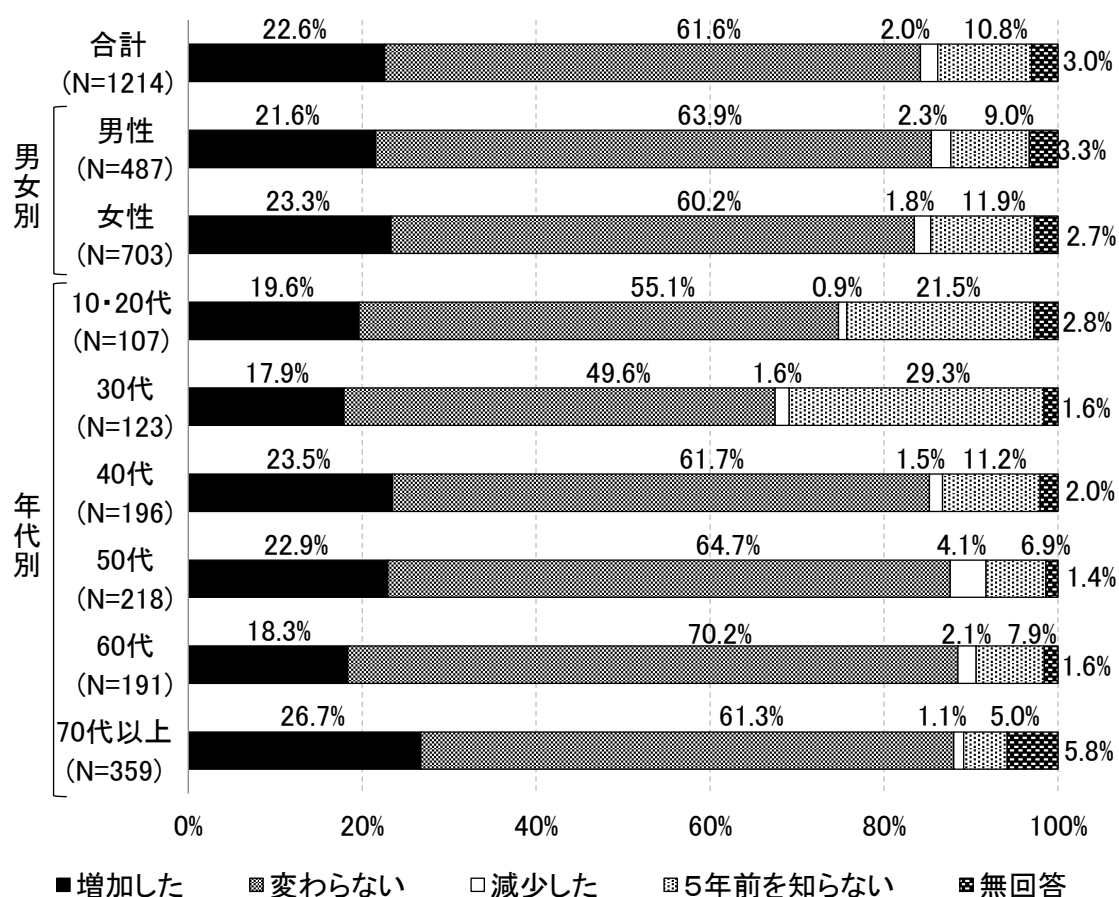


図 29 Q8H 中心市街地で5年前と比べて増加したか（病院などの医療機関）

Q8I の道路の渋滞に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」の割合は、40代と70代以上を除くすべての年代で2割未満である。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で2割未満である（図 30）。

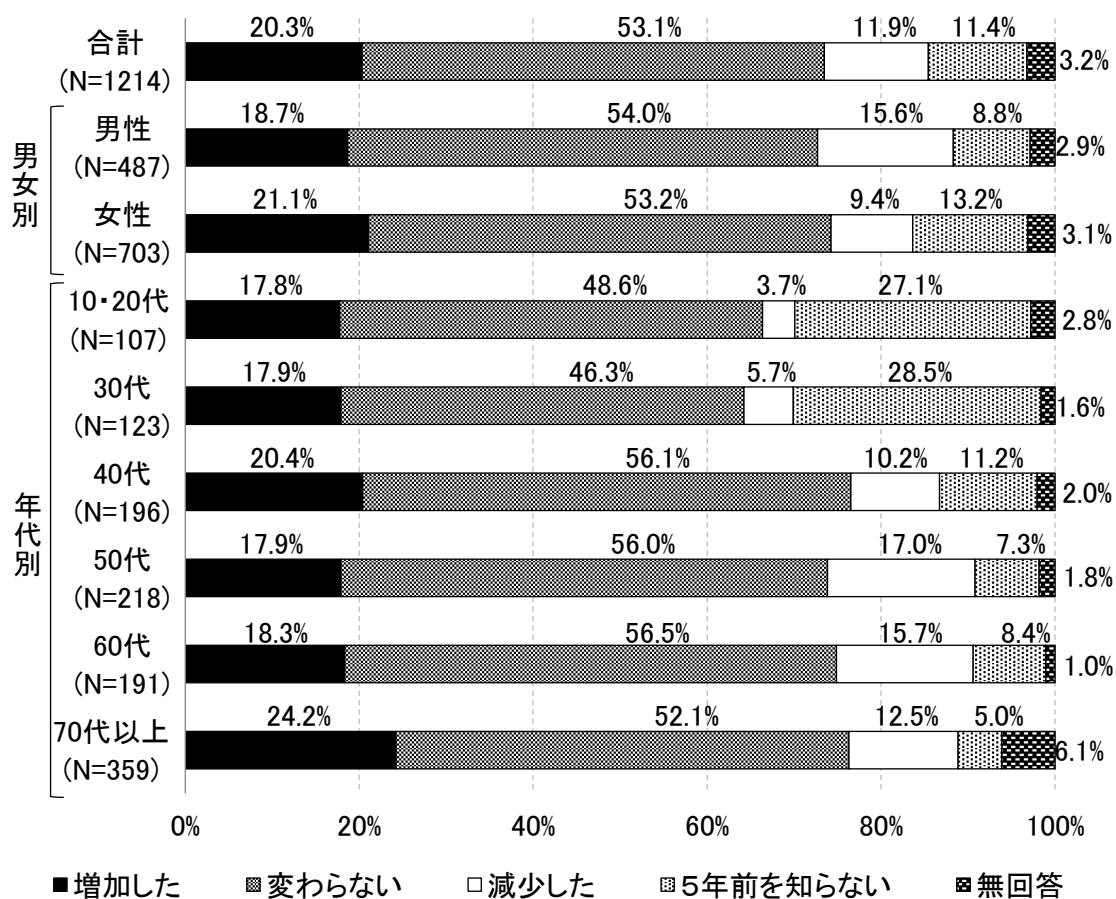


図 30 Q8I 中心市街地で5年前と比べて増加したか（道路の渋滞）

Q8J の駐輪場に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」の割合は、30代が22.8%と最も高く、反対に60代が16.8%と最も低い。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である（図31）。

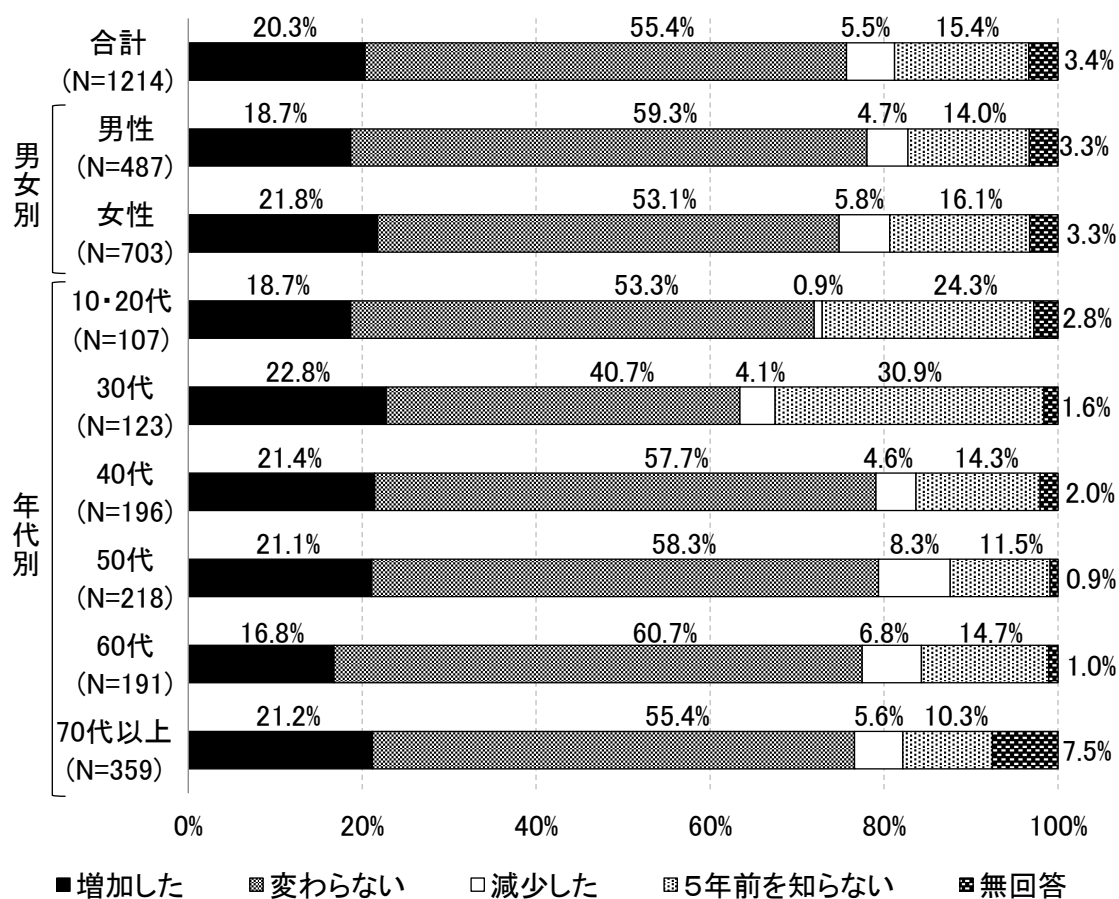


図 31 Q8J 中心市街地で5年前と比べて増加したか（駐輪場）

Q8 K の駐車場に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」の割合は、70 代以上が 21.7%と最も高く、反対に 10・20 代が 12.1%と最も低い。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 1 割未満である（図 32）。

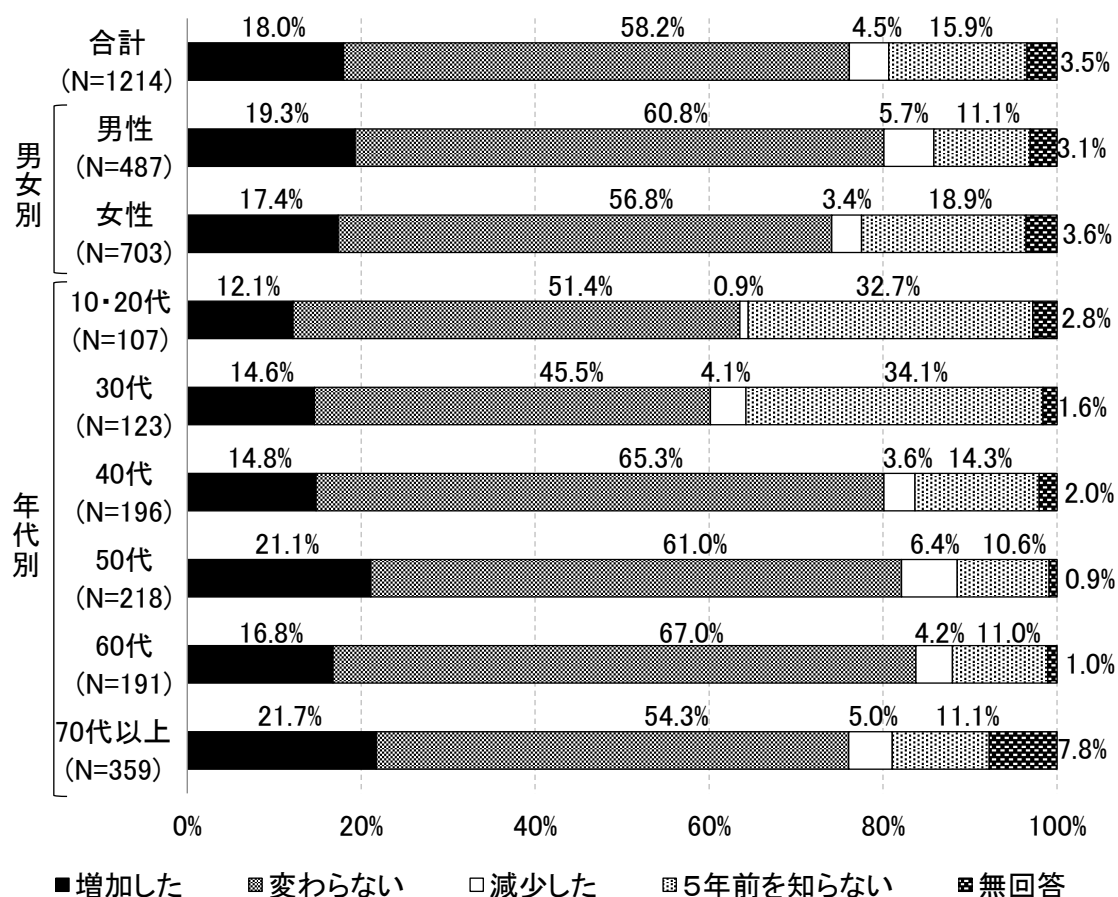


図 32 Q8 K 中心市街地で 5 年前と比べて増加したか（駐車場）

Q8L の街なかの緑や潤いに関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」の割合は、60代が15.7%と最も高く、50代が9.2%と最も低い。「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で2割未満であり、70代以上が15.3%と最も高く、30代が7.3%と最も低い（図33）。

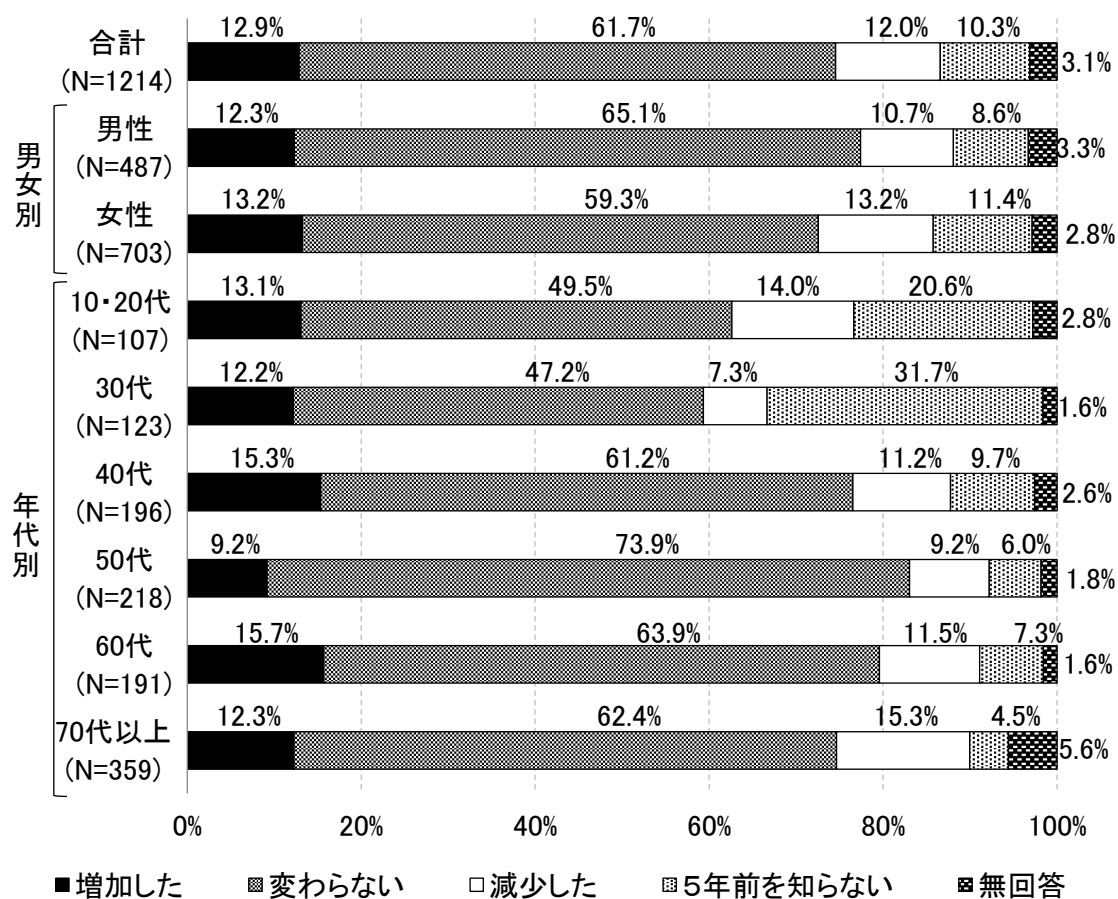


図 33 Q8L 中心市街地で5年前と比べて増加したか（街なかの緑や潤い）

Q9 の中心市街地を住み良い街にするための必要な取り組みに関して、「治安・防犯の向上」が 53.1%と最も高く、「医療機能の充実」が 52.6%と続く（図 34）。

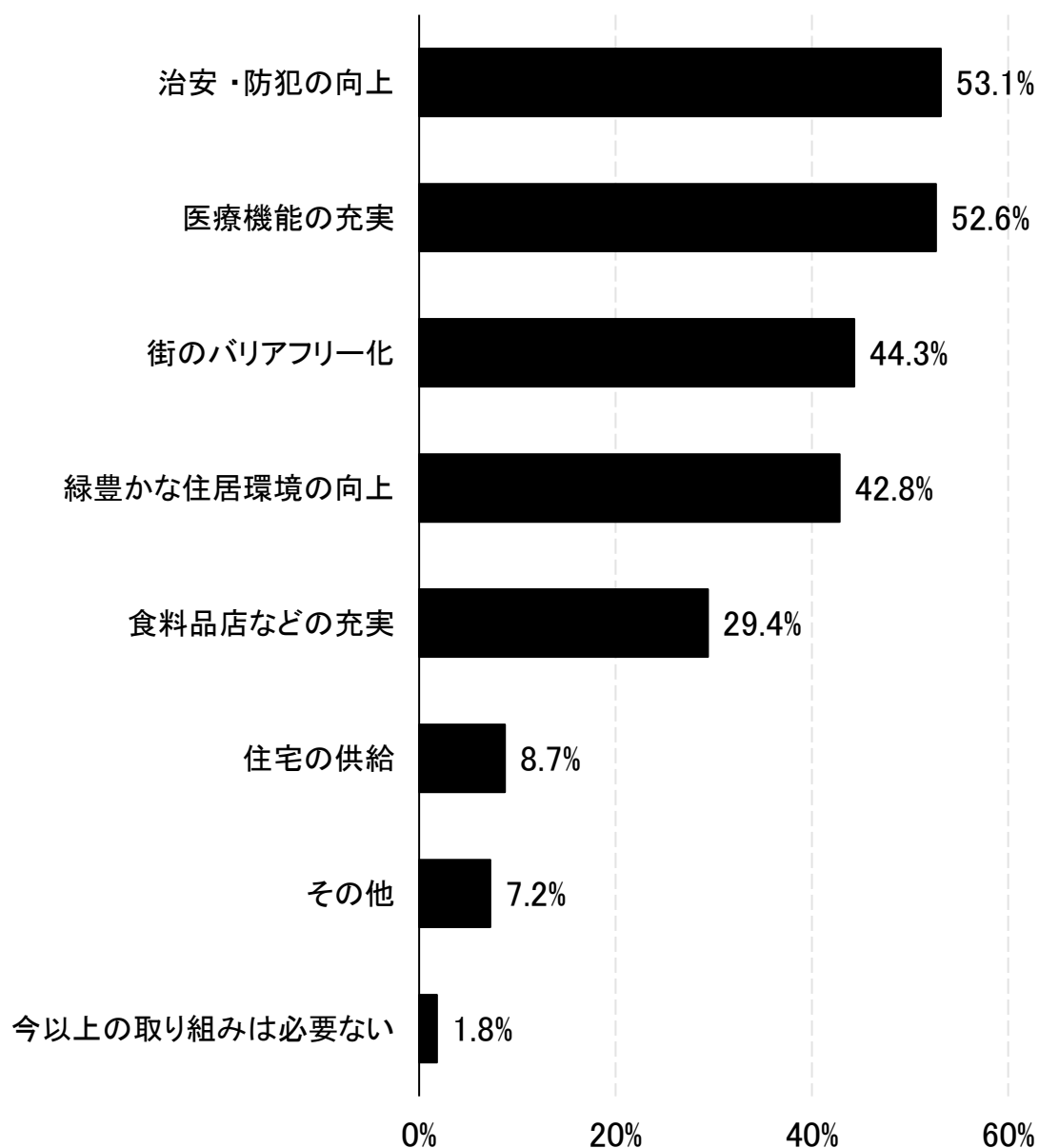


図 34 Q9 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・全体 N=1224）

Q9 の中心市街地を住み良い街にするための必要な取り組みに関して、男女別で見ると、「医療機能の充実」は、男性よりも女性の方が 10.6 ポイント高い（図 35）。

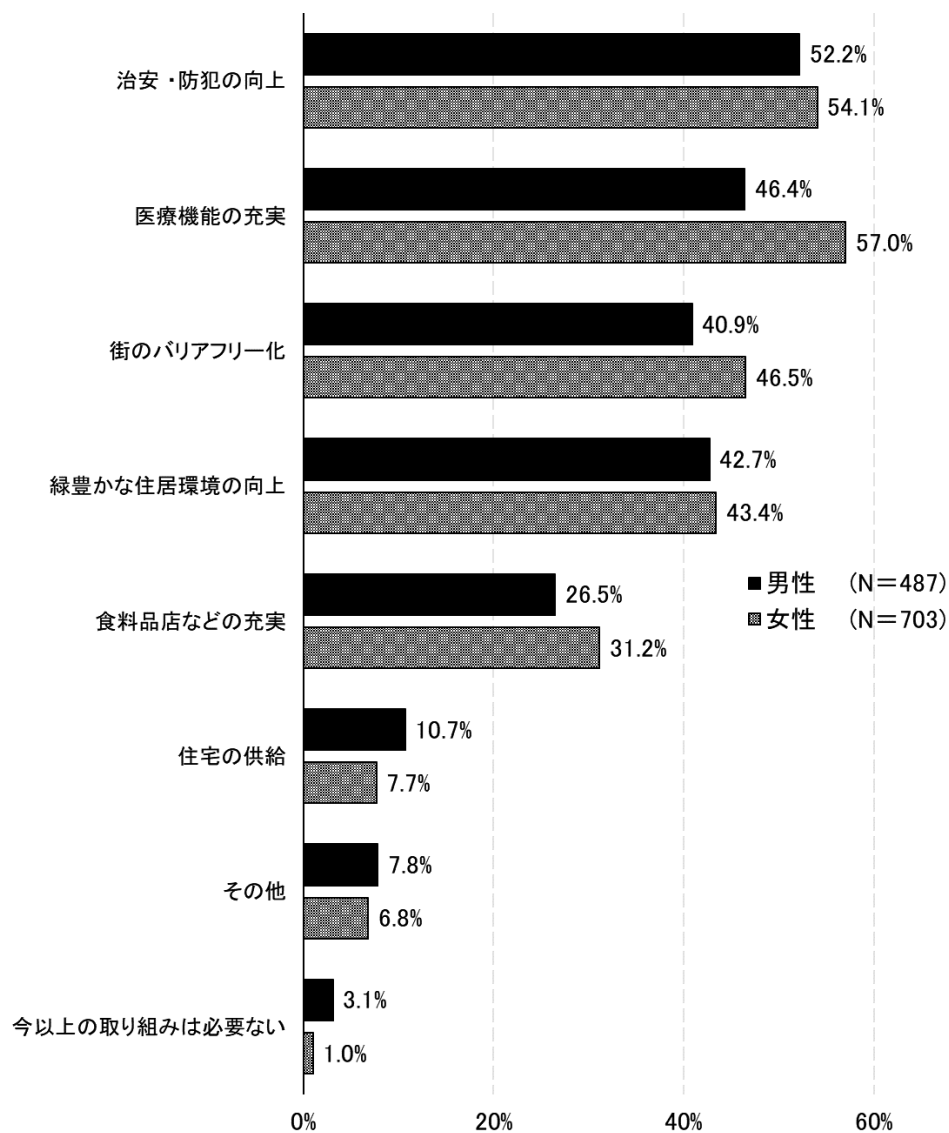


図 35 Q9 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・男女別）

Q9 の中心市街地を住み良い街にするための必要な取り組みに関して、年代別で見ると、「街のバリアフリー化」は 40 代以下と 50 代以上で差があり、70 代以上が 53.8%と高く、反対に 30 代は 26.8%と低い（図 36）。

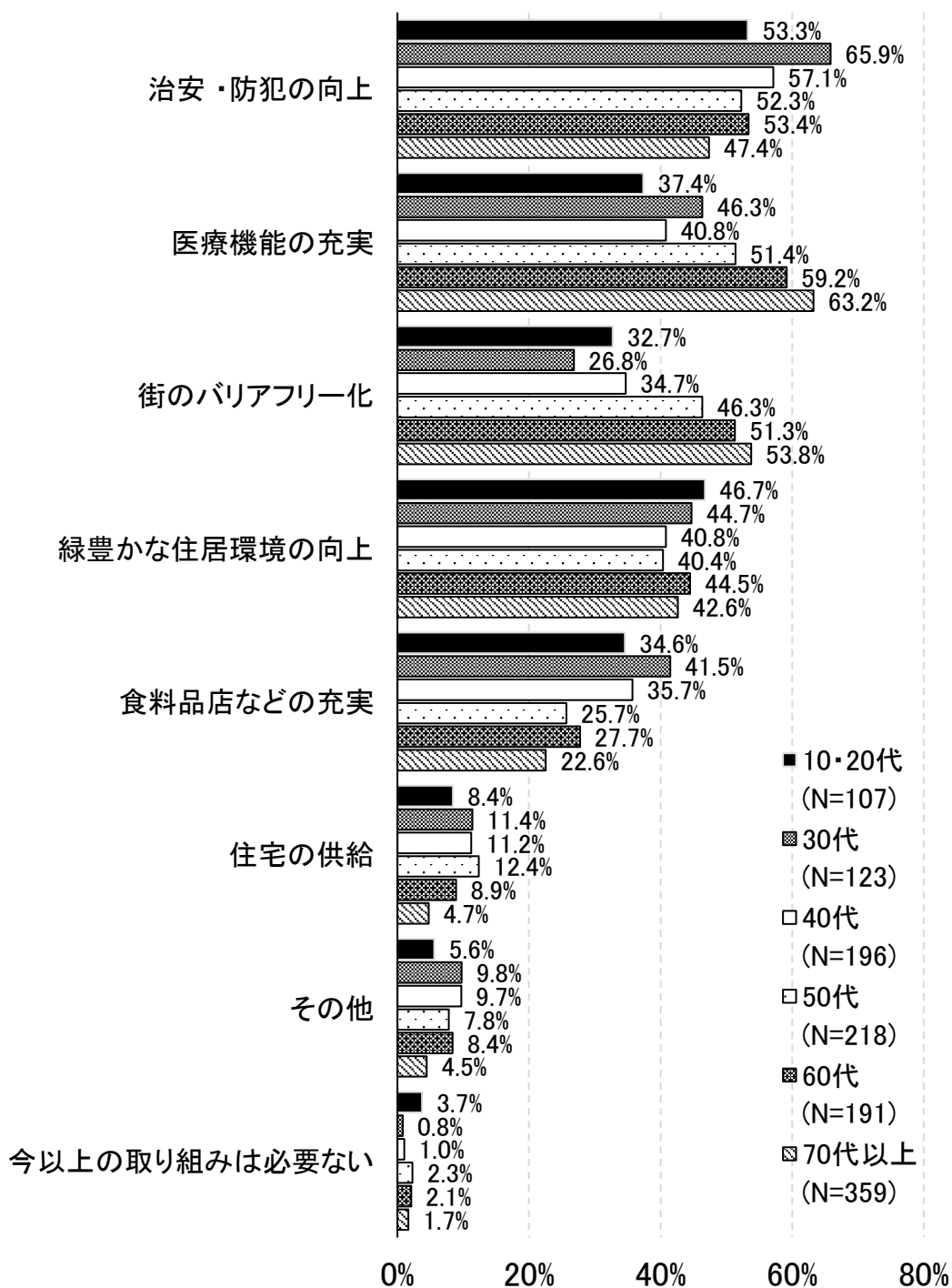


図 36 Q9 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・年代別）

Q10A の徒歩における歩道の整備の状況の満足度に関して、年代別で見ると、10・20代と40代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。それ以外の年代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は60代が40.8%と最も高い。反対に、10・20代は19.6%と最も低い（図 37）。

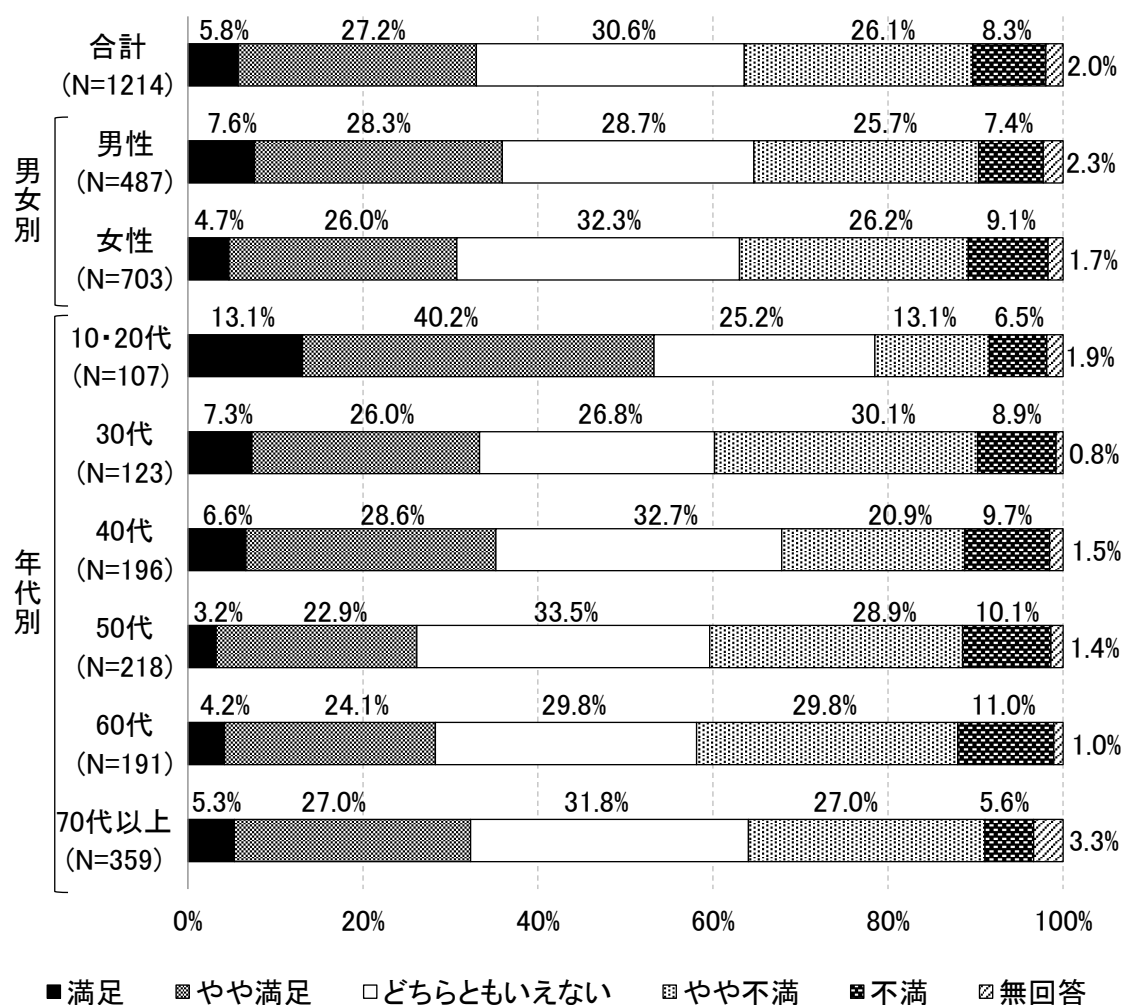


図 37 Q10A 交通手段満足度（徒歩：歩道の整備の状況）

Q10B の徒歩におけるバリアフリー化の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 70 代以上が 22.3% と最も高い（図 38）。

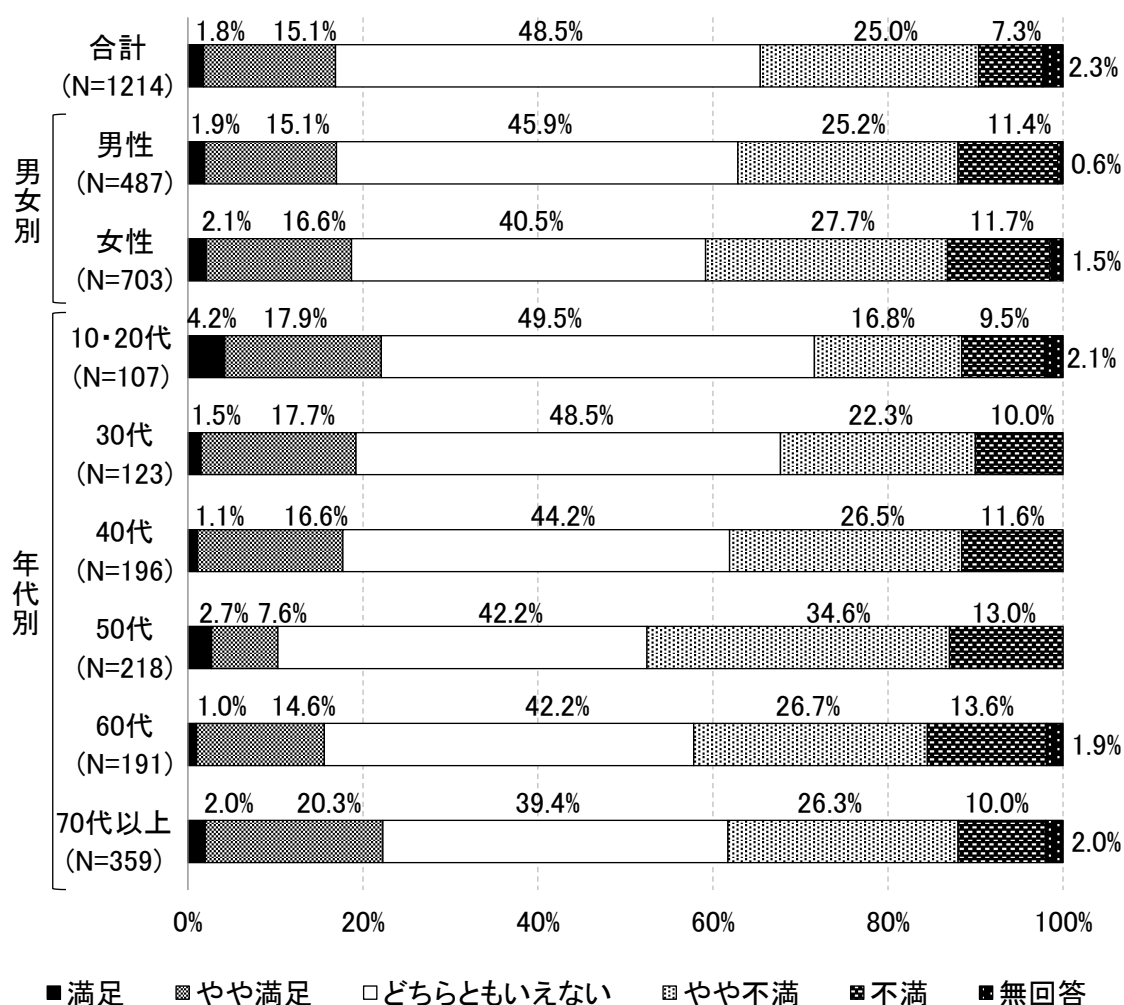


図 38 Q10B 交通手段満足度（徒歩：バリアフリー化）

Q10C の自転車が行き通るために必要なスペースの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は 50 代が 61.0%と最も高い。反対に、10・20 代は 36.4%と最も低い（図 39）。

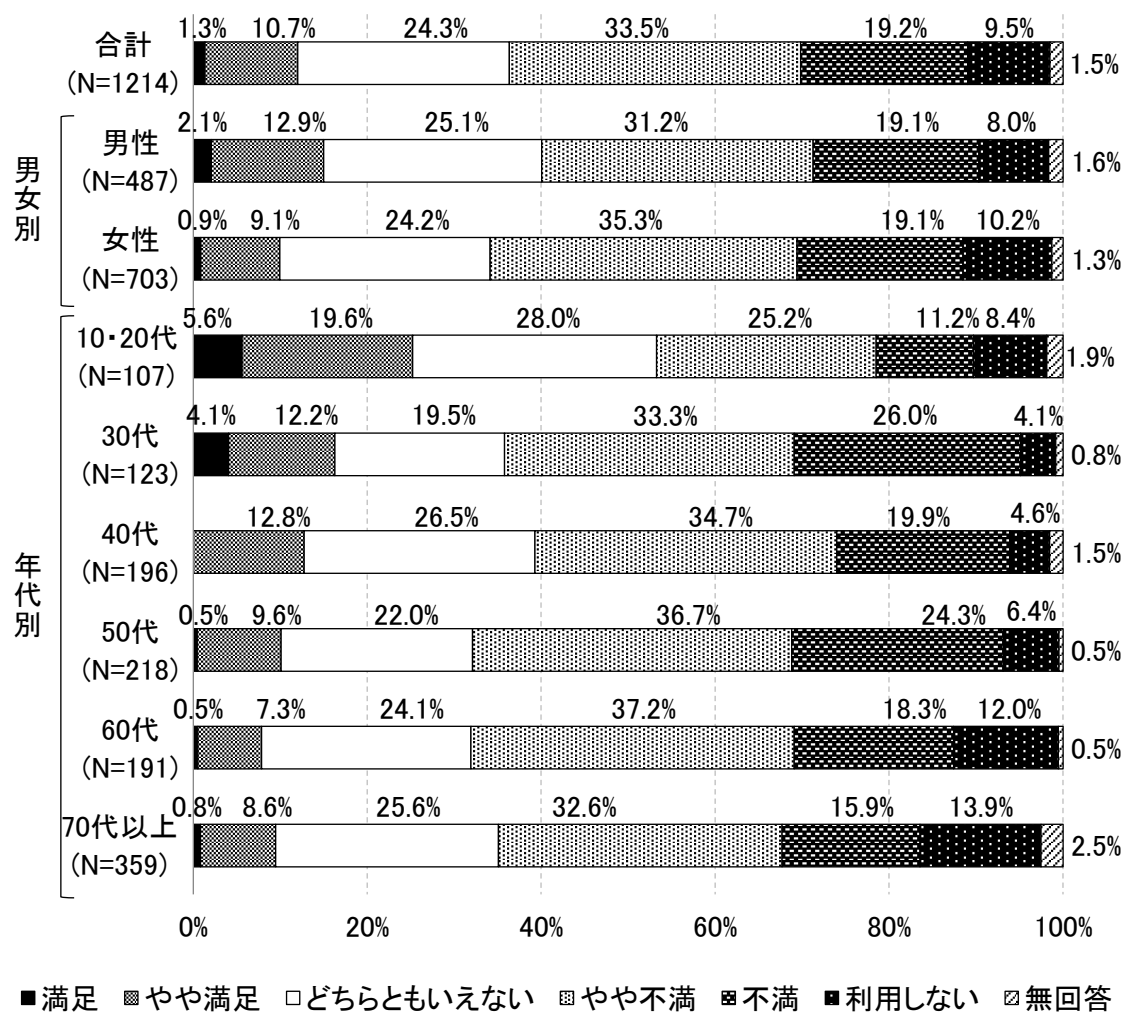


図 39 Q10C 交通手段満足度（自転車：通行するために必要なスペース）

Q10D の自転車の駐輪場の満足度に関して、年代別で見ると、10・20代と30代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合より高い。それ以外の年代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は30代が36.6%と最も高い。反対に、60代は14.6%と最も低い（図40）。

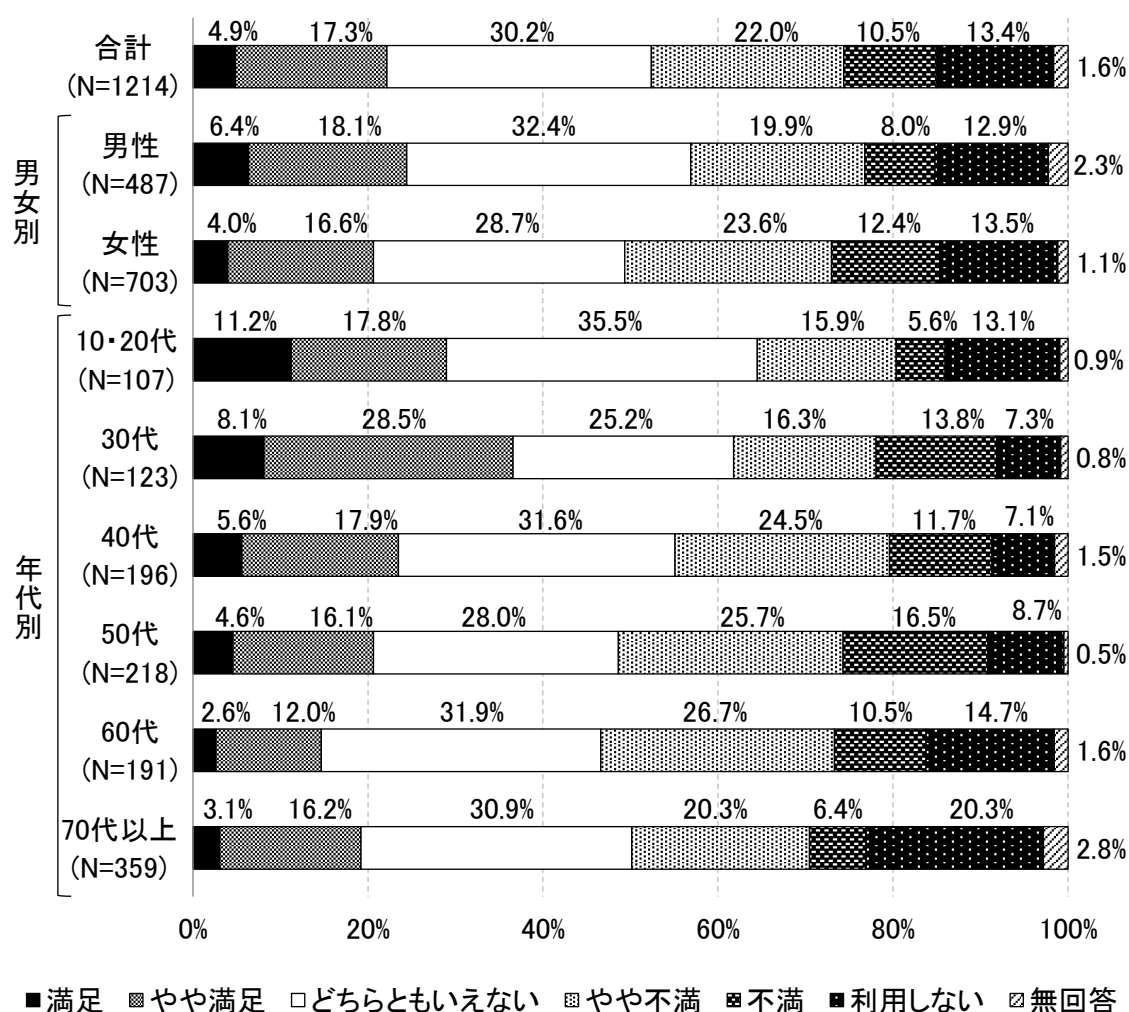


図 40 Q10D 交通手段満足度（自転車：駐輪場）

Q10E の自転車に乗っている人々のマナーの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は 60 代が 69.1%と最も高い。反対に 10・20 代が、45.8%と最も低い（図 41）。

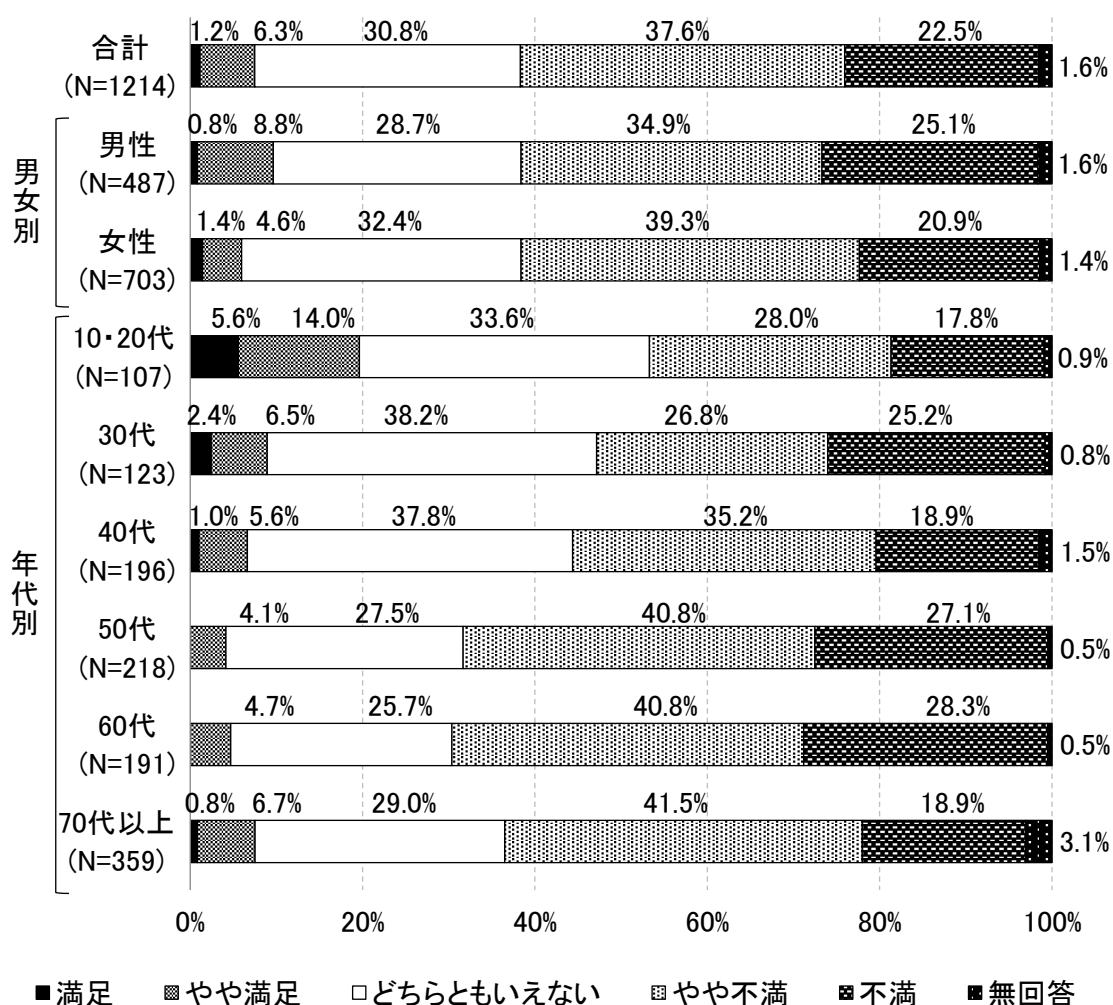
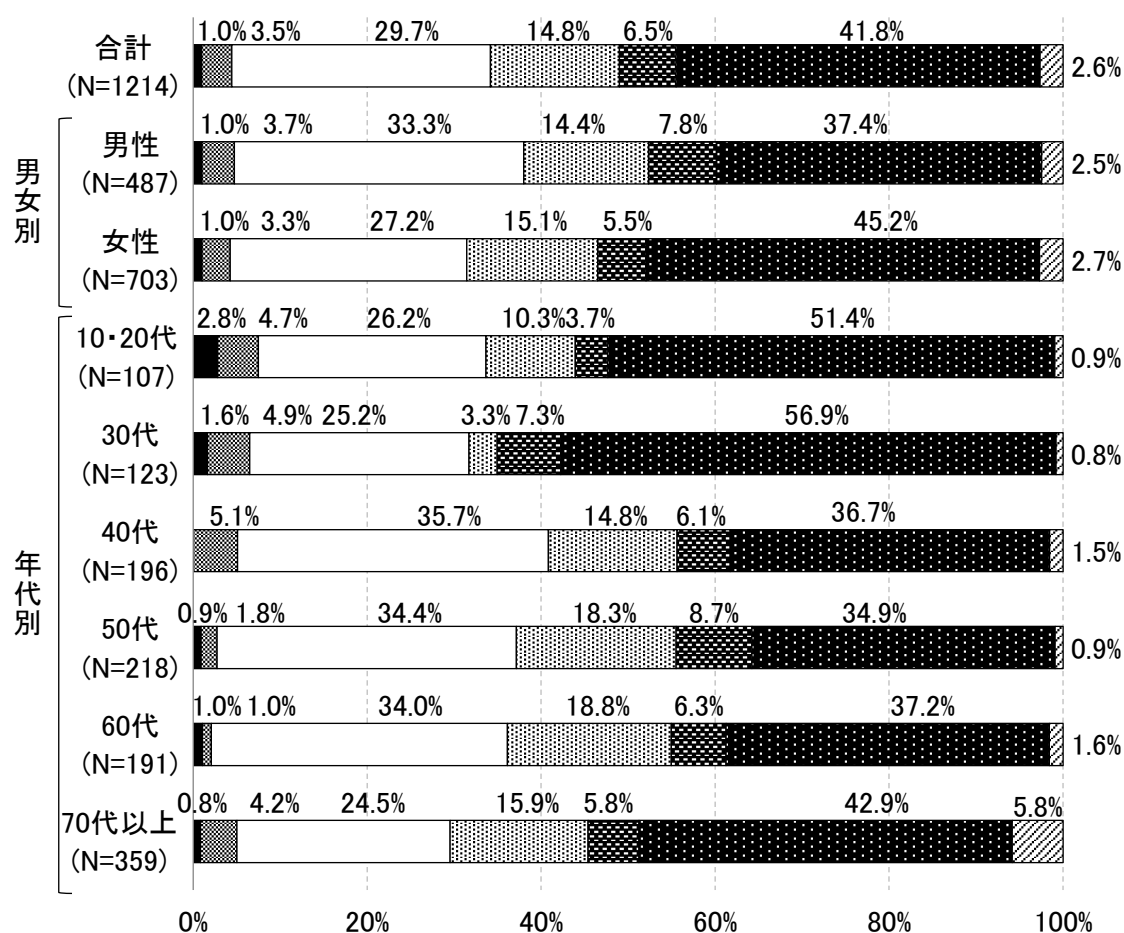


図 41 Q10E 交通手段満足度（自転車：乗っている人々のマナー）

Q10F のバイクが通行するために必要なスペースの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は10・20代が7.5%と最も高い。反対に60代が、2.0%と最も低い（図 42）。



■満足 ■やや満足 □どちらともいえない ■やや不満 ■不満 ■利用しない ■無回答

図 42 Q10F 交通手段満足度（バイク：通行するために必要なスペース）

Q10G のバイクの駐車場の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 8.4%と最も高い。反対に 50 代が、2.8%と最も低い（図 43）。

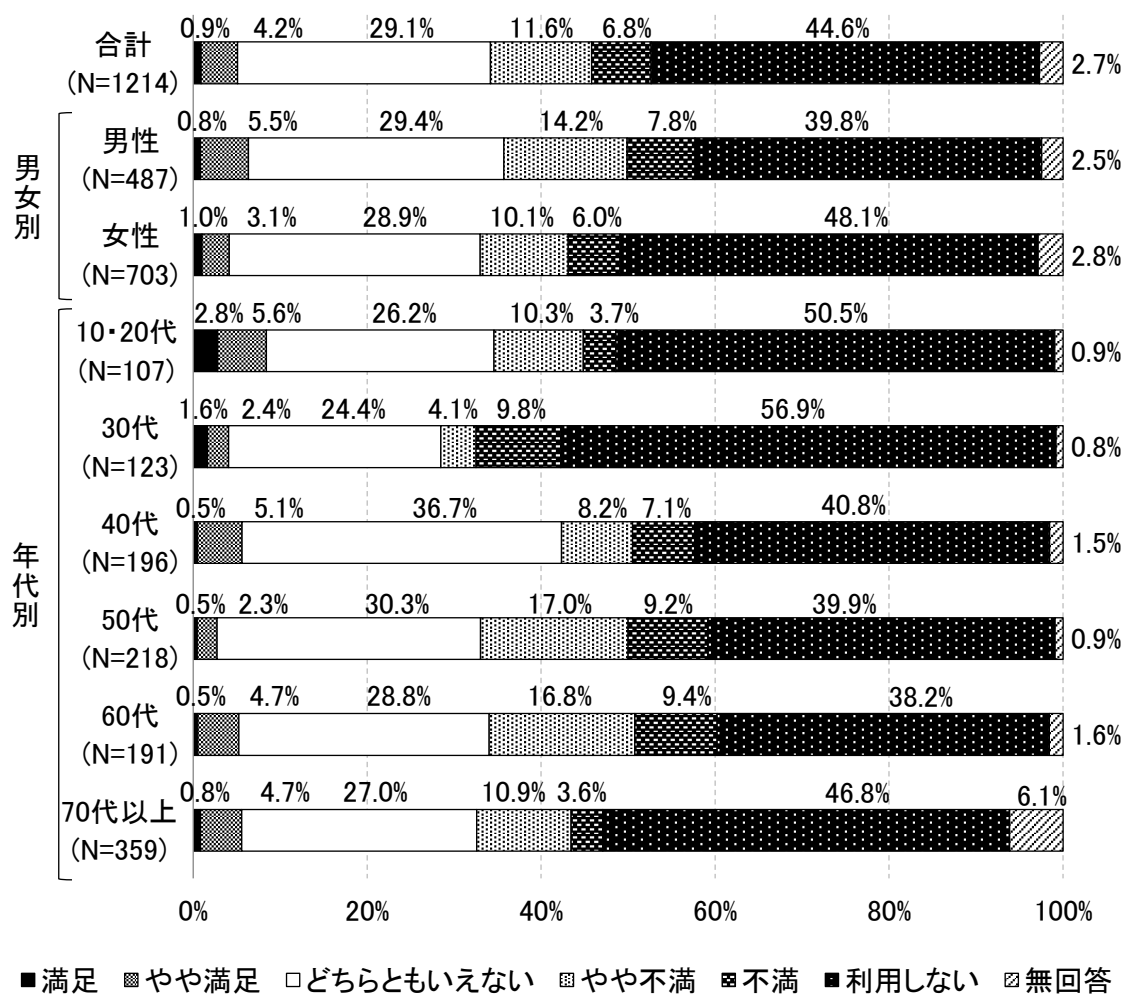


図 43 Q10G 交通手段満足度（バイク：駐車場）

Q10H のバイクに乗っている人々のマナーの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 18.7%と最も高い。反対に 40 代が、4.1%と最も低い（図 44）。

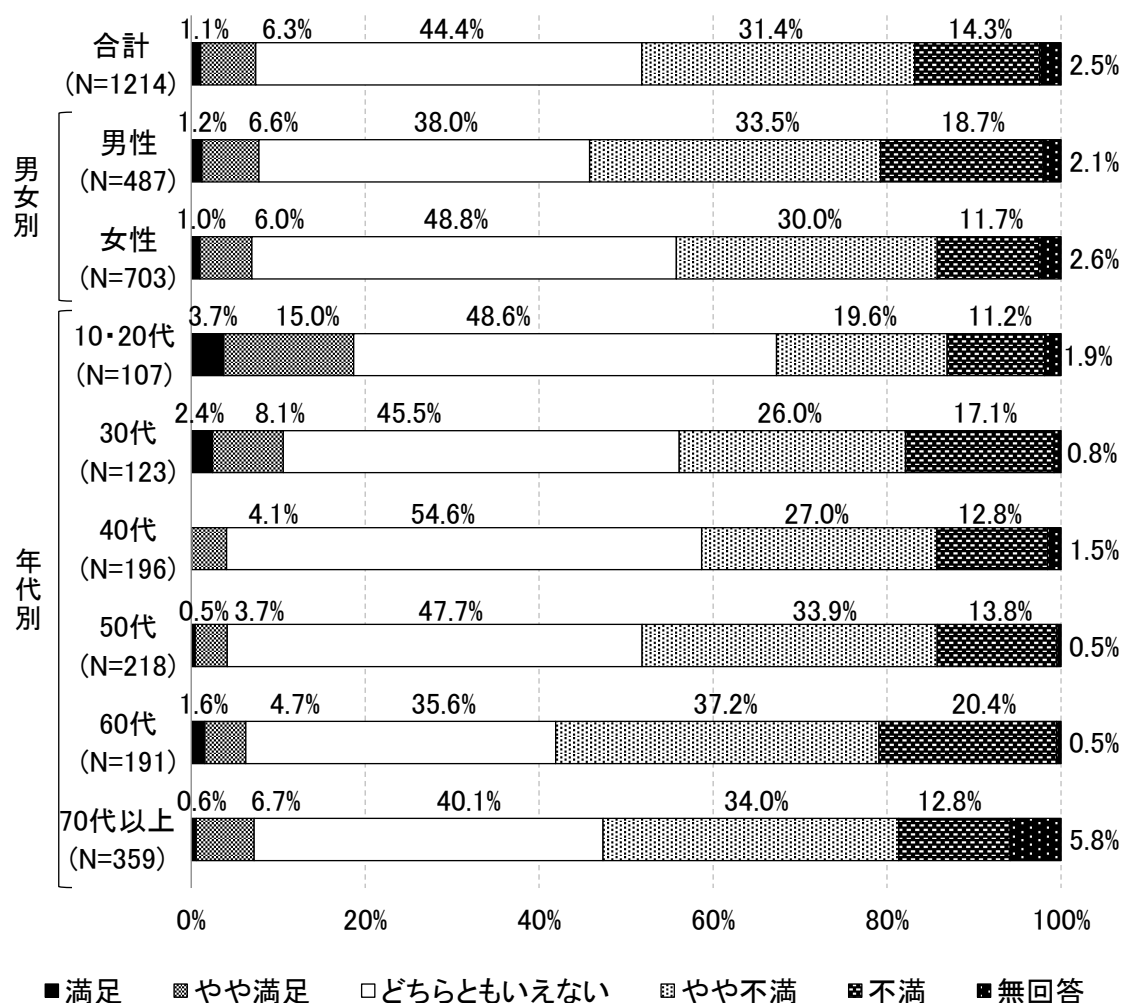


図 44 Q10H 交通手段満足度（バイク：乗っている人々のマナー）

Q10I のバスの路線・系統の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 70 代以上で 44.5%と最も高い。反対に 50 代が 28.5%と最も低い（図 45）。

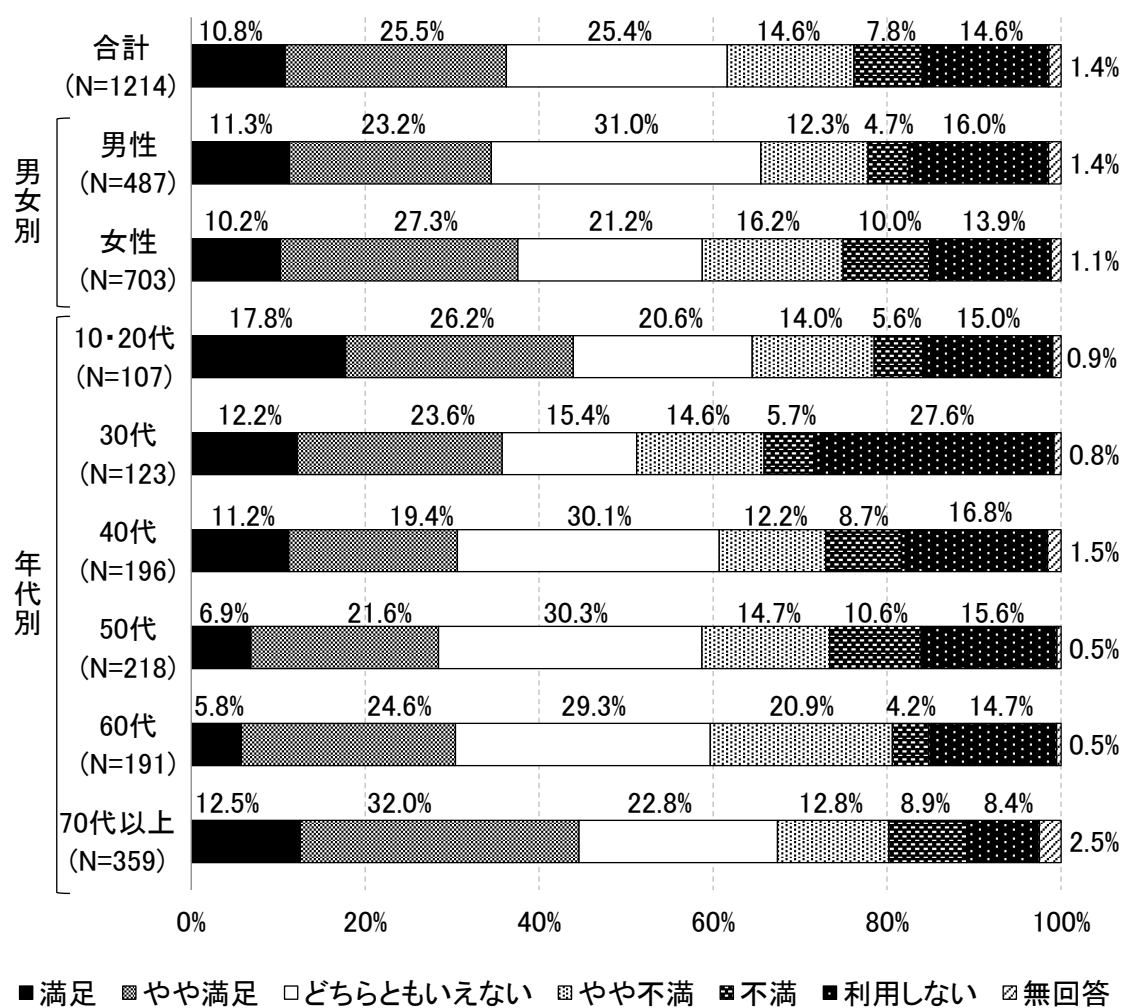


図 45 Q10I 交通手段満足度（バス：路線・系統）

Q10J のバスのダイヤの満足度に関して、年代別で見ると、40 代と 50 代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。それ以外の年代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 70 代以上で 38.4%と最も高い。反対に、40 代が 23.0%と最も低い（図 46）。

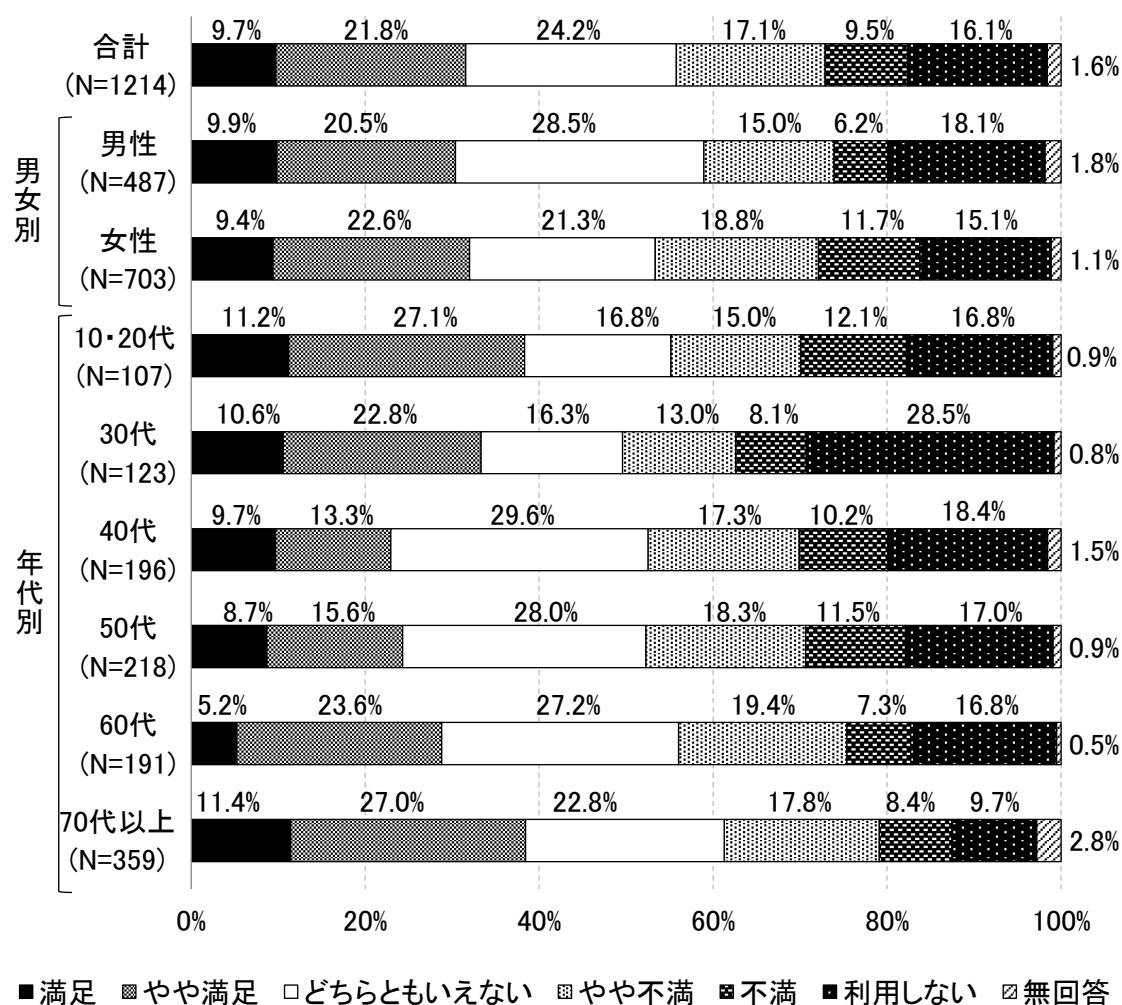


図 46 Q10J 交通手段満足度（バス：ダイヤ）

Q10K のバス停の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。

「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 49.5%と最も高い。反対に 40 代が 29.1%と最も低い（図 47）。

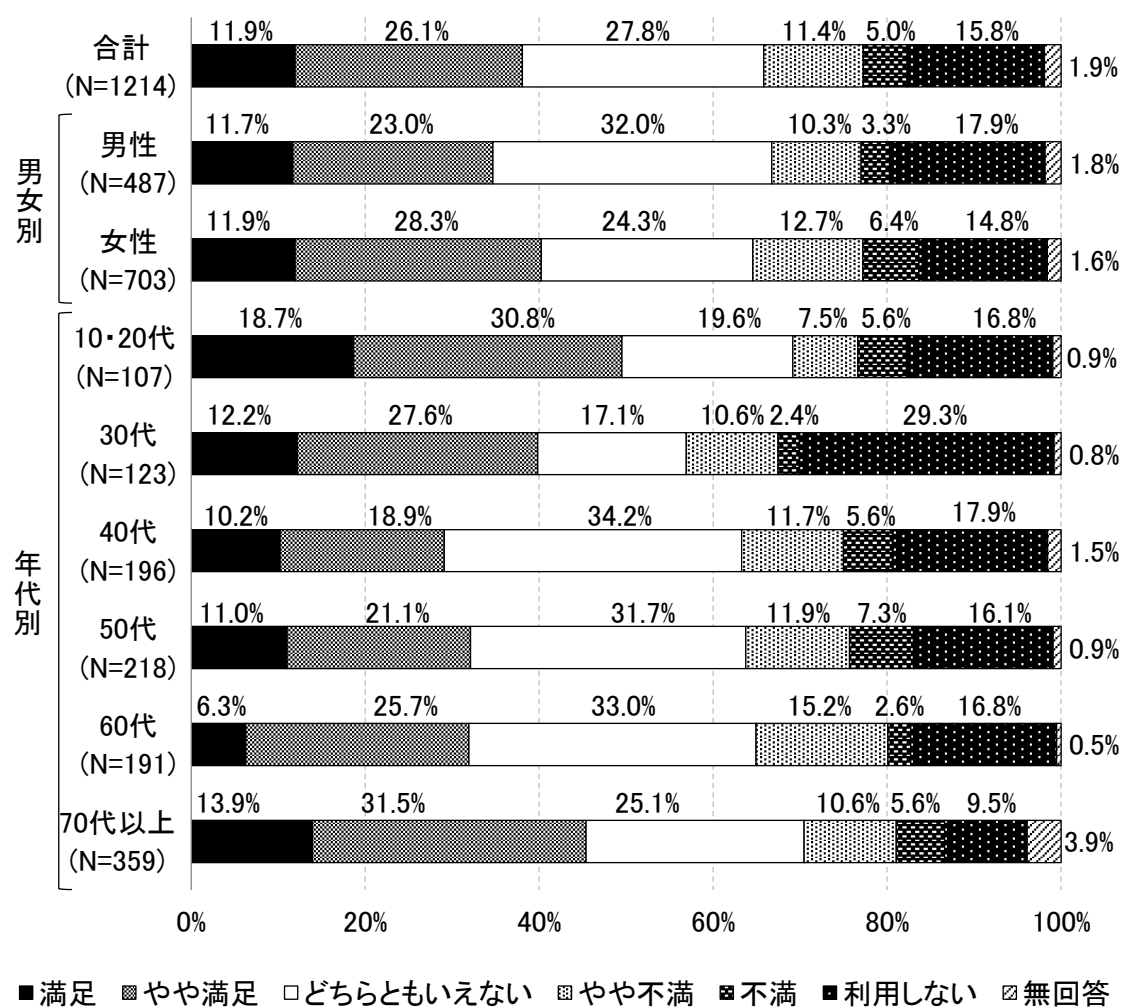
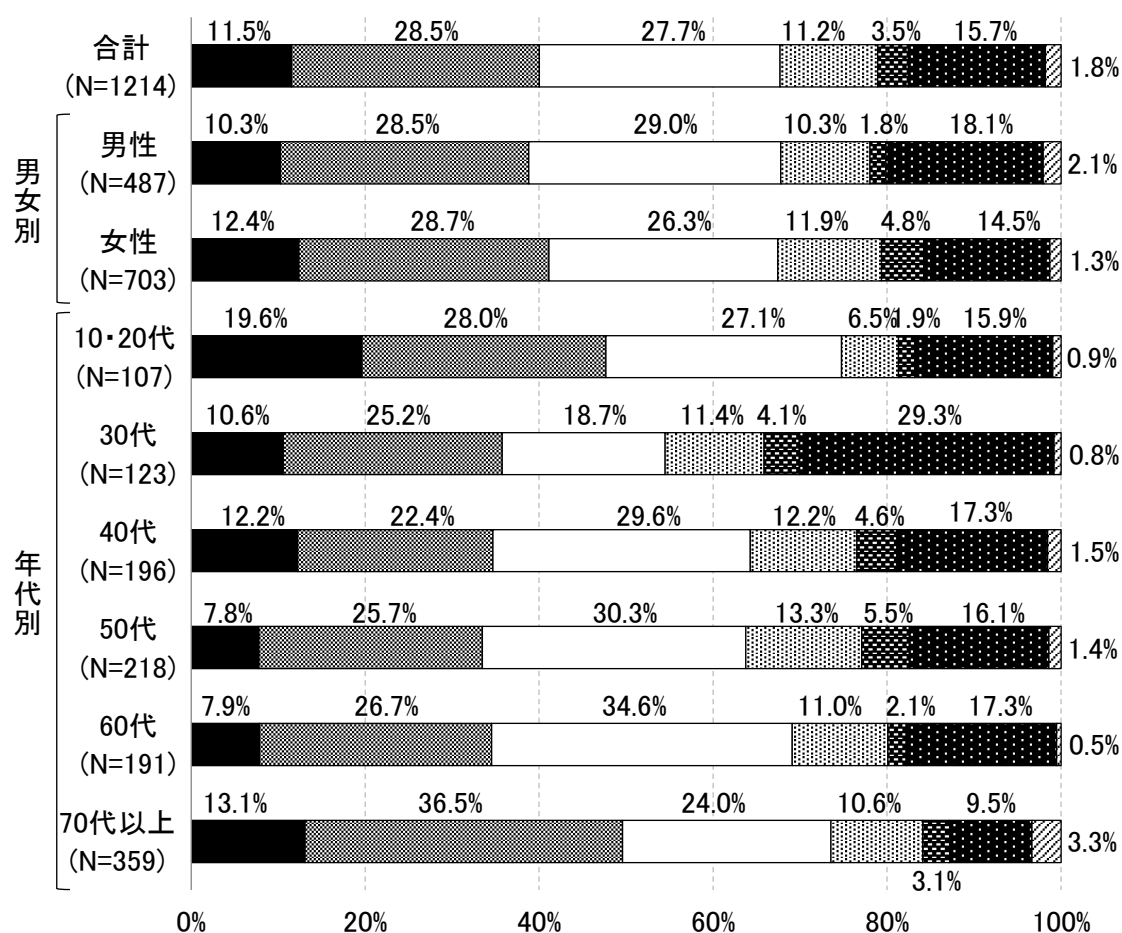


図 47 Q10K 交通手段満足度（バス：バス停）

Q10L のバスの乗り方の分かりやすさの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 70 代以上で 49.6%と最も高い。反対に、50 代が 33.5%と最も低い（図 48）。



■満足 ■やや満足 □どちらともいえない ■やや不満 ■不満 ■利用しない ■無回答

図 48 Q10L 交通手段満足度（バス：乗り方の分かりやすさ）

Q10M の鉄道の駅の使いやすさの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は10・20代が81.3%と最も高い。反対に50代が58.7%と最も低い（図49）。

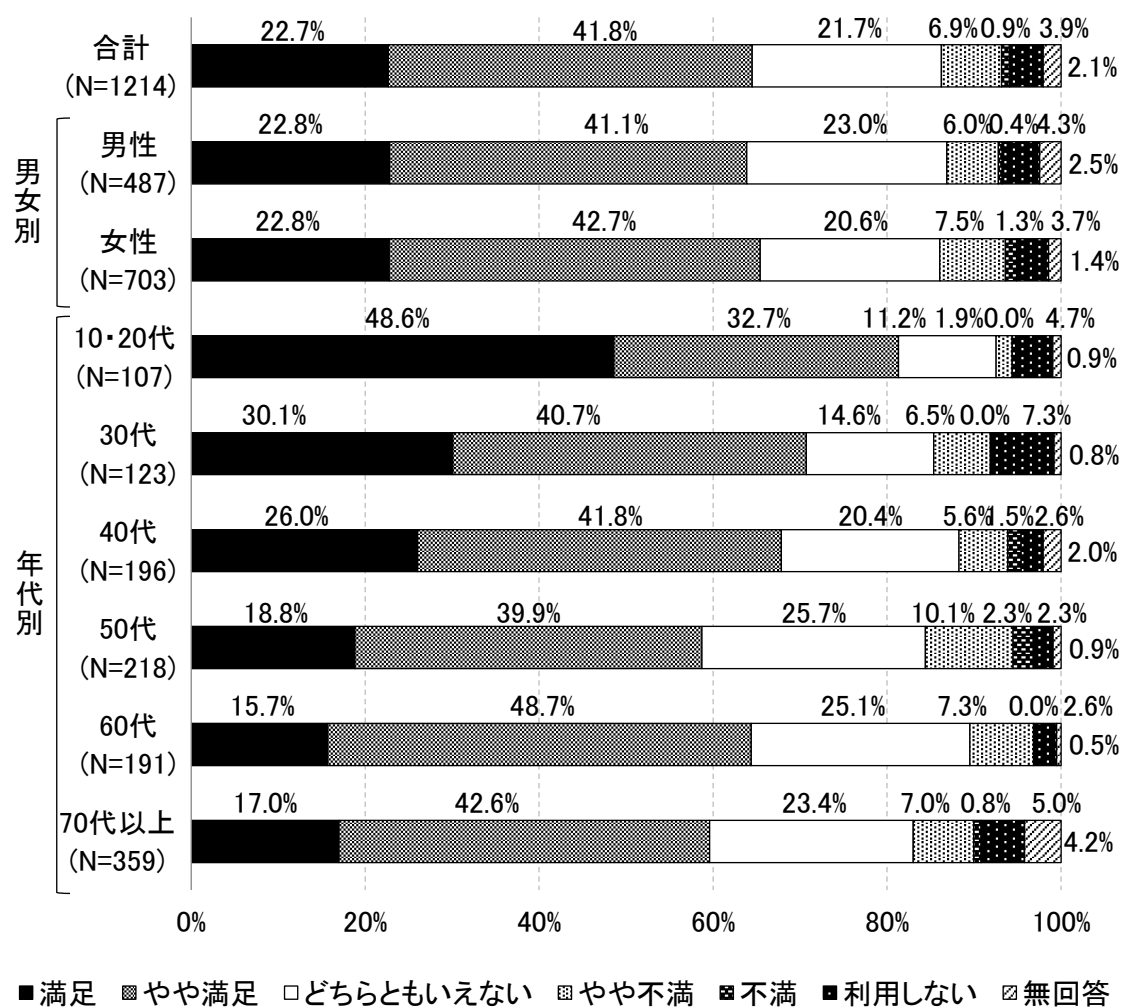


図49 Q10M 交通手段満足度（鉄道：駅の使いやすさ）

Q10N の鉄道の列車ダイヤの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 81.3%と最も高い。反対に、70 代以上が 57.4%と最も低い（図 50）。

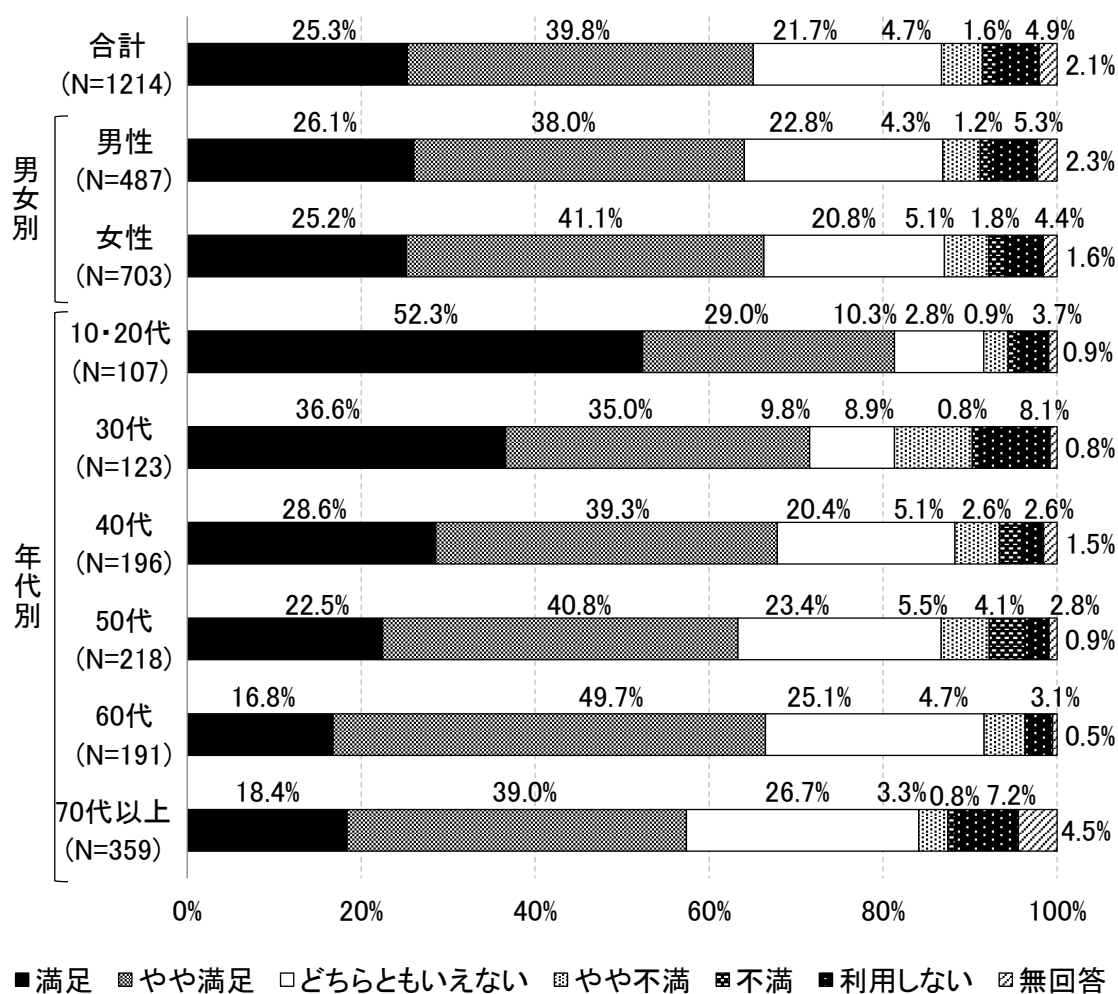


図 50 Q10N 交通手段満足度（鉄道：列車ダイヤ）

Q100 の自動車が通行する道路の整備状況の満足度に関して、年代別で見ると、10・20代および40代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。30代および50代以上では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は10・20代が30.0%と最も高い。反対に、60代が16.2%と最も低い（図51）。

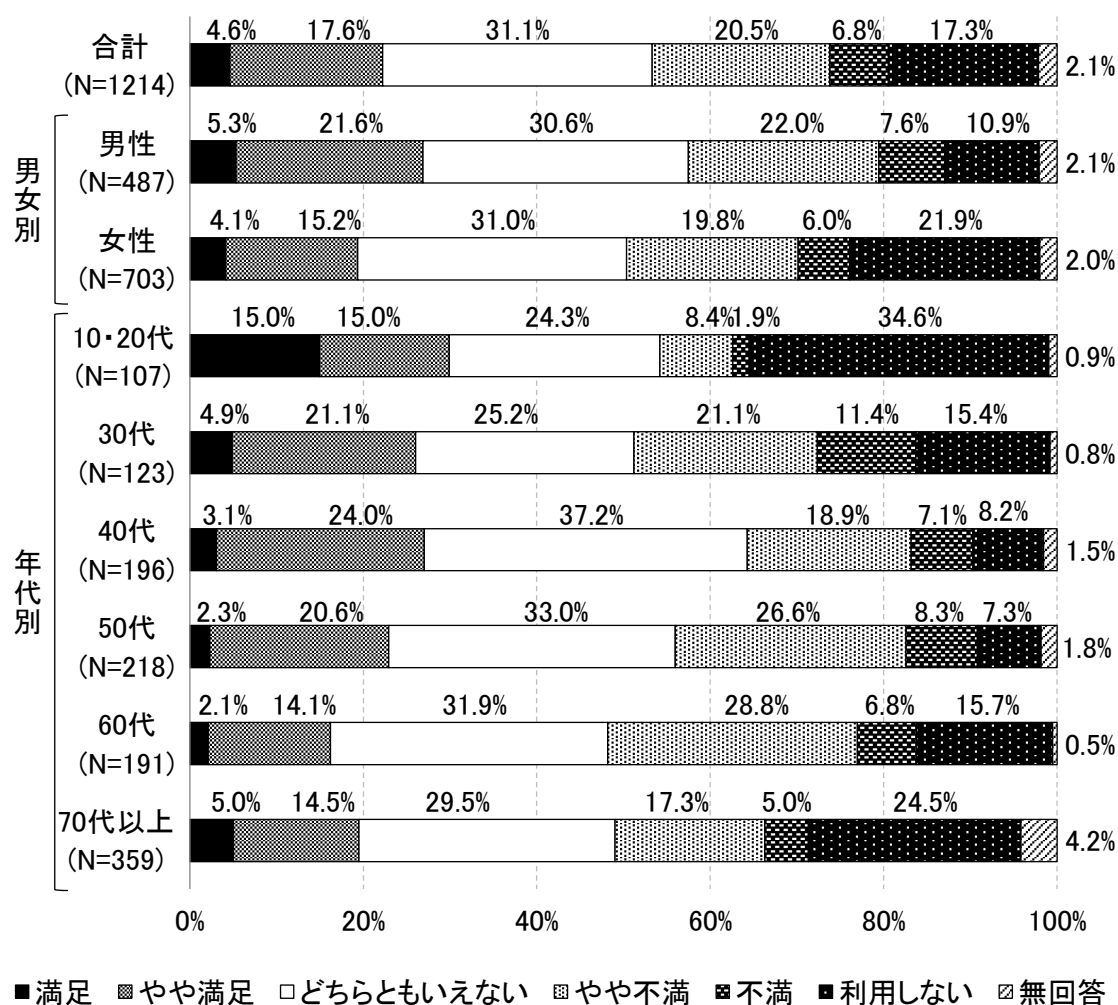


図 51 Q100 交通手段満足度（自動車：道路の整備の状況）

Q10P の自動車の駐車場の満足度に関して、年代別で見ると、30 代以上で、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は 60 代が 33.0%と最も高い。反対に、10・20 代が 10.3%と最も低い（図 52）。

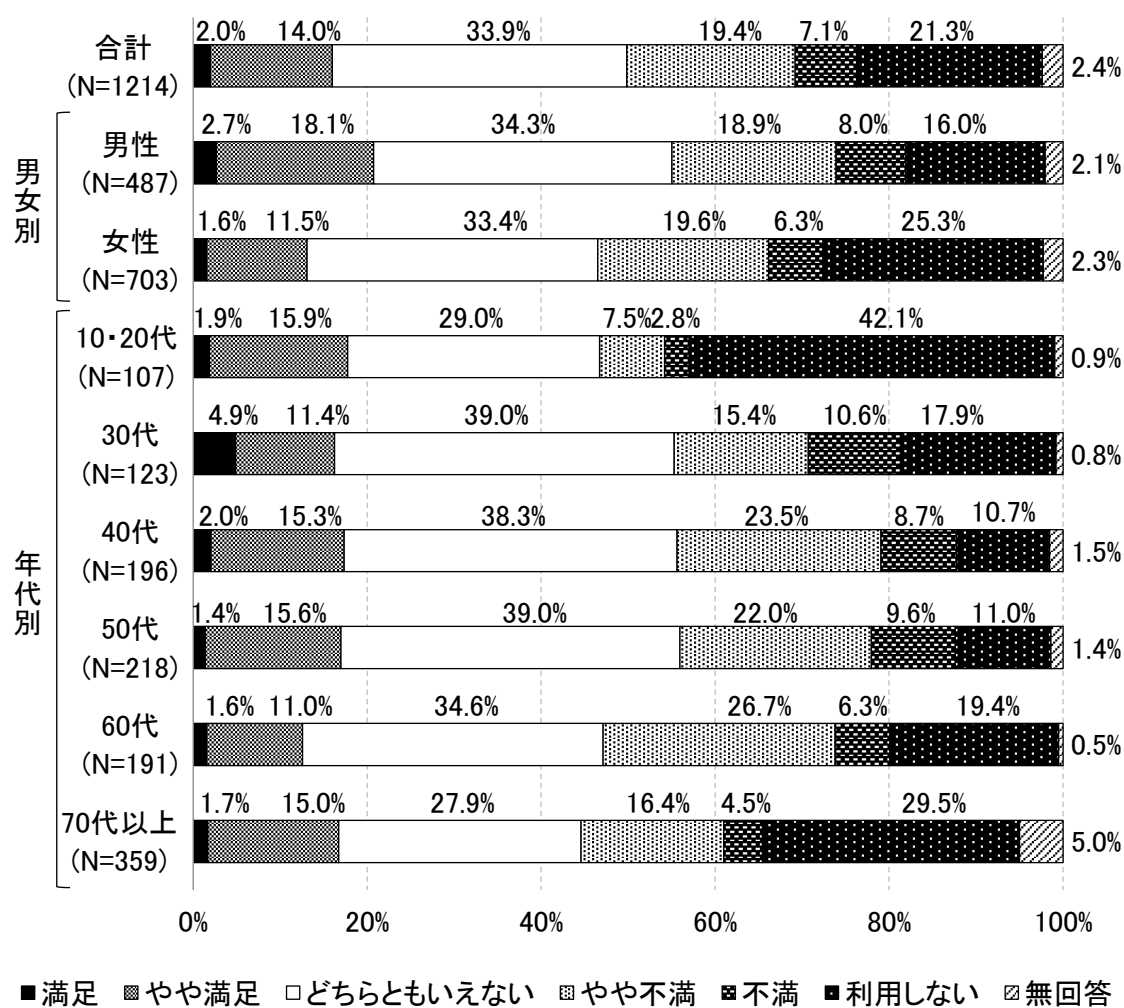
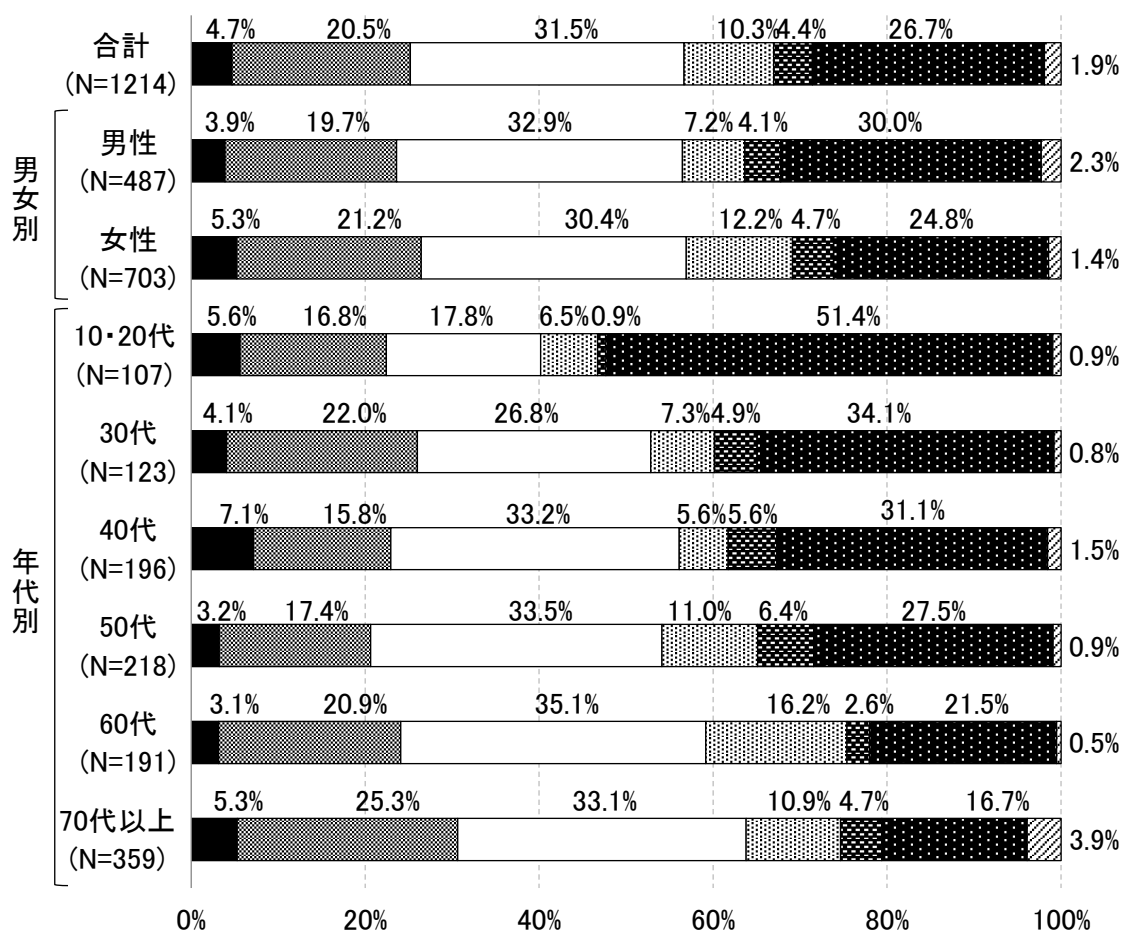


図 52 Q10P 交通手段満足度（自動車：駐車場）

Q10 Q のタクシーの利用しやすさの満足度に関して、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。

「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 70 代以上で 30.6%と最も高い。反対に 50 代が 20.6%と最も低い（図 53）。



■満足 ■やや満足 □どちらともいえない ■やや不満 ■不満 ■利用しない ■無回答

図 53 Q10Q 交通手段満足度（タクシー：利用しやすさ）

Q11 の1日あたりの歩行時間に関して、男女別で見ると、「30分未満」（「10分未満」または「10分以上20分未満」または「20分以上30分未満」）と回答した人の割合は、男性では40.1%、女性では47.7%である。年代別で見ると、「30分未満」と回答した人の割合は30代が52.8%と最も高い。反対に50代が40.4%と最も低い（図54）。

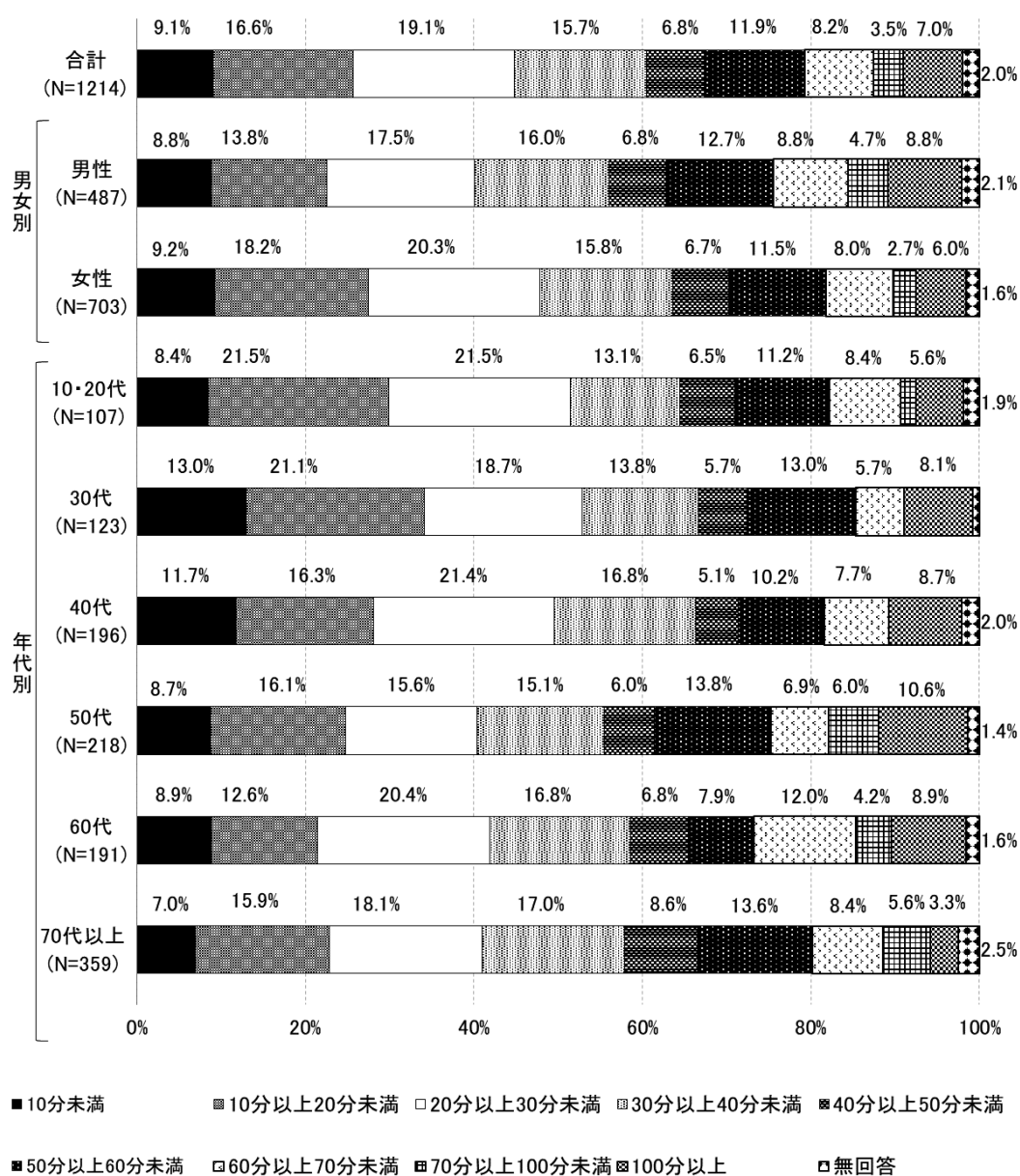


図 54 Q11 1日あたりの歩行時間

Q12 の環境に関する問題への関心度に関して、「異常気象」が 48.8%で最も高く、「地球温暖化」が 48.4%と続く（図 55）。

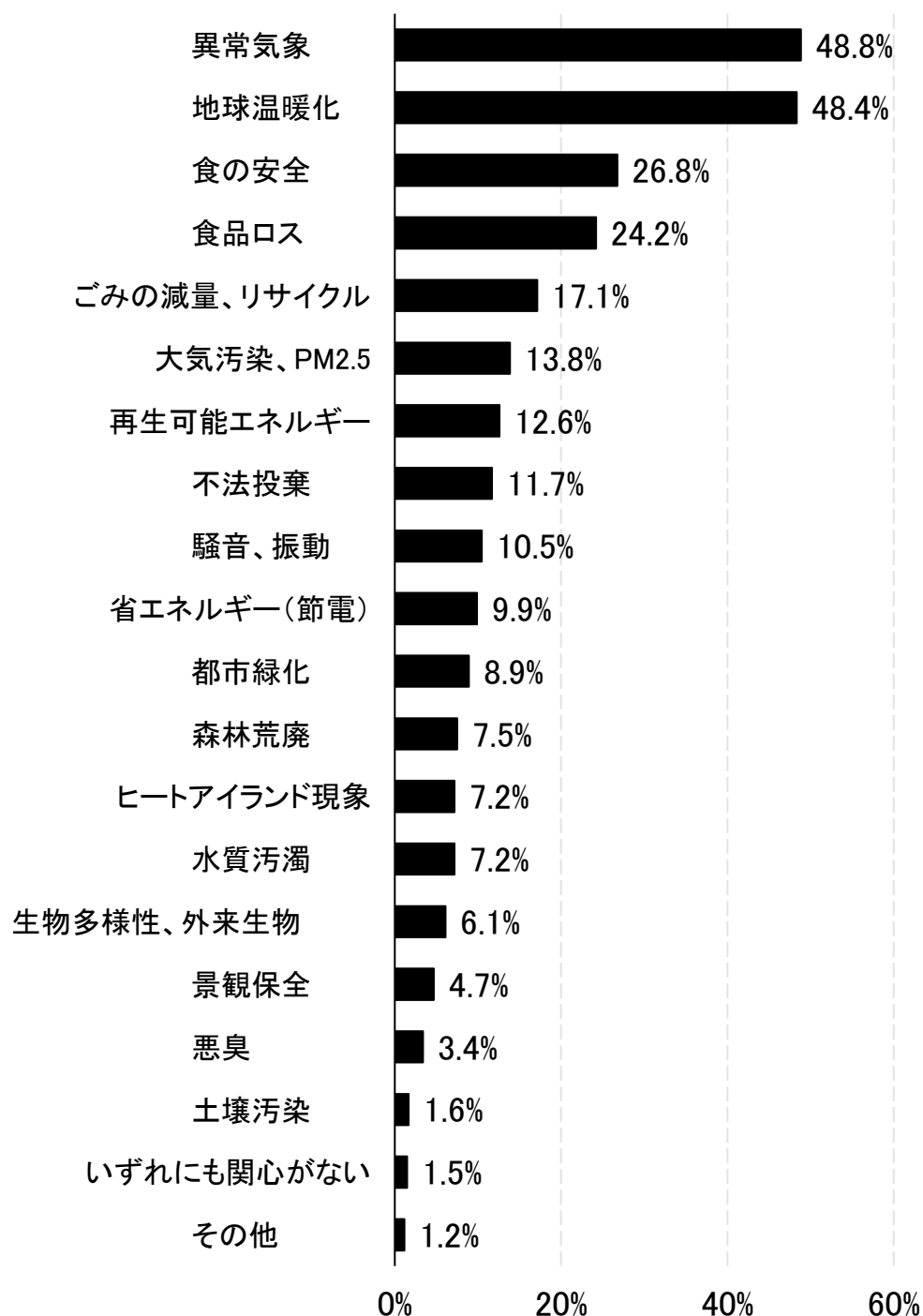


図 55 Q12 環境に関する問題への関心度（複数回答・全体 N=1214）

Q12 の環境に関する問題への関心度に関して、男女別で見ると、「食の安全」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 12.4 ポイント高い（図 56）。

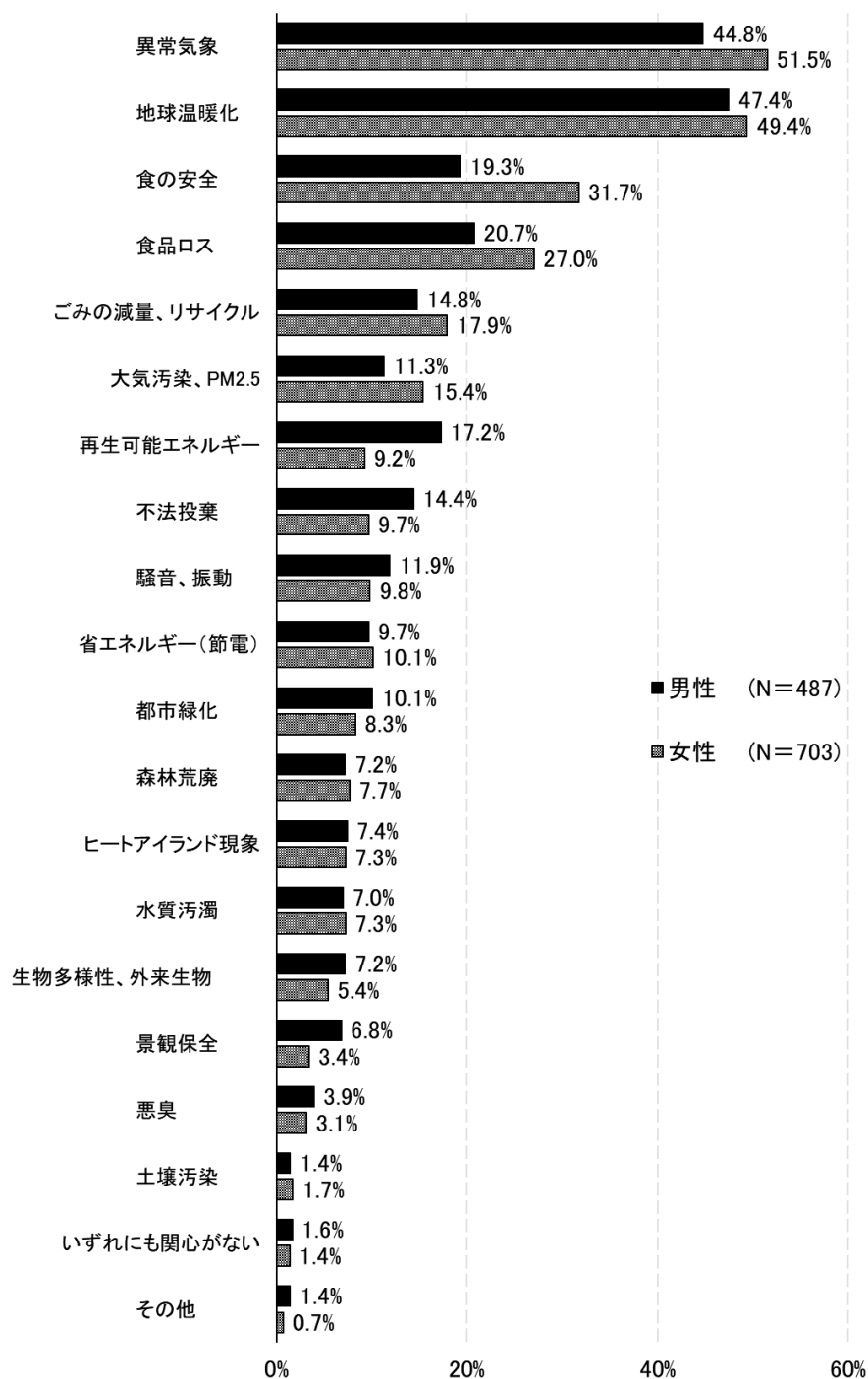


図 56 Q12 環境に関する問題への関心度（複数回答・男女別）

Q12 の環境に関する問題への関心度に関して、年代別で見ると、「食品ロス」は年代で差があり、10・20 代が 35.5%と最も高く、反対に 70 代以上は 20.1%と最も低い（図 57）。

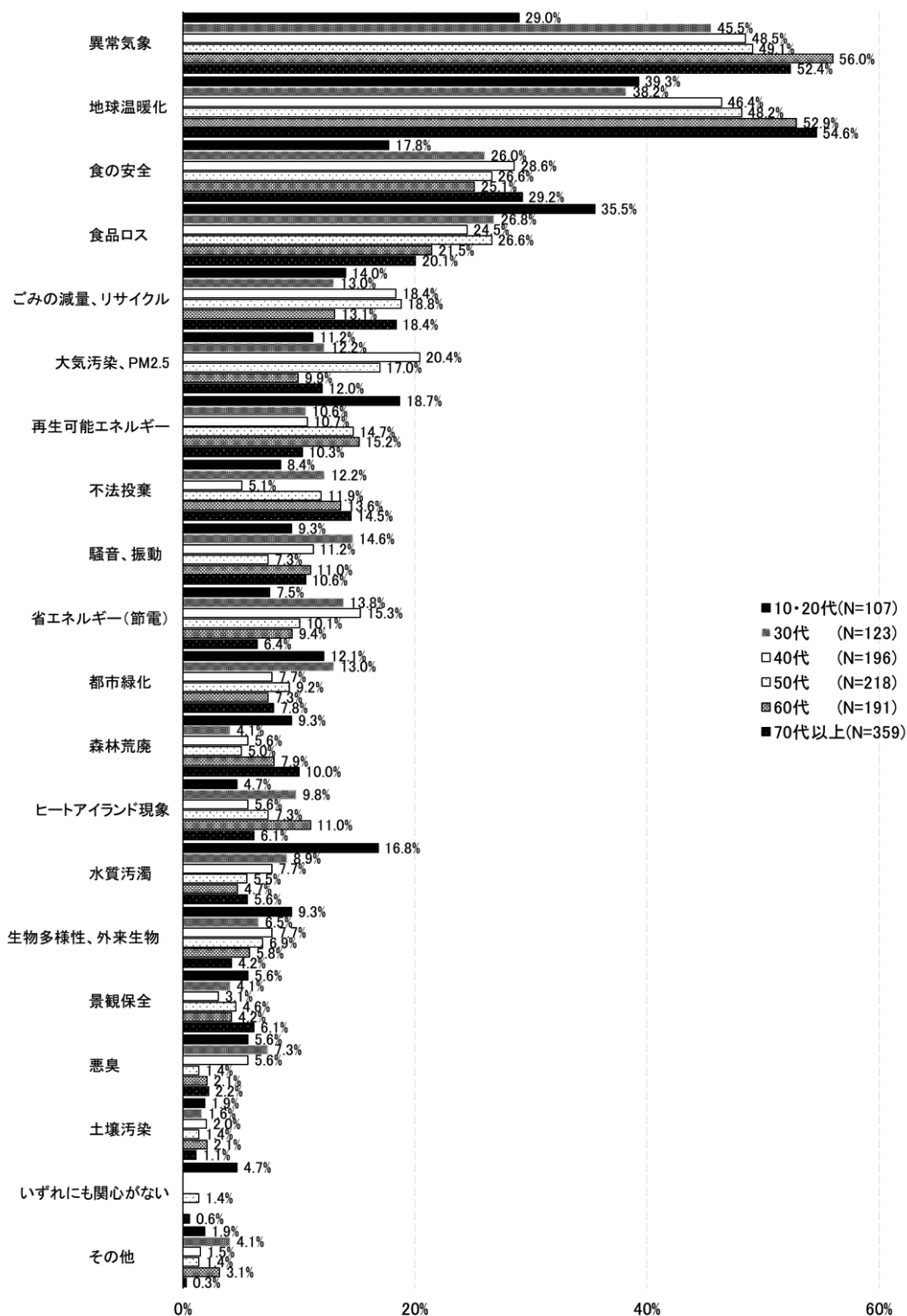


図 57 Q12 環境に関する問題への関心度（複数回答・年代別）

Q13の「生物多様性」という言葉とその意味を知っているかに関して、男女別・年代別のすべての層で「言葉も意味も知っている」または「言葉は知っているが意味は知らない」と回答した人が合わせて5割以上である。年代別で見ると、「言葉も意味も知っている」または「言葉は知っているが意味は知らない」と回答した人の割合は10・20代が75.7%と最も高く、反対に50代が56.9%と最も低い（図58）。

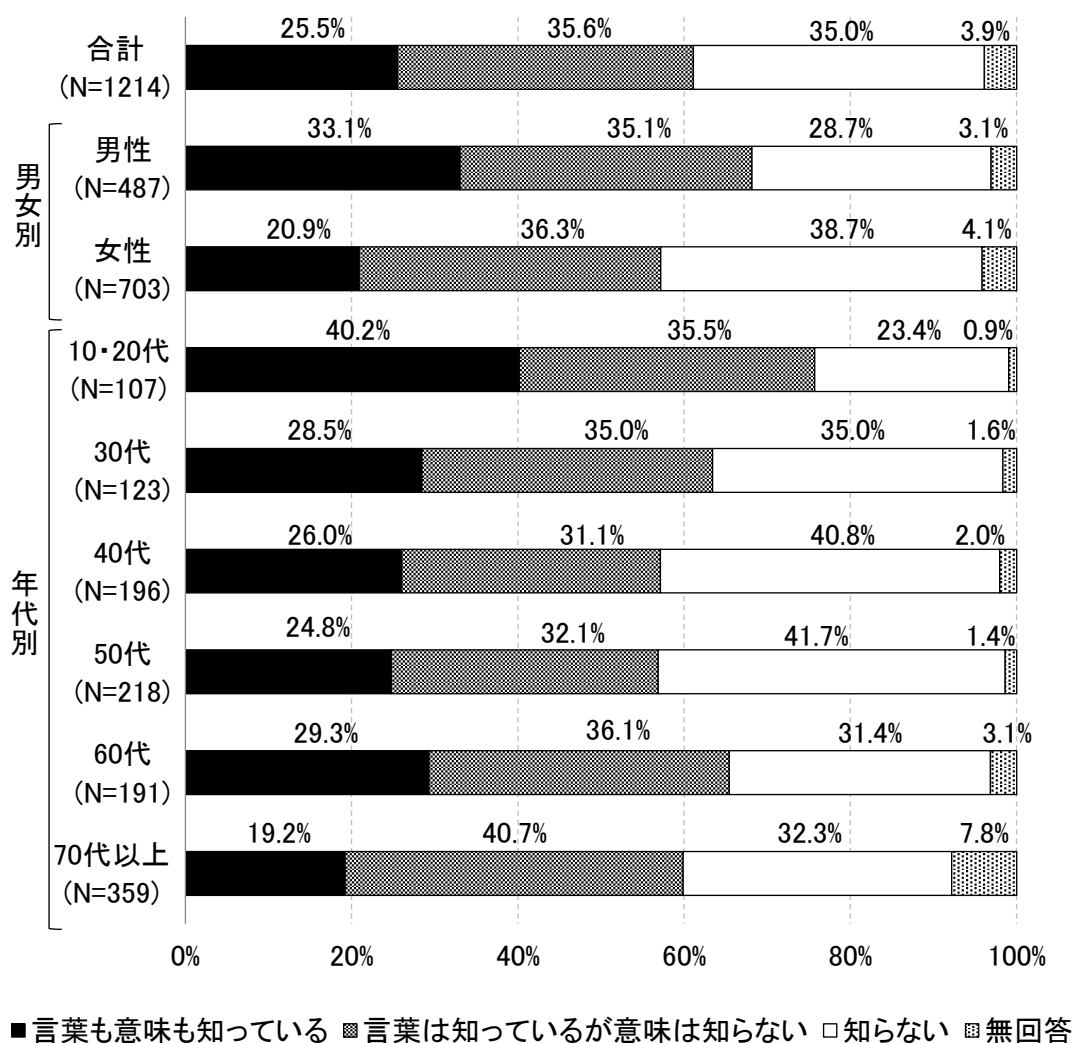


図58 Q13 「生物多様性」という言葉とその意味を知っているか

Q14 の 1 年以内に摂津峡・三好山周辺を訪れたかに関して、男女別・年代別のすべての層で「訪れた」と回答した人が 40%に満たない。年代別で見ると、「訪れた」と回答した人の割合は 30 代が 39.0%と最も高く、反対に 10・20 代が 22.4%と最も低い（図 59）。

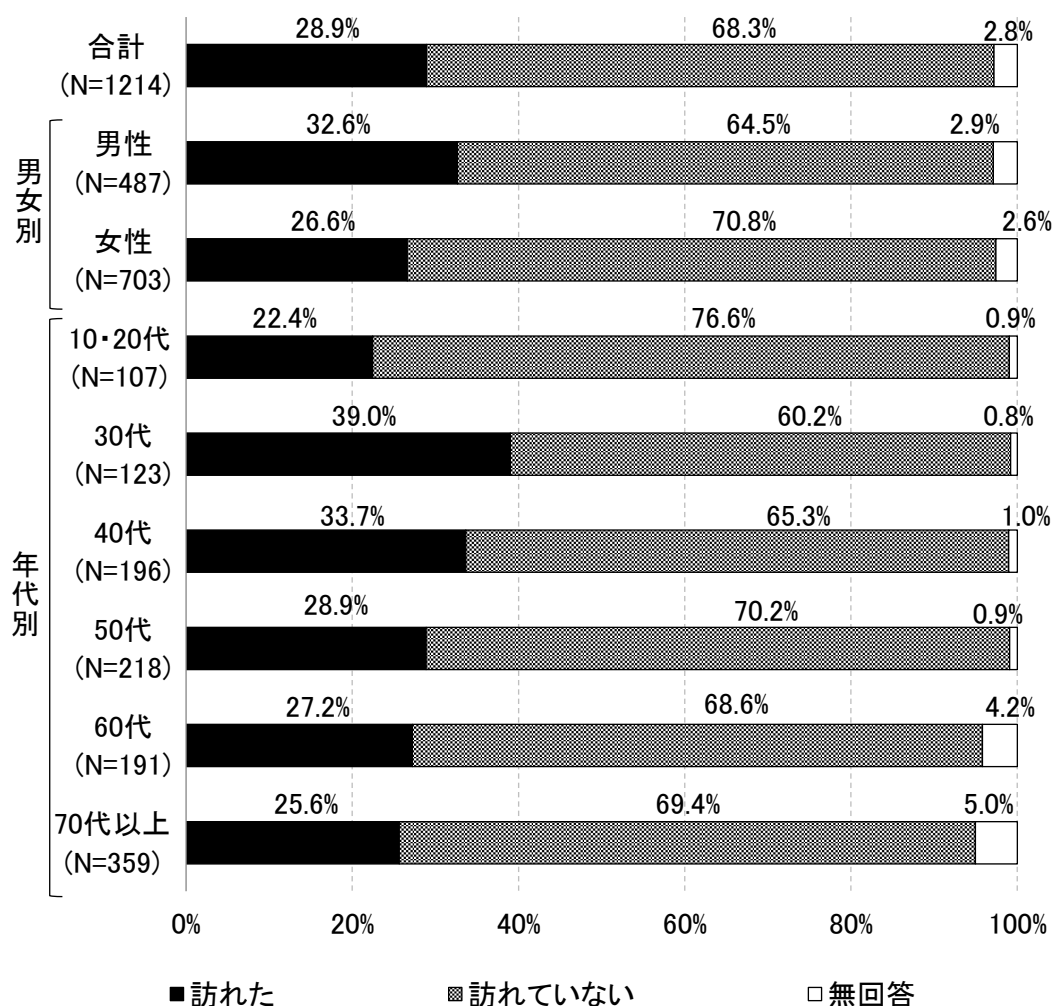


図 59 Q14 1 年以内に摂津峡・三好山周辺を訪れたか

Q15 の摂津峡・三好山周辺を訪れた目的に関して、「花見（桜など）」が 44.7%で最も高く、「ハイキング」が 27.6%と続く（図 60）（Q15 は Q14「1. 訪れた」と回答した人のみが回答している）。

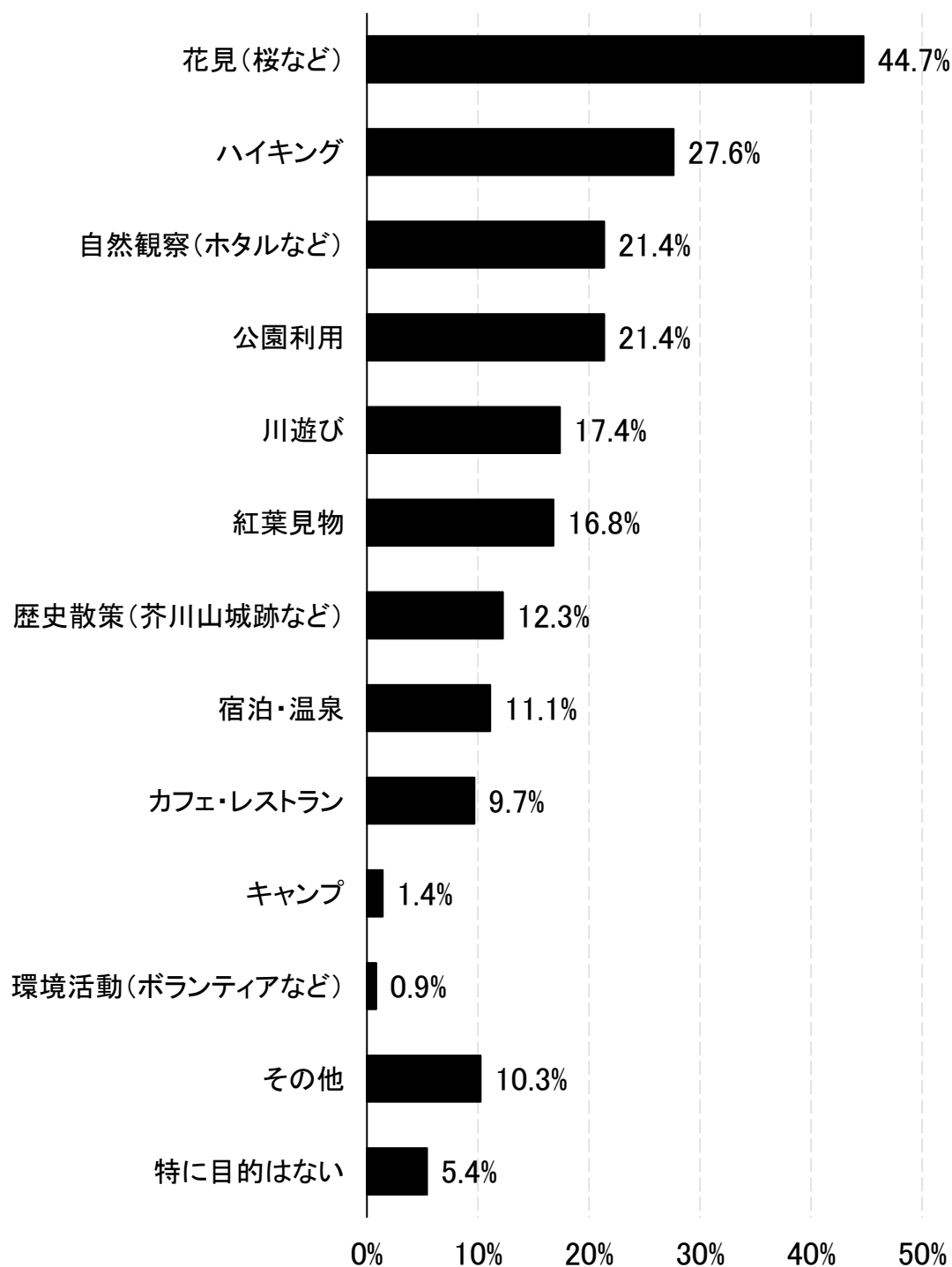


図 60 Q15 摂津峡・三好山周辺を訪れた目的（複数回答・全体 N=351）

Q15 の摂津峡・三好山周辺を訪れた目的に関して、男女別で見ると、「花見（桜など）」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 14.2 ポイント高い（図 61）（Q15 は Q14「1. 訪れた」と回答した人のみが回答している）。

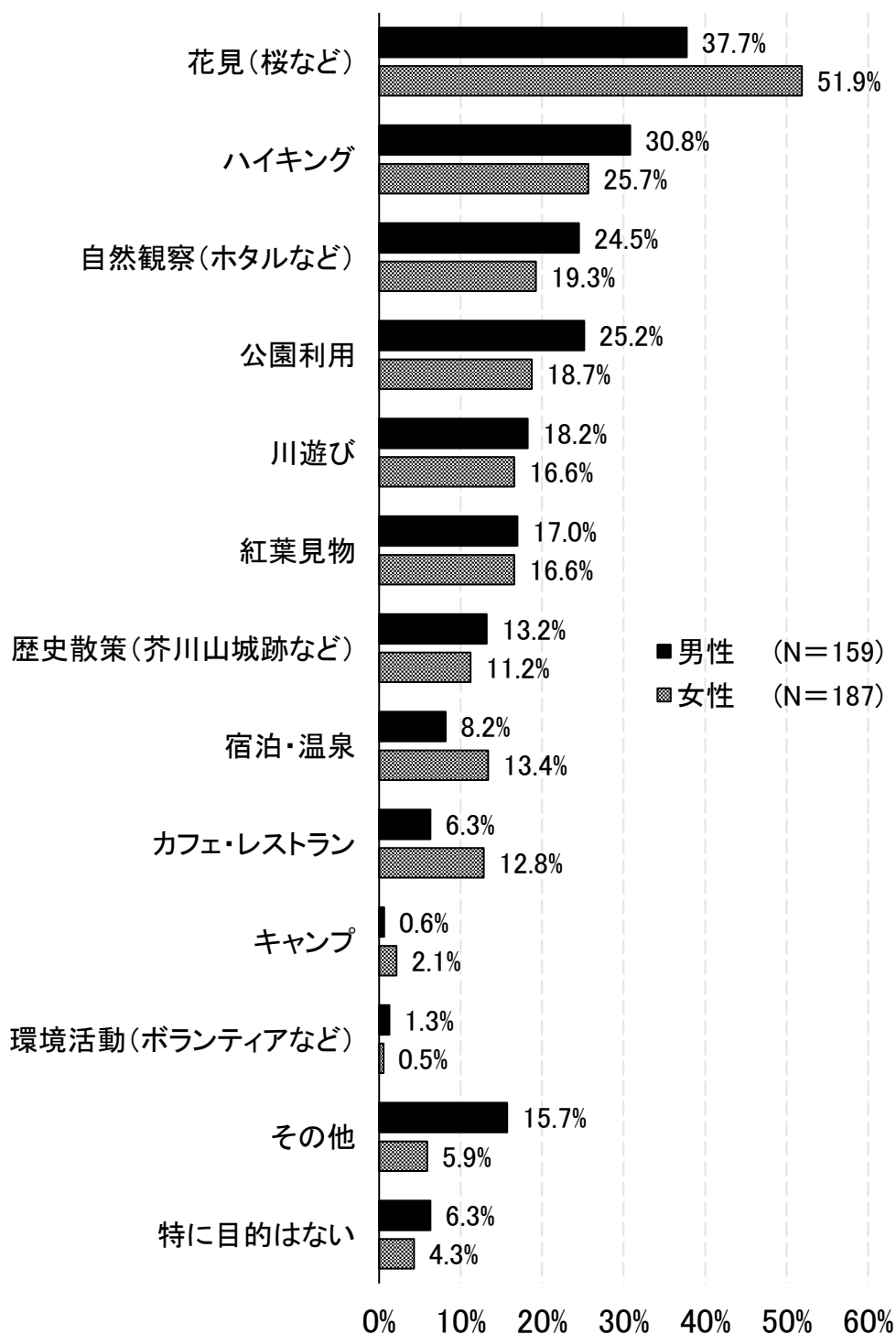


図 61 Q15 摂津峡・三好山周辺を訪れた目的（複数回答・男女別）

Q15 の摂津峡・三好山周辺を訪れた目的に関して、年代別で見ると、「花見（桜など）」は年代で差があり、70 代以上が 62.0%と最も高く、反対に 30 代以上は 31.3%と最も低い（図 62）（Q15 は Q14 「1. 訪れた」と回答した人のみが回答している）。

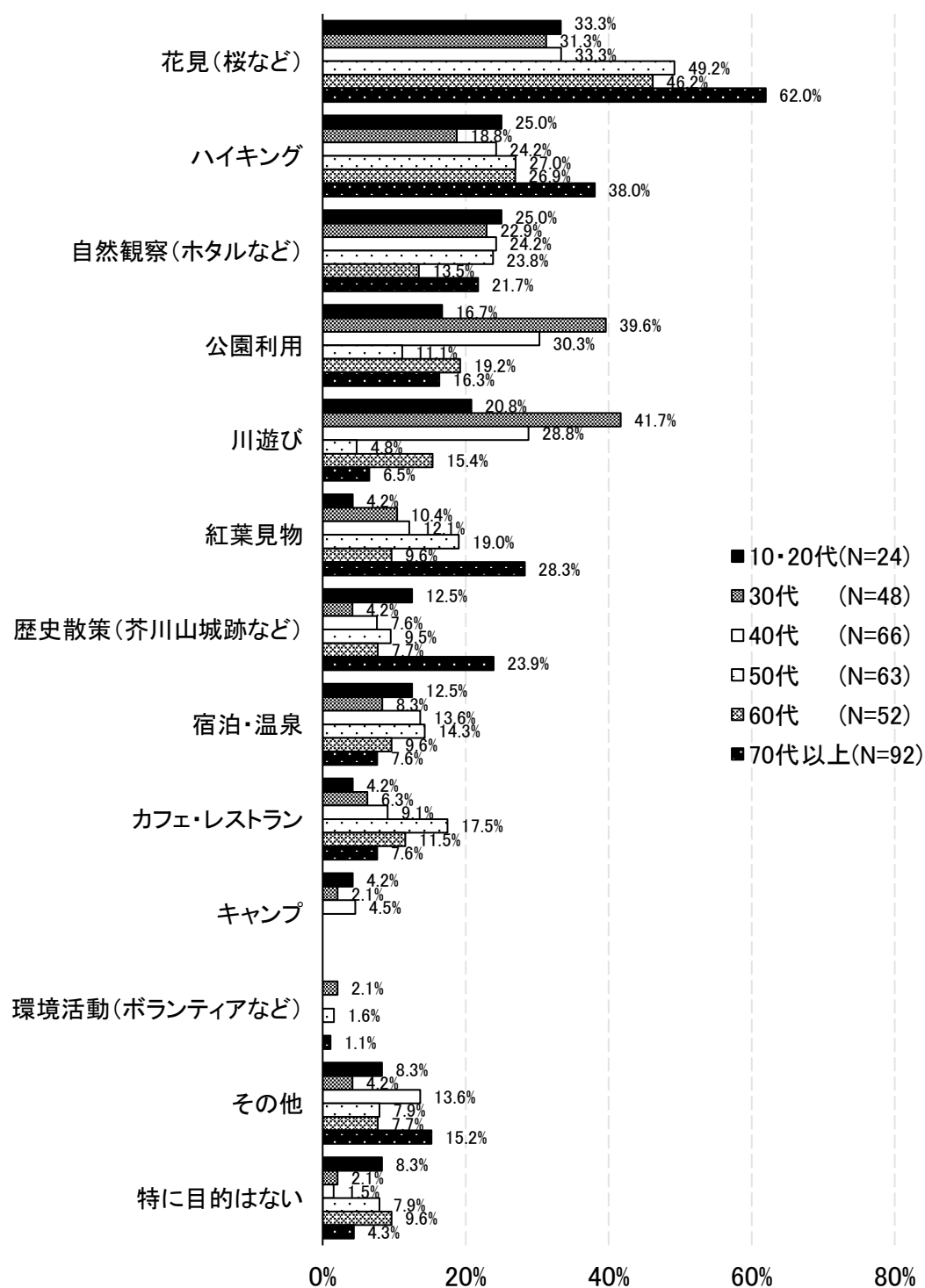


図 62 Q15 摂津峡・三好山周辺を訪れた目的（複数回答・年代別）

Q16A の高槻市には身近な自然環境とのふれあいがあるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が 7 割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 50 代が 82.5%と最も高く、反対に 10・20 代が 73.8%と最も低い（図 63）。

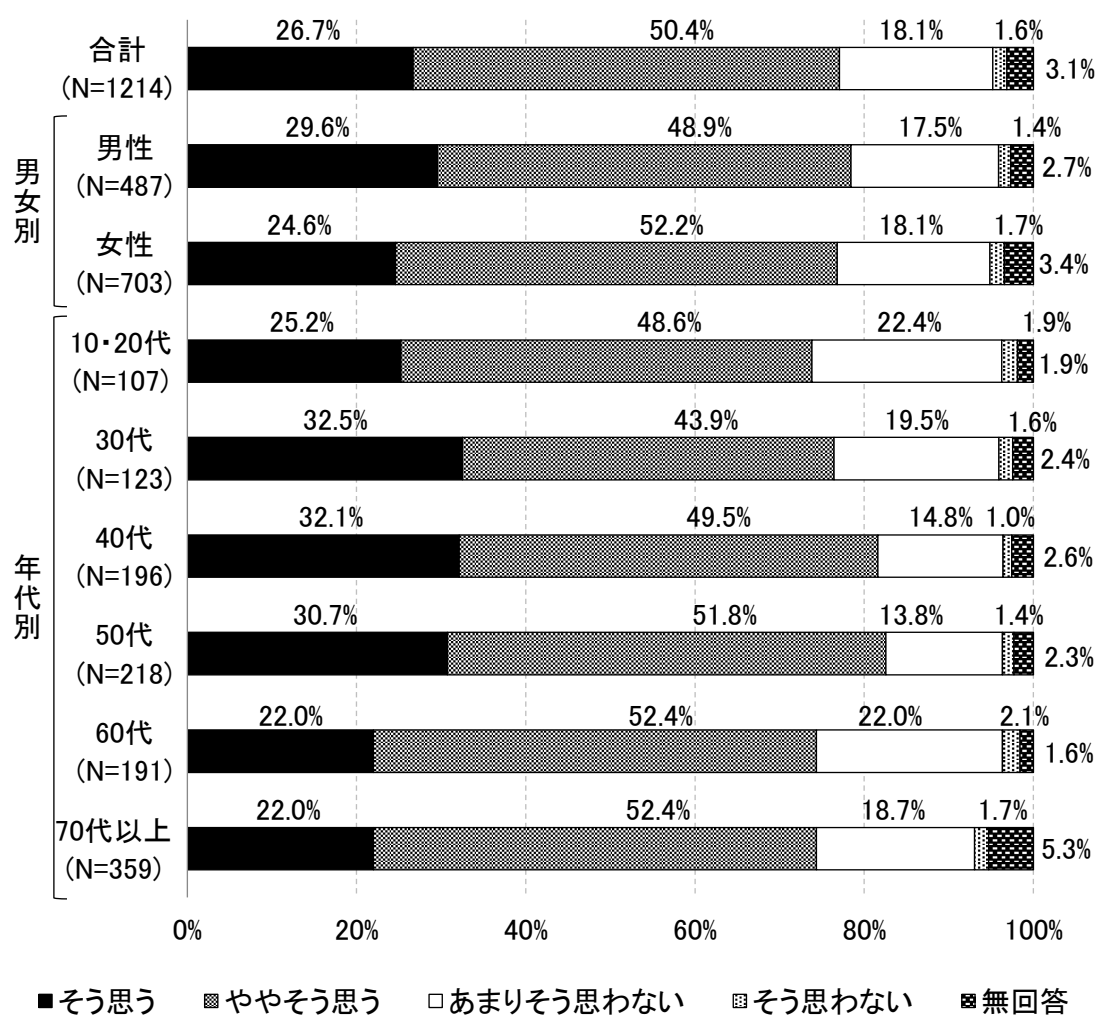


図 63 Q16A 高槻市の環境：身近な自然環境とのふれあいがあるか

Q16B の高槻市は不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が4割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は40代以上が52.0%と最も高く、反対に30代が46.4%と最も低い（図 64）。

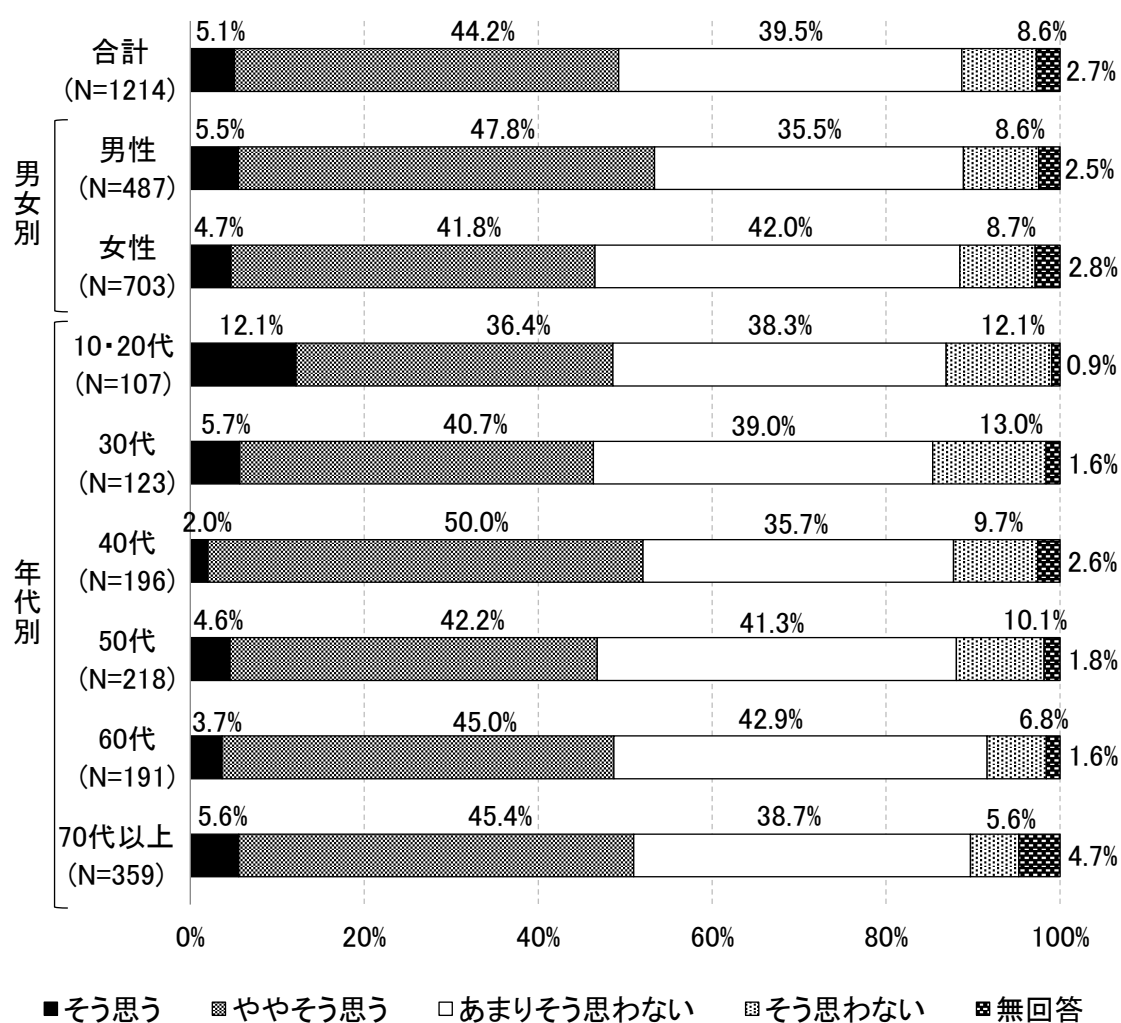


図 64 Q16B 高槻市の環境：不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちか

Q16C の高槻市は良好な環境づくりを目指した活動が豊富かに関して、男女別・年代別では 50 代を除いて、すべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が 4 割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 10・20 代以上が 52.4%と最も高く、反対に 50 代が 39.5%と最も低い（図 65）。

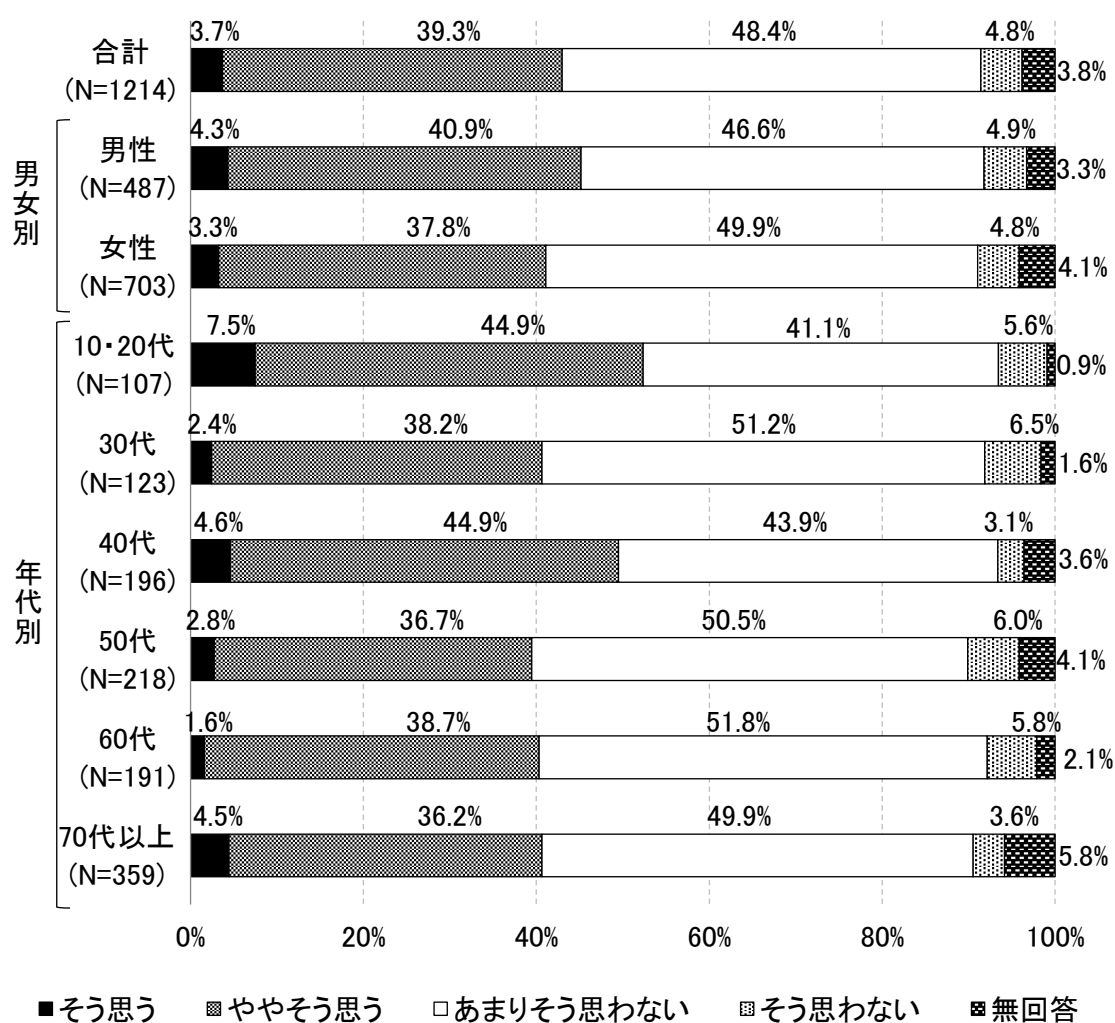


図 65 Q16C 高槻市の環境：良好な環境づくりを目指した活動が豊富か

Q16D の高槻市は環境活動に関する情報や呼びかけが十分かに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が2割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は10・20代以上が35.5%と最も高く、反対に30代が20.3%と最も低い（図66）。

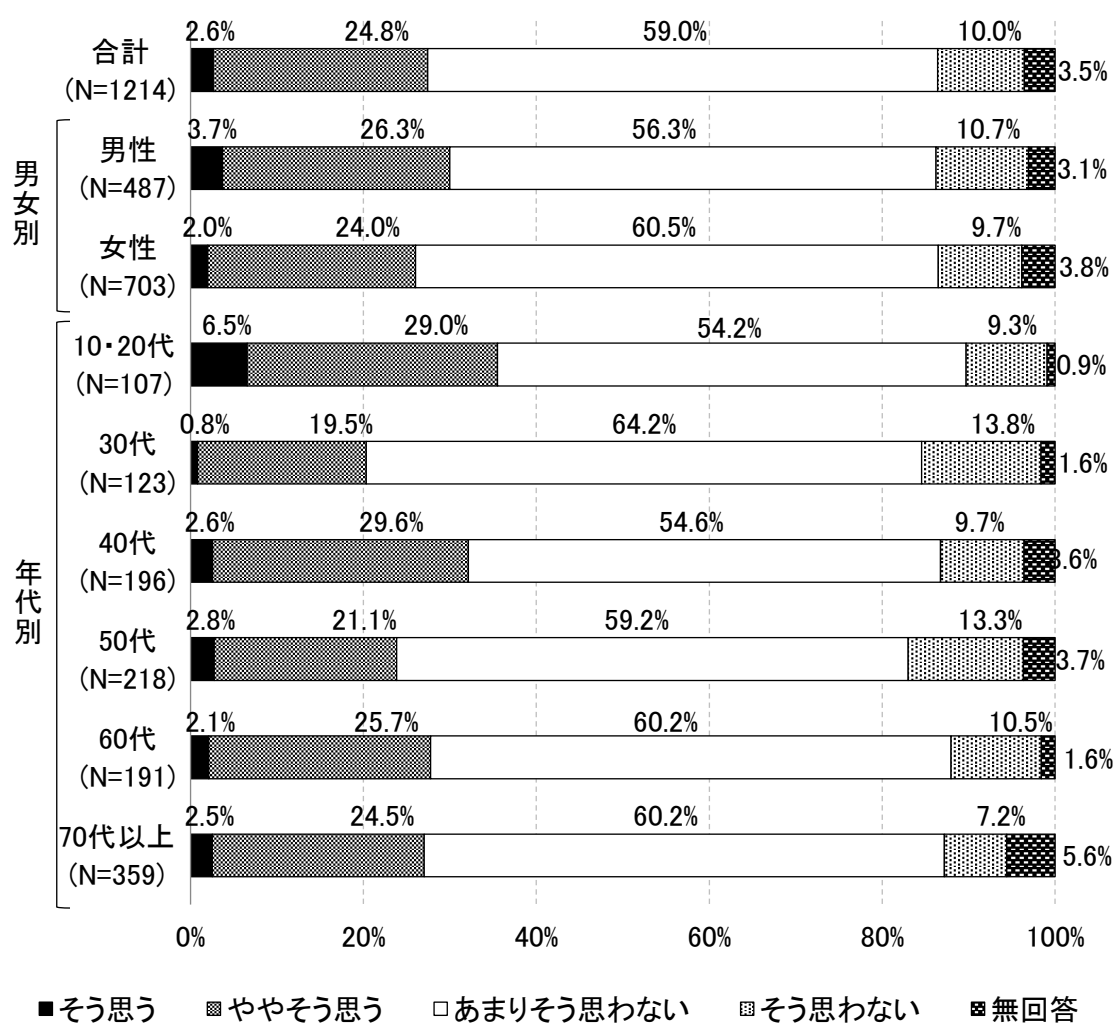


図66 Q16D 高槻市の環境：環境活動に関する情報や呼びかけが十分か

Q17 の森林レクリエーション活動のための整備案（仮）の実施にお金を負担するかに関して、男女別・年代別のすべての層で「適当な金額ならば負担する」と回答した人が 3 割以上である。年代別で見ると、「適当な金額ならば負担する」と回答した人の割合は 60 代と 70 代以上が 56.0%と最も高く、反対に 10・20 代が 37.4%と最も低い（図 67）。

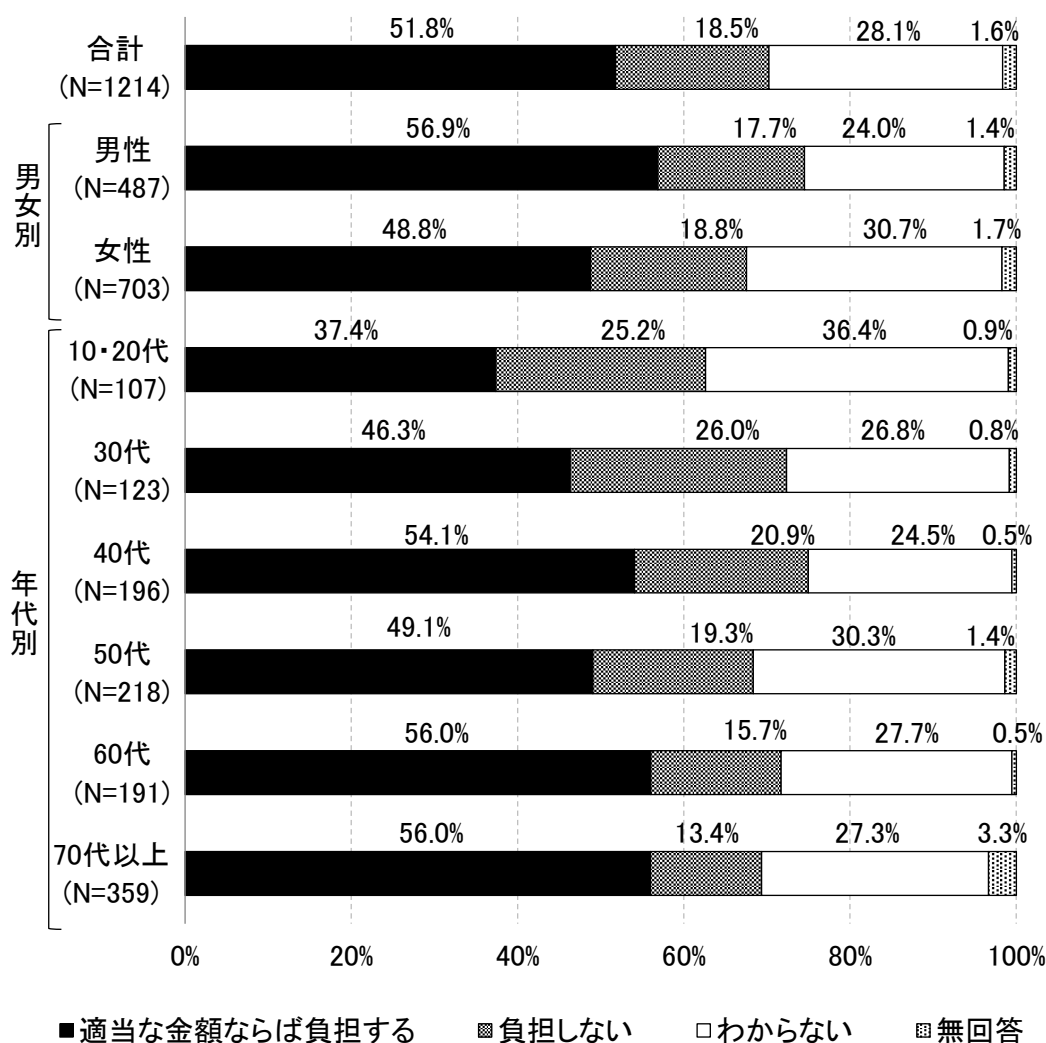


図 67 Q17 森林レクリエーション活動のための整備案（仮）の実施にお金を負担するか

Q18A の1年あたりの負担金額が200円の場合に関して、男女別・年代別のすべての層で「賛成する」と回答した人が9割以上である。年代別で見ると、「賛成する」と回答した人の割合は30代以下では100.0%であり、40代以上では9割を超える（図68）。

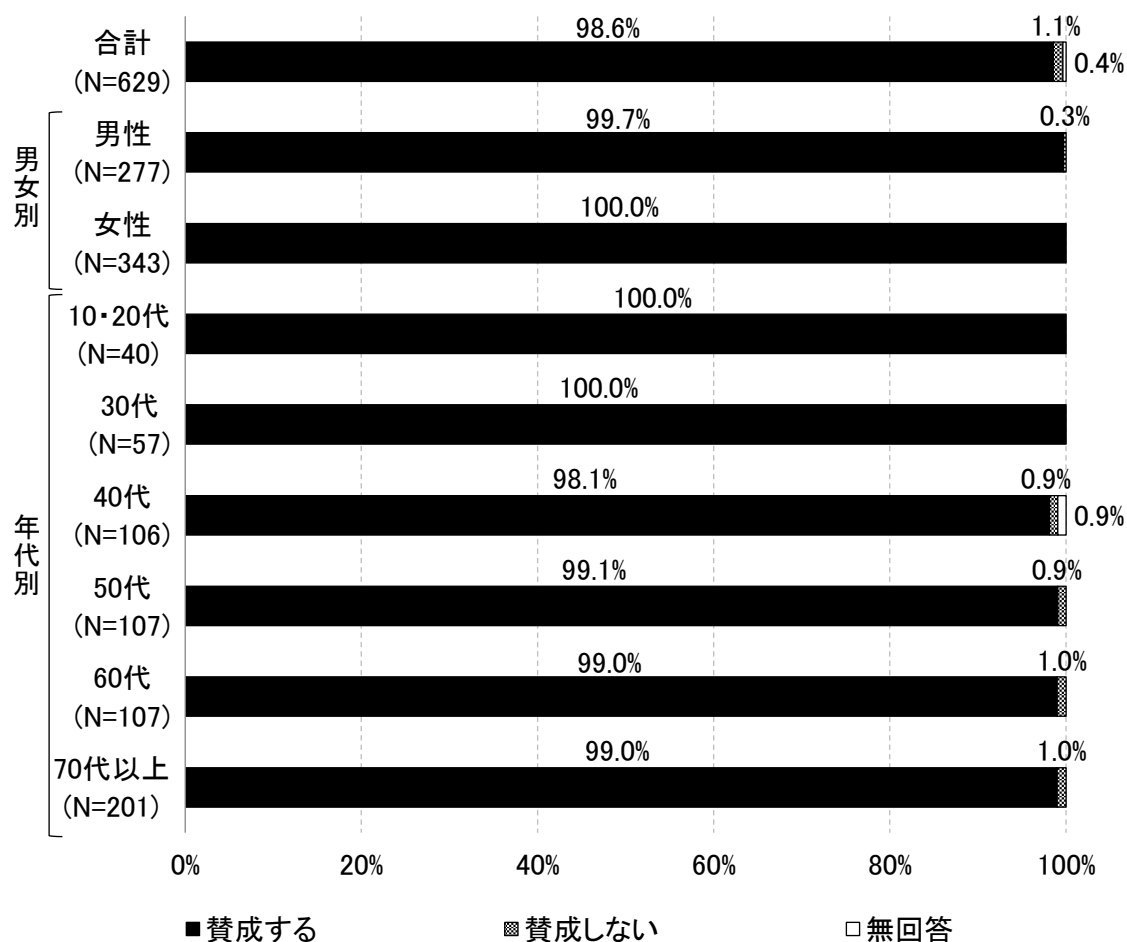


図 68 Q18A 1年あたりの負担金額が200円の場合

Q18B の1年あたりの負担金額が 400 円の場合に関して、男女別・年代別のすべての層で「賛成する」と回答した人が 8 割以上である。年代別で見ると、「賛成する」と回答した人の割合は 10・20 代が 95.0%と最も高く、反対に 40 代が 89.6%と最も低い（図 69）。

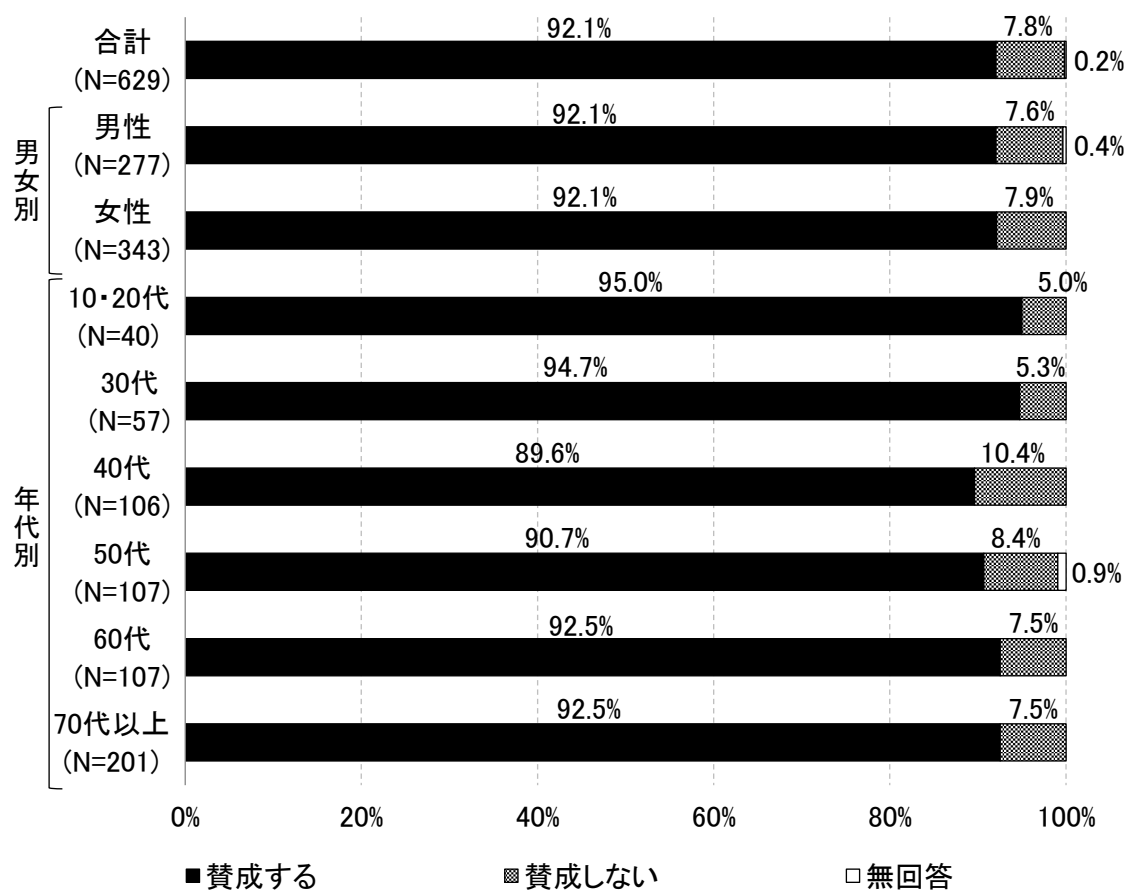


図 69 Q18B 1年あたりの負担金額が 400 円の場合

Q18C の1年あたりの負担金額が1000円の場合に関して、男女別・年代別のすべての層で「賛成する」と回答した人が5割以上である。年代別で見ると、「賛成する」と回答した人の割合は70代以上が73.1%と最も高く、反対に40代が58.5%と最も低い（図70）。

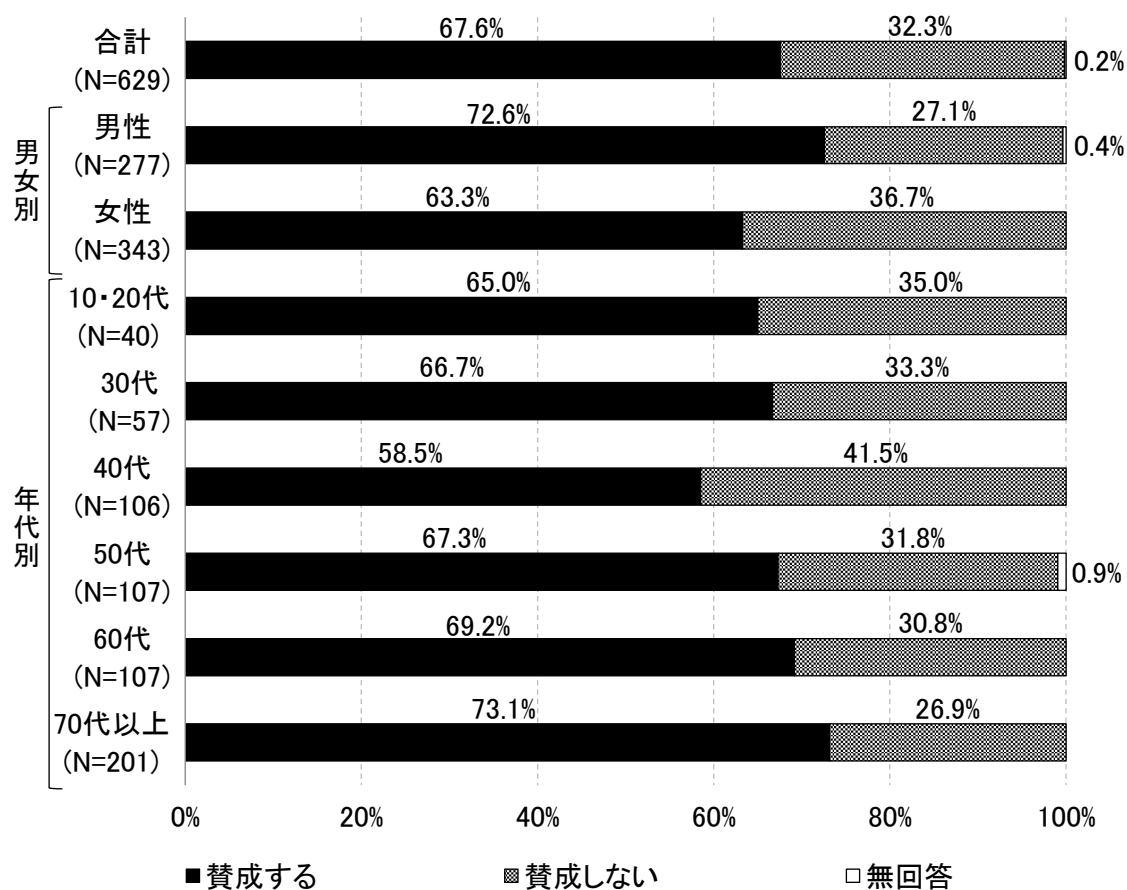


図70 Q18C 1年あたりの負担金額が1000円の場合

Q18D の1年あたりの負担金額が2000円の場合に関して、男女別・年代別のすべての層で「賛成しない」と回答した人が7割以上である。年代別で見ると、「賛成しない」と回答した人の割合は30代が78.9%と最も高く、反対に50代が75.7%と最も低い（図71）。

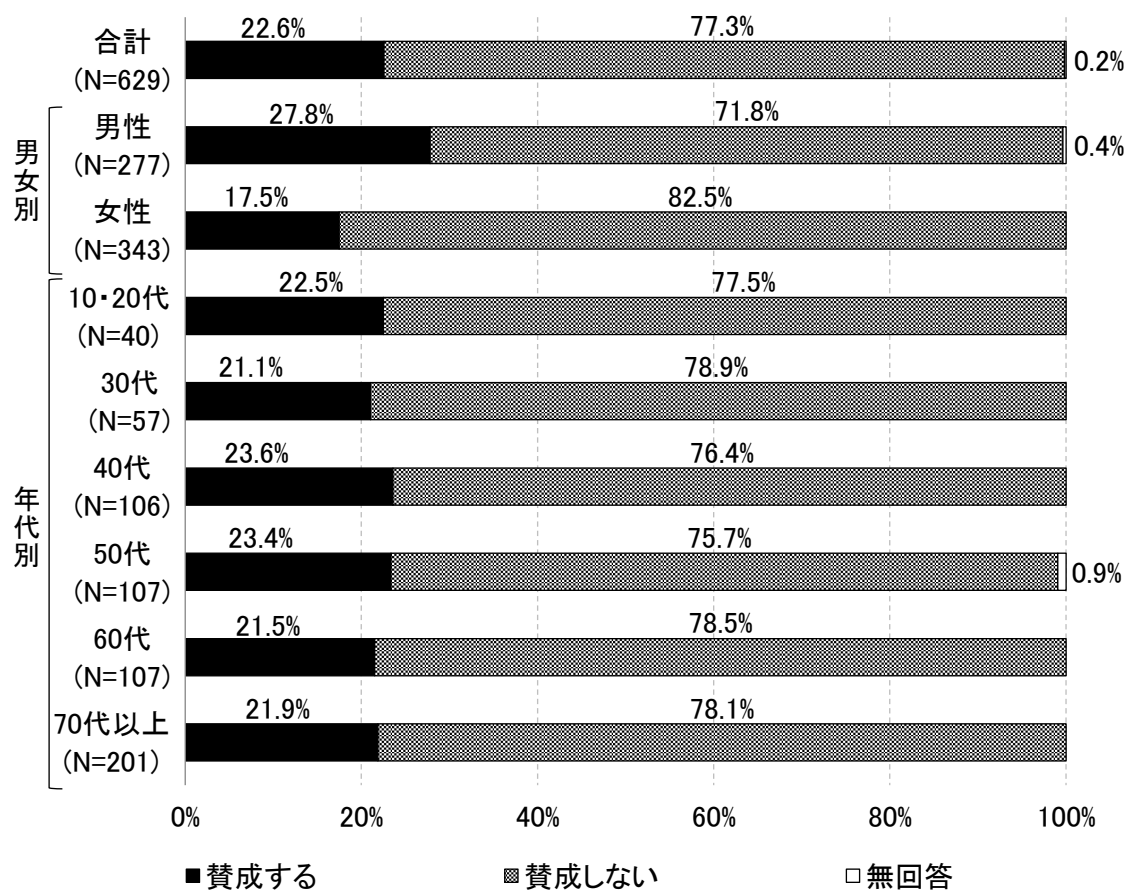


図71 Q18D 1年あたりの負担金額が2000円の場合

Q18E の1年あたりの負担金額が3000円の場合に関して、男女別・年代別のすべての層で「賛成しない」と回答した人が8割以上である。年代別で見ると、「賛成しない」と回答した人の割合は60代が87.9%と最も高く、反対に50代が83.2%と最も低い（図72）。

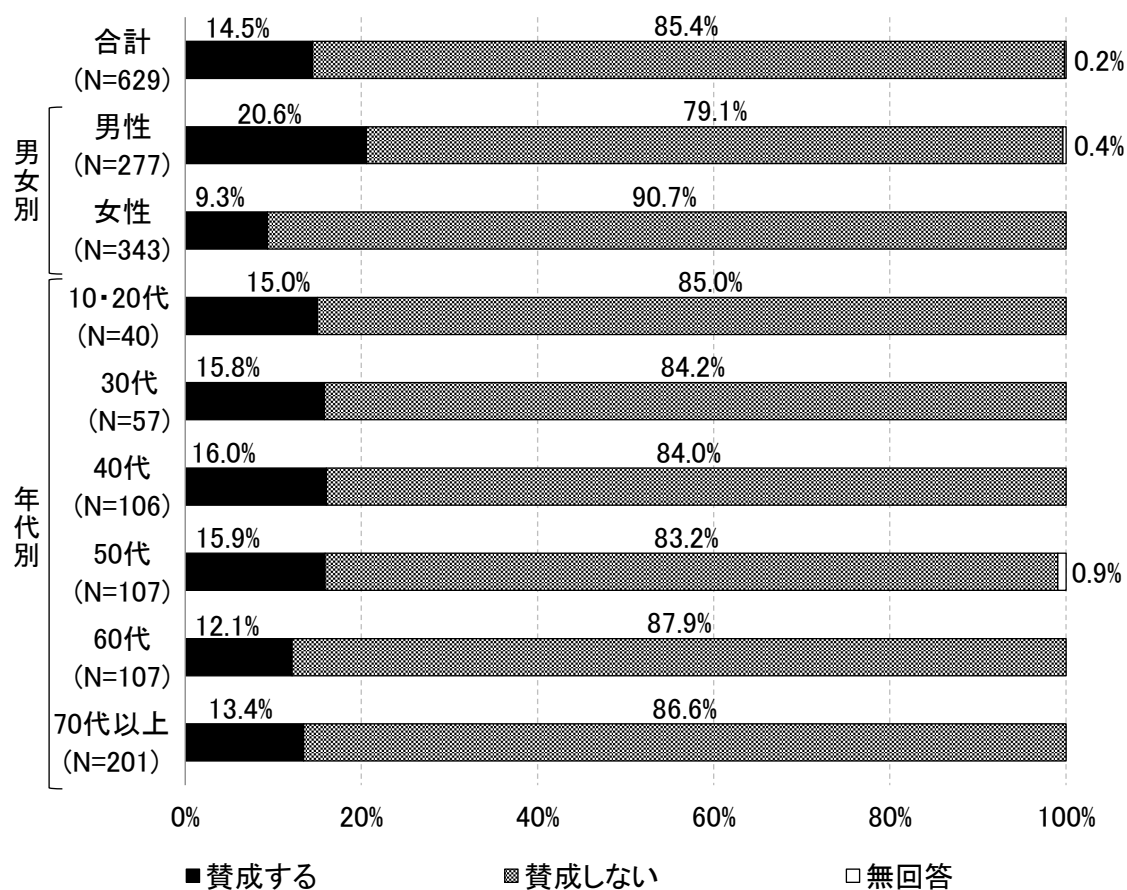


図72 Q18E 1年あたりの負担金額が3000円の場合

Q19の「共生社会」という考え方を知っているかに関して、男女別・年代別のすべての層で「知っている」と回答した人が4割以上である。年代別で見ると、「知っている」と回答した人の割合は50代が54.1%と最も高く、反対に70代以上が44.3%と最も低い(図73)。

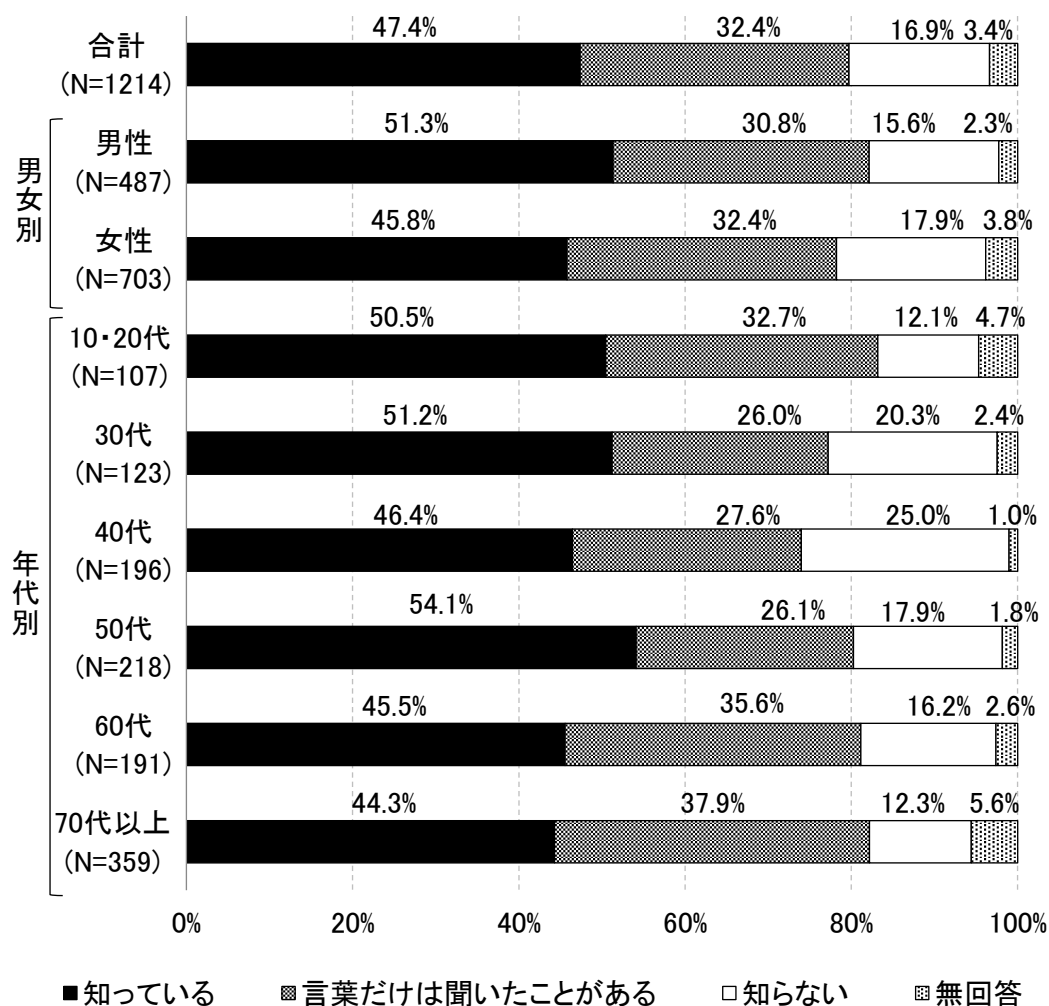


図73 Q19 「共生社会」という考え方を知っているか

Q20 の気が沈んだり、気が重くなることがあるかに関して、男女別で見ると、男女ともに「全くない」または「少しだけある」と回答した人の割合は 3 割以上である。年代別で見ると、「全くない」または「少しだけある」と回答した人の割合は 60 代が 62.3%と最も高く、反対に 50 代が 39.9%と最も低い（図 74）。

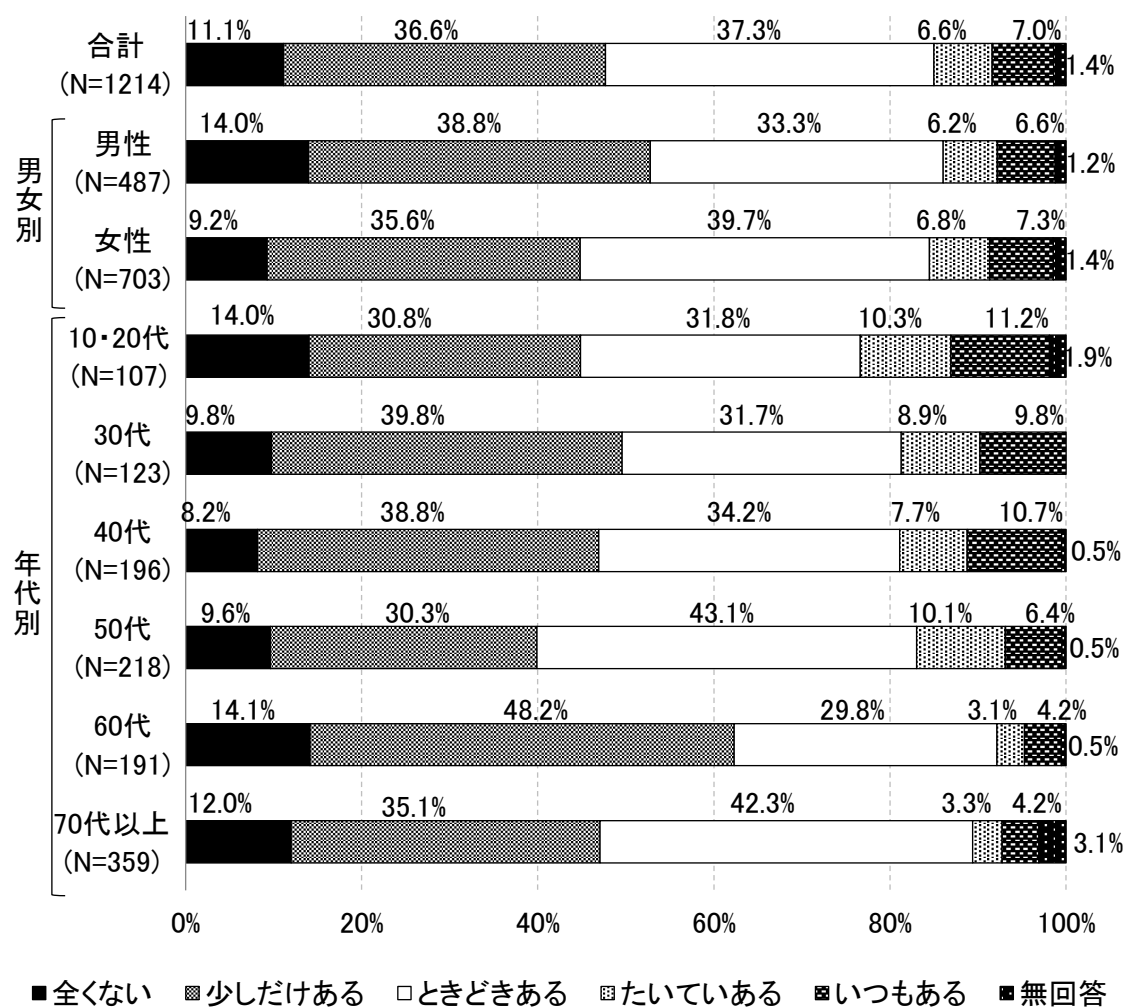
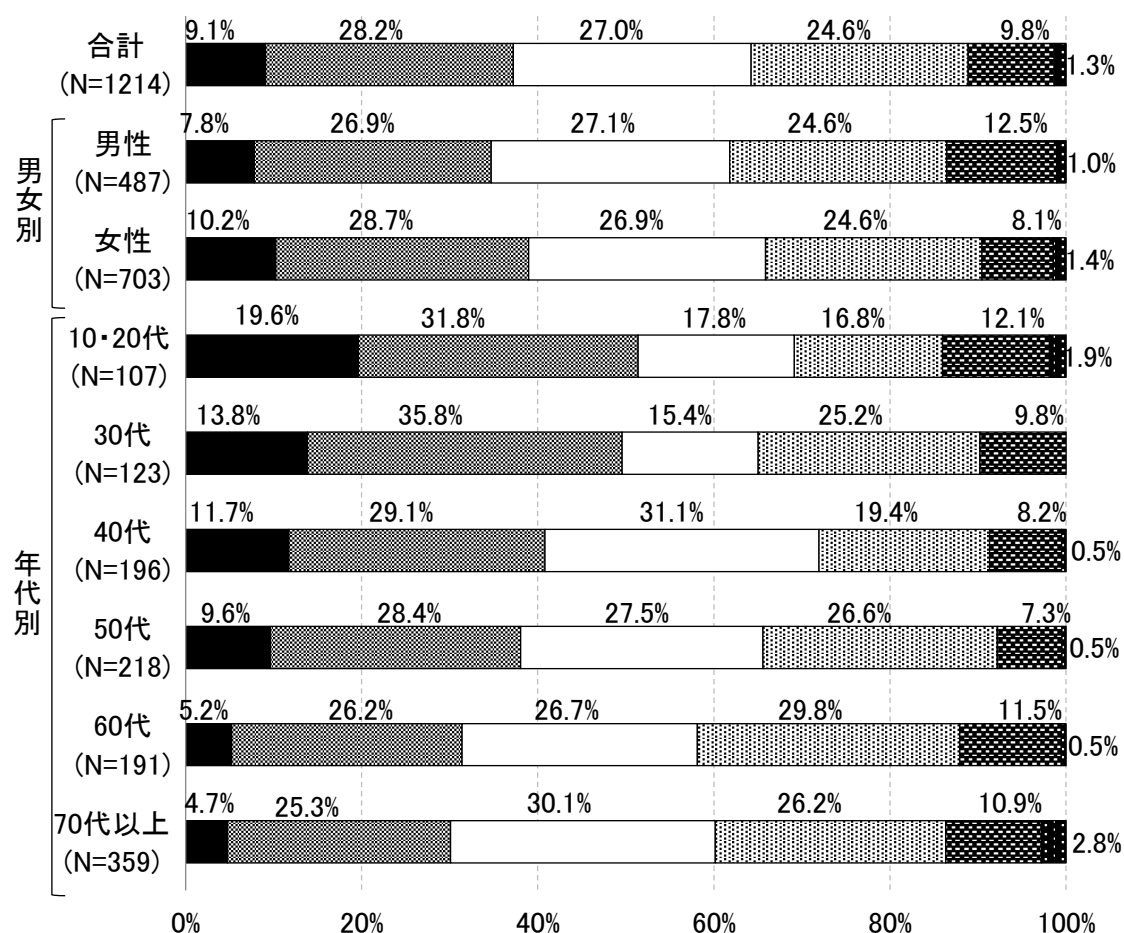


図 74 Q20 気が沈んだり、気が重くなることがあるか

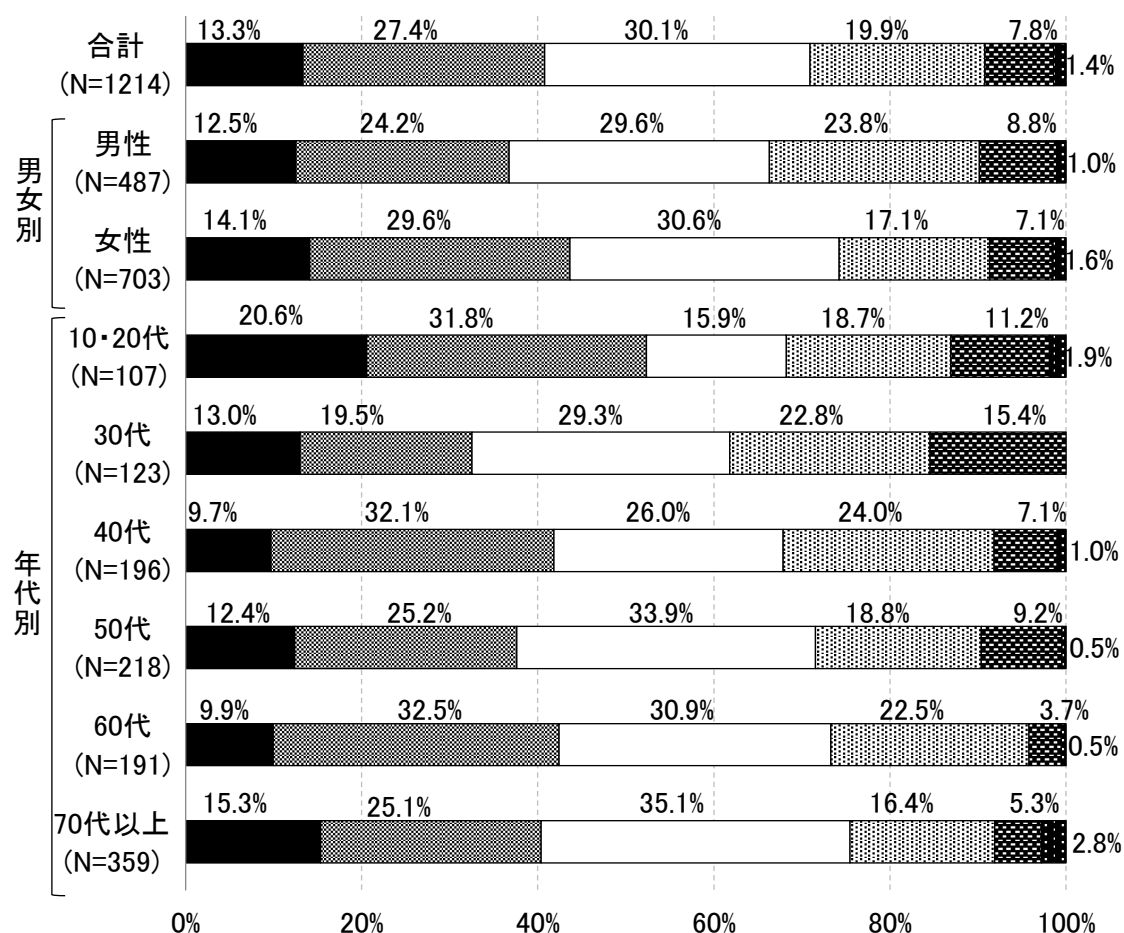
Q21 の心配事が多く、不安になりやすいかに関して、男女別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は、男性で 34.7%、女性で 38.9%と、女性の方が 4.2 ポイント高い。年代別で見ると、年代が下がるにつれて減少傾向にあり、70 代以上で 30.0% になる。(図 75)。



■そう思う ■ややそう思う □どちらともいえない ■あまりそう思わない ■そう思わない ■無回答

図 75 Q21 心配事が多く、不安になりやすいか

Q22 の初対面の相手と会話を楽しむことができるかに関して、男女別で見ると、男女ともに「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は4割程度である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は10・20代が52.4%と最も高く、反対に30代が32.5%と最も低い（図76）。



■そう思う ■ややそう思う □どちらともいえない ■あまりそう思わない ■そう思わない ■無回答

図76 Q22 初対面の相手と会話を楽しむことができるか

Q23 の年間の自殺者数の認知度に関して、男女別・年代別のすべての層で「知っている」と回答した人が 6 割以上である。年代別で見ると、「知っている」と回答した人の割合は 40 代が 78.6%と最も高く、反対に 10・20 代が 65.4%と最も低い（図 77）。

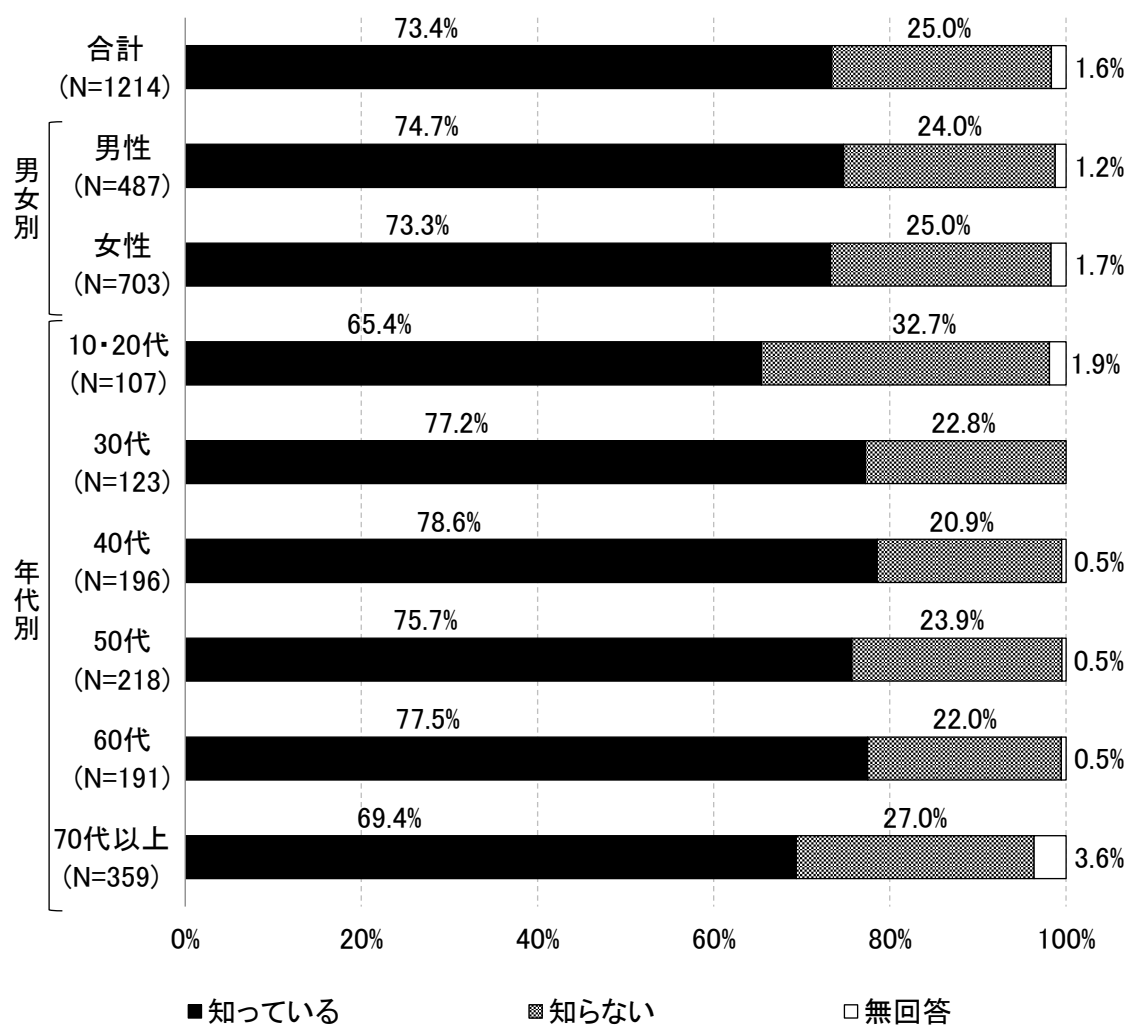


図 77 Q23 年間の自殺者数の認知度

Q24 の自殺に関する相談機関の認知度に関して、男女別・年代別で見ると、70 代以上を除いて、すべての層で 7 割以上が「知っている」と回答している。年代別で見ると、「知っている」と回答した人の割合は 30 代が 87.0%と最も高く、反対に 70 代以上が 59.6%と最も低い（図 78）。

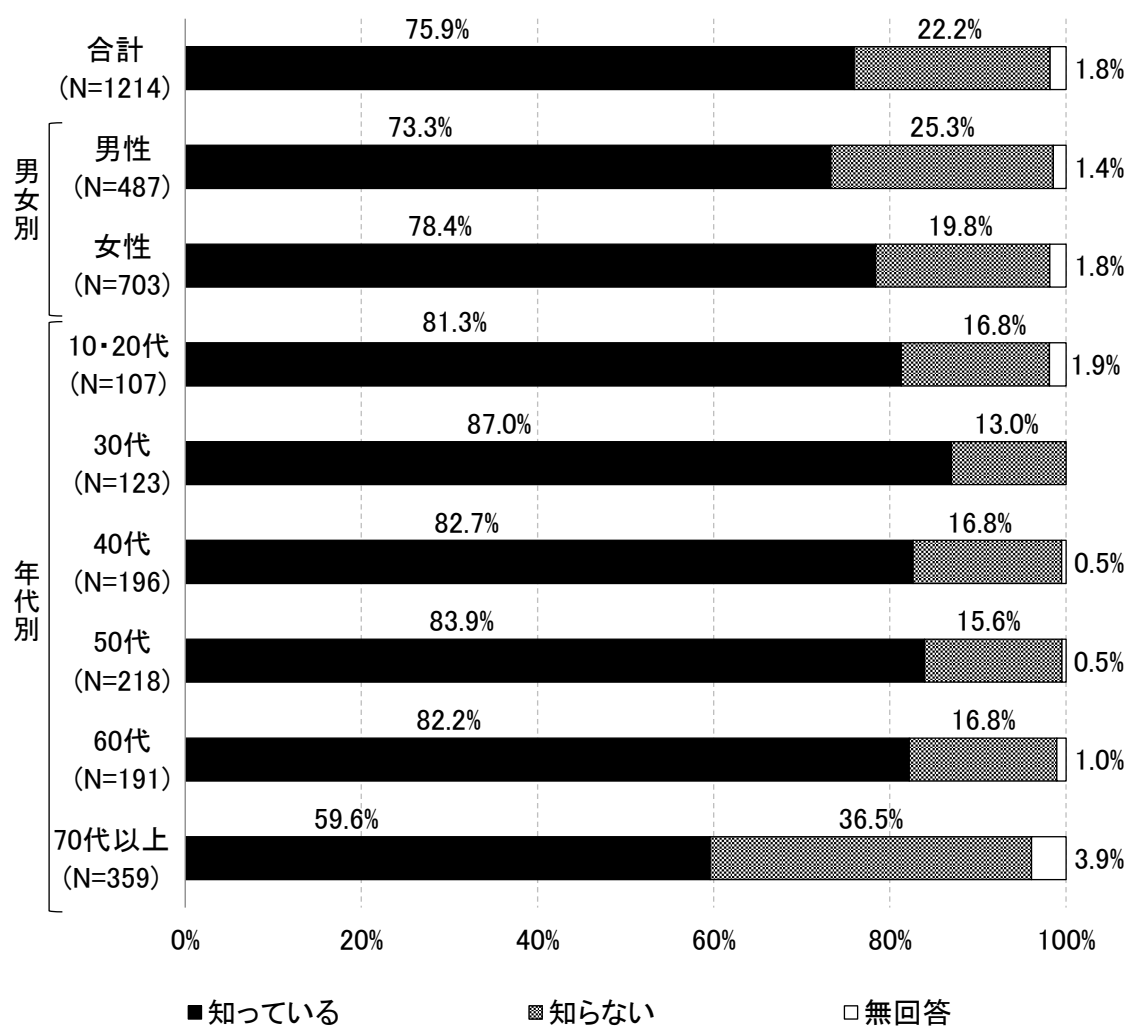


図 78 Q24 自殺に関する相談機関の認知度

Q25 の本気で自殺を考えたことがあるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「ない」と回答した人が7割以上である。年代別で見ると、「ない」と回答した人の割合は70代以上が85.2%と最も高く、反対に10・20代が78.5%と最も低い（図 79）。

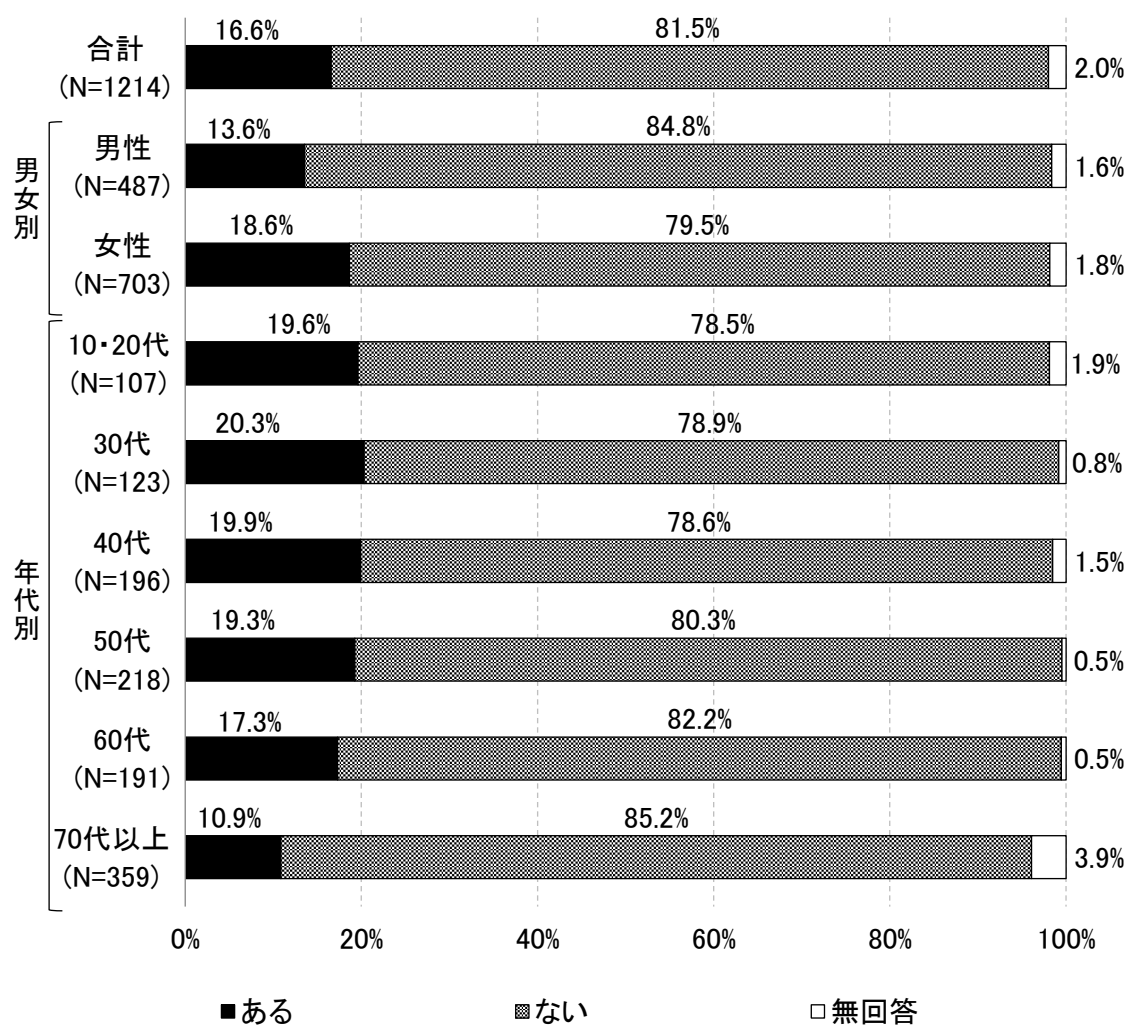


図 79 Q25 本気で自殺を考えたことがあるか

Q26 の自殺願望を聞いたときの対応に関して、「耳を傾けて聞く」が 62.1%で最も高く、「共感を示す」が 50.1%と続く（図 80）。

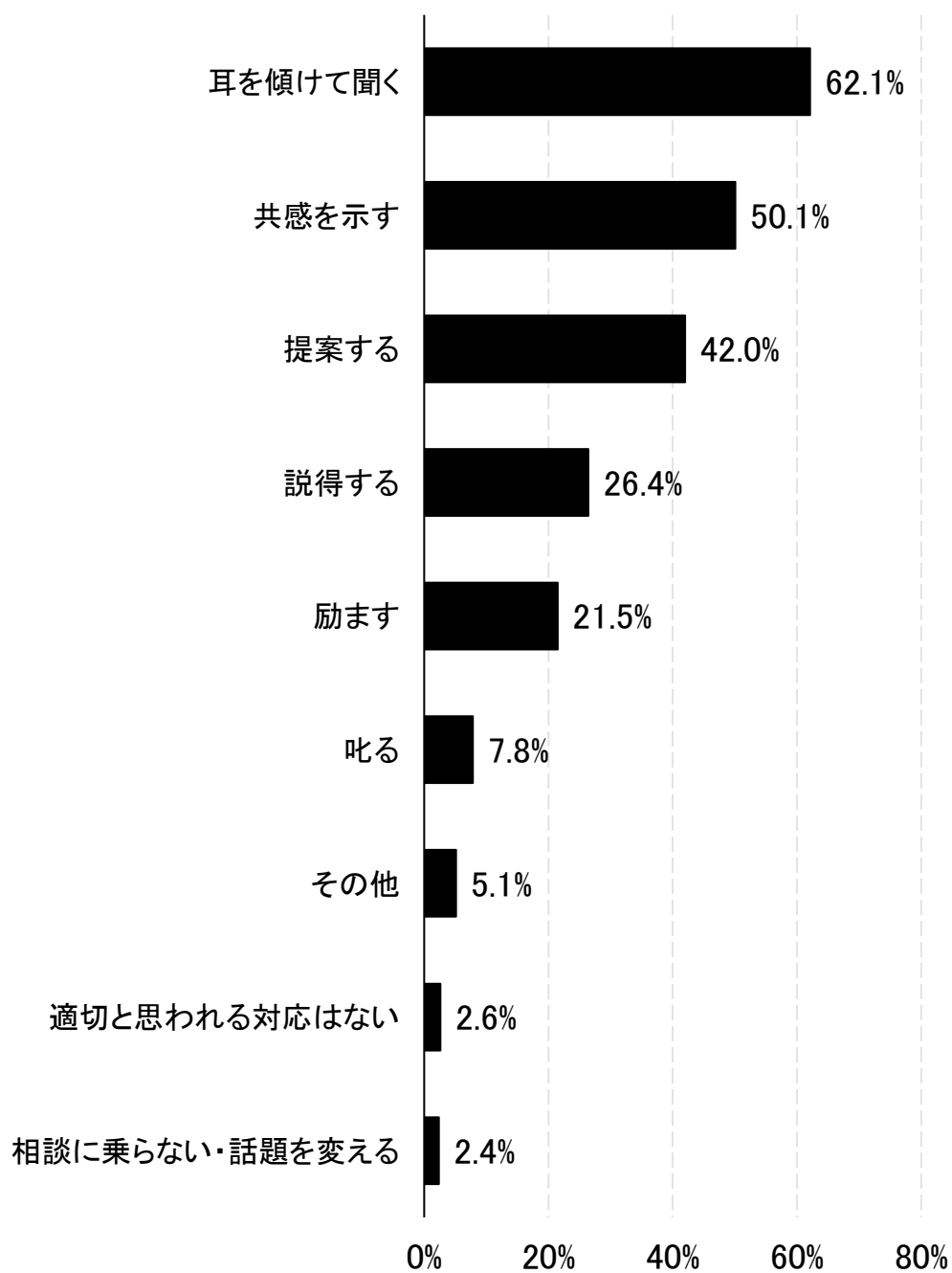


図 80 Q26 自殺願望を聞いたときの対応（複数回答・全体 N=1214）

Q26 の自殺願望を聞いたときの対応に関して、男女別で見ると、「共感を示す」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 17.8 ポイント高い（図 81）。

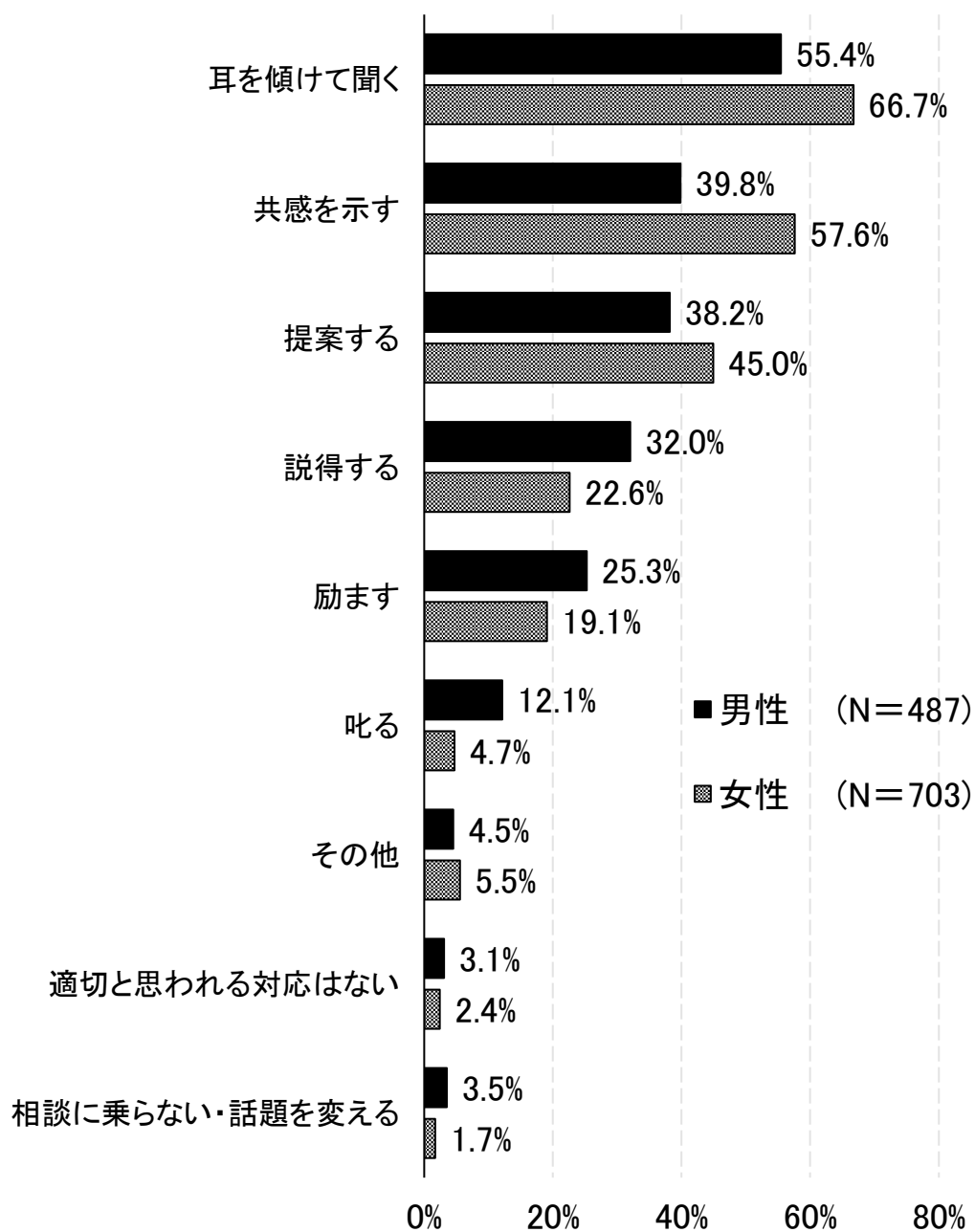


図 81 Q26 自殺願望を聞いたときの対応（複数回答・男女別）

Q26 の自殺願望を聞いたときの対応に関して、年代別で見ると、「耳を傾けて聞く」は年代で差があり、10・20代が81.3%と最も高く、反対に70代以上は47.4%と最も低い（図82）。

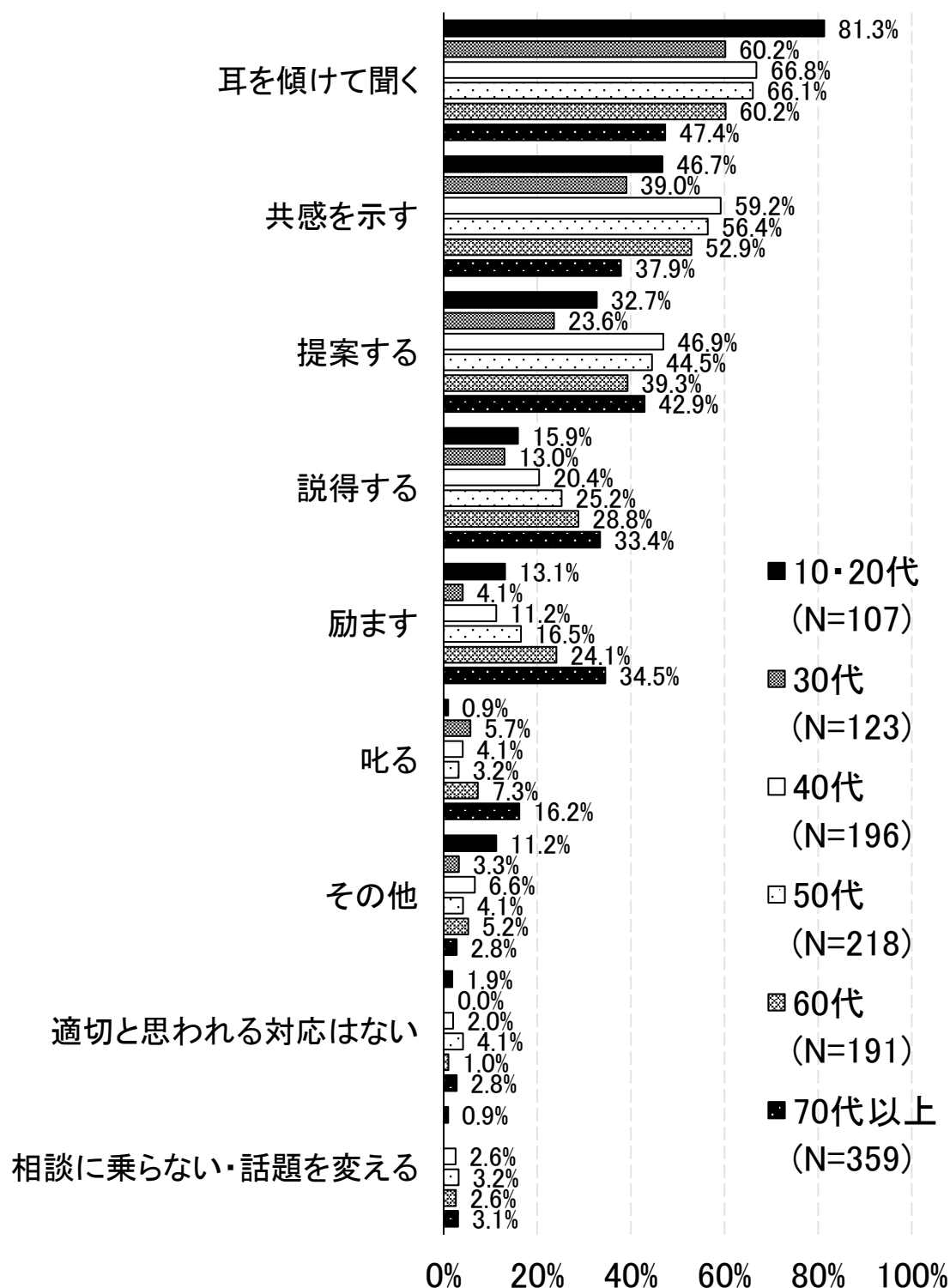


図 82 Q26 自殺願望を聞いたときの対応（複数回答・年代別）

Q27 の今後求められる自殺対策に関して、「様々な悩みに対応した相談窓口の設置」が 47.8%で最も高く、「子どもの自殺予防」が 42.4%と続く（図 83）。

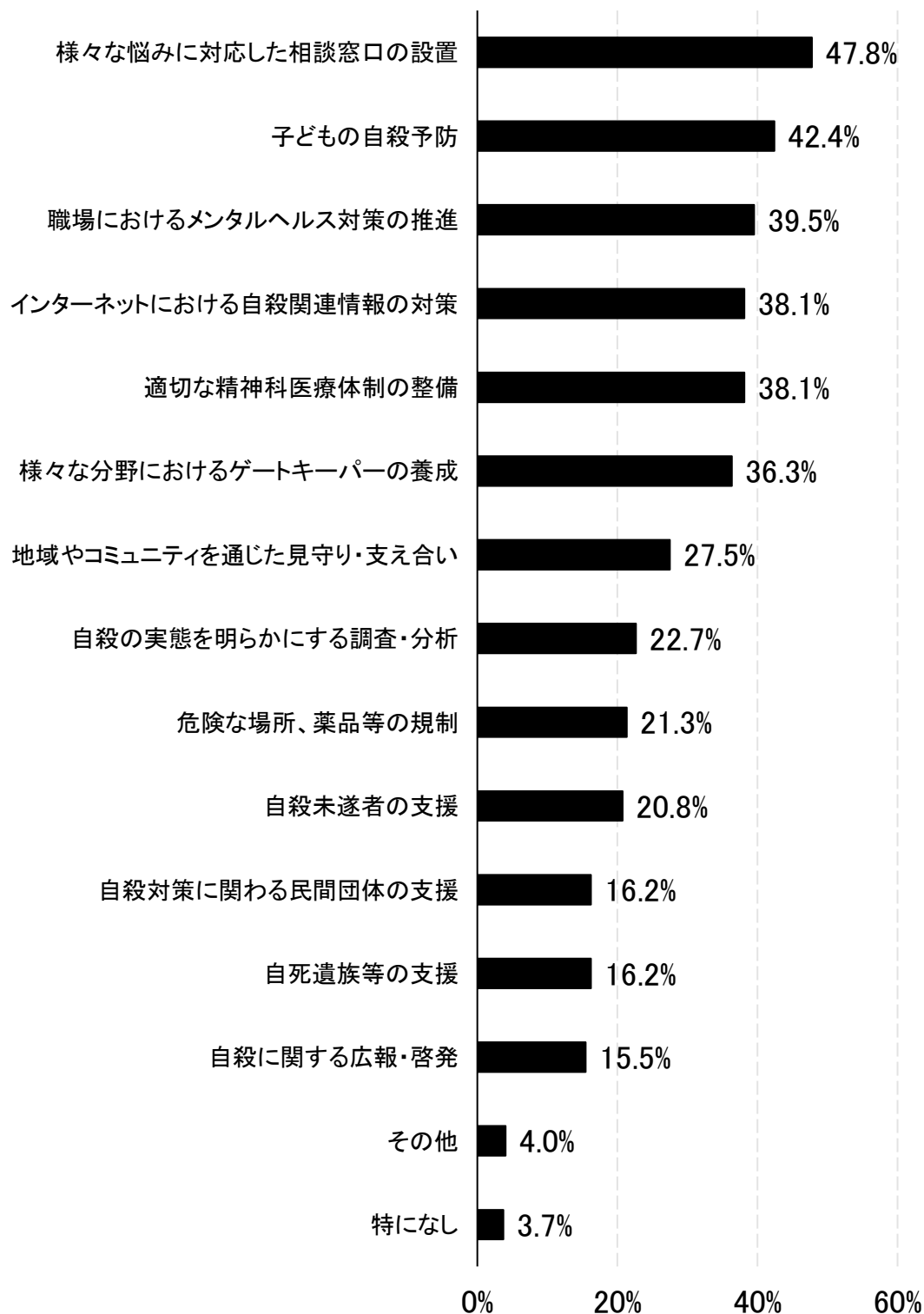


図 83 Q27 今後求められる自殺対策（複数回答・全体 N=1214）

Q27 の今後求められる自殺対策に関して、男女別で見ると、「自殺の実態を明らかにする調査・分析」は男女で差があり、女性よりも男性の方が 10.1 ポイント高い（図 84）。

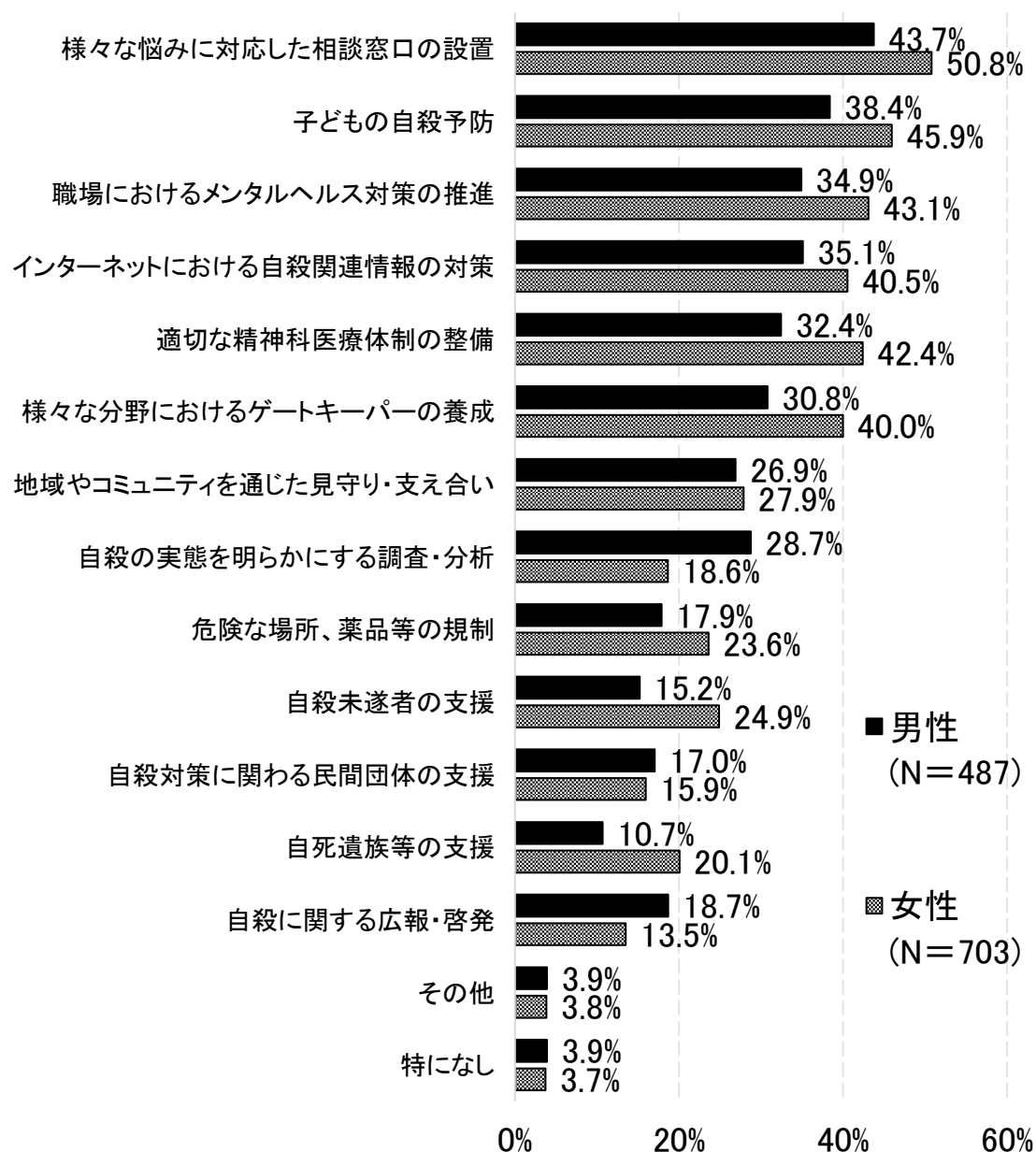


図 84 Q27 今後求められる自殺対策（複数回答・男女別）

Q27 の今後求められる自殺対策に関して、「職場におけるメンタルヘルス対策の推進」は年代で差があり、30 代が 56.1%と最も高く、70 代以上は 27.9%と最も低い（図 85）。

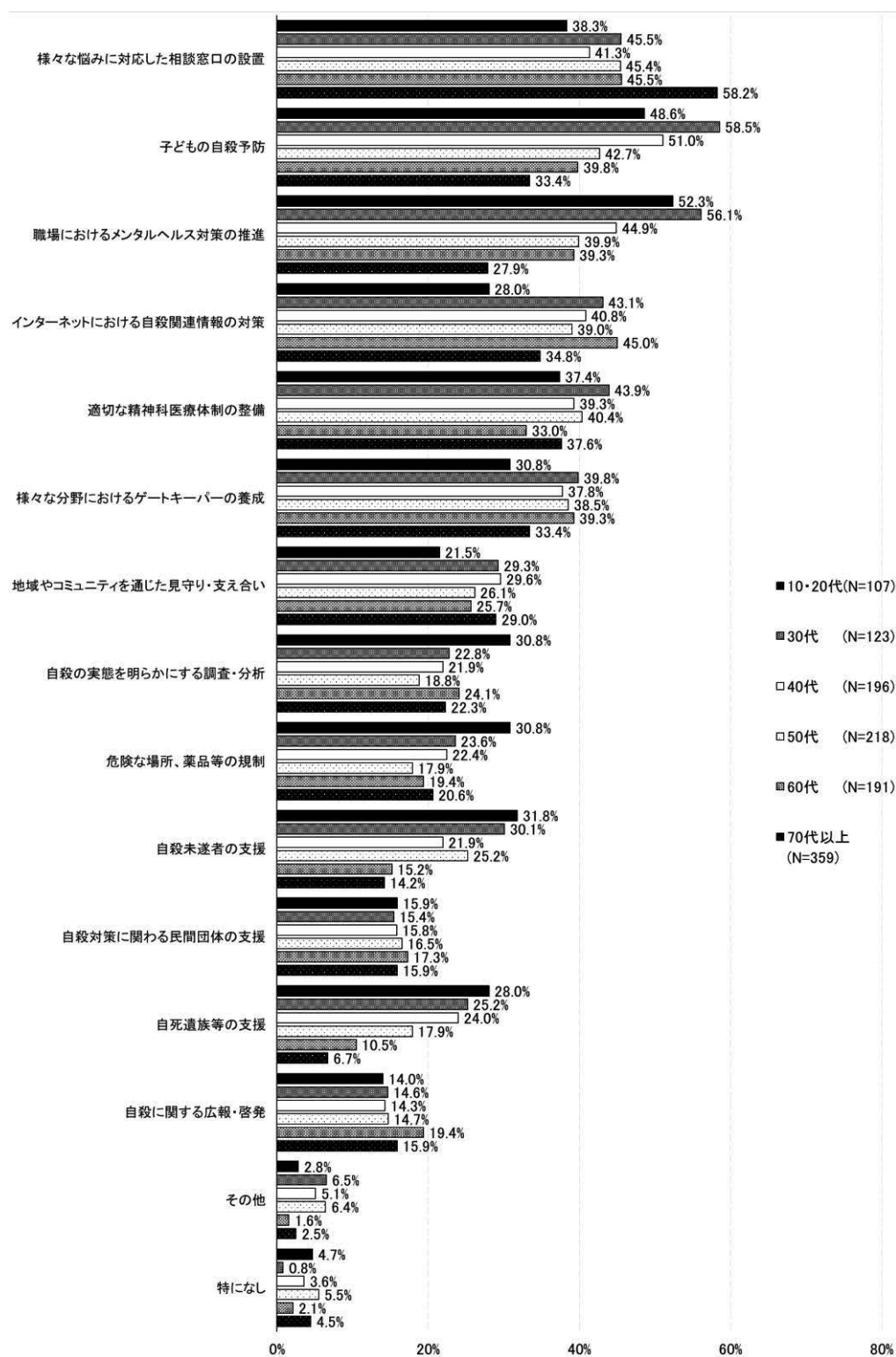


図 85 Q27 今後求められる自殺対策（複数回答・年代別）

Q28 の自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、「身近な人に悩みを聞いてもらう」が 63.4%で最も高く、「心の専門家に相談する」が 58.8%と続く（図 86）。

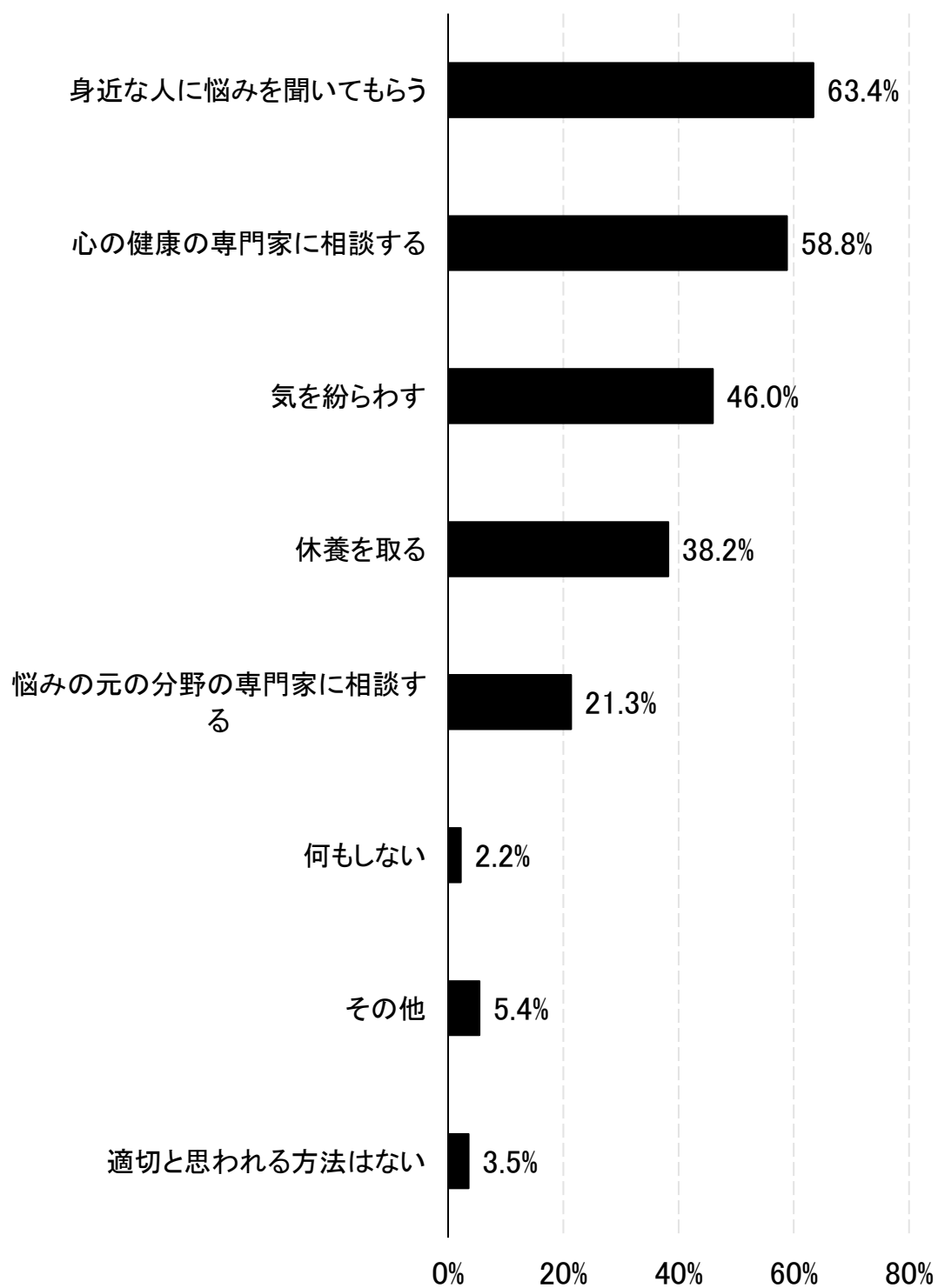


図 86 Q28 自殺したい気持ちを乗り越える方法（複数回答・全体 N=1214）

Q28 の自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、男女別で見ると、「心の健康の専門家に相談する」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 9.4 ポイント高い（図 87）。

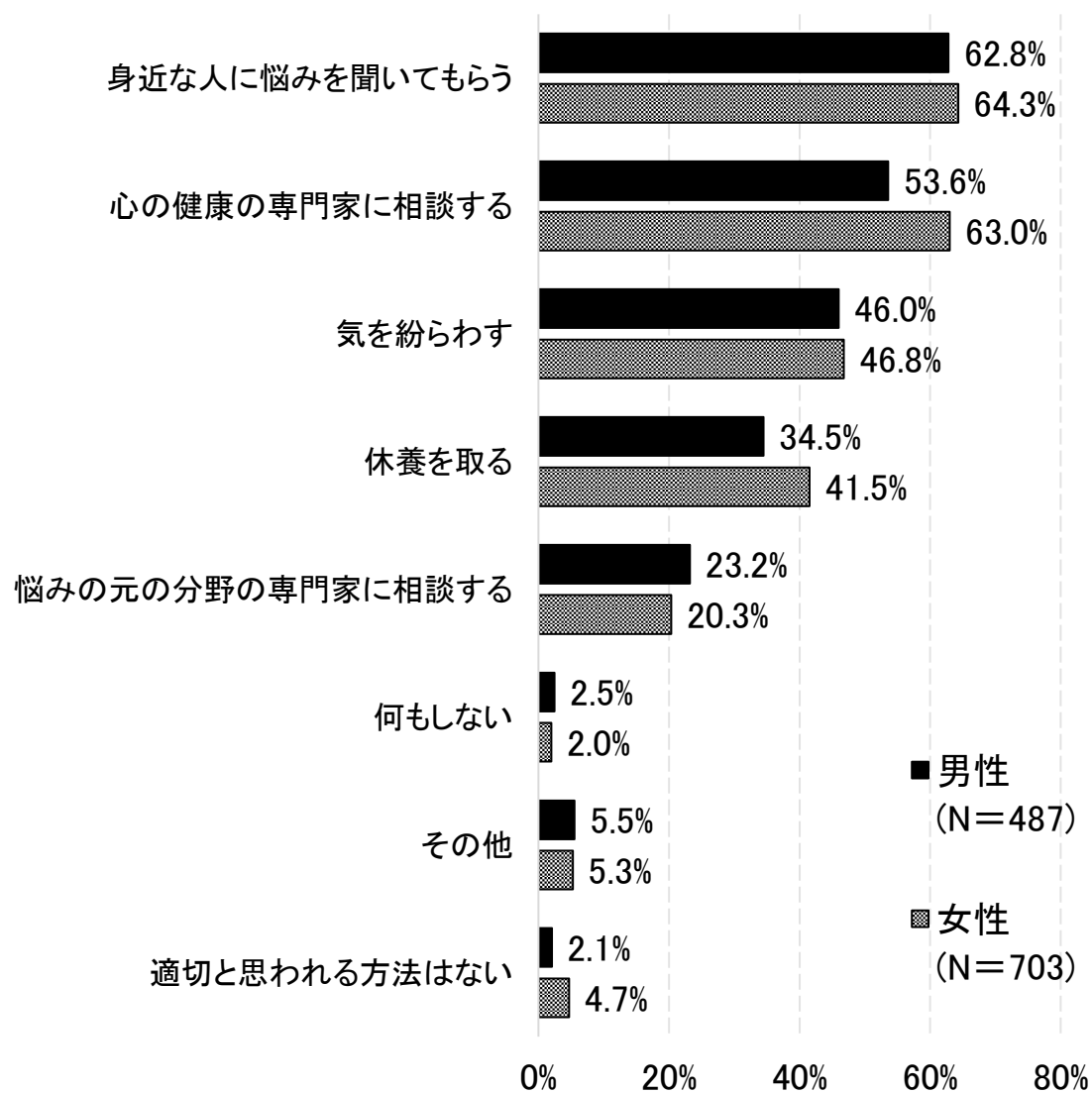


図 87 Q28 自殺したい気持ちを乗り越える方法（複数回答・男女別）

Q28 の自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、年代別で見ると、「休養を取る」は年代で差があり、10・20代が61.7%と最も高く、反対に70代以上は26.5%と最も低い（図88）。

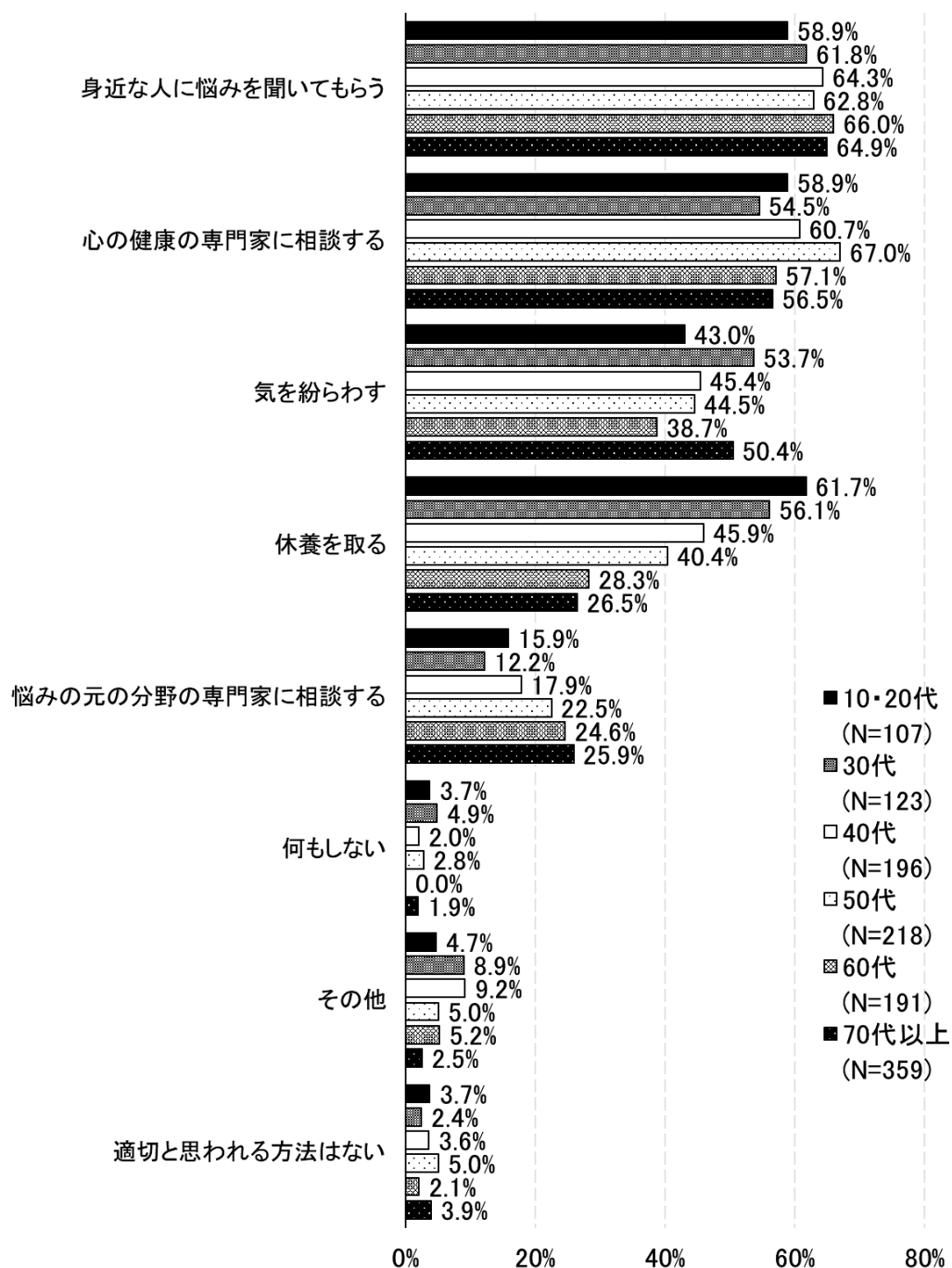


図 88 Q28 自殺したい気持ちを乗り越える方法（複数回答・年代別）

Q29①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、「公園の整備や自然・緑の保全」が28.9%と最も高く、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」が24.2%と続く（図 89）。

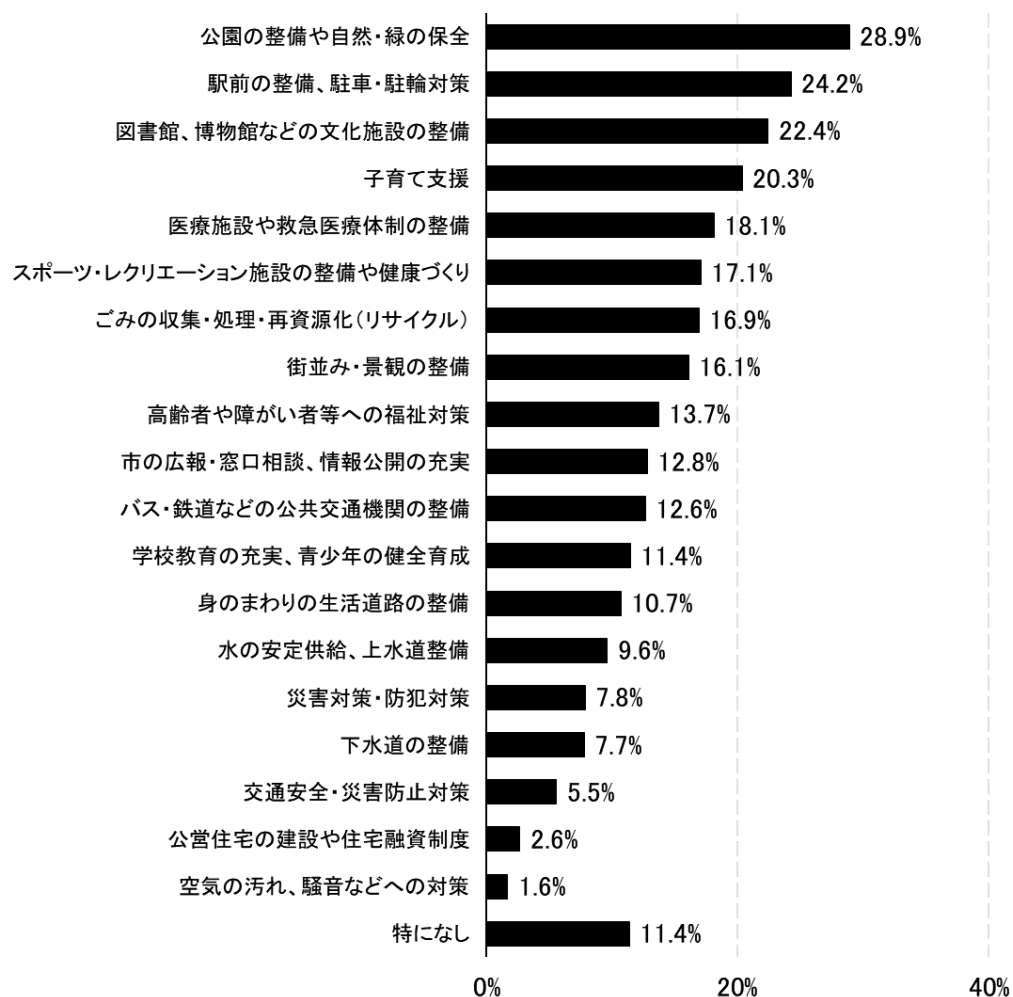


図 89 Q29① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの
(複数回答・全体 N=1214)

Q29①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、男女別で見ると、「ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）」では、男性よりも女性の方が 4.9 ポイント高い（図 90）。

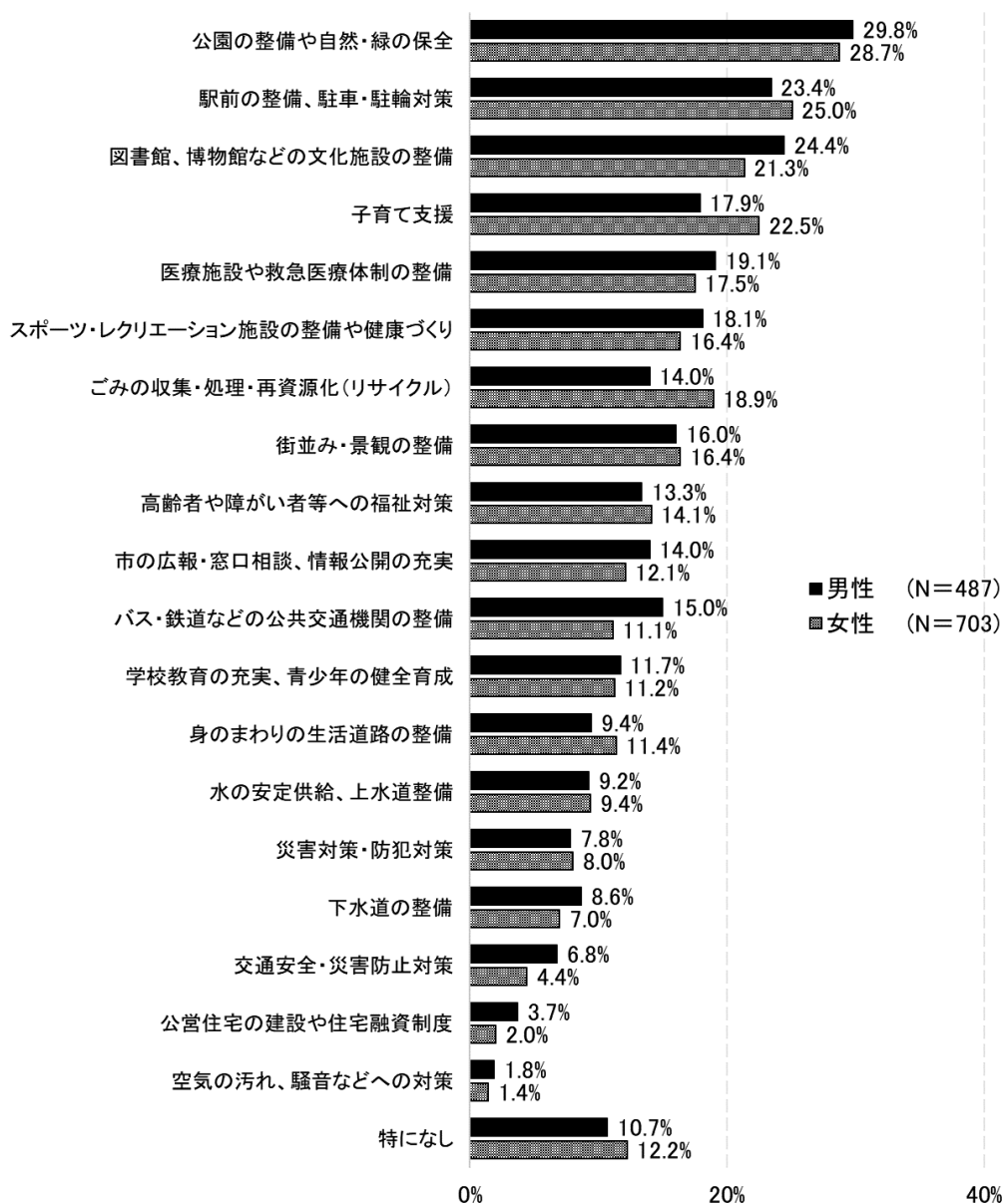


図 90 Q29① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・男女別）

Q29①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、年代別で見ると、「ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）」は、40代が36.7%と最も高く、10・20代は23.4%と最も低い（表5、図91）。

表5 Q29① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・年代別）

	(%)						
	公園の整備や自然・緑の保全	駅前の整備、駐車・駐輪対策	図書館、博物館などの文化施設の整備	子育て支援	医療施設や救急医療体制の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）
10・20代 (N=107)	15.0	16.8	20.6	20.6	14.0	29.0	23.4
30代 (N=123)	8.9	19.5	16.3	8.9	17.1	2.4	28.5
40代 (N=196)	15.8	22.4	12.8	7.1	15.3	0.5	36.7
50代 (N=218)	10.1	19.7	14.7	7.8	11.0	2.3	30.7
60代 (N=191)	8.4	22.5	18.8	12.6	22.0	0.5	26.7
70代以上 (N=359)	11.1	26.7	19.8	21.2	24.0	2.5	25.6

	街並み・景観の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	身のまわりの生活道路の整備	水の安定供給、上水道整備
10・20代 (N=107)	18.7	11.2	6.5	5.6	20.6	20.6	7.5
30代 (N=123)	17.9	20.3	11.4	4.9	4.9	8.1	13.0
40代 (N=196)	17.9	29.1	9.7	3.1	5.1	12.2	14.3
50代 (N=218)	17.0	22.9	10.6	7.3	9.6	8.7	6.9
60代 (N=191)	14.1	28.3	18.8	6.3	7.9	9.9	7.9
70代以上 (N=359)	13.1	23.7	27.3	12.5	15.3	15.6	8.9

	災害対策・防犯対策	下水道の整備	交通安全・災害防止対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	特になし
10・20代 (N=107)	3.7	11.2	8.4	15.9	22.4	0.0
30代 (N=123)	7.3	4.9	10.6	6.5	30.1	16.3
40代 (N=196)	6.6	1.5	14.3	8.2	30.1	9.2
50代 (N=218)	4.1	2.3	9.6	8.7	20.2	14.2
60代 (N=191)	6.3	1.6	8.4	8.4	18.3	13.1
70代以上 (N=359)	3.9	3.1	17.8	7.2	14.5	5.6

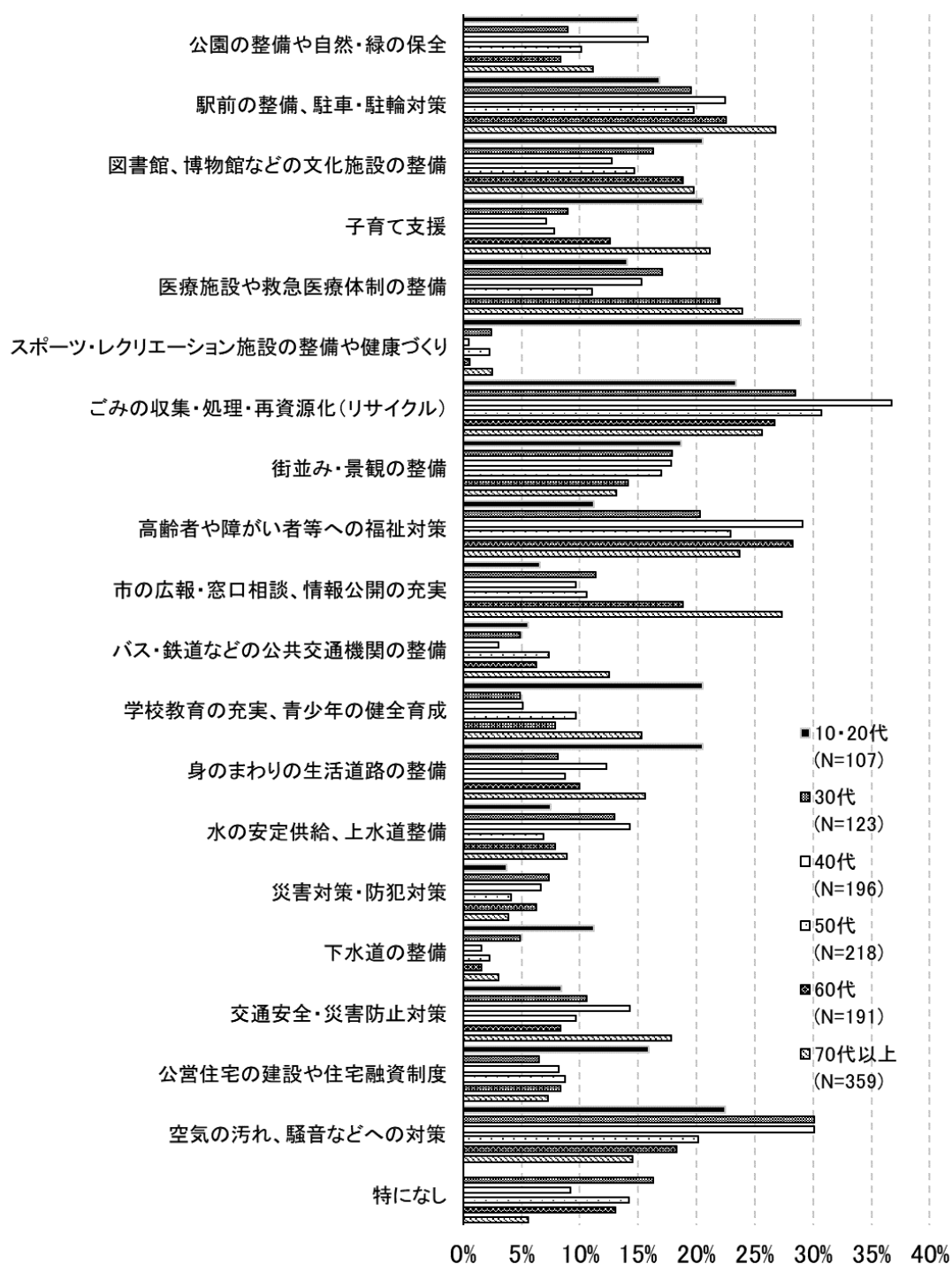


図 91 Q29① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・年代別）

Q29①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、居住地域別で見ると、「公園の整備や自然・緑の保全」は五領地区では、36.4%と最も高く、三箇牧地区では 12.0%と最も低い（表 6、図 92）。

表 6 Q29① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・居住地域別）

	(%)						
	公園の整備や自然・緑の保全	駅前の整備、駐車・駐輪対策	図書館、博物館などの文化施設の整備	子育て支援	医療施設や救急医療体制の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）
高槻北地区 (N=319)	32.3	31.0	31.7	19.1	21.9	17.2	16.9
高槻南地区 (N=318)	31.8	23.6	14.2	22.6	17.6	16.0	13.5
五領地区 (N=44)	36.4	20.5	20.5	15.9	20.5	20.5	13.6
高槻西地区 (N=224)	29.0	21.9	26.8	21.9	15.6	17.9	18.3
如是・富田地区 (N=230)	23.5	21.7	17.4	20.9	15.7	17.8	21.7
三箇牧地区 (N=25)	12.0	16.0	40.0	16.0	12.0	20.0	28.0

	街並み・景観の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	身のまわりの生活道路の整備	水の安定供給、上水道整備
高槻北地区 (N=319)	23.2	12.2	13.2	12.2	11.0	10.3	9.4
高槻南地区 (N=318)	11.6	12.9	10.4	12.6	11.3	10.1	6.3
五領地区 (N=44)	20.5	15.9	20.5	27.3	25.0	9.1	6.8
高槻西地区 (N=224)	16.5	15.6	16.5	13.4	12.1	12.5	10.7
如是・富田地区 (N=230)	12.6	16.5	11.3	12.2	10.4	12.6	12.6
三箇牧地区 (N=25)	12.0	8.0	8.0	4.0	12.0	8.0	20.0

	災害対策・防犯対策	下水道の整備	交通安全・災害防止対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	特になし
高槻北地区 (N=319)	7.2	9.7	5.0	1.6	2.5	8.5
高槻南地区 (N=318)	7.9	5.3	5.0	3.1	0.9	11.6
五領地区 (N=44)	11.4	6.8	9.1	2.3	2.3	15.9
高槻西地区 (N=224)	9.8	7.6	5.8	3.6	1.8	8.9
如是・富田地区 (N=230)	7.8	7.8	6.1	3.0	1.3	14.8
三箇牧地区 (N=25)	8.0	20.0	4.0	4.0	0.0	12.0

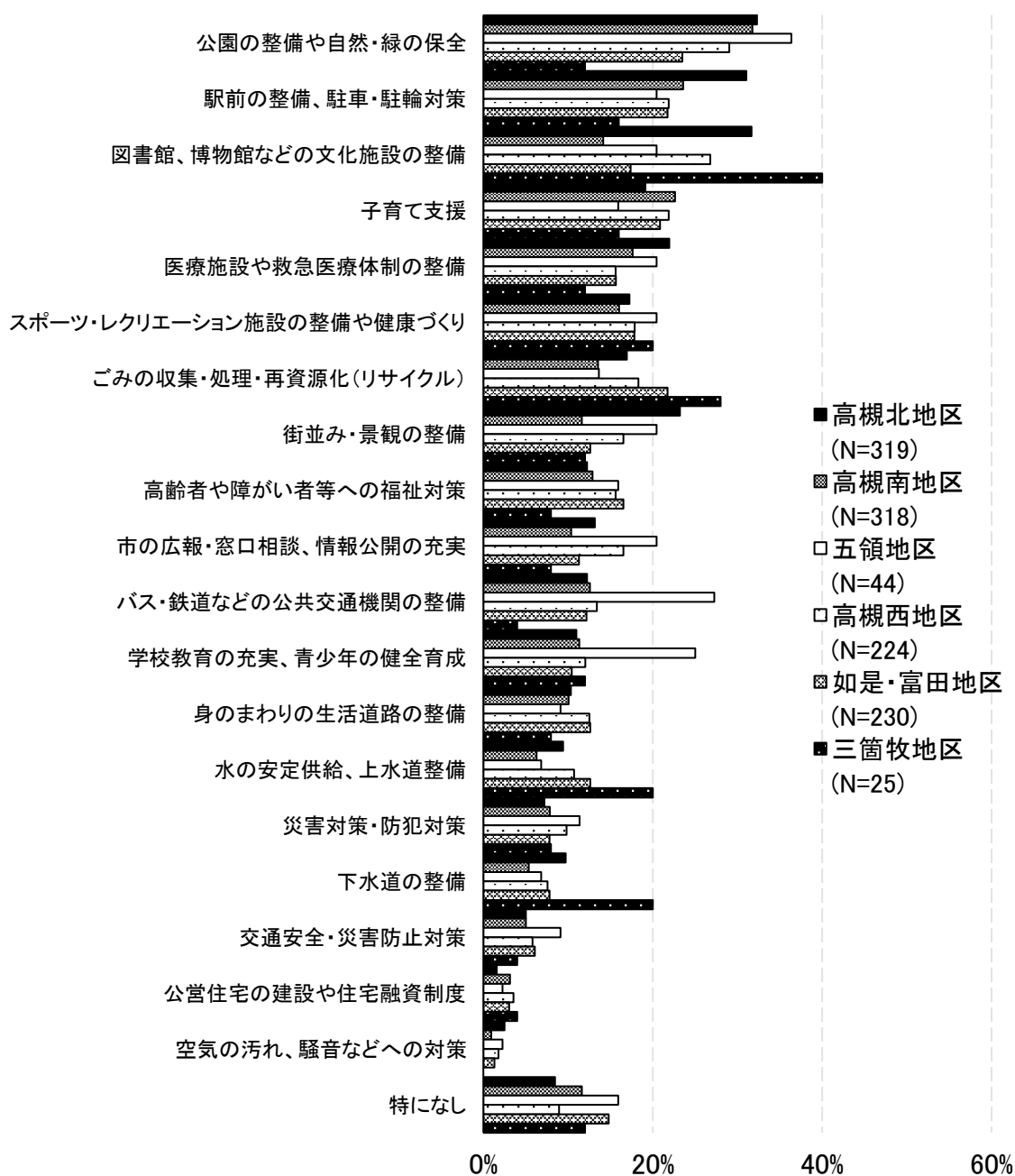


図 92 Q29① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの
(複数回答・居住地域別)

Q29①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、居住年数別で見ると、「図書館、博物館などの文化施設の整備」は1年未満と1年以上3年未満では10%未満であるが、3年以上では10%を超え、10年以上の人々は20%を超える（表7、図93）。

表7 Q29① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・居住年数別）

	公園の整備や自然・緑の保全	駅前の整備、駐車・駐輪対策	図書館、博物館などの文化施設の整備	子育て支援	医療施設や救急医療体制の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	(%)
1年未満 (N=24)	20.8	12.5	8.3	16.7	8.3	8.3	16.7	
1年以上3年未満 (N=43)	25.6	23.3	2.3	11.6	9.3	7.0	9.3	
3年以上5年未満 (N=39)	25.6	15.4	15.4	0.0	15.4	10.3	7.7	
5年以上10年未満 (N=76)	28.9	13.2	15.8	19.7	7.9	11.8	9.2	
10年以上20年未満 (N=166)	40.4	29.5	24.7	25.9	18.1	15.7	12.0	
20年以上30年未満 (N=202)	27.7	27.2	23.3	18.8	16.3	20.3	15.3	
30年以上40年未満 (N=194)	26.3	23.2	25.8	24.7	25.3	17.0	17.5	
40年以上50年未満 (N=256)	29.3	27.3	21.5	21.9	19.9	22.3	16.8	
50年以上 (N=199)	24.1	22.6	26.6	14.6	19.6	15.6	29.1	
	街並み・景観の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	身のまわりの生活道路の整備	水の安定供給、上水道整備	
1年未満 (N=24)	8.3	20.8	8.3	16.7	8.3	8.3	8.3	
1年以上3年未満 (N=43)	9.3	4.7	11.6	2.3	2.3	2.3	4.7	
3年以上5年未満 (N=39)	12.8	2.6	7.7	12.8	5.1	5.1	0.0	
5年以上10年未満 (N=76)	15.8	6.6	10.5	10.5	14.5	7.9	2.6	
10年以上20年未満 (N=166)	22.3	16.3	9.0	11.4	13.9	13.9	7.8	
20年以上30年未満 (N=202)	17.8	14.4	14.4	15.3	13.4	14.4	9.4	
30年以上40年未満 (N=194)	19.6	10.3	13.9	11.9	13.4	12.4	8.8	
40年以上50年未満 (N=256)	13.7	13.7	12.9	14.8	9.0	8.6	10.9	
50年以上 (N=199)	12.1	20.6	16.1	11.1	11.6	9.5	16.1	
	災害対策・防犯対策	下水道の整備	交通安全・災害防止対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	特になし		
1年未満 (N=24)	4.2	12.5	4.2	4.2	0.0	29.2		
1年以上3年未満 (N=43)	2.3	0.0	2.3	2.3	0.0	27.9		
3年以上5年未満 (N=39)	20.5	0.0	7.7	2.6	2.6	30.8		
5年以上10年未満 (N=76)	7.9	1.3	6.6	2.6	0.0	18.4		
10年以上20年未満 (N=166)	9.0	2.4	7.2	1.2	1.8	7.8		
20年以上30年未満 (N=202)	9.4	8.4	5.0	2.5	1.5	8.9		
30年以上40年未満 (N=194)	11.3	9.8	5.7	3.6	2.1	11.9		
40年以上50年未満 (N=256)	7.4	7.0	4.7	4.3	1.6	7.8		
50年以上 (N=199)	5.5	15.6	6.0	1.0	2.5	9.5		

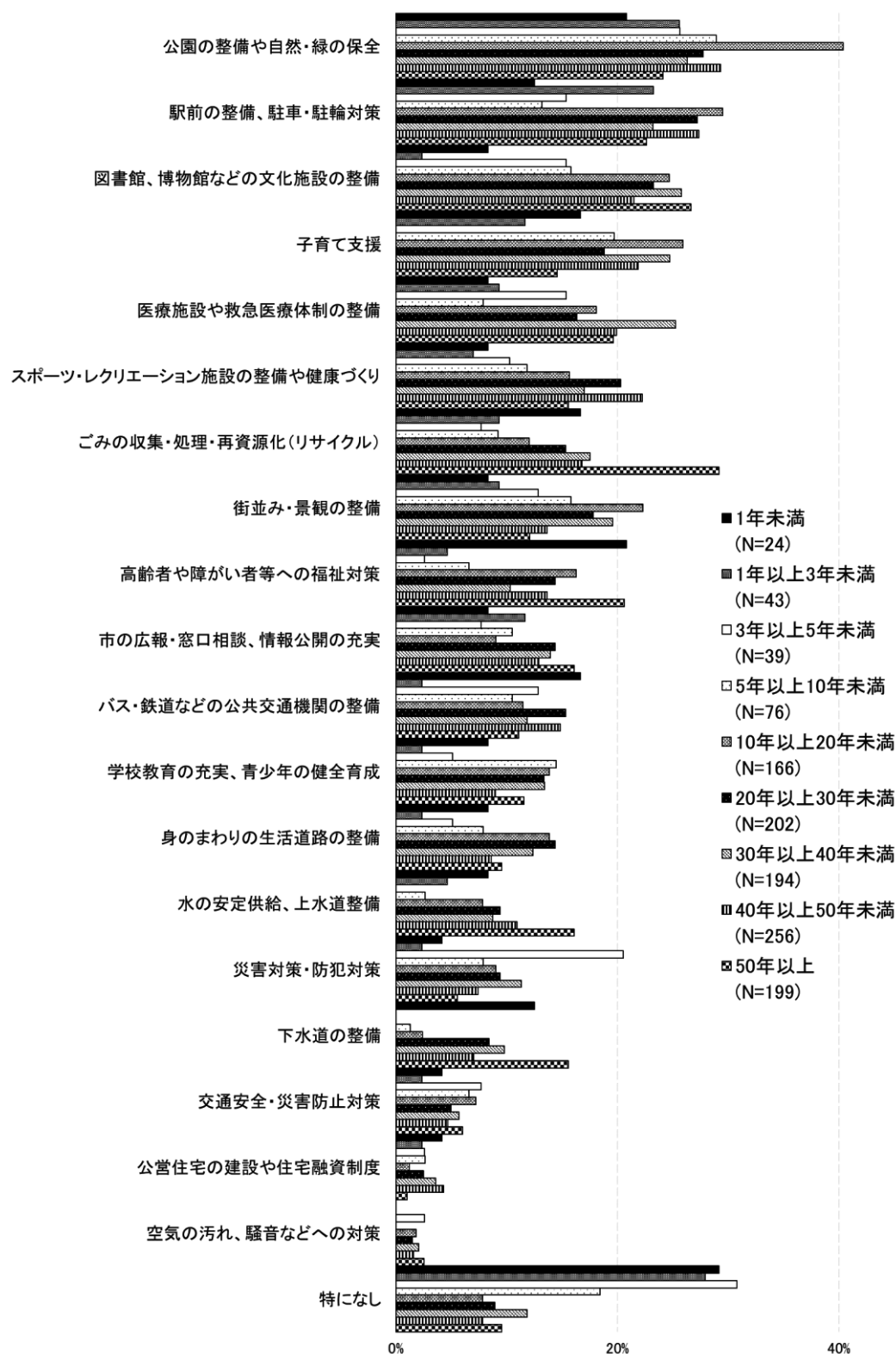


図 93 Q29① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの
(複数回答・居住年数別)

Q29②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、「医療施設や救急医療体制の整備」が 29.9%と最も高く、「高齢者や障がい者等への福祉対策」が 23.4%と続く（図 94）。

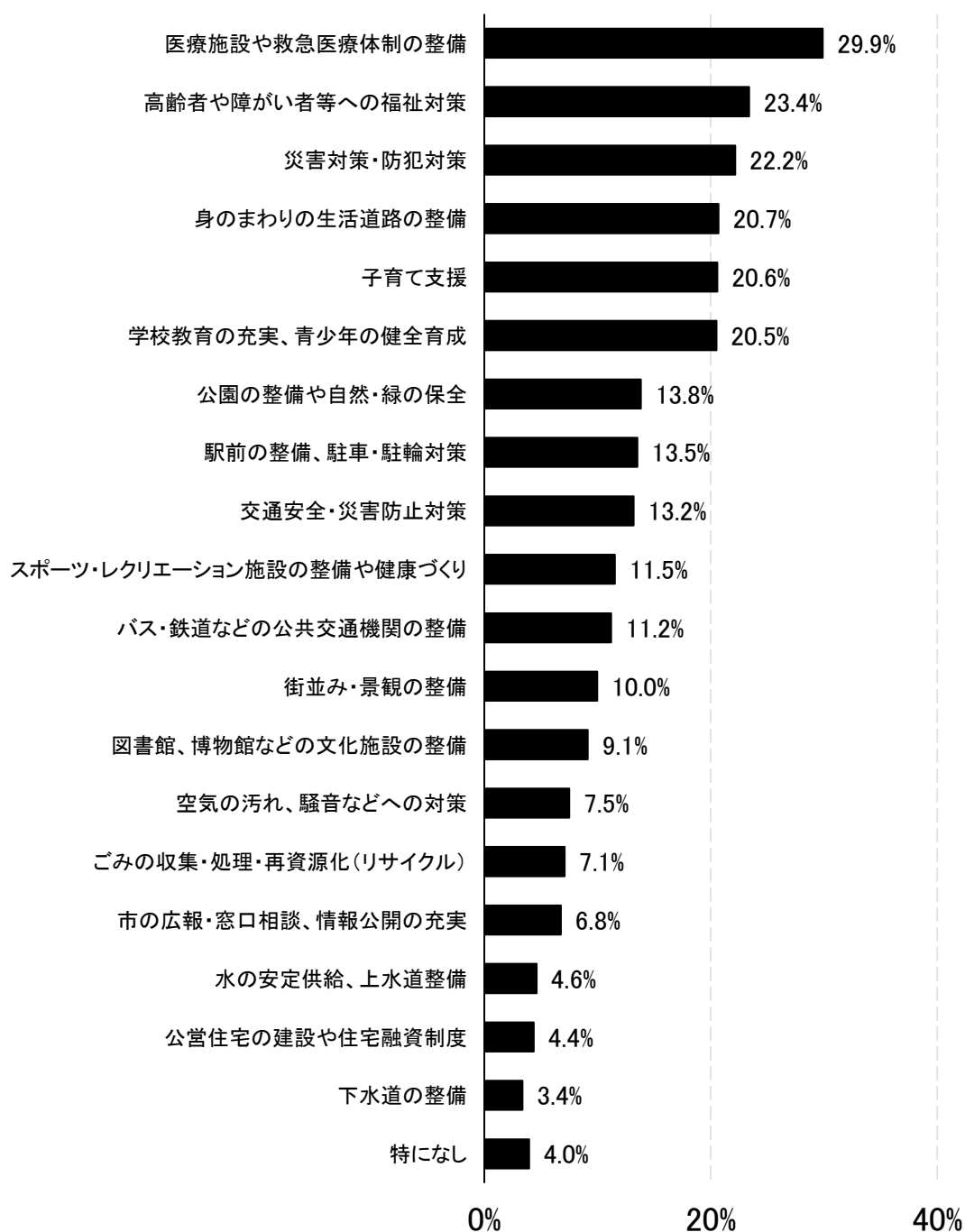


図 94 Q29② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・全体 N=1214）

Q29②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、男女別で見ると、「スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり」では、女性よりも男性の方が 5.6 ポイント高い（図 95）。

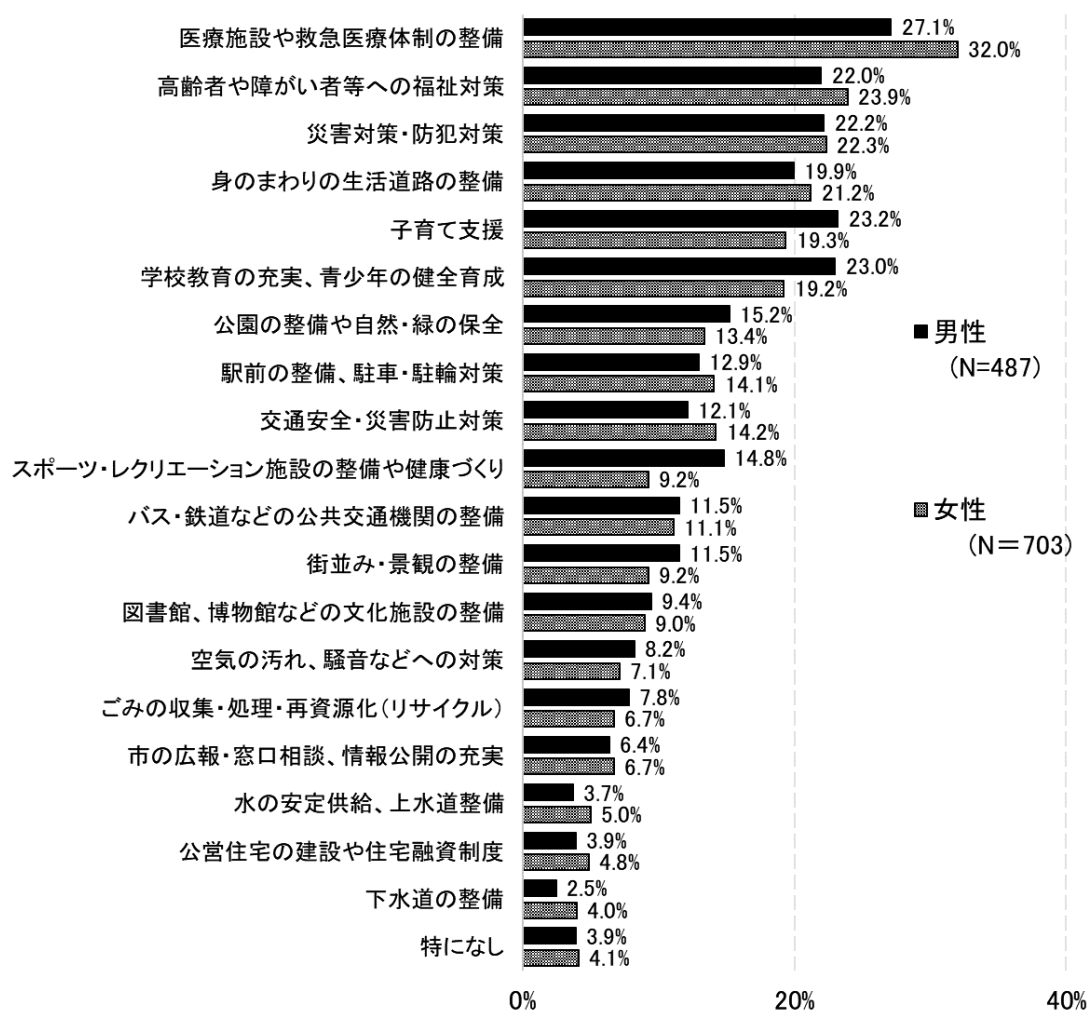


図 95 Q29② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・男女別）

Q29②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、年代別で見ると、「子育て支援」は若い世代で高く、30代は43.9%と最も高い（表8、図96）。

表8 Q29② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

	医療施設や救急医療体制の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	災害対策・防犯対策	身のまわりの生活道路の整備	子育て支援	学校教育の充実、青少年の健全育成	公園の整備や自然・緑の保全	(%)
10・20代 (N=107)	14.0	10.3	17.8	20.6	32.7	19.6	14.0	
30代 (N=123)	22.0	8.1	19.5	31.7	43.9	33.3	16.3	
40代 (N=196)	33.7	12.2	27.6	18.9	30.6	30.1	14.3	
50代 (N=218)	30.3	23.4	27.1	19.3	15.1	15.6	11.9	
60代 (N=191)	30.9	34.0	23.6	20.4	13.6	17.3	11.5	
70代以上 (N=359)	35.1	32.6	18.4	19.5	11.1	16.7	15.3	

	駅前の整備、駐車・駐輪対策	交通安全・災害防止対策	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	街並み・景観の整備	図書館、博物館などの文化施設の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策	(%)
10・20代 (N=107)	15.9	11.2	13.1	14.0	17.8	13.1	14.0	
30代 (N=123)	13.0	17.1	8.1	6.5	8.9	10.6	7.3	
40代 (N=196)	12.8	16.3	14.8	11.7	6.1	11.2	9.2	
50代 (N=218)	15.1	12.8	13.3	12.8	11.0	7.8	7.8	
60代 (N=191)	16.2	8.9	11.5	11.5	11.0	11.0	7.9	
70代以上 (N=359)	11.4	13.1	9.7	10.0	9.5	5.8	4.5	

	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	水の安定供給、上下水道整備	公営住宅の建設や住宅融資制度	下水道の整備	特になし	(%)
10・20代 (N=107)	8.4	3.7	1.9	3.7	1.9	9.3	
30代 (N=123)	8.1	4.1	2.4	4.9	0.8	4.1	
40代 (N=196)	6.1	4.1	7.7	3.6	5.6	2.6	
50代 (N=218)	7.8	4.6	2.8	8.7	4.1	6.4	
60代 (N=191)	6.3	11.0	3.7	3.7	3.1	1.6	
70代以上 (N=359)	7.2	8.6	6.1	2.8	3.3	3.1	

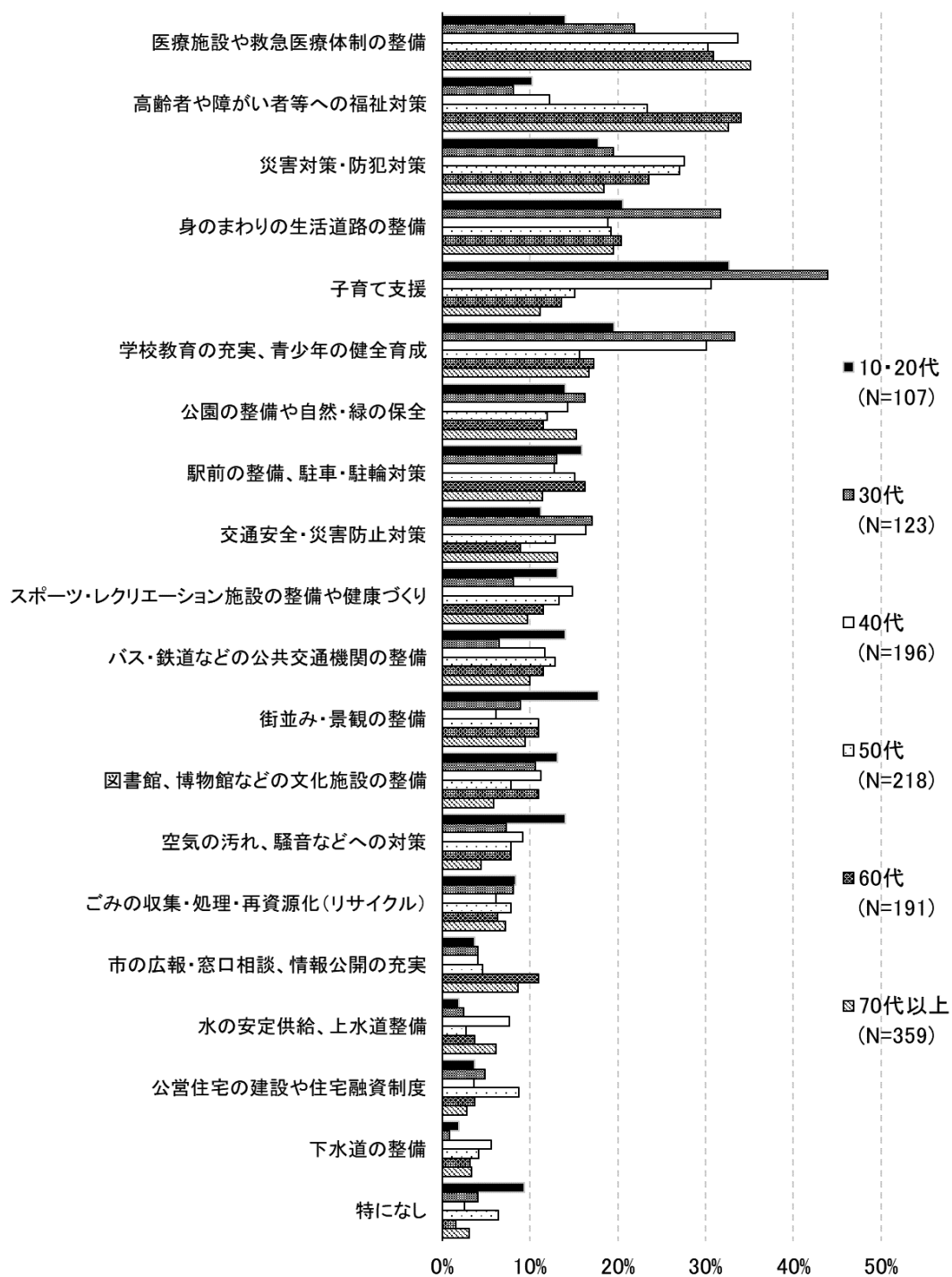


図 96 Q29② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

Q29②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、居住地域別で見ると、「医療施設や救急医療体制の整備」は、どの地域でも最も高い（表 9、図 97）。

表 9 Q29② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

	医療施設や救急医療体制の整備	高齢者や障がい者等への福祉対策	災害対策・防犯対策	身のまわりの生活道路の整備	子育て支援	学校教育の充実、青少年の健全育成	公園の整備や自然・緑の保全	(%)
高槻北地区 (N=319)	27.9	23.2	23.8	22.9	18.8	20.1	14.4	
高槻南地区 (N=318)	26.7	21.7	21.1	21.1	19.2	21.1	12.3	
五領地区 (N=44)	29.5	25.0	20.5	11.4	11.4	18.2	15.9	
高槻西地区 (N=224)	35.7	23.2	20.1	17.4	29.0	21.9	18.8	
如是・富田地区 (N=230)	32.6	25.7	22.6	24.8	21.7	22.6	11.7	
三箇牧地区 (N=25)	32.0	32.0	32.0	24.0	16.0	16.0	16.0	
	駅前の整備、駐車・駐輪対策	交通安全・災害防止対策	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	街並み・景観の整備	図書館、博物館などの文化施設の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策	
高槻北地区 (N=319)	14.1	12.9	13.2	11.6	12.5	8.5	7.2	
高槻南地区 (N=318)	17.0	12.9	11.3	10.1	9.1	11.6	10.7	
五領地区 (N=44)	6.8	11.4	13.6	11.4	6.8	11.4	11.4	
高槻西地区 (N=224)	12.9	16.5	8.9	10.3	11.6	9.8	6.7	
如是・富田地区 (N=230)	8.7	12.2	13.0	12.2	9.1	7.4	4.8	
三箇牧地区 (N=25)	8.0	12.0	8.0	24.0	0.0	0.0	12.0	
	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	水の安定供給、上水道整備	公営住宅の建設や住宅融資制度	下水道の整備	特になし		
高槻北地区 (N=319)	5.6	8.5	4.1	3.4	3.1	4.1		
高槻南地区 (N=318)	6.6	3.8	5.0	5.3	3.5	3.5		
五領地区 (N=44)	13.6	15.9	4.5	4.5	4.5	4.5		
高槻西地区 (N=224)	5.8	5.8	4.9	3.1	4.0	2.2		
如是・富田地区 (N=230)	10.0	7.4	5.2	4.8	2.6	3.9		
三箇牧地区 (N=25)	12.0	4.0	4.0	8.0	4.0	8.0		

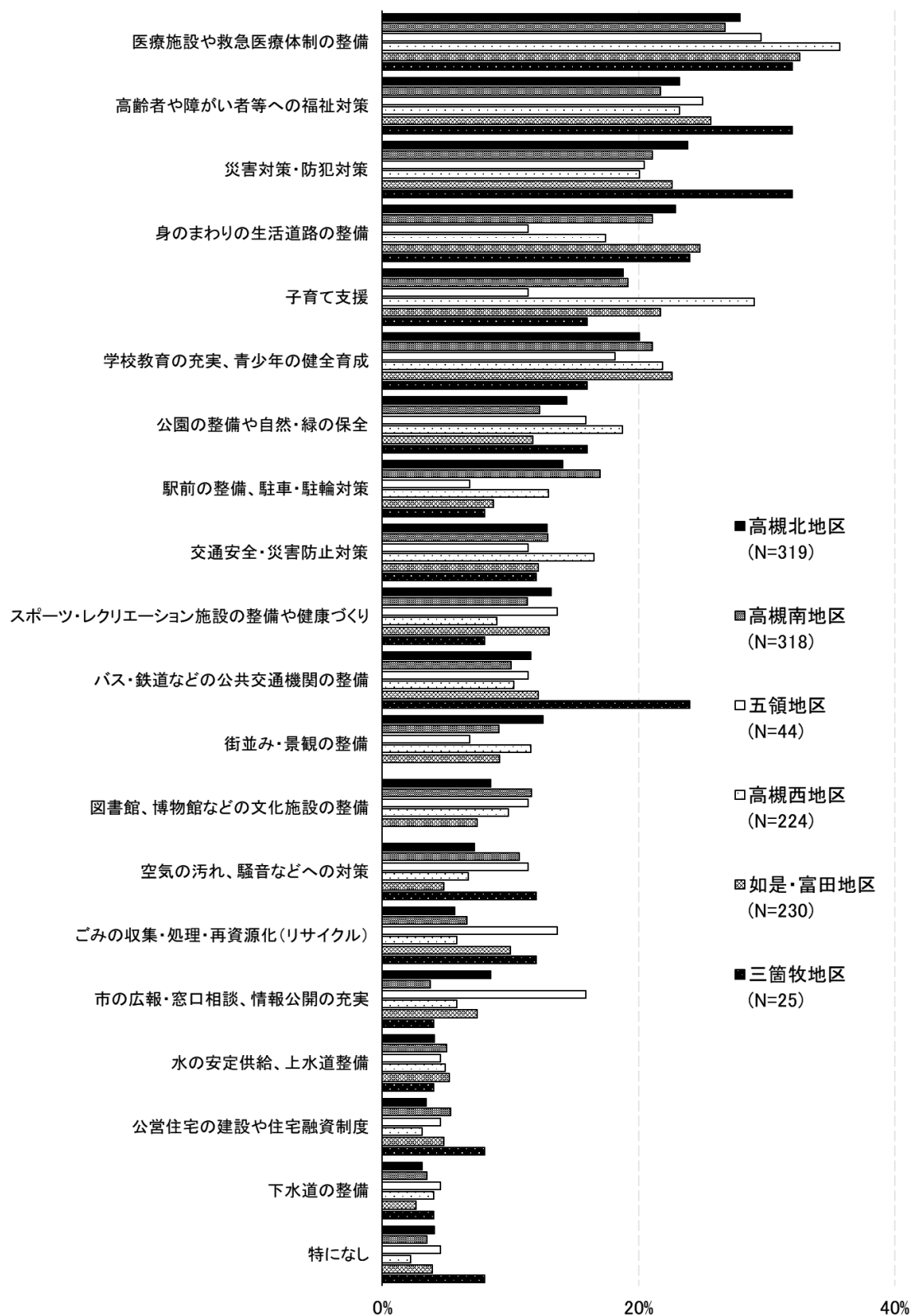


図 97 Q29② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

Q29②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、居住年数別で見ると、「子育て支援」は20年未満の各区分では3割程度で、50年以上では1割程度である（表10、図98）。

表 10 Q29② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

	医療施設や救急医療体制 の整備	高齢者や障がい者等への 福祉対策	災害対策・防犯対策	身のまわりの生活道路の 整備	子育て支援	学校教育の充実、青少年 の健全育成	公園の整備や自然・緑の 保全	(%)
1年未満 (N=24)	29.2	8.3	16.7	16.7	33.3	12.5	16.7	
1年以上3年未満 (N=43)	20.9	4.7	20.9	27.9	27.9	20.9	9.3	
3年以上5年未満 (N=39)	12.8	10.3	30.8	33.3	30.8	33.3	12.8	
5年以上10年未満 (N=76)	26.3	7.9	13.2	31.6	28.9	23.7	14.5	
10年以上20年未満 (N=166)	29.5	13.9	25.3	25.3	28.9	24.1	12.7	
20年以上30年未満 (N=202)	25.7	24.3	21.3	15.8	21.8	19.3	16.8	
30年以上40年未満 (N=194)	30.9	24.7	21.1	18.0	18.6	19.1	17.5	
40年以上50年未満 (N=256)	32.8	34.0	23.8	19.1	16.8	21.5	9.8	
50年以上 (N=199)	37.7	29.6	22.1	19.6	12.6	17.6	14.6	

	駅前の整備、駐車・駐輪 対策	交通安全・災害防止対策	スポーツ・レクリエー ション施設の整備や健康 づくり	バス・鉄道などの公共交 通機関の整備	街並み・景観の整備	図書館、博物館などの文 化施設の整備	空気の汚れ、騒音などへ の対策	(%)
1年未満 (N=24)	12.5	8.3	16.7	25.0	12.5	12.5	4.2	
1年以上3年未満 (N=43)	9.3	23.3	11.6	7.0	9.3	14.0	2.3	
3年以上5年未満 (N=39)	12.8	10.3	15.4	2.6	10.3	23.1	5.1	
5年以上10年未満 (N=76)	17.1	5.3	11.8	3.9	13.2	11.8	13.2	
10年以上20年未満 (N=166)	13.9	13.9	11.4	14.5	7.8	7.2	10.2	
20年以上30年未満 (N=202)	11.9	16.8	9.9	14.9	13.4	9.9	7.9	
30年以上40年未満 (N=194)	14.9	13.9	11.9	12.9	8.8	6.2	8.2	
40年以上50年未満 (N=256)	13.7	12.5	10.5	9.8	9.4	7.8	5.9	
50年以上 (N=199)	14.1	10.6	13.1	8.0	9.5	9.0	6.0	

	ごみの収集・処理・再資 源化（リサイクル）	市の広報・窓口相談、情 報公開の充実	水の安定供給、上水道整 備	公営住宅の建設や住宅融 資制度	下水道の整備	特になし	(%)
1年未満 (N=24)	12.5	4.2	0.0	0.0	0.0	12.5	
1年以上3年未満 (N=43)	4.7	0.0	2.3	2.3	2.3	7.0	
3年以上5年未満 (N=39)	5.1	5.1	2.6	7.7	0.0	7.7	
5年以上10年未満 (N=76)	9.2	2.6	6.6	5.3	2.6	7.9	
10年以上20年未満 (N=166)	9.0	6.0	3.0	5.4	1.8	2.4	
20年以上30年未満 (N=202)	8.4	6.9	3.0	3.5	4.5	5.4	
30年以上40年未満 (N=194)	4.1	7.7	5.2	3.1	3.1	3.1	
40年以上50年未満 (N=256)	7.0	8.6	7.4	6.3	3.1	2.0	
50年以上 (N=199)	7.0	6.5	4.0	3.5	6.0	3.5	

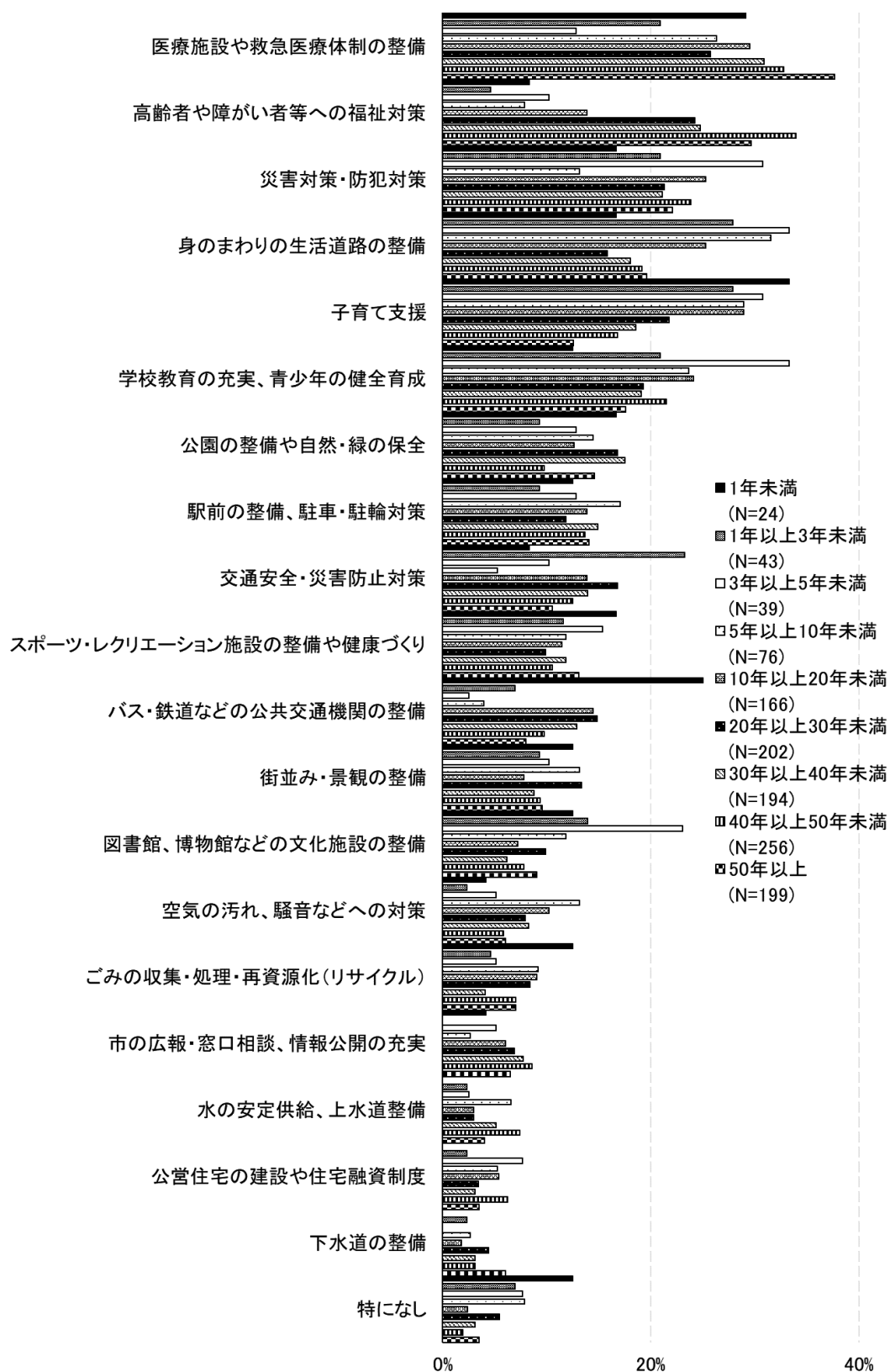


図 98 Q29② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

Q30 の『高槻市みらいのための経営革新』に向けた改革方針」の認知に関して、男女別・年代別のすべての層で「知らない」と回答した人が7割以上である。年代別で見ると、「名前も内容も知っている」または「名前だけ知っている」と回答した人の割合は70代以上が22.3%と最も高く、30代が6.5%と最も低い（図 99）。

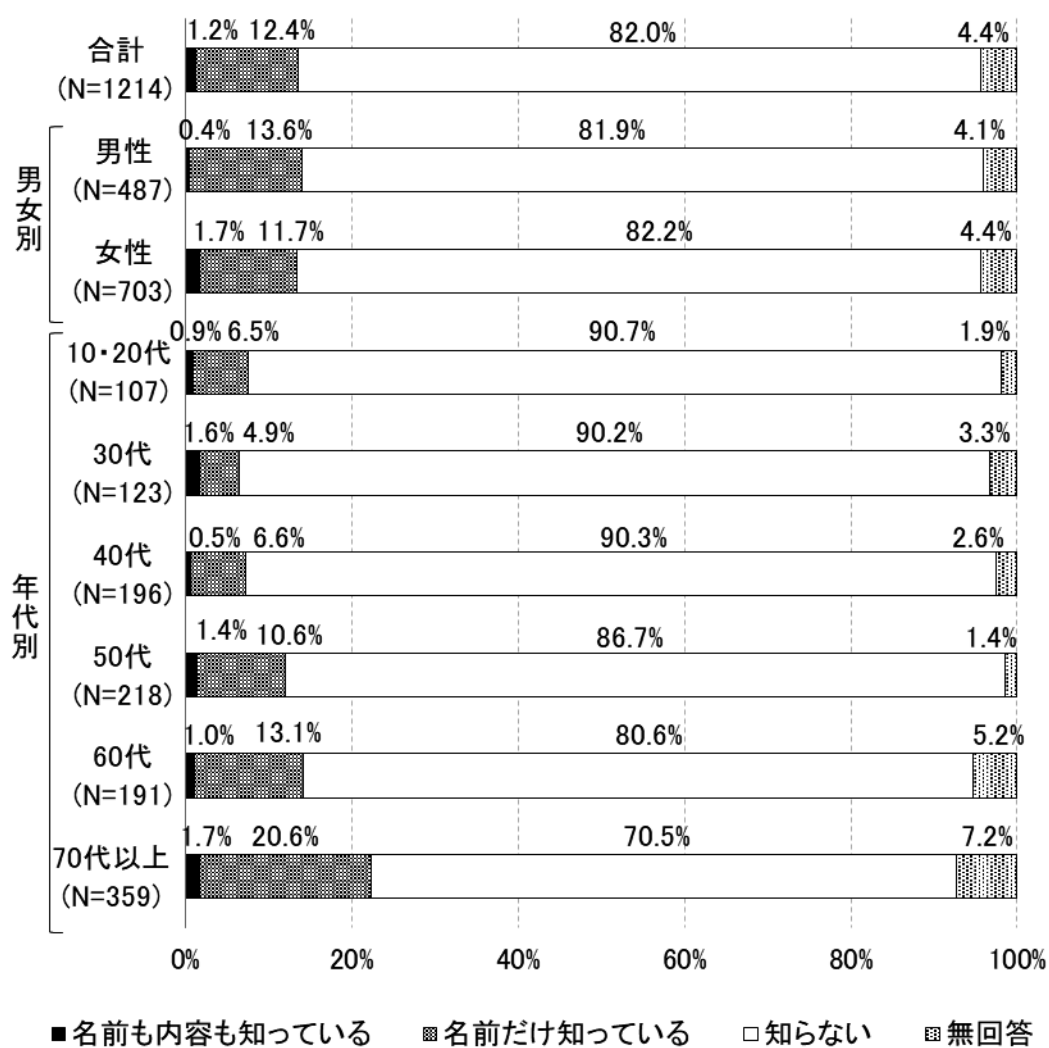


図 99 Q30 「『高槻市みらいのための経営革新』に向けた改革方針」の認知

Q31 の高槻市の 20 年後・30 年後を見据えて行財政改革に取り組むべきかに関して、男女別・年代別のすべての層で「感じる」または「やや感じる」と回答した人が 7 割以上である。年代別で見ると、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 30 代が 83.7%と最も高く、70 代以上が 74.1%と最も低い（図 100）。

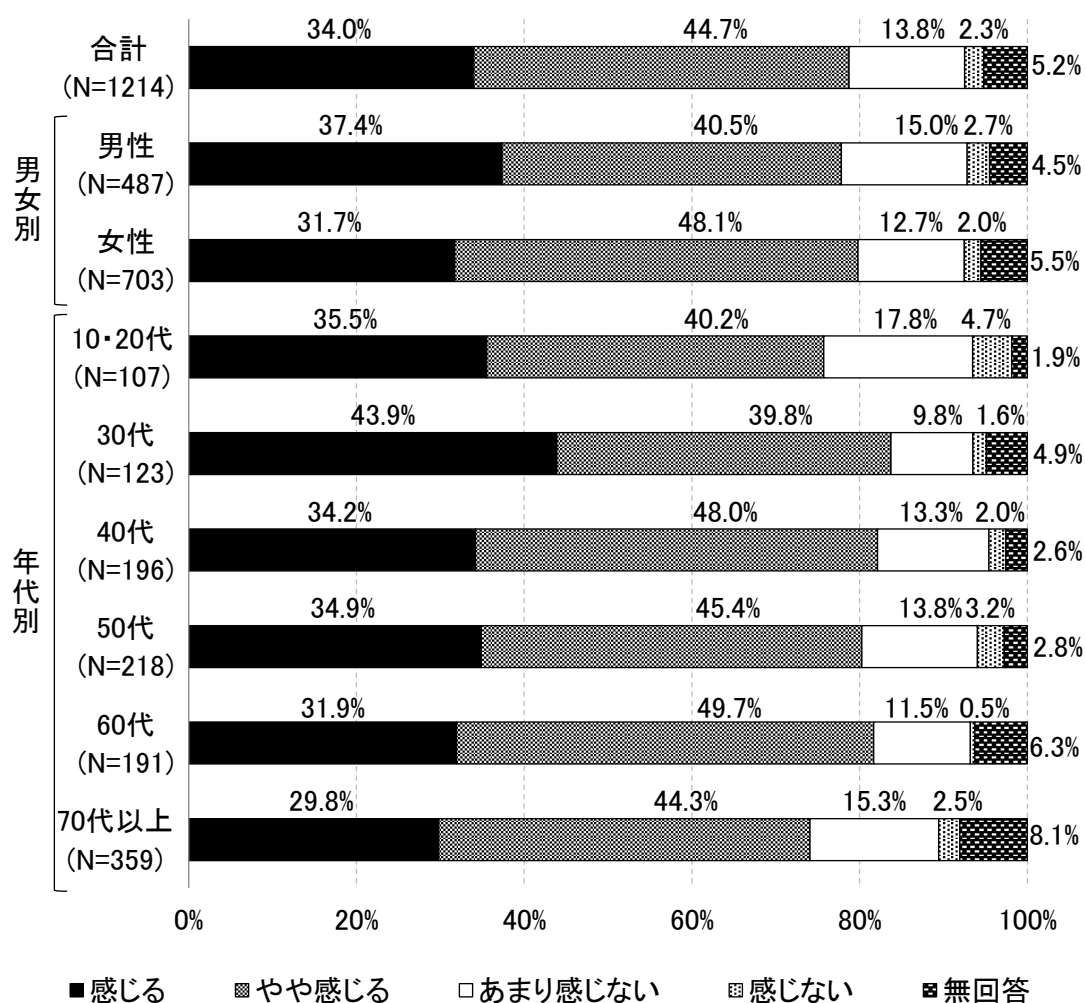


図 100 Q31 高槻市の 20 年後・30 年後を見据えて行財政改革に取り組むべきか

Q32 の1日あたりの SNS（Twitter、Instagram、Facebook など）接触時間に関して、「全く使用しない」と回答した人の割合は、合計で見ると 35.2%である。男女別で見ると、男性の方が女性より 3.9 ポイント高い。年代別で見ると、70 代以上が 59.9%と最も高く、反対に 10・20 代は 6.5%と最も低い（図 101）。

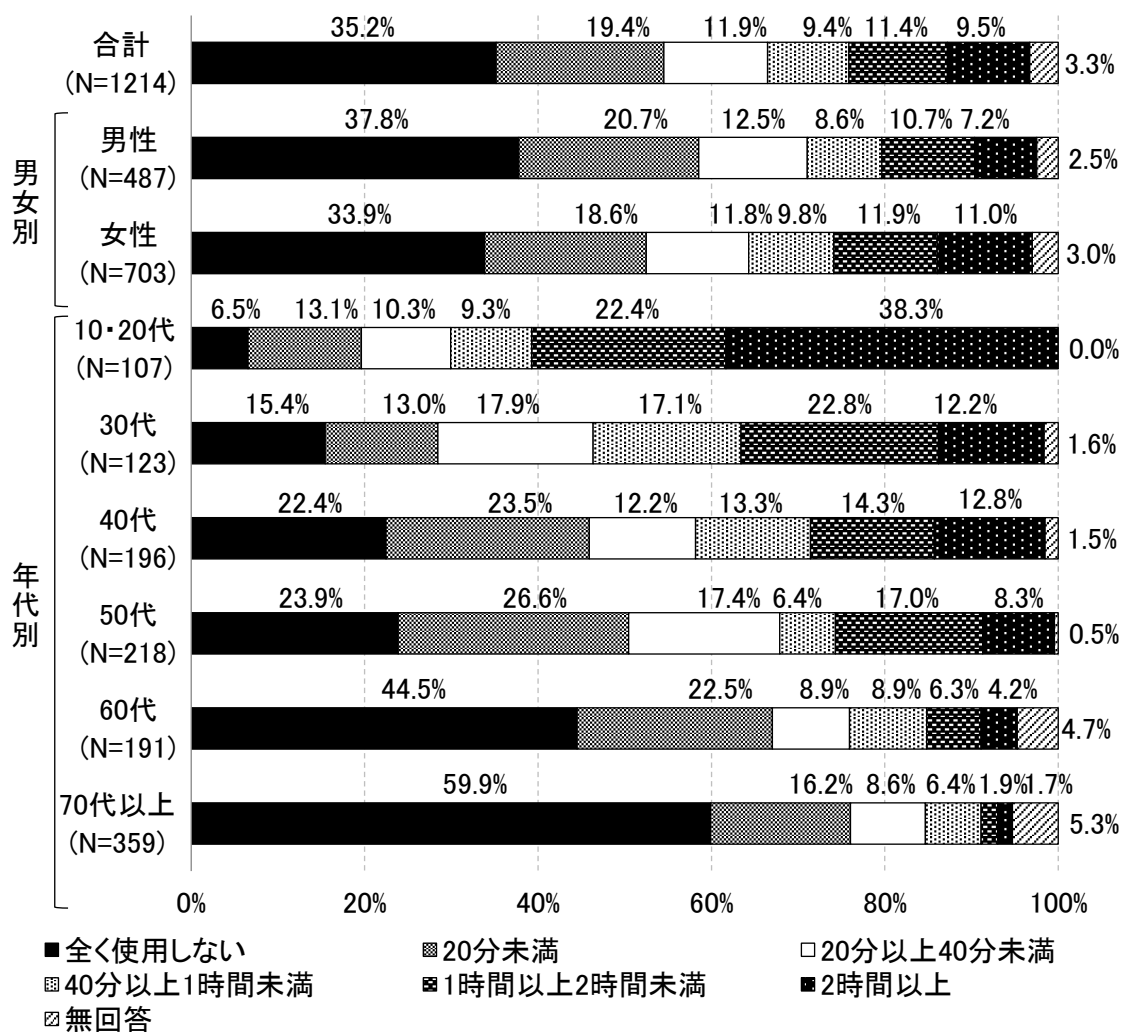


図 101 Q32 1日あたりの SNS（Twitter、Instagram、Facebook など）接触時間

Q33 の友人や知人と雑談をする場合に好む手段に関して、「対面での会話」が 66.1%で最も高く、「LINE 等のメッセージングアプリでのテキストのやりとり」が 59.6%と続く（図 102）。

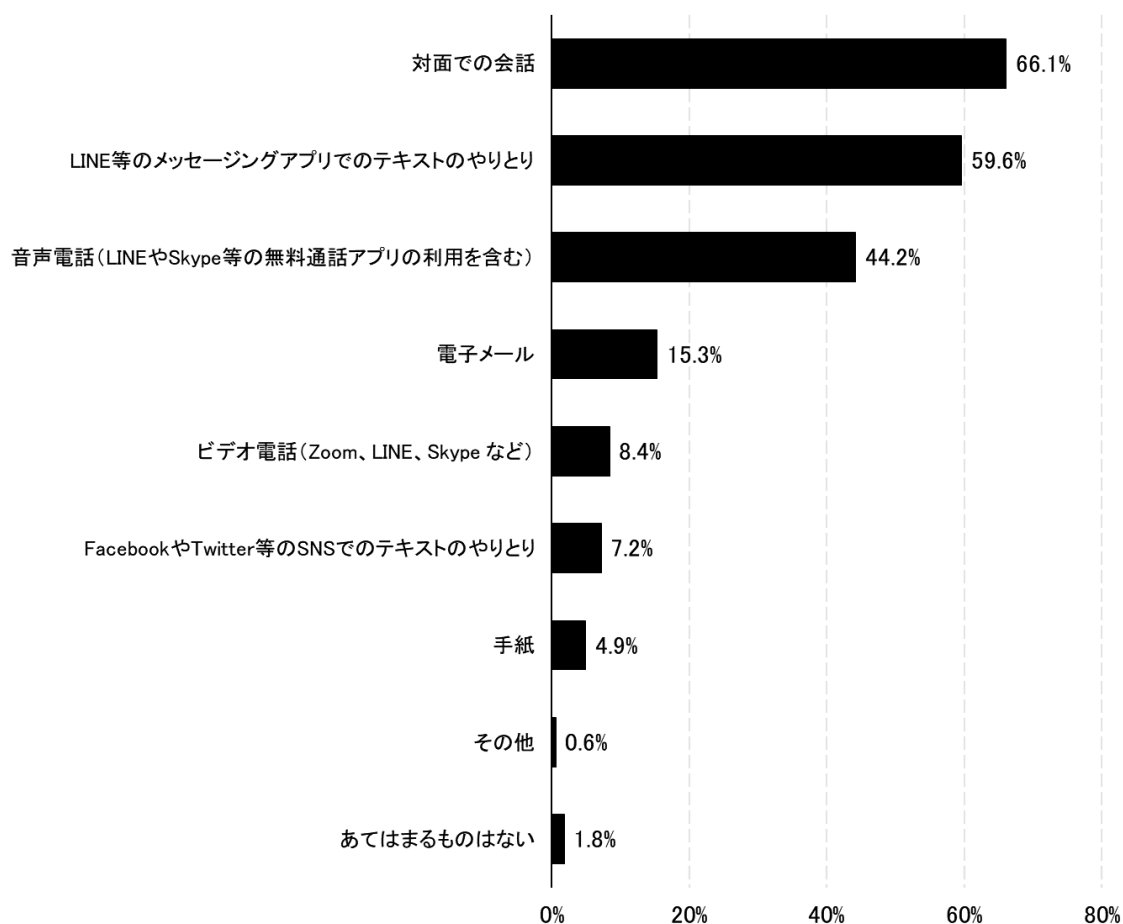


図 102 Q33 友人や知人と雑談をする場合に好む手段（複数回答・全体 N=1214）

Q33 の友人や知人と雑談をする場合に好む手段に関して、男女別で見ると、「LINE 等のメッセージングアプリでのテキストのやりとり」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 12.7 ポイント高い（図 103）。

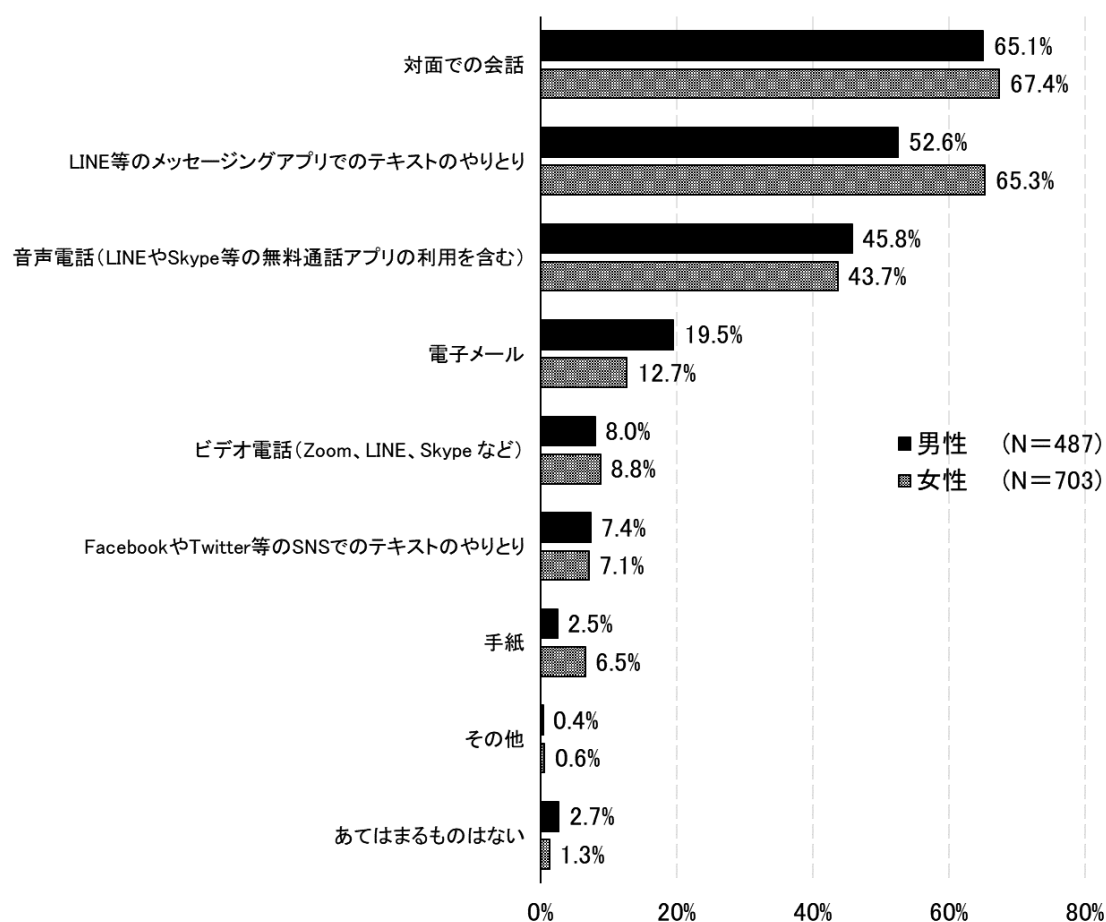


図 103 Q33 友人や知人と雑談をする場合に好む手段（複数回答・男女別）

Q33 の友人や知人と雑談をする場合に好む手段に関して、年代別で見ると、「LINE 等のメッセージングアプリでのテキストのやりとり」は年代で差があり、10・20 代が 89.7%と最も高く、反対に 70 代以上は 27.9%と最も低い（図 104）。

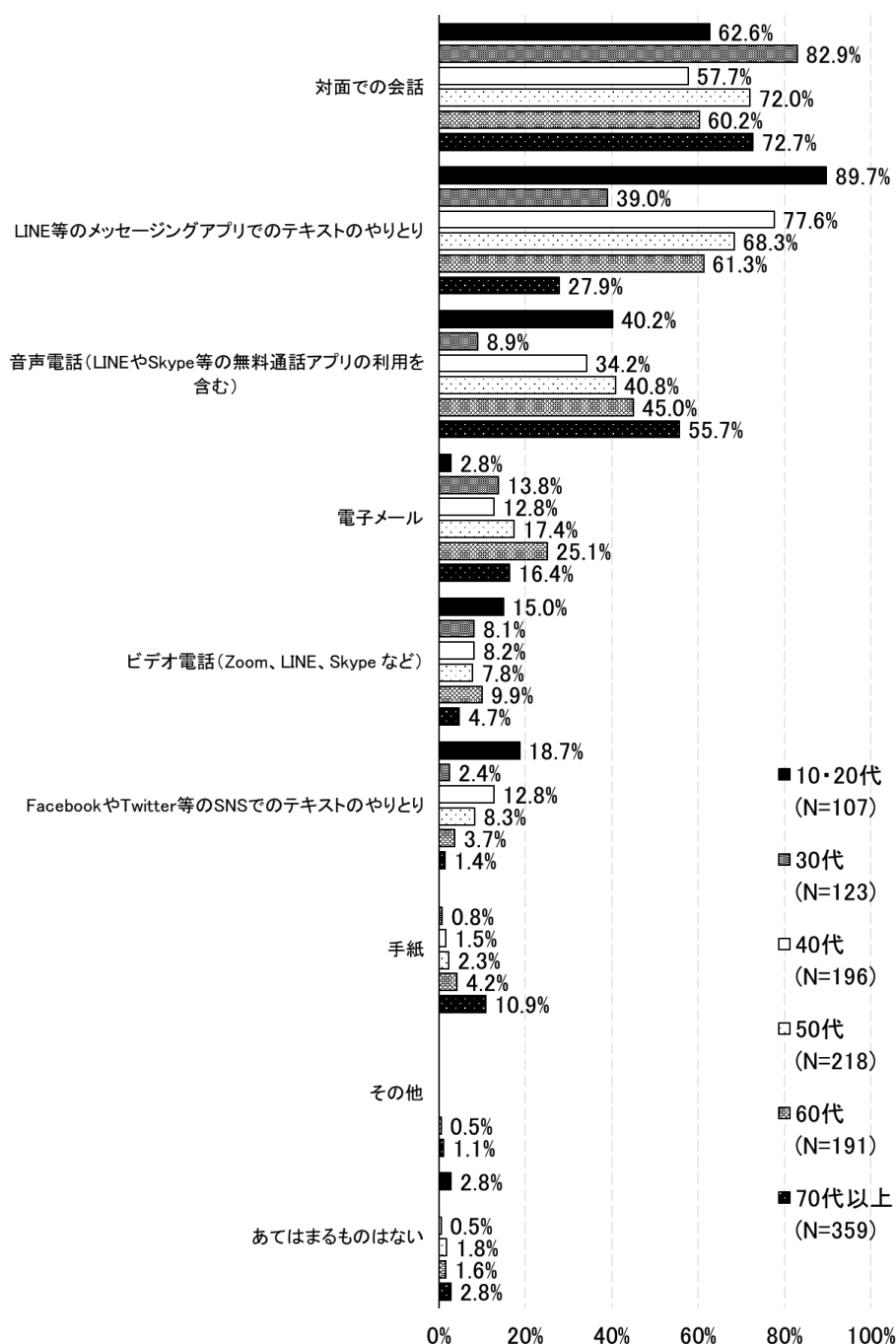


図 104 Q33 友人や知人と雑談をする場合に好む手段（複数回答・年代別）

Q34 の友人関係の満足度に関して、男女別・年代別のすべての層で 5 割以上が「満足」または「やや満足」と回答している。年代別で見ると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 74.8%と最も高く、60 代が 55.5%と最も低い（図 105）。

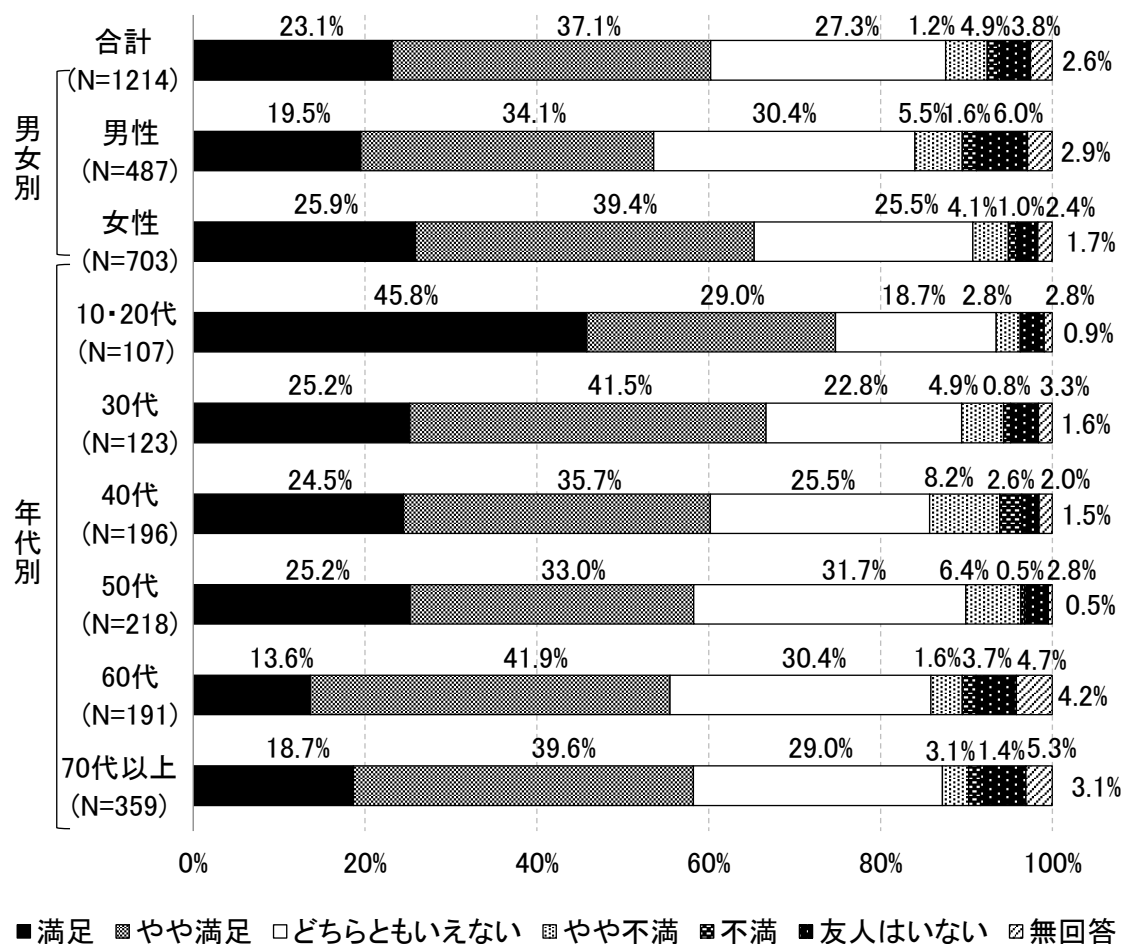


図 105 Q34 友人関係の満足度

Q35 の新型コロナウイルスの感染の不安に関して、男女別・年代別のすべての層で 6 割以上が「非常に感じる」または「ある程度感じる」と回答している。年代別で見ると、「非常に感じる」または「ある程度感じる」と回答した人の割合は 40 代が 78.5%と最も高く、10・20 代が 63.6%と最も低い（図 106）。

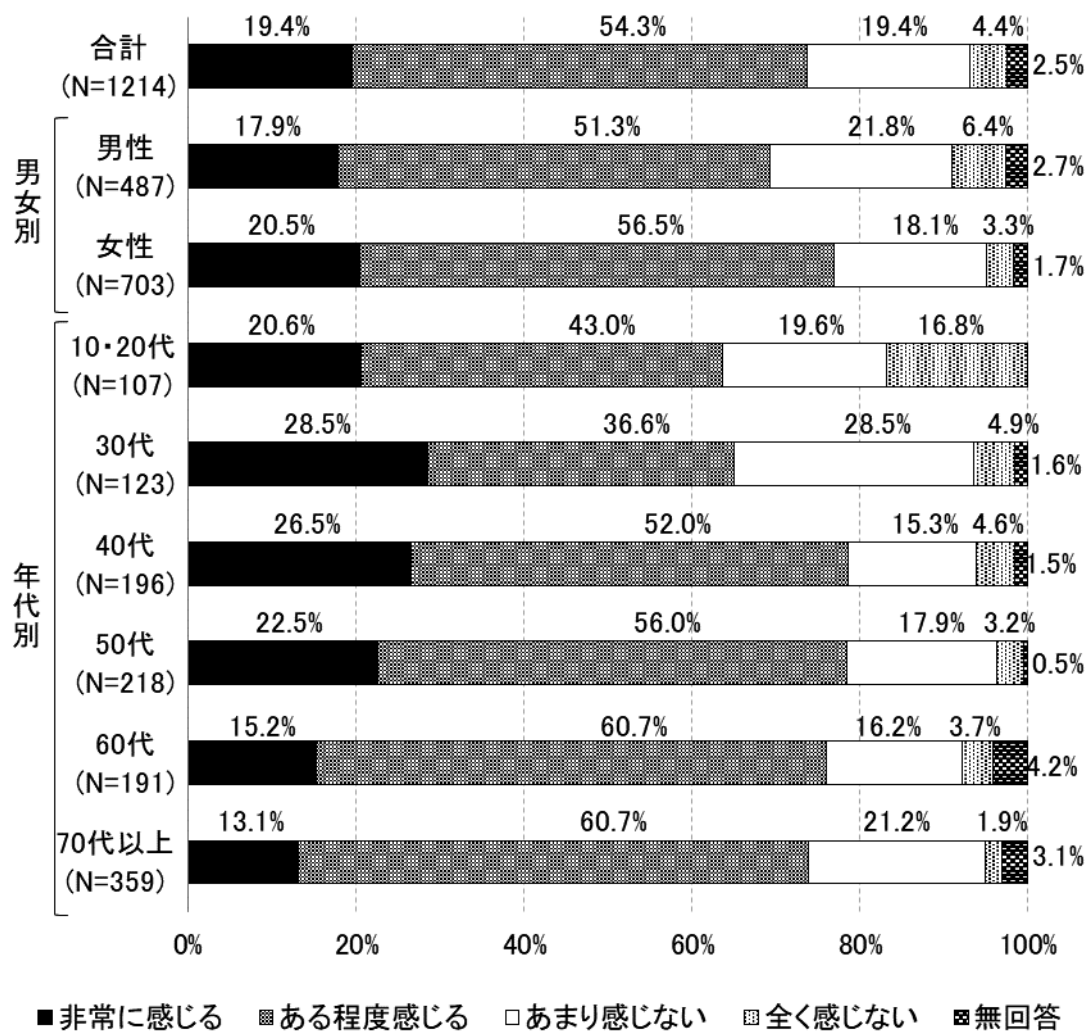


図 106 Q35 新型コロナウイルスの感染の不安

Q36 の屋外にいて人がまばらな時にマスクを着用するかに関して、男女別・年代別のすべての層で6割以上が「常に着用する」または「たいてい着用する」と回答している。年代別で見ると、「常に着用する」または「たいてい着用する」と回答した人の割合は50代が81.2%と最も高く、30代が60.9%と最も低い（図 107）。

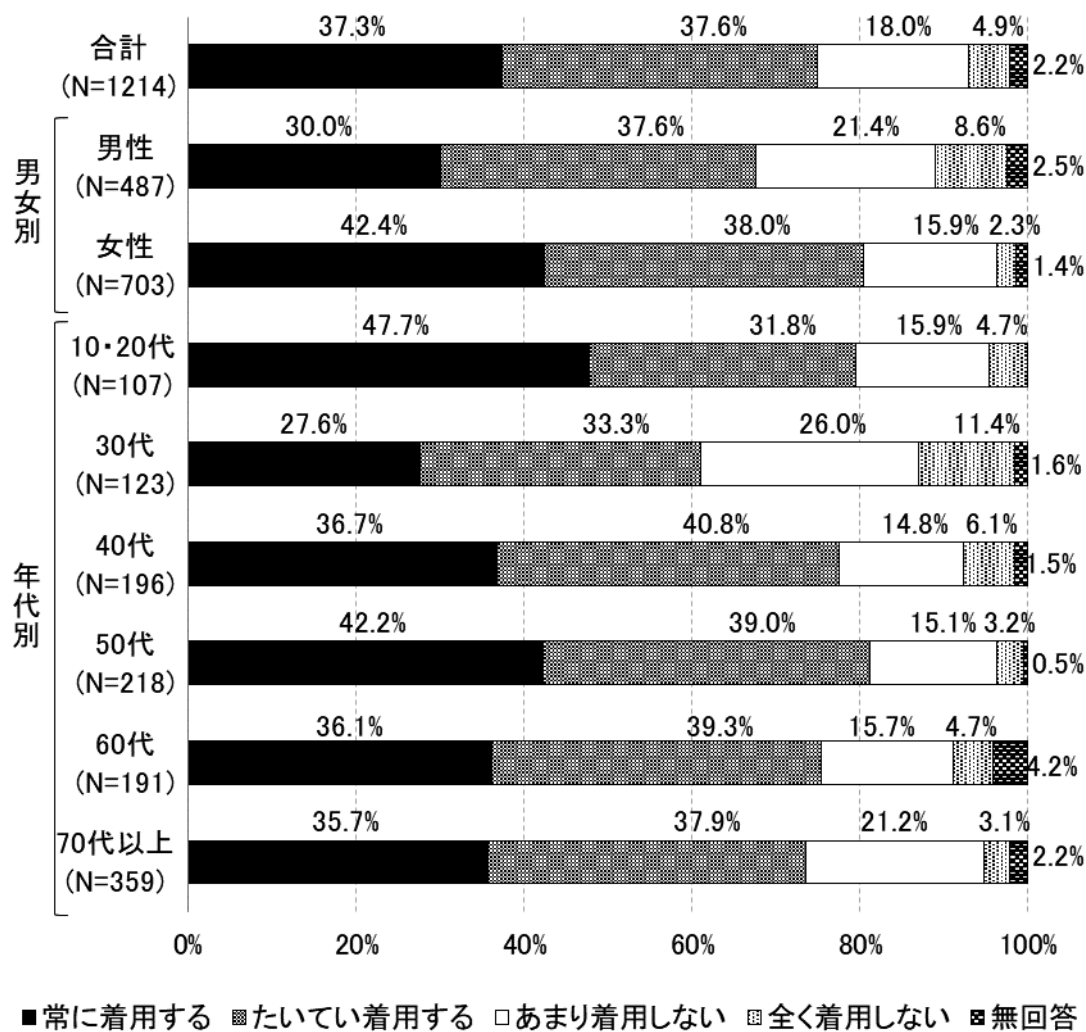


図 107 Q36 屋外にいて人がまばらな時にマスクを着用するか

Q37 の過去一か月間における主な就寝時間に関して、午後 9 時台から午前 0 時台と回答した人の割合は、合計で見ると 79.0%である。男女別で見ると、女性の方が男性より 4.6 ポイント高い。年代別で見ると、70 代以上が 87.7%と最も高く、反対に 10・20 代は 59.9%と最も低い（図 108）。

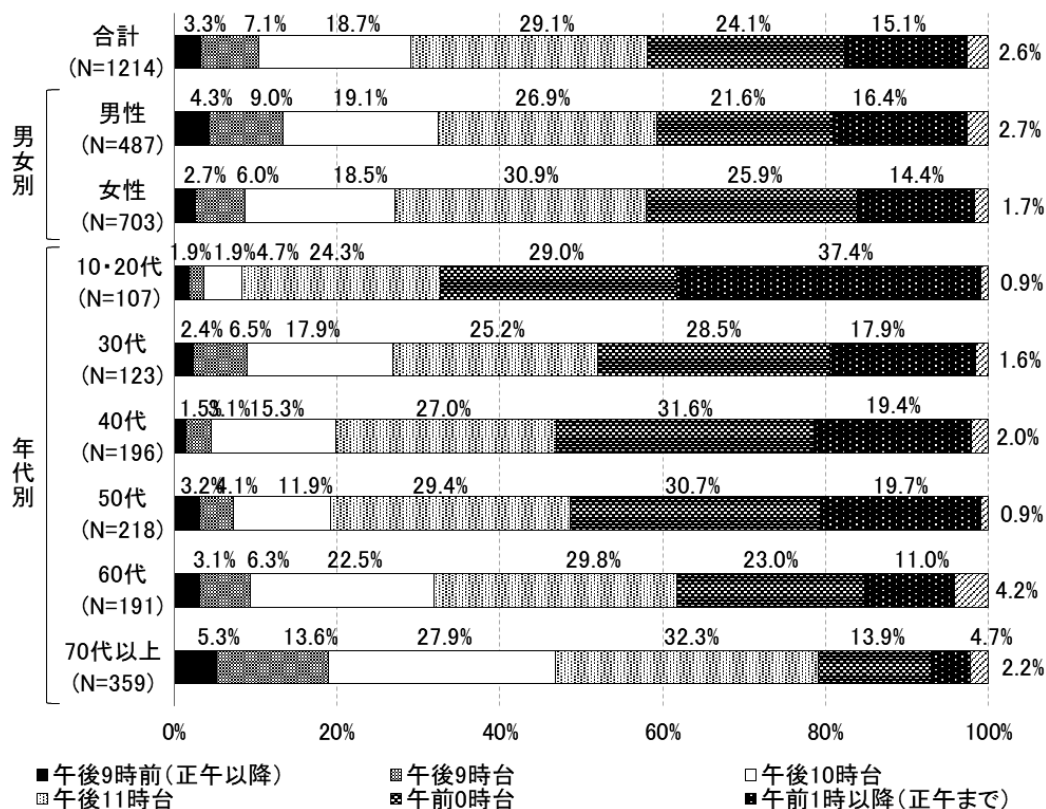


図 108 Q37 過去一か月間における主な就寝時間

Q38 の過去一か月間における眠りの深さに関して、男女別・年代別で見ると、60 代を除いて、すべての層で 1 割以上が「非常に深い」または「比較的深い」と回答している。年代別で見ると、「非常に深い」または「比較的深い」と回答した人の割合は 10・20 代が 28.1%と最も高く、60 代が 9.5%と最も低い（図 109）。

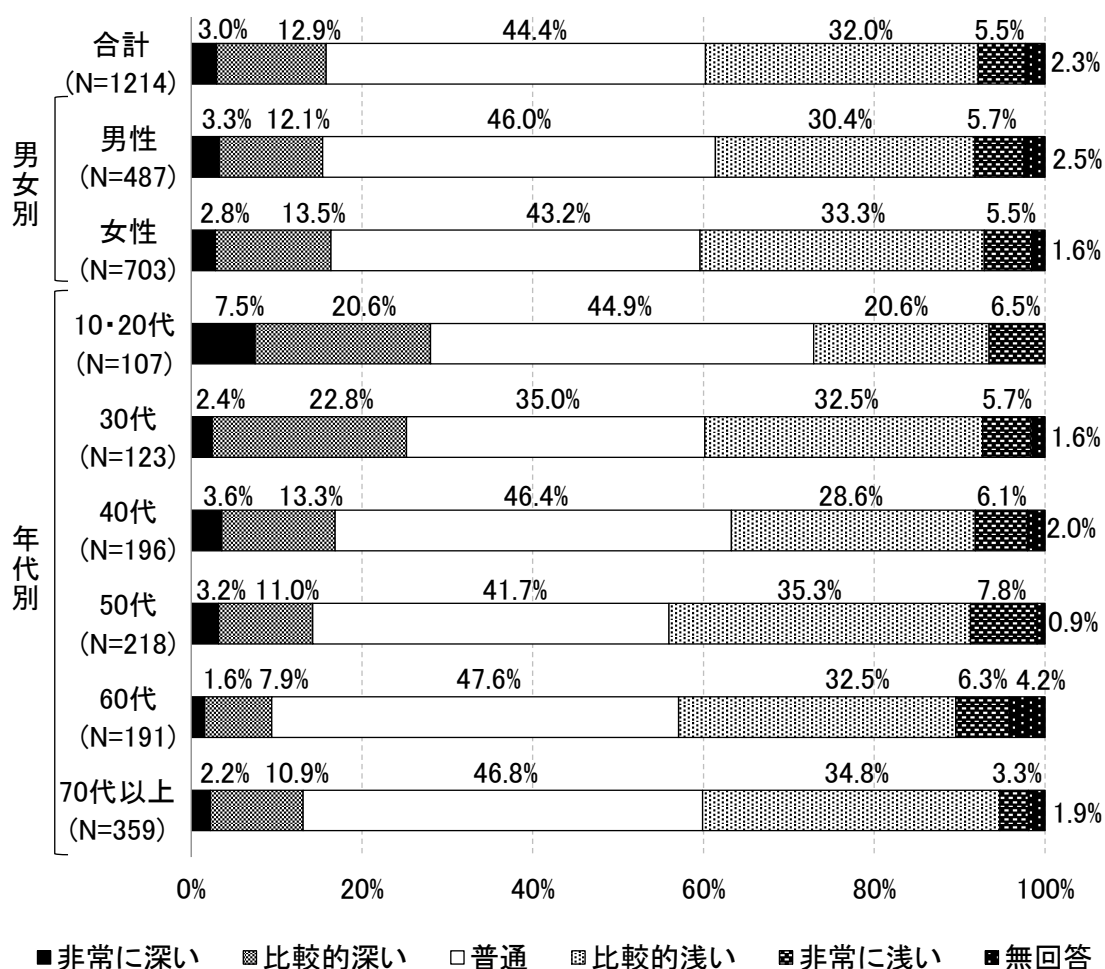


図 109 Q38 過去一か月間における眠りの深さ

Q39 の子どもの頃の習い事に関して、「学習系（学習塾、そろばん、書道、英会話など）」が 64.1%で最も高く、「芸術系（ピアノ、バレエ、絵画、華道・茶道など）」が 31.0%と続く（図 110）。

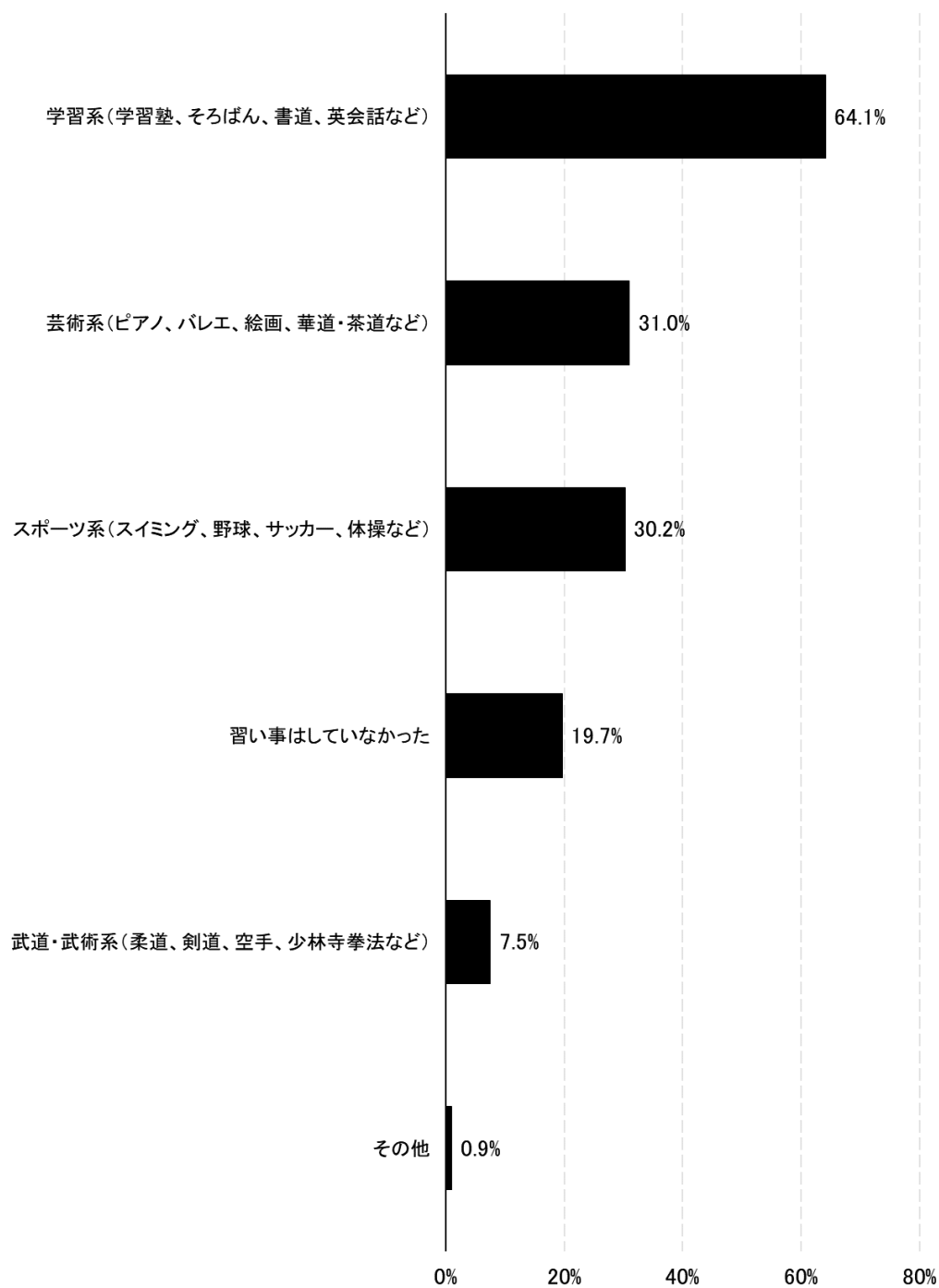


図 110 Q39 子どもの頃の習い事（複数回答・全体 N=1214）

Q39 の子どもの頃の習い事に関して、男女別で見ると、「芸術系（ピアノ、バレエ、絵画、華道・茶道など）」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 16.7 ポイント高い（図 111）。

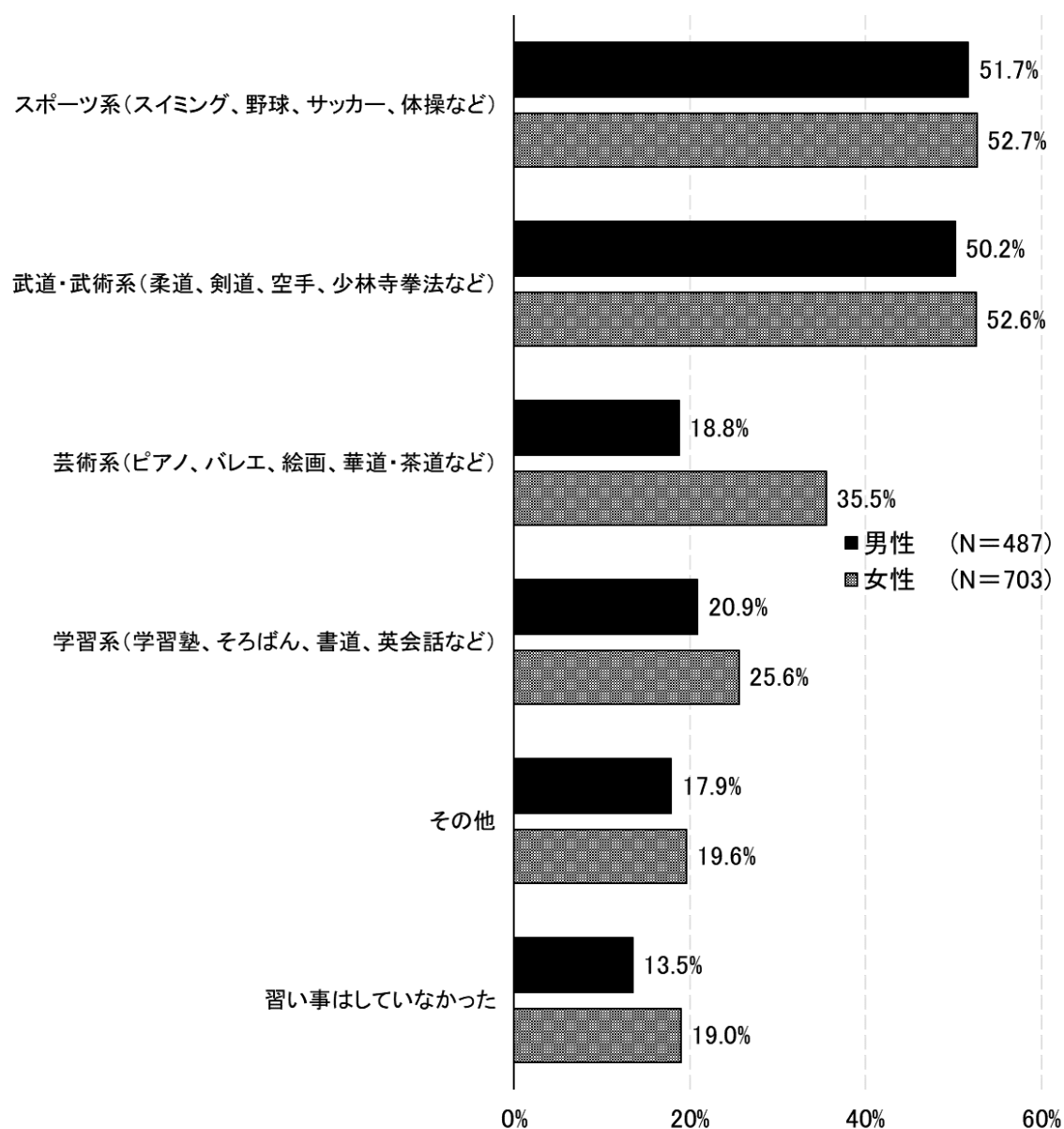


図 111 Q39 子どもの頃の習い事（複数回答・男女別）

Q39 の子どもの頃の習い事に関して、年代別で見ると、「学習系（学習塾、そろばん、書道、英会話など）」は年代で差があり、10・20代が70.1%と最も高く、反対に60代以上は11.0%と最も低い（図 112）。

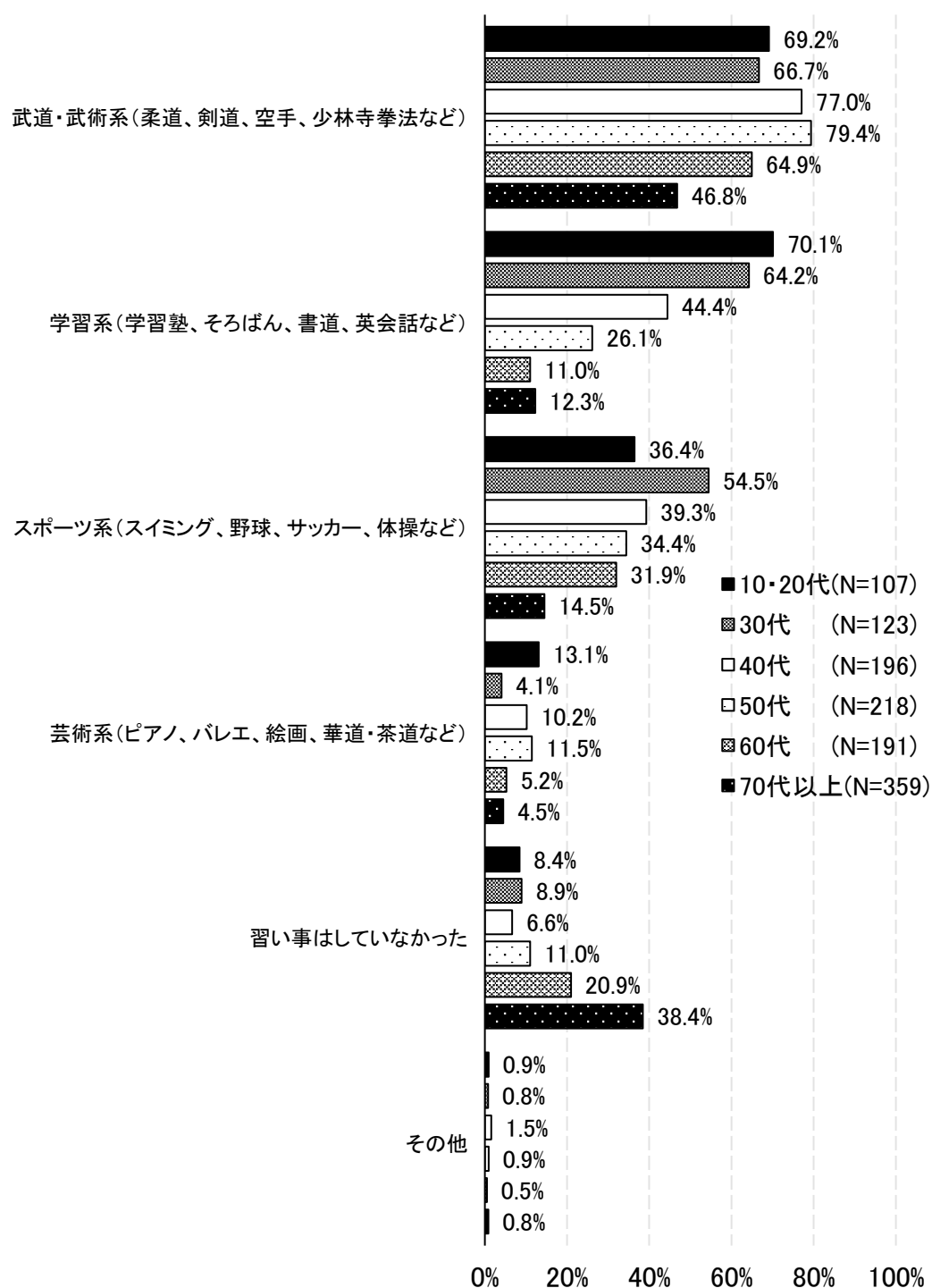


図 112 Q39 子どもの頃の習い事（複数回答・年代別）

最後に、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧を以下に示す。

No.	質問項目	高槻市	関西大学	R03	R02	R01	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	備考
Q1	生活満足度		○	Q1	Q1	Q1	Q33	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1		
Q2	家族満足度		○	Q2	Q2	Q4	Q2	Q2	*Q2	*Q2	*Q3	*Q2	*Q2		JGSS2002 留置票 Q41
Q3	居住地域は暮らしやすいか		○	Q3	Q3	Q5	Q2			*Q3	*Q4	*Q3	*Q3		
Q4	地域に住み続けたいか		○	Q4	Q4	Q9	Q5			Q16					
Q5	高槻市に地域ブランドがあると思うか	○			Q5	Q10									
Q6	中心市街地に行く頻度が3年前と比べて増加したか	○			Q6										
Q7A	中心市街地の向上：防災面での安全性や快適性	○			Q7A	Q11A	Q10A			Q17A					
Q7B	中心市街地の向上：防犯面での安全性や快適性	○			Q7B	Q11B	Q10B			Q17B					
Q7C	中心市街地の向上：居住環境	○			Q7C	Q11C	Q10C			Q17C					
Q7D	中心市街地の向上：公共交通機関の利便性	○			Q7D	Q11D	Q10D			Q17D					
Q7E	中心市街地の向上：多行者にとつての歩きやすさ	○			Q7E	Q11E	Q10E			Q17E					
Q7F	中心市街地の向上：風紀や治安	○			Q7F	Q11F	Q10F			Q17F					
Q8A	中心市街地で3年前と比べて増加したか 文化活動	○			Q8A	Q12A				Q18A					
Q8B	中心市街地で3年前と比べて増加したか コミュニティ活動	○			Q8B	Q12B				Q18B					
Q8C	中心市街地で3年前と比べて増加したか 商店街の魅力	○			Q8C	Q12C				Q18C					
Q8D	中心市街地で3年前と比べて増加したか 百貨店などの大型店の魅力	○			Q8D	Q12D				Q18D					
Q8E	中心市街地で3年前と比べて増加したか 買い物やイベントでのにぎわい	○			Q8E	Q12E				Q18E					
Q8F	中心市街地で3年前と比べて増加したか 魅力的な飲食店	○			Q8F	Q12F				Q18F					
Q8G	中心市街地で3年前と比べて増加したか オフィスなど業務施設	○			Q8G	Q12G				Q18G					
Q8H	中心市街地で3年前と比べて増加したか 病院などの医療施設	○			Q8H	Q12H				Q18H					
Q8I	中心市街地で3年前と比べて増加したか 道路の広さ	○			Q8I	Q12I				Q18I					
Q8J	中心市街地で3年前と比べて増加したか 駐輪場	○			Q8J	Q12J				Q18J					
Q8K	中心市街地で3年前と比べて増加したか 駐車の場	○													
Q8L	中心市街地で3年前と比べて増加したか 街なかの緑や通い	○			Q8K	Q12K				Q18K					
Q9	中心市街地を歩きやすい街にするための取り組み	○			Q9	Q13				Q19					
Q10A	交通手段満足度 徒歩：歩道の整備の状況	○				Q8A			Q8A						
Q10B	交通手段満足度 徒歩：バリアフリー化	○				Q8B			Q8B						
Q10C	交通手段満足度 自転車：通行するために必要なスペース	○				Q8C			Q8C						
Q10D	交通手段満足度 自転車：駐輪場	○				Q8D			Q8D						
Q10E	交通手段満足度 自転車：乗っている人目へのマナー	○				Q8E			Q8E						
Q10F	交通手段満足度 バイク：通行するために必要なスペース	○				Q8F			Q8F						
Q10G	交通手段満足度 バイク：駐輪場	○				Q8G			Q8G						
Q10H	交通手段満足度 バイク：乗っている人目へのマナー	○				Q8H			Q8H						

第3章 睡眠が及ぼす精神への影響

岩元 心紀

1. はじめに

本章では、睡眠が及ぼす精神への影響について分析を行う。睡眠は我々の生活の約 3 分の 1 を占める必要不可欠な生活習慣であるが、社会の多様化に伴い夜型化、24 時間化が進行し睡眠時間が不規則になっている。このことはNHK放送文化研究所が行なっている2020 年度国民生活調査の結果からも明らかである。男女や年代で差があるものの全体としては平日の平均睡眠時間は 7 時間 12 分で 2010 年からあまり変化はないものの 1970 年から見ると睡眠時間は長い間減少傾向にある。またこのような夜型化の傾向に伴い睡眠不足や睡眠障害が増加している。三島（2019）によると睡眠負債は短期的には眠気やパフォーマンス低下を、中期的には記憶・学習、代謝、免疫などの種々の精神・身体機能障害を、長期的には気分障害や生活習慣病のリスクを増大させること、睡眠時間は心血管系疾患、肥満や代謝、抑うつ状態、そして死亡率に至るさまざまな健康リスクとの関係があることが示されている。駒出ら（2007）は不眠によって集中力・記憶・日常の仕事をやり遂げる能力・他人との関わりを楽しむ能力が低下し、QOL（quality of life）水準は悪化する。さらに、不眠はうつ病の前駆症状だけでなく、うつ病発症リスクの有意な要因として重要視されると示されている。

本研究では睡眠の長さではないその他の睡眠の質や就寝時間といった睡眠形態の違いが抑うつや生活満足度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。さらにこの研究を通し睡眠の質の低い傾向がある人や生活満足度の低い傾向がある人はどのような特徴を持った人であるのかということも明らかにする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

菅ら（2006）では交代勤務者が常日勤者より睡眠障害を多く認め勤務体制では夜間勤務後に睡眠時間が短く、熟眠感が得られにくいという結果が明らかにされており、北村ら（2014）では希望睡眠時間は夜型指向性と朝型指向性で有意な差が見られなかったにもかかわらず、実際の睡眠時間は夜型指向性が強いほど短縮し、強い朝型に比較して強い夜型では平均約 1 時間短いことが明らかにされていた。また夜型指向性が強いほど抑うつ状態出現の割合が高いことも明らかにされている。さらに、三島（2019）であつても睡眠状態や日中の眠気とは独立して、強い夜型であることが抑うつ状態の存在と有意な正の関連を示し、強い朝型であることが抑うつ状態の存在と有意な負の関連を示すことが明らかにされてい

る。このことから、夜間勤務者などの夜型指向性がある人は睡眠時間が短くなる傾向があり、この傾向が長期の睡眠不足になり抑うつ出現に大きく関わっていると考えられる。

一方で、駒出ら（2007）では睡眠の充足感が低いほど抑うつ得点が高くなること、田中ら（2010）では睡眠の時間間隔や消灯時刻、起床時刻などではなく、睡眠の質を高めることが主観的ウェルビーイングの向上にとって有効であることを示唆されている。このことから就寝時間などには関係がなく、睡眠の質が抑うつ度や満足度に関係していると考えられる。

2.2. 仮説

先行研究により、交代勤務か常日勤務かといった勤務体制や朝型か夜型かという違いが睡眠時間に影響を与え、夜型指向性が強い人ほど抑うつ度が高くなることが明らかにされていた。先行研究では大学生や交代勤務の社会人など特定の人を対象に調査を行っていたが、異なる年代であるとしても同じ結果になるのではないかと考え、就寝時間が遅い人ほど抑うつ度が高いという仮説を立てた。

また、睡眠の充足感が低いほど抑うつ度が高くなる、消灯時間などに関係がなく睡眠の質を高めることが主観的ウェルビーイングの向上にとって有効であることも明らかにされていることから、睡眠の質が低い人ほど抑うつ度が高く、生活満足度が低いという仮説を立てた。

また、主観的ウェルビーイング (Subject well-being) は Diener, Suh, Lucas, & Smith (1999) によると、感情状態を含み、家族・仕事などの特定の領域に対する満足や人生全般に対する満足を含む広範な概念であることが明らかにされているため主観的ウェルビーイングを生活全体の満足度と定義する。そして、睡眠の質は厚生労働省の睡眠の質を評価する指標で、ノンレム・レム睡眠のサイクルがある程度規則的で中途覚醒が少ないことと示されているため睡眠の質を眠りの深さと定義する。

本研究では上記の定義をもとに研究を行う。

仮説 1 就寝時間が遅い人ほど抑うつ度が高い。

仮説 2 睡眠の質が低い人ほど抑うつ度が高い。

仮説 3 睡眠の質が低い人ほど生活満足度が低い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和四年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,214、回収率は 60.7%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q1：あなたは、現在の生活全体にどのくらい満足していますか。（生活満足度（反転））

- 1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q 20：あなたは、最近、気が沈んだり、気が重くなることがありますか。（抑うつ度）

- 1.全くない 2.少しだけある 3.ときどきある 4.たいていある 5.いつもある

Q 37：あなたの過去1ヶ月間における就寝時間は、主に何時ごろでしたか。（就寝時間）

- 1.午後9時前（正午以降） 2.午後9時台 3.午後10時台 4.午後11時台 5.午前0時台
6.午前1時以降（正午まで）

Q 38：あなたの過去1ヶ月間における眠りの深さは、次のどれにあたりますか。（睡眠の質）

- 1.非常に深い 2.比較的深い 3.普通 4.比較的浅い 5.非常に浅い

Q 40：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

- 1.男性 2.女性

上記の選択に対して、男性を0、女性を1とする女性ダミーを作成した。

Q 41：あなたの年齢をお答えください。（年齢（実数））

- 1.18歳、19歳 2.20代 3.30代 4.40代 5.50代 6.60代 7.70代以上

上記の選択肢に対して、18歳、19歳を18.5、20代を24.5、30代を34.5、40代を44.5、50代を54.5、60代を64.5、70代を74.5として、実数化を行った。

Q 43：あなたの最終学歴を教えてください。（在学中の方は、いま通っている学校を選んでください）（教育年数）

- 1.中学（旧小学校など） 2.高校（または旧制中学など） 3.専門学校 4.短大・高専（5年制） 5.大学（旧高専）・大学院 6.わからない

上記の選択肢に対して、中学（旧小学校など）を9、高校（または旧制中学など）を12、専門学校を13、短大・高専（5年制）を14、大学（旧高専）・大学院を16として教育年数の実数化を行った上で、わからないは欠損値として処理した。

Q51：過去一年間のあなたの世帯の収入はどれくらいですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください。（世帯収入実額（万円））

1.100万円未満 2.100万円～200万円未満 3.200万円～400万円未満 4.400万円～600万円未満 5.600万円～800万円未満 6.800万円～1000万円未満 7.1000万円～1500万円未満 8.1500万円以上 9.わからない

上記の選択肢に対して、100万円未満を50、100万円～200万円未満を150、200万円～400万円未満を300、400万円～600万円未満を500、600万円～800万円未満を700、800万円～1000万円未満を900、1000万円～1500万円未満を1250、1500万円以上を1750として、実数化した上で、わからないは欠損値として処理した。

4. 分析

はじめに、就寝時間と抑うつ度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表1は、就寝時間と抑うつ度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、就寝時間の設問に「午後9時前」と回答した人で、自身の抑うつ傾向が「いつもある」と回答した人が0%である一方で、「午前1時以降」に就寝している人で「いつもある」と回答した人は15%である。また、就寝時間が「午後9時前」と回答した人で、自身の抑うつ傾向が「全くない」「少しだけある」と回答した人は合わせて60%であるが、就寝時間が「午前1時以降」と回答した人で、自身の抑うつ傾向が「全くない」「少しだけある」と回答した人は合わせて40%である。ここから、就寝時間が遅い人ほど抑うつ度の傾向も高くなることがわかる。

表1のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は47.492であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramerの連関係数は0.101と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、就寝時間と抑うつ度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説1を支持する結果である。

表 1 Q37 就寝時間と Q20 抑うつ度のクロス集計表

		Q20 気が沈んだり、気が重くなることがあるか					合計
		全く ない	少しだけ ある	ときどき ある	たいてい ある	いつも ある	
Q37 過去1か月間 の就寝時間	午後 9 時前 (正午以降)	N 5 % 13%	18 47%	12 32%	3 8%	0 0%	38 100%
	午後 9 時台	N 11 % 13%	32 38%	32 38%	3 4%	7 8%	85 100%
	午後10時台	N 30 % 14%	87 39%	84 38%	11 5%	10 5%	222 100%
	午後11時台	N 37 % 11%	142 41%	140 40%	14 4%	16 5%	349 100%
	午前0時台	N 34 % 12%	98 33%	112 38%	27 9%	22 8%	293 100%
	午前1時以降 (正午まで)	N 14 % 8%	59 32%	62 34%	20 11%	27 15%	182 100%
	合計	N 131 % 11%	436 37%	442 38%	78 7%	82 7%	1169 100%

$\chi^2(df=20, N=1169)=47.492^{***}$, Cramer V=.101^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

次に、睡眠の質と抑うつ度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、睡眠の質と抑うつ度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、眠りの深さの設問に「非常に深い」と回答した人で、自身の抑うつ度を「いつもある」と回答した人が 11%である一方で、「非常に浅い」と回答した人で「いつもある」と回答した人は 28%である。また、眠りの深さが「非常に深い」と回答した人で、抑うつ度を「全くない」「少しだけある」と回答した人は合わせて 77%であるが、眠りの深さが「非常に浅い」と回答した人で、抑うつ度を「全くない」「少しだけある」と回答した人は合わせて 30%である。ここから、睡眠の質が低い人は抑うつ度が高いことがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 127.967 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.165 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、睡眠の質と抑うつ度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 2 を支持する結果である。

表 2 Q38 睡眠の質と Q20 抑うつ度のクロス集計表

		Q20 気が沈んだり、気が重くなることがあるか					合計
		全く ない	少しだけ ある	ときどき ある	たいてい ある	いつも ある	
Q38過去1か月間 の眠りの深さ	非常に深い	N 12	16	4	0	4	36
		% 33%	44%	11%	0%	11%	100%
	比較的深い	N 23	68	46	12	7	156
		% 15%	44%	30%	8%	5%	100%
	普通	N 71	210	208	22	21	532
		% 13%	40%	39%	4%	4%	100%
	比較的浅い	N 22	124	172	33	33	384
		% 6%	32%	45%	9%	9%	100%
	非常に浅い	N 3	16	17	11	18	65
		% 5%	25%	26%	17%	28%	100%
	合計	N 131	434	447	78	83	1173
		% 11%	37%	38%	7%	7%	100%

$\chi^2(df=16, N=1173)=127.967^{***}$, Cramer V=.165^{***}

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

次に、睡眠の質と生活満足度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は、睡眠の質と生活満足度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、眠りの深さの設問に「非常に深い」と回答した人で、生活満足度が「満足」と回答した人が 36%である一方で、睡眠の深さが「非常に浅い」と回答した人で「満足」と回答した人は 18%である。また、睡眠の深さが「非常に深い」と回答した人で、生活満足度を「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて 20%であるが、睡眠の深さが「非常に浅い」と回答した人で生活満足度を「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて 27%である。ここから、睡眠の質が低い人は生活満足度も低くなることがわかる。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 60.300 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.113 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、睡眠の質と生活満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 3 を支持する結果である。

表 3 Q38 睡眠の質と Q1 生活満足度（反転）のクロス集計表

		Q1 生活満足度（反転）						
		どちらとも						
		不満	やや不満	言えない	やや満足	満足	合計	
Q38 過去1か月間 の眠りの深さ	非常に	N	2	5	1	15	13	36
	深い	%	6%	14%	3%	42%	36%	100%
	比較的	N	5	11	20	81	38	155
	深い	%	3%	7%	13%	52%	25%	100%
	普通	N	11	53	114	241	119	538
	普通	%	2%	10%	21%	45%	22%	100%
	比較的	N	12	60	88	169	59	388
	浅い	%	3%	16%	23%	44%	15%	100%
	非常に	N	8	10	19	18	12	67
	浅い	%	12%	15%	28%	27%	18%	100%
合計	N	38	139	242	524	241	1184	
	%	3%	12%	20%	44%	20%	100%	

$\chi^2(df=16, N=1184)=60.300^{***}$, Cramer V=.113***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 4 は、抑うつ度を従属変数、睡眠の質、女性ダミー、年齢、教育年数、世帯収入実額を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2 値は 0.114 であり、投入した独立変数によって従属変数である抑うつ度の分散の 11.4% が説明されている。

結果をみると、睡眠の質と女性ダミーが正で有意、年齢と教育年数、世帯収入実額が負で有意であった。これは、男性に比べて女性の方が抑うつ度が高いことがわかる。また、収入が少なく教育年数が少ない若者であるほど抑うつ度が高いことがわかる。標準化係数 (β) をみると、睡眠の質が 0.262 と大きく、睡眠の質が抑うつ度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 2 を支持する結果である。

表 4 Q20 抑うつ度の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	2.872	0.313		***
Q38 過去1ヶ月間の眠りの深さ	0.305	0.036	0.262	***
Q40 女性ダミー	0.119	0.063	0.059	†
Q41 年齢（実数）	-0.011	0.002	-0.183	***
Q43 教育年数（年）	-0.034	0.017	-0.070	*
Q51 世帯収入実額（万円）	-0.043	0.009	-0.161	***
調整済み R^2	0.114			
N	945			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 5 は、生活満足度（反転）を従属変数、睡眠の質、女性ダミー、年齢、教育年数、世帯収入実額を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2 値は 0.088 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 8.8% が説明されている。

結果をみると、年齢、教育年数、世帯収入実額が正で有意、睡眠の質が負で有意であった。これは、高年齢で教育年数が多く収入が多い人であるほど生活満足度が高いことがわかる。一方、女性ダミーは有意な効果がみられなかった。標準化係数（ β ）をみると、世帯収入実額が 0.179 と大きく、世帯収入実額が生活満足度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 3 を支持する結果である。

表 5 Q1 生活満足度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.460	0.323	***
Q38 過去1ヶ月間の眠りの深さ	-0.195	0.037	-0.164 ***
Q40 女性ダミー	0.065	0.065	0.031
Q41 年齢（実数）	0.010	0.002	0.153 ***
Q43 教育年数（年）	0.076	0.018	0.154 ***
Q51 世帯収入実額（万円）	0.049	0.009	0.179 ***
調整済み R^2	0.088		
N	953		

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

5. 考察

本研究は睡眠の質や就寝時間といった睡眠形態の違いが抑うつや生活満足度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「就寝時間が遅い人ほど抑うつ度が高い。」仮説 2「睡眠の質が低い人ほど抑うつ度が高い。」仮説 3「睡眠の質が低い人ほど生活満足度が低い。」という 3 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、就寝時間が遅い人ほど気が沈んだり、気が重くなることがいつもあると回答する割合が多いことから仮説 1 が支持された。また、睡眠が浅いと感じている人ほど気が沈んだり、気が重くなることがいつもある、生活満足度に不満を持っていると回答する割合が多いことから仮説 2、3 が支持された。重回帰分析の結果をまとめると、男性に比べて女性の方が抑うつ度が高く、また収入が低く教育年数が少ない若者であるほど抑うつ度が高いことがわかった。また、睡眠の質が抑うつ度に与える影響が強いといえることがわかった。生活満足度に関しては、高年齢で教育年数が多く収入が多い人であるほど生活満足度

が高いことがわかった。

しかし全体の割合を見ると、午後 11 時台以降に就寝すると回答している人の割合や眠りの深さが比較的浅い、非常に浅いと回答している人の割合が一定数いるという結果も出ている。今後はこのような人たちの生活習慣を改善させるような取り組みや、睡眠の質自体を向上させる取り組みが必要になると考える。例として、成澤（2021）が提示するように規則的で健康的な生活習慣の獲得と維持のために子供の頃からの適切な行動的・教育的介入をすることが必要だと考える。また、厚生労働省のより健康的な睡眠を確保するための生活術では、夜間の睡眠と日中の覚醒とは相互に影響を及ぼし合っており、睡眠を振り返っての満足度（熟眠感、寝心地、目覚め感など）だけでなく、日中の生活における満足度、昼夜を通して心身の諸機能が示す概日リズムの状態などもあわせて多面的に評価する必要があるとされているため、睡眠の質に関しては日中の生活も視野に入れて研究していく必要がある。

6. 文献

- [1]…Diener,E.,Suh,E.M.,Lucas,R.E.,&Smith,H.L.（1999） Subjective Well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*,125,276-302.
- [2]…北村尚人・中谷淳子・中田光紀（2014）「睡眠問題と主観的健康感の関連－勤労者を対象とした大規模疫学調査」『産業医科大学雑誌』 36(4): pp.295-300.
- [3]…駒出陽子・井上雄一（2007）「睡眠障害の社会生活に及ぼす影響(シンポジウム：心身機能と睡眠障害,2006 年,第 47 回日本心身医学会総会(東京))」『心身医学』47(9):pp.785-791.
- [4]…厚生労働省『第 3 章 より健康的な睡眠を確保するための生活術』.（2023 年 1 月 18 日閲覧）
- [5]…三島和夫（2019）「睡眠・覚醒リズム特性と求められている社会時刻との不調和による心身の異常とその病態生理」『秋田医学』 46(1):pp.11-19.
- [6]…成澤元（2021）「学校睡眠介入の必要性とより効果的な実践」『愛知淑徳大学論集.心理学部篇』 (11):pp.15-24.
- [7]…NHK放送文化研究所世論調査部（2021）『国民生活調査 2020 生活の変化×メディア利用』.（2023 年 1 月 18 日閲覧）
- [8]…菅重博・渡部博之・酒巻眞澄佳・端詰勝敬・坪井康次（2006）「交代勤務が与える睡眠,心理面への影響に関する検討」『心身医学』 46(4):pp.293-300.
- [9]…田中芳幸・外川あゆみ・杉田英津子（2010）「睡眠習慣と食習慣による主観的ウェルビーイング向上の可能性の検討」『東京福祉大学・大学院紀要』 1(1):pp.19-27.

第4章 パンデミック下における不安と マスク装着への意識

井谷 勇輝

1. はじめに

2020年の新型コロナウイルス（COVID-19）（以下、コロナと略す）の感染拡大から、政府は緊急事態宣言やまん延防止等重点措置など、様々な感染症への対応を行っている。そして最後にまん延防止等重点措置が終了されたのが2022年3月17日となる。しかし現時点（2022年7月13日）での厚生労働省での発表による1日当たりの国内新規陽性者数は、94,466人と2022年3月17日の48,492人から約2倍にまで増加しているという事が分かった。

このような状況の理由としては、まん延防止等重点措置の終了や人々のコロナに対する不安感の低下により、十分な感染対策をとっていないことが挙げられる。

そこで本研究では、感染対策への意識が低下していると考えられる人々を可視化するために、感染症に対してどのような人々が不安を覚えているのか、また実際に現在、不安感が感染症対策意識に影響を与えているのかを明らかにする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

岩井ら（2021）の調査によると、勤務形態の点でコロナ感染に対する不安の傾向を見た場合には、自営・家族従業の割合が低く、無職の割合が高いという結果になった。他にも、年収が低いほど感染への不安を感じる、経済への不安を感じるほど感染への不安も感じるなどの結果を確認することができた。

また年齢について、岩井ら（2021）によると、75歳以上の人々がより多くの割合で不安を抱えており、逆に50歳未満の人々では不安を抱える人々の割合が少なかった。しかし、内容の近い調査である高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査（2021）によると、コロナへの感染不安に関して10代～50代の層で「非常に感じる」という回答が2割以上を占めたが、60代以上の回答は2割を下回っていた。また、この調査のための調査票の送付は2021年8月26日に行われている。

さらに榊原ら（2021）によると、Nakayachi et al.（2020）との比較により、2020年4月から9月にかけて、「自己の感染予防」という理由が、マスク装着をより促すようになった可能性を示唆しているということが分かった。

2.2. 仮説

岩井ら（2021）の調査内容から、給料が高いほど不安を感じていない傾向にあるという結果が出ており、それ故に自営業の不安が低く、無職の不安が高く見られたのだと考えられる。このことから自営業や経営者、常時雇用の勤め人、パート・アルバイトの順などのように、給料が高い傾向にあると考えられる職業であるほど、不安を感じていないと考えられる。

また、岩井ら（2021）の調査が行われた期間は高齢者の優先接種が開始された 2021 年 4 月 12 日以前であり、高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査（2021）が行われた期間はワクチン接種を希望した高齢者の 2 回目の接種が概ね終了した 7 月末より後となっている。このことから、ワクチンを接種していたかどうかはコロナへの不安に影響していたことが考えられ、希望するすべての対象者への 2 回目のワクチン接種が完了している現在では、コロナへの年齢に対する不安の割合はワクチンの接種状況に偏りが無かった JGSS-2021 の結果に近くなると考えられる。

また榊原ら（2021）の研究結果から、感染症に不安を感じているほど自己の感染予防への意識が強まり、マスク装着への意識が高くなっていくと考えられる。以上のことから、次のような仮説を設定した。

仮説 1 給料が高い傾向にある職業ほど、感染症に不安を感じない。

仮説 2 年齢が低いほど、感染症に不安を感じない。

仮説 3 感染症への不安が強いほど、マスク装着への意識が高い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和四年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,214、回収率は 60.7%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q35: あなたは普段、新型コロナウイルスに感染するのではないかと不安を感じますか。

（新型コロナウイルス感染に対する不安感（反転））

1.非常に感じる 2.ある程度感じる 3.あまり感じない 4.全く感じない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q36：あなたは、屋外にいて人がまばらな時、普段マスクを着用しますか。（屋外にいて人がまばらな時、マスクを着用するか）

- 1.常に着用する 2.たいてい着用する 3.あまり着用しない 4.全く着用しない

Q41：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

- 1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

Q42：あなたの現在の職業はどれにあたりますか。（職業（雇用形態）、正規雇用経営者ダミー、パートダミー、自営ダミー）

- 1.常時雇用の勤め人 2.臨時雇用、パート、アルバイト 3.自営業主
4.自営業の家族従業者 5.経営者、役員 6.家事専業 7.学生 8.無職 9.その他

上記の選択肢に対して、その他を除いた後、常時雇用の勤め人、経営者および役員を 1、それ以外を 0 とする正規雇用経営者ダミー、臨時雇用、パート、アルバイトを 1、それ以外を 0 とするパートダミー、自営業主および自営業の家族従業者を 1、それ以外を 0 とする自営ダミーを作成した。また、9.その他は欠損値として処理した。

4. 分析

はじめに、職業とコロナ感染不安の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、職業とコロナ感染不安の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、職業を「常時雇用」や「経営者、役員」と回答した人ではコロナ感染不安を「全く感じない」と回答した人が 10%以下であり、「無職」と回答した人で不安を「全く感じない」人は 5%以下、「学生」と回答した人で「全く感じない」人は 20%である。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 64.379 であり、1%水準で統計的に有意であることがわかる。上記の結果から、職業とコロナ感染不安の二変数間の関連は統計的に有意であると考えられる。しかし、職業ごとの世帯年収の傾向とコロナ感染不安の関係を確認することはできなかった。

表 1 Q42 職業（雇用形態）と Q35 新型コロナウイルス感染に対する不安感（反転）のクロス集計表

			Q35 新型コロナウイルス感染に対する不安感（反転）				
			全く感じな	あまり感じ	ある程度感	非常に感じ	
			い	ない	じる	る	合計
Q42 職業 (雇用形 態)	常時雇用の勤め	N	22	85	171	88	366
	人	%	6%	23%	47%	24%	100%
	臨時雇用、パー	N	7	36	133	47	223
	ト、アルバイト	%	3%	16%	60%	21%	100%
	自営業主	N	3	13	18	6	40
		%	8%	33%	45%	15%	100%
	自営業の家族従	N	0	3	6	1	10
	事者	%	0%	30%	60%	10%	100%
	経営者、役員	N	2	4	13	5	24
		%	8%	17%	54%	21%	100%
	家事専業	N	3	26	106	28	163
		%	2%	16%	65%	17%	100%
	学生	N	8	9	17	6	40
		%	20%	23%	43%	15%	100%
	無職	N	8	56	166	43	273
		%	3%	21%	61%	16%	100%
	その他	N	1	0	10	7	18
		%	6%	0%	56%	39%	100%
合計		N	54	232	640	231	1157
		%	5%	20%	55%	20%	100%

$\chi^2(df=24, N=1157)=64.379^{***}$, Cramer V=.136^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

また、年齢とコロナ感染不安の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、年齢とコロナ感染不安の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、年齢を「18 歳、19 歳」と回答した人では、コロナ感染不安を「全く感じない」と回答した人が 27%、「20 代」と回答した人では 15%であることがわかる。さらに「30 代」以上と答えた人の「全く感じない」と回答した割合は 5%以下となっていることもわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 90.253 であり、1%水準で統計的に有意である。よって年齢とコロナ感染不安の二変数間の関連は統計的に有意であると考えられる。

表 2 Q41 年齢と Q35 新型コロナウイルス感染に対する不安感（反転）のクロス集計表

		Q35 新型コロナウイルス感染に対する不安感（反転）				合計
		全く感じない	あまり感じない	ある程度感じる	非常に感じる	
		い	ない	じる	る	
Q41 年齢	18歳、19歳	N 4	4	6	1	15
		% 27%	27%	40%	7%	100%
	20代	N 14	17	40	21	92
		% 15%	19%	44%	23%	100%
	30代	N 6	35	45	35	121
		% 5%	29%	37%	29%	100%
	40代	N 9	30	102	52	193
		% 5%	16%	53%	27%	100%
	50代	N 7	39	122	49	217
		% 3%	18%	56%	23%	100%
	60代	N 7	31	116	29	183
		% 4%	17%	63%	16%	100%
	70代	N 7	76	218	47	348
		% 2%	22%	63%	14%	100%
	合計	N 54	232	649	234	1169
		% 5%	20%	56%	20%	100%

$\chi^2(df=18, N=1169)=90.253^{***}$, Cramer V=.160^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 3 は、コロナ感染不安を従属変数、年齢（実数）、正規雇用経営者ダミー、パートダミー、自営ダミーを独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 乗値は 0.003 であり、投入した独立変数によって従属変数であるコロナ感染不安の分散の 0.3%が説明されている。

結果をみると、パートダミーが正で有意であった。これより、職に就いていない人々よりも臨時雇用、パート、アルバイトの人の方がコロナへの不安が大きいと分かる。しかし、それ以外は有意な効果がみられなかった。上記の結果は、仮説 1、仮説 2 を支持しない結果である。

表 3 Q35 新型コロナウイルス感染に対する不安感（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.767	0.105	***
Q41 年齢(実数)	0.002	0.002	0.041
Q42 正規雇用経営者ダミー	0.035	0.059	0.022
Q42 パートダミー	0.124	0.064	0.065 †
Q42 自営ダミー	-0.150	0.116	-0.040
調整済みR ²	0.003		
N	1129		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

次に、コロナ感染不安とマスク着用意識の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 4 は、コロナ感染不安とマスク着用意識の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、不安を「非常に感じる」と回答した人でマスクを「常に着用する」と回答した人は過半数存在するが、不安を「ある程度感じる」以下と回答した人で「常に着用する」人は 40%以下である。また、不安を「非常に感じる」と回答した人では、マスクを「常に着用する」「たいてい着用する」と回答した人は合わせて 8 割以上だが、不安を「全く感じない」人では 5 割程度である。ここから、コロナ感染不安が強い人はマスク着用意識が高いことがわかる。

表 4 のカイ二乗検定の結果を見ると、カイ二乗値は 183.216 であり、1%水準で統計的に有意である。よってコロナ感染不安とマスク着用意識の二変数間の関連は統計的に有意であると考えられる。これは、仮説 3 を支持する結果である。

表 4 Q35 新型コロナウイルス感染に対する不安感（反転）と
Q36 屋外にいて人がまばらな時、マスクを着用するかのクロス集計表

			Q36 屋外にいて人がまばらな時、マスクを着用するか				
			常に着用す る	たいてい着 用する	あまり着用 しない	全く着用し ない	合計
Q35 新型 コロナウ イルス感 染に対す る不安感 (反転)	全く感じない	N	17	10	10	17	54
		%	32%	19%	19%	32%	100%
	あまり感じない	N	58	99	67	11	235
		%	25%	42%	29%	5%	100%
	ある程度感じる	N	228	295	114	22	659
		%	35%	45%	17%	3%	100%
	非常に感じる	N	149	52	26	9	236
		%	63%	22%	11%	4%	100%
合計		N	452	456	217	59	1184
		%	38%	39%	18%	5%	100%

$\chi^2(df=9, N=1184)=183.216^{***}$, Cramer V=.227***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本章では、どのような人々がコロナに対して不安を感じる傾向にあるのか、年収傾向の異なる職業や年齢などの属性とコロナへの不安感の関係、またそのコロナへの不安が感染症対策に実際に表れているのか、マスク着用意識との関連性で分析した。

分析の結果から、職業と感染不安のクロス集計に目立った関連は見られず、また重回帰分析においても有意な結果を得られなかったため、仮説 1 が支持されなかった。また、クロス集計では年齢が低い 10 代、20 代ほど不安を「全く感じない」、「あまり感じない」と答えた割合が多いという結果を得ることができたが、重回帰分析では有意な結果を得ることができなかったために、仮説 2 が支持されなかった。仮説 1、2 に関して、年齢や収入による影響以外に、自身によって支える家族がいるか、コロナによる影響を受けやすい職業かどうかなど、異なる要因による影響も存在したと考えられるために、支持されなかったと考える。仮説 3 については、感染不安を感じている人ほどマスクを「常に着用する」と答えた人が多かったことから、支持されたといえる。

希望するすべての人がワクチンを接種できると考えられる現在でも、コロナの陽性者数は増加を続けており、現時点（2023 年 1 月 11 日）での厚生労働省での発表による 1 日当たりの国内新規陽性者数は、198,873 人と 2022 年 7 月 13 日時点での感染者数よりもさらに 2 倍ということになっている。今回の結果ではどのような人々が不安を強く感じているのか、またどのような人々へより強い注意喚起を行うべきかなどの指標となるものを得ることはできなかったが、コロナに対する不安の強さが感染症対策への意識につながっているという仮説は支持された。よって、引き続きコロナの危険性への理解、その対策意識の喚起を行うことが重要となるだろう。

6. 文献

- [1]…岩井紀子、林萍萍（2021）「コロナ禍における日本人の不安感と政策に対する評価——日本版総合的社会調査 JGSS-2021 から」『学術の動向 2021 年 12 月号』: pp18-26.
- [2]…関西大学総合情報学部（2021）『2021 年度社会調査実習報告書—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—』 p.83.
- [3]…厚生労働省（2022）『データからわかる—新型コロナウイルス感染症情報—』 .
<https://covid19.mhlw.go.jp/> （2022 年 7 月 13 日、1 月 11 日閲覧）
- [4]…Nakayachi, K., Ozaki, T., Shibata, Y., & Yokoi, R. (2020) 『Why do Japanese people use masks against COVID-19, even though masks are unlikely to offer protection from infection? Frontiers in Psychology, 11, 1918』 .
<https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.01918>
- [5]…榊原良太、大藺博記（2021）「人々がマスクを着用する理由とは—国内研究の追試とリサーチクエスションの検証—」『心理学研究』 92(5): pp.332－338.
- [6]…新型コロナウイルス感染症対策本部長（2022）『新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置の終了に関する公示』 .
https://corona.go.jp/emergency/pdf/kouji_20220317.pdf

第5章 子供のころの習い事が将来に与える影響

中谷 聖哉

1. はじめに

本章では、子供のころに習い事をしていたかどうかや、通っていた習い事の種類が将来に及ぼす影響について分析を行う。習い事をしている子供は近年になるとともに増加している。性別では、女子の方が男子よりも習い事をしている割合は高い。また、1 種類の習い事が最も多く、2 種類 3 種類と増えていくごとに、割合は減少している（久本・三笠・金築 2003）。

そこで本章では、その習い事が将来にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることで、習い事の持つ早期教育の可能性を明らかにする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

まず、佐藤・大江（2021）により、男子は長期継続群が忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲において有意に高く、女子は長期継続群が闘争心、勝利意欲、予測力において有意に高かった。このことから、スポーツを長く継続することで心理的対処が向上することが述べられている。また、学童期の後期にスポーツを始めた場合、青年期の協調性が有意に高くなることが明らかになった。また、スポーツの習い事の経験がある男子と経験がない男子を比較するとスポーツの習い事を経験した。

男子において心理的対処能力が優れており、女子はスポーツ経験の有無が心理的対処能力の向上に影響を及ぼしていない傾向にあることが明らかになっている（徳永ほか 1994）。さらに、菊野ら（2018）より水泳、柔道・剣道、ピアノの習い事が実行機能の発達に有効であることが示唆されている。

2.2. 仮説

本章では、子供のころ（15 歳以下）に通っていた習い事について、「スポーツ系」「武道・武術系」「芸術系」「学習系」の 4 つに分け、何も習い事をしていなかった人と、それぞれの 4 つに分けて質問する。佐藤・大江（2021）により、スポーツを長く継続することで心理的対処が向上することが示唆され、菊野ら（2018）により水泳、柔道・剣道、ピアノの習い事が実行機能の発達に有効であることが示唆されている。よって、本研究の仮説は以下の通りである。

仮説 1 子供のころにスポーツ系の習い事をしていた人は、結婚率が高くなる。

仮説 2 子供のころに学習系の習い事をしていた人は、最終学歴が高くなる。

仮説 3 習い事をしていた人の方が、友人が多く、友人満足度が高い。

仮説 4 習い事をしていた人の方が、生活満足度が高い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和四年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,214、回収率は 60.7%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q1：現在の生活全体にどのくらい満足していますか。（生活満足度（反転））

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q34：あなたは、現在の友人との関係に全体としてどのくらい満足していますか。

1. 満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満 6.友人はいない

Q39：あなたは、子どもの頃（15歳以下）、どのような習い事をしていましたか。あてはまるものをいくつでもお選びください。

1. スポーツ系（スイミング、野球、サッカー、体操など） 2. 武道・武術系（柔道、剣道、空手、少林寺拳法など） 3. 芸術系（ピアノ、バレエ、絵画、華道・茶道など） 4. 学習系（学習塾、そろばん、書道、英会話など） 5.その他（ ） 6. 習い事はしていなかった

Q40：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1.男性 2.女性

上記の選択に対して、男性を 0、女性を 1 とする女性ダミーを作成した。

Q43：あなたの最終学歴を教えてください。（在学中の方は、いま通っている学校を選んでください）（教育年数）

1.中学（旧小学校など） 2.高校（または旧制中学など） 3.専門学校 4.短大・高専（5年制） 5.大学（旧高専）・大学院 6.わからない

Q41：あなたの年齢をお答えください。（年齢（実数））

1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

上記の選択に対して、18 歳、19 歳を 18.5 歳、20 代を 24.5 歳、30 代を 34.5 歳、40 代を 44.5 歳、50 代を 54.5 歳、60 代を 64.5 歳、70 代以上を 74.5 歳として、処理した。

Q48：あなたは現在、結婚していらっしゃいますか。（結婚ダミー）

1.既婚（配偶者あり） 2.既婚（死別・別居） 3. 未婚

上記の選択に対して、既婚（配偶者あり）と既婚（死別・別居）を 1、未婚を 0 とする、結婚ダミーを作成した。

4. 分析

はじめに、スポーツ系（スイミング、野球、サッカー、体操など）を習っていた子供と、結婚したことがあるかについての単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、スポーツ系の習い事をしていた人と、結婚をしたことがあるかについてのクロス集計表を作成したものである。まず、子供のころ（15 歳以下）に通っていた習い事がありますかとの設問に「スポーツ系」と回答した人では、あなたは現在、結婚していらっしゃいますかを「既婚（配偶者あり）」「既婚（死別・離別）」と回答した人が 72%とかなりの割合存在する一方で、「スポーツ系」と回答しなかった人では、あなたは現在、結婚していらっしゃいますかを「既婚（配偶者あり）」「既婚（死別・離別）」と回答した人は 86%である。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 32.725 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.168 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、スポーツ系の習い事をしていた人と、結婚をしたことがあるかの二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。しかしこれは、仮説とは逆の子供のころにスポーツ系の習い事をしていた人は、結婚率が低いことを支持する結果であり、仮説 1 は支持されない。

表 1 Q39_1 子供の頃の習い事：スポーツ系と結婚のクロス表

			結婚		
			未婚	既婚	合計
Q39_1 子供の頃の 習い事：ス ポーツ系（スイ ミング、野球、 サッカー、体操 など）	当てはまる	N	102	258	360
		%	28%	72%	100%
	当てはまらな い	N	113	683	796
		%	14%	86%	100%
合計		N	215	941	1156
		%	18%	81%	100%

$\chi^2(df=1, N=1156)=32.725^{***}$, Cramer V=.168***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

つぎに、学習系と教育年数についての単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表2は、学習系の習い事をしていた人と、教育年数についてのクロス集計表を作成したものである。まず、子供のころ（15歳以下）に通っていた習い事がありますかとの設問に「学習系」と回答した人では、最終学歴が「短大・高専（5年制）」「大学（旧高専）・大学院」と回答した人が合わせて56%と過半数を超えている一方で、「中学（旧小学校など）」「高校（または旧制中学など）」と回答した人は、33%である。また、「学習系」と回答しなかった人では、最終学歴が「短大・高専（5年制）」「大学（旧高専）・大学院」と回答した人が合わせて30%であり、「中学（旧小学校など）」「高校（または旧制中学など）」と回答した人は合わせて60%である。これは、学習系の習い事をしていた人は、最終学歴が高いことがわかる。

表2のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は105.203であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramerの連関係数は0.302と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、学習系の習い事をしていた人と、教育年数の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説2を支持する結果である。

表2 Q39_4 子供の頃の習い事：学習系と最終学歴のクロス表

		最終学歴					
			中学（旧小学校など）	高校（または旧制中学など）	専門学校	短大・高専（5年制）	大学（旧高専）・大学院
Q39_4 子供の頃の習い事：学習系（学習塾、そろばん、書道、英会話など）	当てはまる	N	21	233	79	124	309
		%	3%	30%	10%	16%	40%
	当てはまらない	N	49	186	36	20	98
		%	12%	48%	9%	5%	25%
合計		N	70	419	115	144	407
		%	6%	36%	10%	12%	35%

$\chi^2(df=4, N=1155)=105.203^{***}$, Cramer V=.302***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表3は、最終学歴を従属変数、女性ダミー、年齢（実数）、子供のころ（15歳以下）に通っていた習い事を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済みR2値は0.249であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の24.9%が説明されている。

結果をみると、スポーツ系が正で有意、芸術系が正で有意、学習系が正で有意、習い事をしていなかったが負で有意、女性ダミーが負で有意、年齢（実数）が負で有意であった。これは、スポーツ系、芸術系、学習系の習い事をしていた人は、最終学歴が高く、習い事をしていなかった人、女性の人、年齢の高い人ほど最終学歴が低いことがわかる。上記の結果は、仮説2を支持する結果である。

表 3 Q43 最終学歴の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	15.348	0.296	***
Q39_1 子供の頃の習い事：スポーツ系（スイミング、野球、サッカー、体操など）	0.251	0.139	0.056 †
Q39_2 子供の頃の習い事：武道・武術系（柔道、剣道、空手、少林寺拳法など）	0.05	0.206	0.006
Q39_3 子供の頃の習い事：芸術系（ピアノ、バレエ、絵画、華道・茶道など）	0.838	0.131	0.189 ***
Q39_4 子供の頃の習い事：学習系（学習塾、そろばん、書道、英会話など）	0.597	0.164	0.136 ***
Q39_5 子供の頃の習い事：その他	0.387	0.573	0.017
Q39_6 子供の頃の習い事：習い事はしていなかった	-0.379	0.213	-0.073 †
女性ダミー	-0.824	0.122	-0.196 ***
年齢(実数)	-0.035	0.004	-0.285 ***
調整済みR ²	0.249		
N	1138		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 4 は、友人満足度を従属変数、女性ダミー、年齢（実数）、子供のころ（15 歳以下）に通っていた習い事を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.016 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 1.6%が説明されている。

結果をみると、学習系が正で有意、年齢が正で有意であった。これは、学習系の習い事をしてきた人は、友人満足度が高く、年齢が高いほど、友人満足度が高いことがわかる。一方、女性ダミーや他の子供のころの習い事の有無は有意な効果がみられなかった。上記の結果は、仮説 3 を部分的に支持する結果である。

表 4 Q34 友人満足度の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	4.035	0.150	***
Q39_1 子供の頃の習い事：スポーツ系（スイミング、野球、サッカー、体操など）	0.022	0.070	0.012
Q39_2 子供の頃の習い事：武道・武術系（柔道、剣道、空手、少林寺拳法など）	0.075	0.104	0.022
Q39_3 子供の頃の習い事：芸術系（ピアノ、バレエ、絵画、華道・茶道など）	0.060	0.067	0.031
Q39_4 子供の頃の習い事：学習系（学習塾、そろばん、書道、英会話など）	-0.119	0.083	-0.062 *
Q39_5 子供の頃の習い事：その他	-0.068	0.275	-0.007
Q39_6 子供の頃の習い事：習い事はしていなかった	-0.087	0.109	-0.038
女性ダミー	0.184	0.063	0.099 *
年齢(実数)	-0.005	0.002	-0.089 ***
調整済みR ²	0.016		
N	11.070		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表5は、生活満足度を従属変数、女性ダミー、年齢（実数）、子供のころ（15歳以下）に通っていた習い事を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済みR²値は0.014であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の1.4%が説明されている。

結果をみると、芸術系が正で有意、年齢が正で有意であった。これは、芸術系の習い事をしてきた人は、生活満足度が高く、年齢が高いほど、生活満足度が高いことがわかる。一方、女性ダミーや他の習い事を子供のころの習い事の有無は有意な効果がみられなかった。上記の結果は、仮説4を部分的に支持する結果である。

表5 Q1 生活満足度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	3.344	0.166	***
Q39_1 子供の頃の習い事：スポーツ系（スイミング、野球、サッカー、体操など）	0.120	0.078	0.054
Q39_2 子供の頃の習い事：武道・芸術系（柔道、剣道、空手、少林寺拳法など）	-0.185	0.116	-0.048
Q39_3 子供の頃の習い事：芸術系（ピアノ、バレエ、絵画、華道・茶道など）	0.169	0.074	0.077 *
Q39_4 子供の頃の習い事：学習系（学習塾、そろばん、書道、英会話など）	0.013	0.093	0.006
Q39_5 子供の頃の習い事：その他	0.057	0.310	0.005
Q39_6 子供の頃の習い事：習い事はしていなかった	-0.190	0.120	-0.074
女性ダミー	0.002	0.068	0.001
年齢(実数)	0.005	0.002	0.083 *
調整済みR ²	0.014		
N	11.560		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本研究では、子供のころに習い事をしてきたか、通っていた習い事の種類の将来におよぼす影響について分析を行うことで、習い事の持つ早期教育の可能性を検討していく。

最初に、スポーツ系の習い事をしてきたことによる影響について考察していく。分析の結果、スポーツ系の習い事をしてきた人よりも、していなかった人のほうが、結婚割合が高かった。これは仮説1と逆の結果であった。また、生活満足度や、友人満足度にも影響を及ぼしていなかった。佐藤・大江（2021）はスポーツを長く継続することで心理的対処能力が向上することを報告しているが、それは結婚率に影響を及ぼさないことが判明した。一方、スポーツ系の習い事をしてきた人の最終学歴は高くなることが分かった。

次に、学習系の習い事をしてきたことによる影響について考察する。学習系の習い事を子供のころにしていた人は最終学歴が高かった。これにより仮説2は支持された。また、学習系の習い事をしてきた人は、友人満足度が高く、将来に良い影響を及ぼすことがわかった。

また芸術系の習い事をしてきた人は、生活満足度と最終学歴が高い一方で、武道・芸術

系の習い事をしていた人は、友人満足度、生活満足度ともに影響を及ぼしていないことが判明した。これらの結果により、仮説 3, 4 ともに部分的に支持された。

本研究の結果により、子供のころに習い事をすることは、将来に良い影響を与えることが多いことがわかる。

最後に本研究の限界点について述べていく。第一に習い事の種類や、流行りは時代とともに移り変わっていくものであり、その当時の時代背景を考える必要がある。そのため、調査対象を同年代の人に絞り、標本を集めることで、習い事の影響をより正確に把握することができるであろう。

6. 文献

- [1]…久本 信子・三笠 友紀恵・金築 優子(2003) 「子どもの習い事の現状：性、年齢、居住地域との関連」『夙川学院短期大学研究紀要』 27:pp.29-51.
- [2]…菊野 春雄・李 珊埼・菊野 雄一郎・山田 悟史(2018) 「習い事がメタ認知と実行機能の発達にどのように影響するのか」『環境と経営』 24(1):pp.53-72.
- [3]…佐藤 真綾・大江 淳悟(2021) 「乳児期から学童期に経験したスポーツの習い事が青年期の心理的対処能力に及ぼす影響」『宮城学院女子大学発達科学研究』21:pp.49-58.
- [4]…徳永幹雄・橋本公雄・高柳茂美 (1994) 「スポーツクラブ経験が日常生活の心理的対処能力に及ぼす影響」『健康科学』 17 : pp.59-68.

第6章 性格特性とコミュニケーション手段の選択

馬上太一

1. はじめに

本研究では性格特性が各人のコミュニケーションに対して望む要素に影響し、それに合致するコミュニケーション手段を選択するという考えのもと、性格特性と好みのコミュニケーション手段の関係性について分析する。ここで扱う性格特性とはヒトの性格は5つの要素からなると説明するビッグファイブ理論で挙げられている5因子のうち、外向性と神経症的傾向の2つである。ただし本研究ではその判定は簡略化して行う。

昨今、COVID-19の影響により対面で会う機会は減少し、今まで利用してこなかったコミュニケーション手段をも用いざるを得ない状況が発生している。しかしこれはきっかけに過ぎず、今後継続的に種々のコミュニケーション手段を使い分けていくことになると予想される。情報通信白書（総務省）で掲げられる『「誰一人取り残さない」デジタル化』においては心理的な要因については触れられていないが、デジタル利用に際し心理的障壁の存在は無視できず、この方向性からのアプローチも必要であると考え。このような状況において、どのような人がどのようなコミュニケーションを求めているかの整理が必要であろう。

2. 仮説

2.1. 先行研究

コミュニケーションと性格特性の関係については、藤本ら（2007）により外向性及び神経症的傾向と6種類のコミュニケーション・スキル（自己統制・表現力・解読力・自己主張・他者受容・関係調整）の関係性が検証されている。得られた結果からは外向性が高いほど自己統制を除く5つすべての得点が高くなり、神経症的傾向が低いほど解読力・他者受容・自己統制・関係調整の4つの得点が高くなるという相関が確認されている。

2.2. 仮説

以上のことから性格特性とコミュニケーション手段の選択には相関があることが予想される。またその構造として性格特性がコミュニケーションの要素（根本的な特性（文字、声など）、非言語情報（表情、視線、ジェスチャー、その他の曖昧なしぐさ）、人数（一対一、集団）、名前との結びつき（実名、ハンドルネーム、匿名）、即時的か非同期的かなど）の好みに寄与し、それがコミュニケーション手段の選択に影響すると予想する。しかし今回の調査でそのすべてを明らかにするのは困難であるため本研究では性格特性とコミュニケーション手段の選択傾向との相関を調べ、可能であればその結果から要素との関係について考

察をする。また、年齢によって触れる機会の少ないコミュニケーション手段が存在する、性別によってコミュニケーションへの態度が異なる、SNS 利用時間が多い人は SNS の利用を好み、対面を好まないといった傾向があることが予想される。以上を踏まえ仮説を以下のように設定する。

仮説 1 神経症傾向が高いほどコミュニケーション自体を好まない傾向にある。また他の手段よりは返答を考える時間を得られるテキスト形式での非同期的な手段を好む、または対面などの情報が多く得られる手段を好む。

仮説 2 外向的な人ほど即時性の高い電話を好む傾向にある。

仮説 3 コミュニケーション手段の好みと年齢、性別、SNS 利用時間は相関がある。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和四年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,214、回収率は 60.7%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q21：あなたは、いつも心配事が多く、不安になりやすい方だと思いますか。（神経症的傾向）

1.そう思う 2.ややそう思う 3.どちらともいえない 4.あまりそう思わない 5.そう思わない

Q21：あなたは、いつも心配事が多く、不安になりやすい方だと思いますか。（神経症的傾向（反転））

1.そう思う 2.ややそう思う 3.どちらともいえない 4.あまりそう思わない 5.そう思わない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、神経症的傾向が小さくなるように、尺度の反転を行った。

Q22：あなたは、初対面の相手との会話を楽しむことが出来る方だと思いますか。（外向性）

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満

Q32：あなたは、あなたは普段、1 日にどれくらいの時間、SNS (Twitter、Instagram、Facebook

など)に触れていますか。(SNSの利用時間)

1.電子メール 2.LINE等のメッセージングアプリでのテキストのやりとり
3.FacebookやTwitter等のSNSでのテキストのやりとり 4.音声電話(LINEやSkype等の無料通話アプリの利用を含む) 5.ビデオ通話 6.対面での会話 7.手紙 8.その他 9.あてはまるものはない

Q33:あなたは、友人や知人と雑談をする場合、以下のどのような手段を好みますか。当てはまるものをいくつでもお選びください。(会話手段の好み)

1.電子メール 2.LINE等のメッセージングアプリでのテキストのやりとり
3.FacebookやTwitter等のSNSでのテキストのやりとり 4.音声電話(LINEやSkype等の無料通話アプリの利用を含む) 5.ビデオ通話 6.対面での会話 7.手紙 8.その他 9.あてはまるものはない

Q33:あなたは、友人や知人と雑談をする場合、以下のどのような手段を好みますか。当てはまるものをいくつでもお選びください。(会話(統合))

1.電子メール 2.LINE等のメッセージングアプリでのテキストのやりとり
3.FacebookやTwitter等のSNSでのテキストのやりとり 4.音声電話(LINEやSkype等の無料通話アプリの利用を含む) 5.ビデオ通話 6.対面での会話 7.手紙 8.その他 9.あてはまるものはない

上記の選択に対して、各個体の複数回答の状況を反映できるようデータの再構成を行った。

Q40:あなたの性別はどちらですか。(女性ダミー)

1.男性 2.女性

上記の選択に対して、女性を1、男性を0とする女性ダミーを作成した。

Q41:あなたの年齢をお答えください。(年齢(実数))

1.18歳、19歳 2.20代 3.30代 4.40代 5.50代 6.60代 7.70代以上

上記の選択に対して、中央値の年齢として処理した。

4. 分析

4.1.表

本研究に用いる主な変数についての集計結果とクロス表を示す。

まず、表1はQ33会話手段の好みの回答状況である。各行は本設問における有効回答数1165のうち何人が各選択肢を選択したかを示している。

対面の回答が一番多く、次いで LINE 等テキスト、音声電話の回答が多くなっている。LINE 等テキストが対面と大きな差はなく電話よりも選択されるという結果になっており、比較的新しいコミュニケーションも浸透し好まれていることが読み取れる。

表 1 Q33 の度数分布表

		応答数	
		N	%
電子メール		186	15.8%
LINE等テキスト		723	61.4%
Facebook等テキスト		87	7.4%
Q33会話	音声電話	536	45.5%
手段の好	ビデオ電話	102	8.7%
み	対面	802	68.1%
	手紙	60	5.1%
	その他	7	0.6%
	あてはまるものはない	22	1.9%
合計		2525	214.5%

表 2、表 3 は性格特性と会話手段の好みについてのクロス集計表である。

この表におけるカイ二乗値及び Cramar の V は項目ごとに性格特性とのクロス集計表を作成した際にカイ二乗検定を行った結果を付したものである。これらのクロス表の内容については 4.2.分析と 5.考察にて検討する。

表 2 Q21 神経症的傾向と Q33 会話手段の好みのクロス集計表

		Q33会話手段の好み									合計
		電子メール	LINE等テキスト	Facebook等テキスト	音声電話	ビデオ電話	対面	手紙	その他	あてはまるものはない	
Q21 神経症的傾向	そう思う	N 15	79	15	51	11	57	4	0	6	108
		% 13.9%	73.1%	13.9%	47.2%	10.2%	52.8%	3.7%	0.0%	5.6%	
	ややそう思う	N 54	200	21	147	32	233	17	4	7	335
		% 16.1%	59.7%	6.3%	43.9%	9.6%	69.6%	5.1%	1.2%	2.1%	
	どちらともいえない	N 53	190	20	145	25	210	15	1	4	313
		% 16.9%	60.7%	6.4%	46.3%	8.0%	67.1%	4.8%	0.3%	1.3%	
	あまりそう思わない	N 45	177	20	141	23	212	15	1	1	291
		% 15.5%	60.8%	6.9%	48.5%	7.9%	72.9%	5.2%	0.3%	0.3%	
	そう思わない	N 19	71	10	52	10	85	8	1	3	118
		% 16.1%	60.2%	8.5%	44.1%	8.5%	72.0%	6.8%	0.8%	2.5%	
合計		N 186	717	86	536	101	797	59	7	21	1165
		% 16.00%	61.50%	7.40%	46.00%	8.70%	68.50%	5.10%	0.60%	1.80%	100.00%
カイ二乗値		0.628	6.877	8.063 †	1.567	1.048	16.041**	1.191	3.484	13.1 *	
Cramar V		0.023	0.077	0.083 †	0.037	0.03	0.117**	0.032	0.055	0.106 *	

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 2 の 2 Q21 神経症的傾向と Q33 会話手段の好みのクロス集計表（列パーセント）

		Q33会話手段の好み										
		電子メール	LINE等テキスト	Facebook等テキスト	音声電話	ビデオ電話	対面	手紙	その他	あてはまるものはない	合計	
Q21 神経 症的傾向	そう思う	N	15	79	15	51	11	57	4	0	6	108
		9.3%	8.1%	11.0%	17.4%	9.5%	10.9%	7.2%	6.8%	0.0%	28.6%	
	ややそう思う	N	54	200	21	147	32	233	17	4	7	335
		28.8%	29.0%	27.9%	24.4%	27.4%	31.7%	29.2%	28.8%	57.1%	33.3%	
	どちらともいえない	N	53	190	20	145	25	210	15	1	4	313
		26.9%	28.5%	26.5%	23.3%	27.1%	24.8%	26.3%	25.4%	14.3%	19.0%	
	あまりそう思わない	N	45	177	20	141	23	212	15	1	1	291
		25%	24.2%	24.7%	23.3%	26.3%	22.8%	26.6%	25.4%	14.3%	4.8%	
	そう思わない	N	19	71	10	52	10	85	8	1	3	118
		10.1%	10.2%	9.9%	11.6%	9.7%	9.9%	10.7%	13.6%	14.3%	14.3%	
合計		度数	186	717	86	536	101	797	59	7	21	1165

表 3 Q22 外向性と Q33 会話手段の好みのクロス集計表

		Q33会話手段の好み										
		電子メール	LINE等テキスト	Facebook等テキスト	音声電話	ビデオ電話	対面	手紙	その他	あてはまるものはない	合計	
Q22外向性	そう思う	N	25	109	19	75	16	104	16	0	2	158
		%	15.8%	69.0%	12.0%	47.5%	10.1%	65.8%	10.1%	0.0%	1.3%	
	ややそう思う	N	52	206	24	157	35	226	20	3	4	322
		%	16.1%	64.0%	7.5%	48.8%	10.9%	70.2%	6.2%	0.9%	1.2%	
	どちらともいえない	N	55	204	23	174	27	249	15	2	6	355
		%	15.5%	57.5%	6.5%	49.0%	7.6%	70.1%	4.2%	0.6%	1.7%	
	あまりそう思わない	N	41	144	17	99	19	161	4	0	6	236
		%	17.4%	61.0%	7.2%	41.9%	8.1%	68.2%	1.7%	0.0%	2.5%	
	そう思わない	N	13	53	3	31	4	57	4	2	3	93
		%	14.0%	57.0%	3.2%	33.3%	4.3%	61.3%	4.3%	2.2%	3.2%	
合計	N	186	716	86	536	101	797	59	7	21	1164	
	%	16.00%	61.50%	7.40%	46.00%	8.70%	68.50%	5.10%	0.60%	1.80%	100.00%	
カイ二乗値			0.691	7.839 †	7.763	9.985*	5.251	3.639	15.495 **	6.714	2.645	
Cramer V			0.024	7.839 †	0.082	0.093*	0.067	0.056	0.115 **	0.076	0.048	

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 3 の 2 Q22 外向性と Q33 会話手段の好みのクロス集計表（列パーセント）

		Q33会話手段の好み										
		電子メール	LINE等テキスト	Facebook等テキスト	音声電話	ビデオ電話	対面	手紙	その他	あてはまるものはない	合計	
Q22 外向性	そう思う	N	25	109	19	75	16	104	16	0	2	158
	13.6% %		13.4%	15.2%	22.1%	14.0%	15.8%	13.0%	27.1%	0.0%	9.5%	
	ややそう思う	N	52	206	24	157	35	226	20	3	4	322
	27.7% %		28.0%	28.8%	27.9%	29.3%	34.7%	28.4%	33.9%	42.9%	19.0%	
	どちらともいえない	N	55	204	23	174	27	249	15	2	6	355
	30.5% %		29.6%	28.5%	26.7%	32.5%	26.7%	31.2%	25.4%	28.6%	28.6%	
	あまりそう思わない	N	41	144	17	99	19	161	4	0	6	236
	20.3% %		22.0%	20.1%	19.8%	18.5%	18.8%	20.2%	6.8%	0.0%	28.6%	
	そう思わない	N	13	53	3	31	4	57	4	2	3	93
8.0% %		7.0%	7.4%	3.5%	5.8%	4.0%	7.2%	6.8%	28.6%	14.3%		
合計		度数	186	716	86	536	101	797	59	7	21	1164

4.2.分析

はじめに、Q21 神経症的傾向と Q33 会話手段の好みの各項目についての単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 4 には Q1 神経症的傾向と Q33 会話手段の好みの各項目のクロス表の一例として対面の項目についてのものを示している。ここからは神経症的傾向が低い人ほど対面を好み、神

経症的傾向が高い人ほど対面を好まないことが読み取れる。

表 4 のカイ二乗検定の結果、カイ二乗値は 16.041 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.177 と一定の関連が認められる。同様に各項目についてカイ二乗検定を行い、対面以外の項目で有意であると判断された(表 2 参照)のは「Facebook 等テキスト」(カイ二乗値 8.063、10%水準で有意、Cramer の連関係数 0.083)、「あてはまるものはない」(カイ二乗値 13.100、5%水準で有意 Cramer の連関係数 0.106) の 2 項目であった。「Facebook 等テキスト」に関してのクロス表の結果からは神経症的傾向が高い人ほど「Facebook 等テキスト」を好む傾向がみられ、「あてはまるものはない」に関してのクロス表の結果からは神経症的傾向が高い人ほど「あてはまるものはない」と答える傾向にあることが読み取れる。これは、表 2 の全体像と合わせて考えても神経症的傾向が高いほど対面を好むという仮説は支持しない結果となっている一方で、神経症的傾向が高いほど「あてはまるものはない」「Facebook 等のテキスト」を答える傾向に関しては仮説 1 の一部を支持する結果となっている。

表 4 Q21 神経症的傾向と Q33 会話手段の好み：対面のクロス集計表

		Q33_6 会話手段の好み：対面			
			当てはまらない	当てはまる	合計
Q21 神経症的傾向	そう思う	N	51	57	108
		%	47.2%	52.8%	100.0%
	ややそう思う	N	102	233	335
		%	30.4%	69.6%	100.0%
	どちらともいえない	N	103	210	313
		%	32.9%	67.1%	100.0%
	あまりそう思わない	N	79	212	291
		%	27.1%	72.9%	100.0%
	そう思わない	N	33	85	118
		%	28.0%	72.0%	100.0%
合計	N	368	797	1165	
	%	31.6%	68.4%	100.0%	

$\chi^2(df=4, N=1165)=16.041^{**}$, Cramer V=.117**

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

同様に Q22 外向性と Q33 会話手段の好みの各項目についての単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

各項目のうちカイ二乗検定の結果有意であると判断された(表 3 参照)のは「LINE 等テキスト」(カイ二乗値 7.839、10%水準で有意、Cramer の連関係数 0.082)、「音声電話」(カイ二乗値 9.985、5%水準で有意、Cramer の連関係数 0.093)、「手紙」(カイ二乗値 15.495、1%水準で有意、Cramer の連関係数 0.115) の 3 項目であった。「LINE 等テキスト」に関してのクロス表の結果からは外向性が高いほど「LINE 等テキスト」を好み、「音声電話」

に於けるクロス表の結果から、外向性が高いほど「音声電話」を、「手紙」に於けるクロス表の結果から、外向性が高いほど「手紙」を好む傾向にあることが分かった。外向性が高いほど電話を好むという結果は仮説 2 を支持する結果である。

表 5 は、会話手段の好みから対面の項目を従属変数、SNS 利用時間、神経症的傾向（反転）、外向性、女性ダミー、年齢（実数）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.010 であり、投入した独立変数によって従属変数である会話手段の好み：対面の分散の 1.0% が説明されている。

結果をみると、年齢が正で有意、神経症的傾向（反転）が負で有意であった。これは、年齢が高いと、対面での会話を好み、神経症的傾向が小さいと、対面での会話を好むことがわかる。標準化係数（ β ）をみると、神経症的傾向（反転）が -0.076 と比較的絶対値が大きく、一定量対面での会話を好むかどうかに影響するといえる。一方、SNS 利用時間や女性ダミー、外向性は有意な効果がみられなかった。上記の結果は、対面環境においての仮説 3 について一部を支持する結果である。

表 5 Q33 会話手段の好み：対面の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	0.69	0.089	***
Q32 SNS利用時間	-0.007	0.009	-0.027
Q21神経症傾向(反転)	-0.031	0.012	-0.076 *
Q22 外向性	-0.002	0.012	-0.005
Q40女性ダミー	0.024	0.028	0.026
Q41年齢(実数)	0.002	0.001	0.064 *
調整済みR ²	0.010		
N	1131		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

次に、表 6 は、会話(統合)を従属変数、SNS 利用時間、神経症的傾向、外向性、女性ダミー、年齢（実数）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.019 であり、投入した独立変数によって従属変数である会話(統合)の 1.9% が説明されている。

結果をみると、年齢が正で有意、SNS 利用時間が負で有意であった。これは、年齢が高いと、対面での会話を好み、SNS 利用時間が短いと、対面での会話を好むことがわかる。標準化係数（ β ）をみると、年齢が 0.082 と比較的大きく、一定量対面での会話を好むかどうかに影響するといえる。一方、女性ダミーや外向性、神経症的傾向では有意な効果がみられなかった。上記の結果は、仮説 3 について一部を支持する結果である。

表 6 Q33 会話（統合）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	3.683	0.246		***
Q21 神経症的傾向	-0.007	0.034	-0.005	
Q22 外向性	0.014	0.034	0.008	
Q32 SNS利用時間	-0.097	0.024	-0.09	***
Q40女性ダミー	0.055	0.078	0.014	
Q41年齢(実数)	0.009	0.003	0.082	***
調整済みR ²	0.019			
N	2447			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

次に会話（統合）と神経症的傾向、外向性、SNS 利用時間、年齢（実数）について多重コレスポンデンス分析を行った。得られた結果が図 1 の判別測定、図 2-6 の付置図である。

図 1 の判別測定の結果から SNS 利用時間及び年齢（実数）は次元 1 で、外向性と神経症的傾向は次元 2 によって説明される度合いが大きいことが読み取れる。図 2 から次元 1 において LINE 等テキストとビデオ電話が、また対面と音声電話及び電子メールがほぼ同程度であることが分かり、また図 5 から SNS 利用時間が短いほど、図 6 からは年齢（実数）が高いほど次元 1 が高位になっていることが分かる。図 3 と 4 から曖昧な回答ほど次元 2 が高位になり、極端な回答ほど次元 2 が低位である傾向がみられる。

以下、複数の付置図を合わせて解釈する。性格特性とコミュニケーション手段の選択傾向の関係について、「Facebook 等テキスト」と神経症的傾向「そう思う」および外向性「そう思わない」が近くなっており、反対に神経症的傾向「そう思わない」および外向性「そう思う」と「手紙」、「その他」「あてはまるものはない」の項目が近くなっており、関連があることが窺える。「対面」はどの層からも回答が得られやすいため、次元 1 で中央付近に位置している。対面より次元 1 で高位にあるのは「電話」や「電子メール」といった従来の手段であり、年齢層が高く、SNS 利用時間が短い人との関連が強い。また次元 1 が低位であるテキスト形式の手段や「ビデオ電話」は年齢層が低く、SNS 利用時間が長い層との関連が強くなっている。

図 1 分析モデルの判別測定

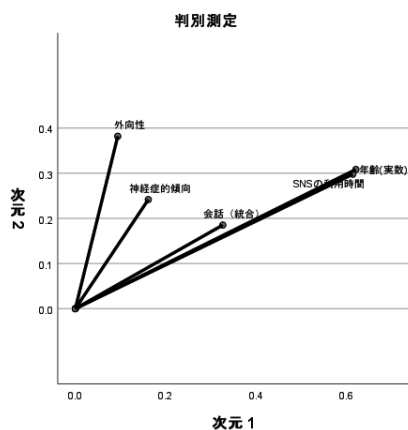


図 2 Q33 会話（統合）の付置図

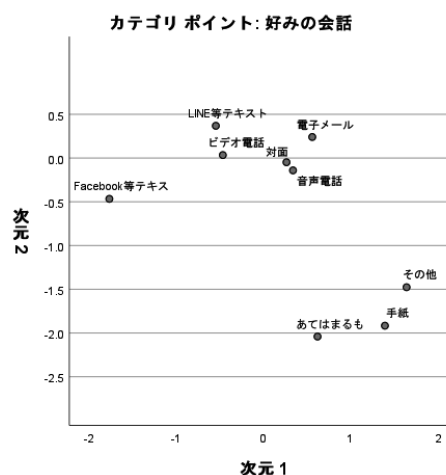


図 3 Q21 神経症的傾向の付置図

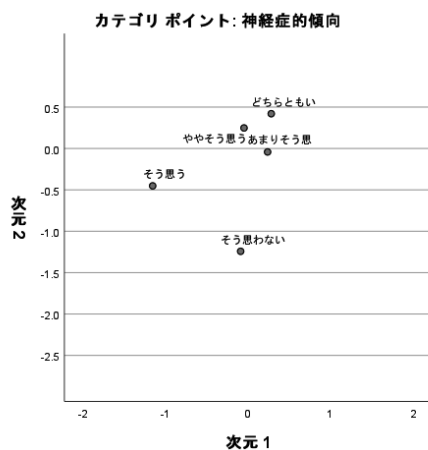


図 4 Q22 外向性の付置図

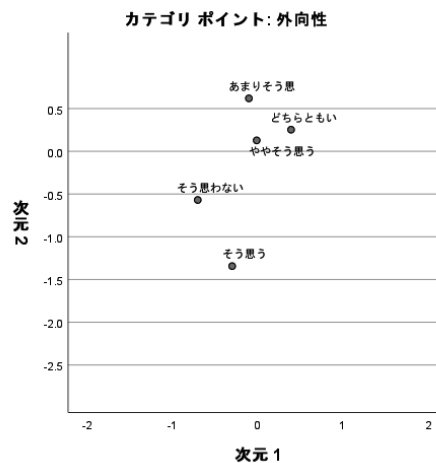


図 5 Q32 SNS 利用時間の付置図

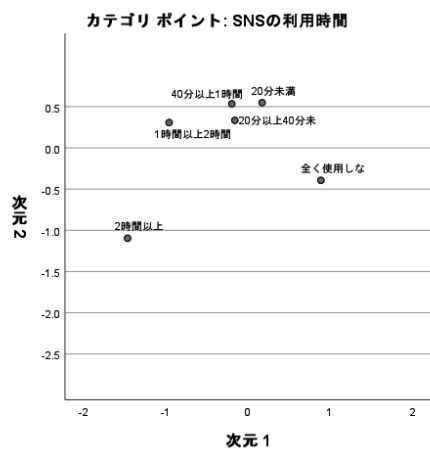
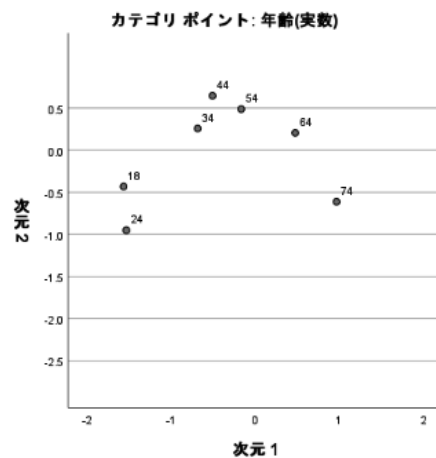


図6 Q41年齢（実数）の付置図



5. 考察

まずクロス集計表から有意であるとは言い切れない項目も含めて集計結果について考察を行う。

神経症的傾向が高い人について「Facebook 等テキスト」の方が「LINE 等テキスト」より顕著に高い集計結果となっている。この両者の特徴について整理すると LINE はクローズドな限られた相手との会話を主に想定した作りになっているのに対し、Facebook や Twitter はダイレクトメールなどがあるもののメインの機能としてはオープンな作りになっている。LINE の主な会話相手は家族、知人友達が上位になっており（文献[4]）、Facebook も主な会話相手はリアルな知人友達となっている（文献[5][7]）。投稿時人の目を気にするかというアンケート調査で Twitter は気にしないとの回答が多く、LINE と Facebook 共にやや気にする回答となっており、だれの目を気にするかについては Facebook では仕事上の繋がりの人を気にするとの声が目立っており LINE と異なっている（文献[3]）。親密度が高い、または接触頻度が高い相手とは LINE を使い、趣味が合う相手とは Twitter を用いるとの調査もある（文献[2]）。

「LINE 等テキスト」「Facebook 等テキスト」の具体的な SNS の内訳は不明であるが、仕事などで上下関係等立場が定まっている方が話しやすいといった可能性はあるものの、私的ではない関係の人と繋がっていることが多い Facebook は基本的に雑談に向いておらず、「Facebook 等テキスト」の多くは Twitter であると考えられる。だとすると神経症的傾向が高い人は接触頻度が高い人とのやり取りで使われがちな LINE よりリアルでの結びつきが薄く、純粋に趣味で知った相手との関わりを好んでいることが推測される。このことは実名かハンドルネームかといった要素の好みとの関係が予想される。

外向性が高い人について、離れていてもやり取りができる事を重要視しているような印象を受ける。また、手紙において割合が高いことを考えると接触機会が少ない人とも親密度が失われたとは感じず、年賀状などにより関係性を維持し続けることを好む人であると考えられる。また表の 3 の 2 を見ると外向性単体での回答比率に比べて、「Facebook 等テキスト」「ビデオ電話」の項目において外向性が低い人の回答割合は小さくなっている。逆に外向性が高いと「Facebook 等テキスト」「ビデオ通話」「手紙」といった全体として回答が少ない項目の回答も比較的多くなっており、外向性が高いと特定の手段に固執しない傾向にあるように見える。ただし、各行において回答数を人数で割った値はいずれも 2.1 前後であり、外向性が高い程より多くの項目を選択するというわけではない。

以上のことを概観すると、性格特性が好むコミュニケーションの要素に影響を与えるというよりは、外向性が低い、または神経症的傾向が高い程何らかのコミュニケーションの要素を嫌うという構造にあるのではないかと考えられる。よって性格特性とコミュニケーション手段の選択傾向関係ではなく、性格特性とコミュニケーション手段選択の回避傾向の調査が必要であると考えられる。

次にコレスポネンデンス分析の結果について考察を行う。「対面」「音声電話」と「LINE 等

テキスト」「ビデオ電話」の位置は近く複数回答で同時に選択されることが多い様子が窺えるが、「Facebook 等テキスト」は離れており、回答者からは「LINE 等テキスト」とも類似性が薄いと考えられていることが予想される。「Facebook 等テキスト」は「LINE 等テキスト」に比べ直接会ったことのない状態から関係が始まることが多いと予想され、手段そのものよりは手段によって想定される会話相手の差、特に直接会ったことがある相手か否かが、手段選択にも影響を与えているのではないだろうか。「Facebook 等テキスト」と性格特性の関係は極端な回答と結びついているなどほかの手段より強くみられるため、この部分に限定して、対面で会う相手との会話を好むか否かと性格特性の関係について検討する余地がある。

また、今回の調査では回答者が利用したことがなく好悪が判断できないといった場合に關しての考慮はされておらず扱いには注意が必要である。

6. 文献

- [1]...藤本 学, 大坊 郁夫 (2007) 「コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み」『パーソナリティ研究』.15(3): pp.347-361.
- [2]...ModuleApps2.0(2016)『相手との関係性による SNS 使い分け調査。仲が いい ほど 増加する SNS とは?』<https://moduleapps.com/mobile-marketing/9400res/> (2023 年 1 月 11 日閲覧).
- [3]...opt(2014)『オプト、Twitter (ツイッター) の利用実態に関する調査を実施』.
<https://www.opt.ne.jp/news/pr/detail/id=2341> (2023 年 1 月 11 日閲覧)
- [4]...Research+(2014)『LINE に関する調査』
<http://www.researchplus.net/html/investigation/report/index60.html> (2023 年 1 月 11 日閲覧)
- [5]...SMMLab(2013)『【アンケート調査結果大公開！】ユーザーが Facebook を主に利用する目的・時間帯・デバイス、友達数は？Facebook 利用実態』.
<https://smmlab.jp/article/post-22942/> (2023 年 1 月 11 日閲覧)
- [6]...総務省令和 3 年版情報通信白書 (PDF 版)「誰一人取り残さない」デジタル化の実現に向けて
- [7]...VENECT(2020)『【2020 年 SNS 利用目的調査】 LINE、twitter、Instagram などの利用目的とは?』.
<https://www.venect.jp/blog/column/425/> (2023 年 1 月 11 日閲覧)

第7章 共生社会認知の動機としての他者理解

今西 凜

1. はじめに

日本においては、障害者差別解消法の施行が平成 28 年 4 月のことである。また、令和 3 年 5 月には同法の改正が行われ、日々障害者を主とした被差別者への合理的配慮及び差別の緩和、禁止へ向けて様々な取り組みが着々と推進されている。一方で、同法最初の施行から 1 年が経過した平成 29 年度の障害者問題に関する世論調査（内閣府）では、同法を「知らない」と答えた割合は実に 77.9%と高いものであり、またその基本的理念として存在する「共生社会」という概念については、こちらも「知らない」と答えた割合が 33.7%に至る。SDGs が謳われる昨今においても、障害者問題について一般への周知はあまり徹底されていないというのが現状のようである。

ここで「共生社会」について意味を確認しておく。文部科学省の特別支援教育に関する資料（2012）では共生社会を「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である」としている。ここにおいて「障害者」については上記の通り、「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった」対象者を指す。

視点は変わるが、日本においては COVID-19 の本格的な流行は 2020 年以降のことである。この未知のウイルスが蔓延するにつれて、偏見や差別、社会参加への障害形成などの不都合が指摘されている。内田（2020）の指摘するところによれば、COVID-19 を原因とした差別は確かに生じている。また、阿形（2021）の高校生へ向けた調査によると、COVID-19 への不安が「ある」と答えた生徒のうち実に 41.1%が、差別の可能性をその不安理由として挙げている。さらに福井（2022）の研究によれば、「その（COVID-19 感染者への忌避・偏見的態度）促進要因として、感染嫌悪や COVID-19 恐怖、許容的奉仕の期待、怒り表出が、緩和要因として、感染 嫌悪や感染予防対策行動、独断性、他者への融和・順応、因果応報が見出された」（2022：p132）。これらのことから、COVID-19 の感染者は共生社会の概念において「十分に社会参加できるような環境にない」可能性が予測される。

そこで本章では検証を行うことで、共生社会という概念の認知と人々の思考傾向の関係を調べ、共生社会を知らしめる必要性を見出すことを試みる。主には、社会不安や幸福度と共生社会知識の関係である。

2. 仮説

2.1. 先行研究

福井（2022）の研究において、二分的思考の下位概念と COVID-19 への偏見態度と、他の流行病にみられない特異な相関が指摘されている。小塩（2010）によれば二分法的な思考を行う人物は、自分自身に近い集団を「味方」で「良い」、自分が属さない集団を「敵」で「悪い」と見ながちである。一方で COVID-19 についての行動免疫システムを測る変数の考察は、COVID19 感染者への偏見や差別意識に特有の寄与因ではないとしている。

立瀬ら（2022）の調査と考察によると、コロナ禍における生活苦は生活者自身の活動範囲の縮小を促し、不安によるストレスの増加をもたらしていることが指摘されている。すなわち、外的、内的それぞれにおいて、自身の所属意識の範囲と不安には相関があるということである。

2.2. 仮説

さて、福井（2022）の研究及び小塩（2010）の指摘から、COVID-19 への不安と共生社会への理解について一つ想定したい。即ち、COVID-19 への不安を感じていない人は共生社会という概念をより認知するのではないかという予測である。不安を感じない人が不安を感じる人と対話を試みる過程などあれば、共生社会の概念に触れることもあろう。

またこれらに関連して、二分法的思考における他者理解へのバイアスについての考察も行いたい。この思考に特有の、自分自身に近い集団と自分が属さない集団という対立に注目し、自己及び他者への関わり方と共生社会という概念の知識についての関係を見る。さらに立瀬らの指摘も踏まえて、自身の生活範囲や関連属性を狭めることなく、他者理解をよく行う人物（つまり彼らの考察によれば COVID-19 への不安がないと推察される人物）について見る。具体的には、「他者への働きかけ」、「自身の所属範囲」に注目した変数を用意することによってこれらを観察する。

仮説 1 COVID-19 への不安を感じない人ほど、共生社会という概念を認知している傾向がある。

仮説 2 自身が所属していると認識する属性及びその領域が広いほど、共生社会という概念を認知している傾向がある。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和四年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,214、回収率は 60.7%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q11：あなたは、1日に平均して何分くらい歩いていますか。（一日の平均歩行時間）

1. 10分未満 2. 10分以上20分未満 3. 20分以上30分未満 4. 30分以上40分未満 5. 40分以上50分未満 6. 50分以上60分未満 7. 60分以上70分未満 8. 70分以上100分未満 9. 100分以上

Q19：あなたは、障害のある・なし等にかかわらず、誰もが社会の一員としてお互いを尊重し、支え合って暮らすことを目指す「共生社会」という考え方を知っていますか。この中から1つだけお答えください。（共生社会認知（反転））

1. 知っている 2. 言葉だけは聞いたことがある 3. 知らない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、概念の認知度合いが高くなるように、尺度の反転を行った。

Q21：あなたは、いつも心配事が多く、不安になりやすい方だと思いますか。（心配性反転）

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらともいえない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、不安が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q22：あなたは、初対面の相手との会話を楽しむことができる方だと思いますか。（初対面反転）

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらともいえない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、初対面での会話を楽しむように、尺度の反転を行った。

Q35：あなたは普段、新型コロナウイルスに感染するのではないかと不安を感じますか。（COVID-19 不安）

1. 非常に感じる 2. ある程度感じる 3. あまり感じない 4. 全く感じない

Q41：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1. 18歳、19歳 2. 20代 3. 30代 4. 40代 5. 50代 6. 60代 7. 70代以上

Q43：あなたの最終学歴を教えてください。（在学中の方は、いま通っている学校を選んでください）（最終学歴）

1. 中学（旧小学校など） 2. 高校（または旧制中学など） 3. 専門学校 4. 短大・高専（5年制） 5. 大学（旧高専）・大学院 6. わからない

4. 分析

はじめに、新型コロナウイルス感染に対する不安感と共生社会認知（反転）の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表1は、新型コロナウイルス感染に対する不安感と共生社会認知（反転）の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、新型コロナウイルス感染に対する不安感の設問に「非常に感じる」と回答した人では、共生社会認知を「知っている」と回答した人が51%、一方で「全く感じない」と回答した人では「知っている」が44%以下である。また、「非常に感じる」と回答した人では、共生社会認知を「知らない」と回答した人が20%、一方で「全く感じない」と回答した人では「知らない」が28%以下である。これらより、不安を感じる人ほど共生社会を認知する割合が、少しばかり多く見える。

表1のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は9.189であり、統計的に有意ではない。また、Cramerの連関係数は0.063とほぼ関連が認められない。以上のことから、新型コロナウイルス感染に対する不安感と共生社会認知の二変数間の関連は、統計的に有意な関連でないと考えられる。これは、仮説1を支持しない結果である。

表1 Q35 COVID-19 不安と Q19 共生社会認知のクロス集計表

			Q19 共生社会認知反転			
			言葉だけは 聞いたこと			
			知らない	がある	知っている	合計
Q35 新型コロナウイルス感染に対する不安感	非常に感じる	N	46	66	117	229
		%	20%	29%	51%	100%
	ある程度感じる	N	99	221	320	640
		%	16%	35%	50%	100%
	あまり感じない	N	43	79	104	226
		%	19%	35%	46%	100%
	全く感じない	N	15	15	24	54
		%	28%	28%	44%	100%
合計		N	203	381	565	1149
		%	18%	33%	49%	100%

$\chi^2(df=6, N=1149)=9.189$, Cramer V=.063

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

次に、初対面（反転）と共生社会認知（反転）の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、初対面（反転）と共生社会認知（反転）の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、初対面会話の設問に「そう思う」と回答した人では、共生社会認知を「知っている」と回答した人が 60%と多く存在する一方で、「そう思わない」と回答した人では「知っている」が 37%である。これについて共生社会認知を「知らない」「言葉だけは聞いたことがある」と回答した人の割合が共に初対面会話を楽しめるほど、単調ではないにせよ減少する傾向にあるのは興味深い。総じて、初対面での会話を楽しめると自覚する人ほど、共生社会についてその意味も含めて認知する割合が高いと言える。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 28.048 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.109 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、初対面会話と共生社会認知の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、他者への同調及び友好的な働きかけとみれば、仮説 2 を一部支持する結果である。

表 2 Q22 初対面反転と Q19 共生社会認知のクロス集計表

		Q19 共生社会認知反転			
		言葉だけは 聞いたこと			合計
		知らない	がある	知っている	
Q22 初対 面反転	そう思わない	N 23	35	35	93
		% 25%	38%	38%	100%
	あまりそう思	N 49	93	93	235
	わない	% 21%	40%	40%	100%
	どちらともい	N 54	130	175	359
	えない	% 15%	36%	49%	100%
	ややそう思う	N 51	96	177	324
		% 16%	30%	55%	100%
	そう思う	N 25	39	95	159
		% 16%	25%	60%	100%
	合計	N 202	393	575	1170
		% 17%	34%	49%	100%

$\chi^2(df=8, N=1170)=28.048^{***}$, Cramer V=.109***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

続いて、心配性（反転）と共生社会認知（反転）の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は、心配性（反転）共生社会認知（反転）二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、初対面会話の設問に「そう思う」と回答した人では、共生社会認知を「知っている」と回答した人が 45%にとどまる一方で、「そう思わない」と回答した人では「知っている」が 61%である。ここから、心配性と自覚する人ほど、共生社会についてその意味も含めて認知する割合が低いと言える。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 33.482 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.120 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、心配性と共生社会認知の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これについては後ほど考察する。

表 3 Q21 心配性と Q19 共生社会認知のクロス集計表

		Q19 共生社会認知反転			
		言葉だけは聞いたこと			合計
		知らない	がある	知っている	
Q21 心配性反転	そう思わない	N 16	29	71	116
		% 14%	25%	61%	100%
	あまりそう思わない	N 40	91	162	293
		% 14%	31%	55%	100%
	どちらともいえない	N 43	126	153	322
		% 13%	39%	48%	100%
	ややそう思う	N 76	117	140	333
		% 23%	35%	42%	100%
	そう思う	N 28	30	49	107
		% 26%	28%	46%	100%
	合計	N 203	393	575	1171
		% 17%	34%	49%	100%

$\chi^2(df=8, N=1171)=33.482^{***}$, Cramer V=.120***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

さらに、一日の平均歩行時間と共生社会認知（反転）の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 4 は、一日の平均歩行時間と共生社会認知（反転）の二変数についてクロス集計表を作成したものである。共生社会について「知っている」と回答した人については、一日の平均時間が長いほど割合が僅かに増加の傾向があることが読める。一日の平均歩行時間が長い人ほど、共生社会についてその意味も含めて認知する割合が高いと言える。

表 4 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 26.608 であり、5%水準で統計的に

有意である。また、Cramer の連関係数は 0.108 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、一日の平均歩行時間と共生社会認知の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、自身の領域の広さに関連して、仮説 2 を一部支持する結果であると思われるが、詳細は後ほど考察する。

表 4 Q11 一日の平均歩行時間と Q19 共生社会認知のクロス集計表

		Q19 共生社会認知反転			
		言葉だけは聞いたこと			合計
		知らない	がある	知っている	
Q11 一日の平均歩行時間	10分未満	N 27	38	41	106
		% 26%	36%	39%	100%
	10分以上20分	N 44	63	85	192
	未満	% 23%	33%	44%	100%
	20分以上30分	N 40	74	111	225
	未満	% 18%	33%	49%	100%
	30分以上40分	N 26	56	101	183
	未満	% 14%	31%	55%	100%
	40分以上50分	N 11	33	37	81
	未満	% 14%	41%	46%	100%
	50分以上60分	N 18	45	76	139
	未満	% 13%	32%	55%	100%
	60分以上70分	N 11	39	48	98
	未満	% 11%	40%	49%	100%
	70分以上100分未満	N 5	12	24	41
		% 12%	29%	59%	100%
	100分以上	N 19	21	45	85
		% 22%	25%	53%	100%
	合計	N 201	381	568	1150
		% 18%	33%	49%	100%

$\chi^2(df=16, N=1150)=26.608^*$, Cramer V=.108*

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

上記のクロス集計群を踏まえたうえで、さらに共生社会等知識の獲得に関連の深いと考える年齢と学歴を参考に入れつつ、回帰分析を参照する。

表 5 は、共生社会認知（反転）を従属変数、一日の平均歩行時間、心配性（反転）、初対面（反転）、年齢、最終学歴を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2 値は 0.054 であり、投入した独立変数によって従属変数である共生社会認知の分散の 5.4% が説明されている。

結果をみると、一日の平均歩行時間、初対面（反転）、最終学歴が正で有意(1%水準で統計的に有意)、心配性(反転)が負で有意であった。標準化係数 (β) をみると、学歴が 0.174 と大きく、学歴が共生社会の認知度に与える影響が強いといえる。また、その他の変数を総括すると、標準化係数の絶対値を比較して、初対面での会話を楽しむ自覚があることがより共生社会の理解に影響していることが推測される。上記の結果は、仮説 2 を支持する結果と言える。

表 5 Q19 共生社会認知（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	1.751	0.154	***
Q11 一日の平均歩行時間	0.025	0.009	0.077 **
Q21 心配性反転	-0.061	0.020	-0.093 **
Q22 初対面反転	0.067	0.020	0.100 ***
Q41 年齢	0.026	0.014	0.058 †
Q43 最終学歴	0.092	0.017	0.174 ***
調整済み R^2	0.054		
N	1114		

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

5. 考察

本研究については、共生社会という概念の認知が人の生活態度に及ぼす影響の可能性を考察するべく、まずどのような人物が共生社会を認知しているのかという視点で分析を行った。具体的には、COVID-19 への不安、自殺念慮、他者への働きかけ、自身の所属意識と評価という四つの社会問題から、共生社会という概念が如何なる思考の人物により認知されているのかの分析を進めた。分析の結果より、他者への働きかけと自身の所属意識及び評価の項目については、その仮説について考察するに足る結果が得られたと見る。

まず初対面での会話態度にのみ注目するのであれば、関係の浅い他者への同調及び友好的な態度の傾向から『誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える』共生社会の概念にもよく親和する態度であることは明確である。しかしこれに加えて心配性の自覚を踏まえて再び考察するならば、単に友好的であるという要素のみならず、自身の把握する他者という存在及び社会構造への理解、すなわち共生社会という

概念において他者は尊重し認め合うものであるという視点でもって他者や社会に対する余計な不安を抱かない、というのは重要な要素だと考える。これについては学歴や年齢との関係からも考察される。つまり年齢は経験であり学歴は知識であるとするならば、他者理解や他者不安を含めた経験は、知識という新たな視点の有無によって解釈を変容させることから可能である。これが、「心配性を自覚する人ほど共生社会への認知度が低い」ことの実態ではないかと考える。

また、平均歩行時間に相関がみられるという結果は興味深い。他者への態度、心配や不安というのは内的、概念的な相互理解や自身の知覚範囲に関連するが、歩行から推察されるのは明確に外的、物理的な自身の知覚範囲である。共生社会の理解については思想や障害などの知識を中心とした内的な社会把握のみならず、実際の各人の活動範囲＝自身の所属する社会と解釈する外的な社会把握によっても促進されるのだろうか。それとも単に、検索領域の限定されがちな室内やインターネットよりも、足でもって活動する人物の方がより多様な知識を得る機会が多い傾向にあり、その過程で共生社会という概念と邂逅することもあるのだろうか。考察の余地がある。

以上のように、本研究及び調査は共生社会を認知する人物をある程度明らかにしたものの、さらに独立変数間の関係への考察や、そもそもの「知識」というものの獲得方法やその厳密な定義まで、課題が多分に残されている。立瀬ら（2022）の指摘するような性差、収入や職種による社会不安との関連についても検討の余地がある。まずは「なぜその知識を得るに至ったか」という過程を明確にすることが、今後研究すべき課題であろう。

6. 文献

- [1]…阿形恒秀(2021)『新型コロナウイルスといじめ問題——「感染に関わる差別」「感染防止に関わるストレス」といじめとの関連——』鳴門教育大学研究紀要第 36 巻 p120-131
- [2]…福井義一(2022)『わが国における新型コロナウイルス（COVID-19）感染者への 偏見や差別意識に寄与する要因,大学生における探索的検討』甲南大学紀要文学編第 172 巻 p123-139
- [3]…厚生労働省(2022)『令和 3 年中における自殺の状況』.
<https://www.mhlw.go.jp/content/R3kakutei01.pdf>
- [4]…小塩真司(2010)『二分法的思考尺度(Dichotomous Thinking Inventory)の特徴—これまでの検討のまとめと日常生活で重視する事柄との関連—』人文学部研究論第 23 巻 p45-57
- [5]…文部科学省(2012)『特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告 1・1. 共生社会の形成に向けて』.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325881.htm
- [6]…内閣府(2017)『障害者に関する世論調査』.
<https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-shougai/gairyaku.pdf>

- [7]... 日本財団 (2021) 『日本財団第4回自殺意識調査』.
https://www.nipponfoundation.or.jp/app/uploads/2021/08/new_pr_20210831_05.pdf
- [8]...立瀬剛志,石若夏季,大野将輝,関根道和(2022)『コロナ禍における自殺率都道府県格差の
関連要因』地域生活学研究第13巻 p1-9
- [9]...内田博文(2020)『ハンセン病差別と新型コロナ禍差別』部落解放・人権研究所 HP.
https://blhrri.org/user_pdf/topics/20200527100305_1.pdf

第8章 SNSの利用が友人満足度にもたらす影響

岸 凌太郎

1. はじめに

総務省から出されている令和3年度情報通信白書によると、日本国民のインターネットの利用率は83.4%、SNSの使用率が73.8%となっている。これらからSNSやインターネットの普及、発展により社会のあり方が変わっていることがわかり、それに伴い、友人との接し方も変化している。その中で、友人に対しての印象、満足度も同様に変化していると考えられる。ところが、古谷ら(2006)の研究を見ると、携帯電話というコミュニケーションツールは友人と連絡するツールとして用いられているが友人満足度との相関が見られなかったと述べられている。

このことをふまえた上で、本研究では、長年を経てSNSがさらに普及したことによってSNSが友人満足度にどのような影響をもたらしているかに焦点を当てて分析する。そしてこれらを調査した結果、今後のSNSとの関わり方、友人との交流の形が見えてくるのではないかと考える。

2. 仮説

2.1. 先行研究

河井(2014)の研究によると、ソーシャルメディア・パラドックスという現象がある。これはSNSで投稿をすることで、自尊感情が満たされ友人満足度が上がる一方で、SNS上でトラブルが起こると低下するという現象のことである。また、SNSの新規利用者は閲覧頻度が高いほど友人満足度が低くなり孤独感が高まることがあるとされる一方で、投稿頻度が上がると友人満足度は高くなる可能性があるとされている。

また別の観点から述べると、橋元(2018)によるとSNSへの依存は孤独な人の癒やしや自己表現欲求の充足になるとされており、逆にアクセスしないと孤独不安を感じるとされる。

2.2. 仮説

先ほどの橋元(2018)の研究や河井(2014)の研究から考察すると、SNSの利用のし過ぎで孤独感が増し、結果として、友人満足度は低くなると考察できる。また、総務省から出されている令和3年度情報通信白書によると、20代のSNS利用率は90.4%に対して60代は60.6%、70代と80代の利用率は60代よりさらに低い利用率で若者と比べて減少傾向にある。

仮説 1 SNS の利用時間が長いほど友人関係の満足度は下がる。

仮説 2 年齢が高いほど（60 代以上）SNS の利用が減り友人満足度が上がる。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和四年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,214、回収率は 60.7%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q32：あなたは普段、1日にどのくらいの時間、SNS（Twitter、Instagram、Facebook など）に触れていますか。

1. 全く使用しない
2. 20 分未満
3. 20 分以上 40 分未満
4. 40 分以上 1 時間以内
5. 1 時間以上 2 時間未満
6. 2 時間以上

Q34：あなたは、現在の友人との関係に全体としてどのくらい満足していますか。

1. 満足
2. やや満足
3. どちらともいえない
4. やや不満
5. 不満
6. 友人はいない

Q34：あなたは、現在の友人との関係に全体としてどのくらい満足していますか（友人満足度（反転））。

1. 満足
2. やや満足
3. どちらともいえない
4. やや不満
5. 不満
6. 友人はいない

上記の選択肢に対して数字が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った上で、6. 友人はいないを欠損値として処理した。

Q40：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1. 男性
2. 女性

上記の選択に対して、女性を 1、男性を 0 とする女性ダミーを作成した。

Q41：あなたの年齢をお答えください。（年齢（実数））

1. 18 歳、19 歳
2. 20 代
3. 30 代
4. 40 代
5. 50 代
6. 60 代
7. 70 代以上

4. 分析

はじめに、SNS の 1 日の利用時間と友人関係の満足度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表1は、SNSの1日の利用時間と友人関係の満足度の二変数についてクロス集計表を作成した物である。まず、SNSの1日の利用時間という設問に「全く使用しない」と回答した人のうち友人関係の満足度を「満足」と回答した人が17%であるのに対し、「2時間以上」SNSを1日に利用している人は「満足」と回答した人が33%存在する。また、SNSの利用時間を「2時間以上」と回答した人のうち「どちらともいえない」「やや不満」「不満」「友人はいない」と答えた人は合わせて35%であるのに対し、「全く使用しない」と答えた人は45%存在する。ここから、SNSの1日の利用時間が長い人は友人関係の満足度が高いことがわかる。

表1のカイ2乗検定の結果をみると、カイ2乗値は98.491であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramerの連関係数は0.130と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、SNSの1日の利用時間と友人関係の満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説1を支持しない結果である。

表1 Q32 SNSの1日の利用時間とQ34 友人関係の満足度のクロス集計表

		Q34 友人関係の満足度							
		どちらとも					友人はいない		合計
		満足	やや満足	いえない	やや不満	不満	い		
Q32 SNSの1日 の利用時 間	全く使用しない	N	74	159	144	14	6	30	427
		%	17%	37%	34%	3%	1%	7%	100%
	20分未満	N	52	76	79	14	8	4	233
		%	22%	33%	34%	6%	3%	2%	100%
	20分以上40分	N	45	59	32	6	1	1	144
	未満	%	31%	41%	22%	4%	1%	1%	100%
	40分以上1時間	N	19	58	27	9	0	1	114
	未満	%	17%	51%	24%	8%	0%	1%	100%
	1時間以上2時	N	51	54	24	7	0	2	138
	間未満	%	37%	39%	17%	5%	0%	1%	100%
2時間以上	N	38	36	24	9	0	7	114	
	%	33%	32%	21%	8%	0%	6%	100%	
合計	N	279	442	330	59	15	45	1170	
	%	24%	38%	28%	5%	1%	4%	100%	

$\chi^2(df=25, N=1170)=98.491^{***}$, Cramer V=.130***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表2は、友人関係の満足度（反転）を従属変数、SNSの1日の利用時間、女性ダミー、年齢（実数）独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済みR2乗値は0.025であり、投入した独立変数によって従属変数である友人関係の満足度の分散の2.5%が説明されている。

結果をみると、SNSの1日の利用時間、女性ダミーが正、年齢（実数）が負で有意であった。これはSNSの1日の利用時間が長く、女性であると友人関係の満足度が高いことがわかる。標準化係数（ β ）をみると、SNSの1日の利用状況が0.099と大きく、SNSの1日の利用時間が友人関係の満足度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説1、仮

説 2 を支持しない結果である。

表 2 Q34 友人関係の満足度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	3.748	0.138	***
Q32 SNSの1日の利用時間	0.053	0.018	0.099 **
Q40 女性ダミー	0.162	0.055	0.087 **
Q41 年齢（実数）	-0.003	0.002	-0.058 †
調整済みR ²	0.025		
N	1103		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本研究では SNS の 1 日の利用時間が友人関係の満足度にもたらす影響を明らかにすることを目的として調査分析を行った。具体的には、SNS の 1 日の利用時間が長いほど友人関係の満足度は下がるという仮説を立て、SNS の 1 日の利用時間と友人関係の満足度の質問項目を使い分析を行った。分析の結果から、「SNS の利用時間が長いほど友人関係の満足度は下がる」という仮説は支持されなかった。

なぜ仮説が支持されなかったか考察すると、Instagram の普及が理由の一つとして挙げられる。友人との連絡手段の一つとして SNS が用いられるようになり、Instagram の DM 機能ならば、いつでも友人と会話をすることができるため、SNS を利用することでかえって友人関係の満足度が上がるという結果がうまれたと考える。さらに、現在では友人関係のあり方は直接会って交流するというあり方だけではなくなったと考える。

また、昨今の新型コロナウイルスの感染状況によって、外出を控え自宅にいたことが推奨されていたため、人間関係において人と会って交流するという形が減少した。それに伴い友人関係のあり方として直接会って交流するという形が減少したと考える。

これらのことから、SNS の利用は友人関係に対して良好な関係を持っているため、連絡手段や友人関係の構築手段として積極的に活用するべきであると考ええる。そして友人との交流の形として対面のみこだわらず SNS の利用もするべきであると結論づける。

6. 文献

- [1]…古谷嘉一郎・坂田桐子（2006）「対面，携帯電話，携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果：コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して」『社会心理学研究』22(1): pp.72-84.
- [2]…河井大介（2014）「ソーシャルメディア・パラドクス：ソーシャルメディア利用は友人関係を抑制し精神的健康を悪化させるか」『社会情報学』3(1): pp.31-46.

- [3]...橋元良明（2018）「ネット依存の現状と課題—SNS 依存を中心として」『ストレス科学
研究』 33: pp.10-14.
- [4]...令和三年度情報通信白書.
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/r03.html>
(2023 年 1 月 15 日閲覧)

第9章 森林レクリエーション活動の CVM 分析

今村 勇哉

1. はじめに

本研究では、大阪市の近郊に位置し大都市圏に含まれる一方で、多様な自然環境が郊外に立地するという特徴的な地域である高槻市における環境に対する価値づけと、他の地域における環境に対する価値づけとの差異が存在するのかを明らかにする。

具体的には、高槻市においては、中心部と郊外において森林面積に大きな差異が存在するが、こうした地域間の特徴の差異が、各地域に住む人々の森林レクリエーション活動に対する選好に影響を与えるのかを CVM(Contingent Valuation Method)によって分析する。

高槻市は、森林資源が希少な地域とそうでない地域が並立するという特性があり、森林が存在する地域では定期的にレクリエーション活動・森林保全活動などが行われている。その一方で、高槻市中心部は森林密度が低くこのような活動の供給量は少ない。

環境の価値には、大きく分けて 2 つの価値が存在し、それぞれ利用価値・非利用価値とされている。さらに、利用価値に分類されているが、将来時点において現在の利用と同程度の水準を利用できる価値という意味で、被験者が他人の利用に対して価値を見いだす「代位効果」や、「イメージアップ効果」などと合わせて存在そのものに対する価値であるために非利用価値であるという議論もある。

環境（森林）のレクリエーション利用による間接的な利用価値と、将来においても現在と同程度にそれを体験できるというオプション価値に対する支払意思額を測定することが本研究の目的である。さらに面接調査の場合、質問者が好ましいと考える回答に関して、回答者が質問者にとって望ましい方向になるような回答になるような回答をすることによって生じるバイアスである質問者バイアスや、質問者に喜ばれるような回答をすることによって生じるバイアスである追従バイアスは、郵送調査で行う本研究においては生じないと考えられる。

2. 仮説

2.1. 先行研究

佐藤ら(2019)は CVM による森林資源の原単位経済価値評価を目的として 2015 年 11 月 16 日から 12 月 4 日まで全国の 192,704 人に対しインターネット調査を行った。森林資源のもつ環境機能や生態系機能に関する重要性を問う設問を作成するなど評価対象の性質の再認識を促す方法がとられている。また、支払カード型の CVM 質問により価値評価を行っている。森林が希少な地域ほど 1ha の森林に対する WTP が高いという結果が得られた。より森林が身近に存在する地域の住民ほど、森林に対する主観的価値は低いということ

である。また、世帯所得が高い家計ほど WTP が高くなっているという関係が示唆されている。

CVM はアンケートを利用するために、その設計によりバイアスを受けやすいという欠点が報告されている。そこで栗山他(1999)は 4 回のパイロットサーベイを行なった上で、全国規模の訪問面接アンケートを実施し、パイロットとファイナルサーベイの評価結果の比較を行った。パイロット 1 は電話調査、パイロット 2 は街頭面接調査、パイロット 3 では訪問面接調査で行われているが、こうしたアンケート方式が支払意思額に与える影響が存在しないことを明らかにした。

2.2. 仮説

以下の二肢選択モデル（変形版）を作成することで得られる結果を被説明変数として、また摂津峡・三好山周辺（緑地）への訪問有無や年齢などのデータを、説明変数とした回帰モデルを作成する。

特定のグループにおける WTP（支払意思額）を推定するため、以下に示すいくつかのモデルを作成して、複数の社会的属性を持つ回答者の森林レクリエーション活動に対する価値を推定し、全体的な WTP との違いを見る。

また、これまでの森林利用に関する CVM による研究結果や、他地域で徴収されている金額などを考慮すると、平均的には年間数百円程度であれば許容できると考える回答者が多いのではないかと考える。そこで以下のような仮説を立てた。

- 仮説 1 高齢者ほど森林レクリエーション活動実施に対する支払意思額は高い。
- 仮説 2 森林レクリエーション活動実施に対する支払意思額は数百円程度である
- 仮説 3 摂津峡・三好山周辺への訪問をしたことがある回答者ほど森林レクリエーション活動実施に対する支払意欲は高い。
- 仮説 4 予算（年収）が高い回答者ほど森林レクリエーション活動実施に対する支払意欲は高い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和四年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,214、回収率は 60.7%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q14：あなたは、この１年以内に、摂津峡・三好山周辺を訪れましたか。

1. 訪れた 2. 訪れていない

上記の選択に対して、訪れたを 1、訪れていないを 0 とする訪問ダミーを作成した。

Q17：仮にいま、あなたがお住まいの地域の住民の間で、５年間かけて、森林レクリエーション活動※ができるように整備するという案がでてきたとします。この案を実施するために、地域住民でお金を出し合うとしたら、あなたはお金を負担しても良いと思いますか。

※森林レクリエーションとは、ハイキング・登山、森林浴など森林内で実施する保健・文化・教育的な活動のことです。

1. 適当な金額ならば負担する 2. 負担しない 3. わからない

上記の選択に対して、3. わからないは欠損値として処理した。

Q18：この案を実施するにあたって、１年あたりの負担金額が、以下に示す A～E のそれぞれの場合、あなたは案に賛成しますか。賛成しませんか。それぞれ選んでください。（賛成するダミー）

A. 200 円の場合 B. 400 円の場合 C. 1000 円の場合 D. 2000 円の場合 E. 2000 円の場合 のそれぞれについて 1. 賛成する 2. 賛成しない

上記の選択に対して、賛成するを 1、賛成しないを 0 とする賛成するダミーを作成した。

Q41：あなたの年齢をお答えください。

1. 18 歳、19 歳 2. 20 代 3. 30 代 4. 40 代 5. 50 代 6. 60 代 7. 70 代以上

Q45：高槻市には現在までどのくらいお住まいですか。

1. 1 年未満 2. 1 年以上 3 年未満 3. 3 年以上 5 年未満 4. 5 年以上 10 年未満
5. 10 年以上 15 年未満 6. 15 年以上 20 年未満 7. 20 年以上 30 年未満
8. 30 年以上 40 年未満 9. 40 年以上 50 年未満 10. 50 年以上

Q51：過去一年間のあなたの世帯の収入はどれくらいですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください。

1. 100 万円未満 2. 100 万円～200 万円未満 3. 200 万円～400 万円未満 4. 400 万円～600 万円未満 5. 600 万円～800 万円未満 6. 800 万円～1000 万円未満 7. 1000 万円～1500 万円未満 8. 1500 万円以上 9. わからない

上記の選択肢を、2. 200 万円未満、2. 200 万円～400 万円未満、3. 400 万円～600 万円未満、4. 600 万円～800 万円未満、5. 800 万円～1000 万円未満、6. 1000 万円以上、の 6 カテゴリに合併した上で、9. わからないは欠損値として処理した。

4. 分析

はじめに、森林レクリエーション活動の整備に対する負担可否と年齢の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、森林レクリエーション活動の整備に対する負担可否と年齢の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、年齢が 20 歳未満（18 歳、19 歳）の人では、例外的に 4 人全員が負担すると回答したものの、20 歳以上の人においては年齢が上昇するほど森林レクリエーション活動の整備に対して「適当な金額ならば負担する」と回答した人の割合が増加している。例えば、20 代の回答者で「適当な金額ならば負担する」と回答した割合は 57.1%である一方で、70 代の回答者においてはその割合が 80.7%と高い水準になっていることがわかる。ここから、若年層ほど森林レクリエーション活動に対する支払意思が低く、高齢者ほど森林レクリエーション活動に対する支払意思が高いことがわかる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 22.815 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は.165 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、森林レクリエーションに対する負担の可否と年齢の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

表 1 Q41 年齢と Q17 森林レクリエーション活動に対する負担可否のクロス集計表

		Q17.森林レクリエーション 活動のための整備案(仮) の実施にお金を負担するか		
		適当な金額 なら負担する	負担しない	合計
Q41 年齢	18歳,19歳	N 4	0	4
		% 100.0%	0.0%	100.0%
	20代	N 36	27	63
		% 57.1%	42.9%	100.0%
	30代	N 57	32	89
		% 64.0%	36.0%	100.0%
	40代	N 106	41	147
		% 72.1%	27.9%	100.0%
	50代	N 107	42	149
		% 71.8%	28.2%	100.0%
	60代	N 107	30	137
		% 78.1%	21.9%	100.0%
	70代	N 201	48	249
		% 80.7%	19.3%	100.0%
合計		N 618	220	838
		% 73.7%	26.3%	100.0%

$\chi^2(df=6, N=838)=22.815(***)$, CramerV=.165(***)

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<0.1

次に、統計ソフト R により分析した結果を用いて、高槻市の住民が森林レクリエーション活動の整備に対してどの程度の潜在的な需要を持っているかを、以下の図 1 に示す。

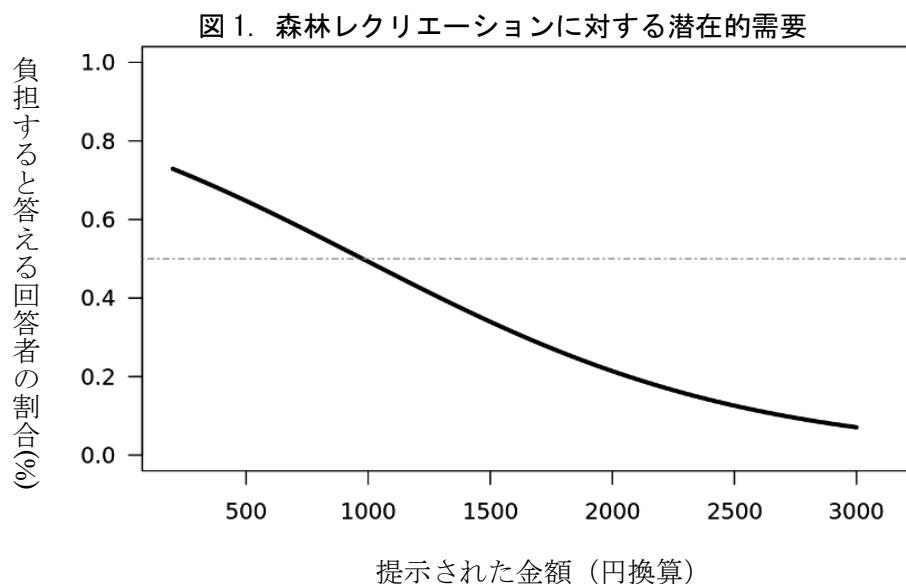


図 1 の曲線は、森林レクリエーションに対して負担する金額(WTP)と、その負担する人の割合（推定）の結果である。中央付近にひかれてある水平線（点線）は全体の 50%を表し、この直線と曲線の交点である約 1000 円という金額は、半数の人が受け入れる金額であることを示している。ここでわかることは、森林レクリエーションに対して事前の想定よりも高い潜在的な需要が存在することである。このことについては、以下で詳しく分析する。

表 2 は、森林レクリエーション活動に対する賛否(Q18)を従属変数、摂津峡・三好山に対する訪問ダミー(Q14)、居住年数(Q45)、世帯年収(Q51)、提示金額(BID)を独立変数、年齢を交絡（調整）変数として投入したロジスティック回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R2 値は 0.226 であり、投入した独立変数によって従属変数である森林レクリエーションに対する賛否の分散の 22.6%が説明されている。また、モデルの予測性能を示す AIC（赤池情報量規準）は 746.4 , BIC（ベイズ情報量規準）は 773.7 であった。また、ここで調整変数を投入している理由は、年齢による影響を所与として考えるためである。

結果をみると提示金額(BID)と訪問ダミーが負で有意、世帯年収が正でそれぞれ有意水準 5%で有意であり、居住年数についてはこのモデルにおいては有意な差はみられなかった。ここから、世帯年収（1 世帯当たりの可処分所得）が高いほど森林レクリエーション活動に対する支払意思額は高くなることがわかる。上記の結果は、仮説 4 を支持する結果である。

一方で、摂津峡・三好山を訪問したことを表す訪問ダミーについては有意水準 5%で有意に負であったことから、こうした地域を訪問（利用）した人ほど支払意思額が低い結果となった。上記の結果は、仮説 3 を支持しない結果である。

標準化係数 $\exp(\beta)$ をみると、提示金額が -12.08 と絶対値が最も大きい。このことから

(支払) 提示金額の大きさが森林レクリエーション活動への賛否に与える影響は大きいと言える。

表 2 Q18 森林レクリエーションに対する賛否のロジスティック回帰分析

	B	SE	exp (β)
(定数)	0.707	0.617	1.146
Q41	0.209	0.071	2.926 **
Q45	-0.405	0.194	-2.086
Q14	-0.068	0.055	-1.228 *
Q51	0.158	0.056	2.805 **
Q18	-0.001	0.000	-12.075 ***
調整済み	0.2262		
N	701		

***p<.001,**p<.01,*p<.05,+<.1

次に、仮説 2 をさらに検証するために、上記のモデルから得られた結果を利用して支払意思額（平均値・中央値）を求める。以下の表 3 はその結果である。

表 3. WTP 推定値と信頼区間

	Estimate	LB	UB
平均値	1164.6	1029.6	1310.0
調整済み平均値	1191.2	1042.7	1355.6
中央値	984.6	846.0	1132.1

上記の結果の通り、森林レクリエーション活動に対する平均的な支払意思額(WTP)は 1191 円である。またブートストラップ法で測定した 95%信頼区間は 1029~1310 円である。中央値は 985 円であり、信頼区間は 846.0~1132 円である。中央値の 95%信頼区間で WTP を見ると仮説 2 の通り数百円程度からおおよそ 1000 円程度であるとわかる。

5. 考察

以上の分析結果を踏まえたうえで、森林レクリエーション活動の在り方と今後の政策的側面について考察する。

まず、高槻市における地理的側面から考察すると【摂津峡・三好山周辺】といった自然環境豊かで、森林利用の代表的な地域に訪れた回答者ほど森林レクリエーションに対する支払意思額が低い結果になったことから、まだ森林利用を行っていない回答者に対して山林地域におけるキャンプや山登りなどの高槻市内における日帰り旅行などの企画を行うことが有効だと考えられる。

次に年代や世帯年収などの属性の側面から考察する。20 歳未満のデータは不足している

が、このような回答者においても一定程度の需要があることが確認できるため、教育的な目的で活動を行っていくことも有効な手段である。加えて高齢者ほど高い利用価値をつけている傾向があるので、中高年向けの山菜採集などの森林内でのイベントの企画も有効である。また、可処分所得が高い回答者ほど森林の利用価値が高いことがわかるため、単なる森林利用にとどまらず、山林内で採集された食材を利用する飲食店・レストランなどでのイベントなどを通じてより高い付加価値をつけることが必要である。

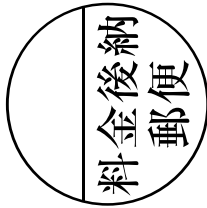
近年の感染対策意識の高まりにより、他府県への旅行を控える人が多くなっている状況下で、今後はこうした県内での森林利用の形にどの程度の需要があるのかといった研究が求められるだろう。

6. 文献

- [1]...岩田 健吾・藤野正也・栗山浩一（2021）「森林生態系サービスの経済価値評価 ―滋賀県の水源林を事例として―」『森林応用研究』30 巻 1 号 p. 1-10
- [2]...太田晃子・蓑茂寿太郎（2000）『CVM による「屋久島」の価値評価とその信頼性：パイロットとファイナルサーベイの比較』『ランドスケープ研究』64 巻 5 号 p. 679-684.
- [3]...河川環境整備に関わる CVM を適用した経済評価検討会（2008）『CVM を適用した河川環境整備事業の経済評価の指針』
https://www.mlit.go.jp/river/basic_info/seisaku_hyouka/gaiyou/hyouka/h2005/cvm.pdf (参照日：2022-07-21).
- [4]...栗山 浩一, 北畠 能房, 大島 康行（1999）「CVM による「屋久島」の価値評価とその信頼性：パイロットとファイナルサーベイの比較」『林業経済研究』45 巻 1 号 p. 45-50.
- [5]...栗山浩一・庄子康（2008）「協力金が訪問行動に及ぼす影響の経済分析―屋久島における CVM による実証研究」『環境科学誌』21 巻 4 号 p. 307-316.
- [6]...栗山浩一（2011）「Excel でできる CVM」『環境経済学ワーキングペーパー』p. 1-19.
- [7]...佐藤 真行・栗山 浩一・藤井 秀道・馬奈木 俊介（2019）「日本における森林生態系サービスの経済評価」『統計数理』67 巻 第 1 号 3-20
- [8]...庄子康, 栗山浩一（1998）「自然公園における利用者規制の環境経済学的分析：北海道雨竜沼湿原を事例として」『北海道大学農学部 演習林研究報告』55(2), pp. 369-414.
- [9]...末廣 拓登・伊藤弘・武正憲（2021）「国立公園阿蘇地域における来訪者の観光行動と環境保全への支払意思額の関係」『環境情報科学』35 巻 p. 221-226
- [10]...李承吉・李恍玉・愈昌根（2014）「自然公園の利用価値及び支払意思の決定要因：観光句の無等山道立公園に関する実証研究」『日本国際観光学会論文集』21 巻 p. 93-98.

資料：
予告はがき・調査票

郵便はがき



--	--	--	--	--	--	--	--

「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」 ご協力のお願い

高槻市と関西大学は、高槻市民の生活ともの見方についての調査を共同で実施することになりました。調査の対象は、無作為に選ばれた18歳以上の市民の方です。

近日中に調査票の入った大きな茶封筒（ボールペン入り）が届きます。ご多忙中、誠に恐縮ですが、届き次第、調査票に回答をご記入の上、ご返送頂きますようよろしくお願い申し上げます。

令和4年8月



関西大学



市民生活環境部 市民生活相談課
〒569-0067 高槻市桃国町2-1
TEL 072-674-7130

関西大学 総合情報学部
〒569-1095 高槻市霊仙寺町2-1-1
TEL 072-690-2151

※あて所に尋ねあたらない場合は、高槻市へ返戻して下さい。

予告はがき

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査

(調査実施) 高槻市・関西大学総合情報学部

高槻市と関西大学は共同で、市政と市民生活に関する調査を行っています。市は、今後の施策を検討するうえでの基礎資料とすることを目的に、大学は、高槻市民の生活とものの見方に関する研究と教育を行うことを目的に実施するもので、調査の対象は、住民基本台帳から無作為に選ばれた18歳以上の市民の方です。封筒宛名のご本人様ご自身の回答を、この調査票にご記入いただきますようお願いいたします。調査の回答は、調査の目的以外には、一切利用いたしませんので安心してお答えください。

調査結果につきましては、本年12月頃に速報版を、翌年3月中旬に最終報告書を発行し、高槻市と関西大学で閲覧できるようにいたします。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

*ボールペンを同封しております。回答の際にご利用ください(返却の必要はありません)。

*ご回答は、とくに断りがなければ、選択肢番号を1つだけ選んでマルをつけてください。マルをつける個数が決められていたり、回答していただく方が限られていたりするものは、指示に従ってお答えください。

*お忙しいところ誠に恐縮ですが、**9月9日(金)**までに、同封の封筒(切手貼付済み)でご返送いただきますようお願いいたします。

*この調査票と封筒には、ご住所やお名前を記入されないようお願いいたします。

(どなたがどのような回答をされたかわからないようにするためです。)

<調査に関するお問い合わせ> 高槻市 市民生活環境部 市民生活相談課

tel : 072-674-7130

関西大学 総合情報学部

tel : 072-690-2151

Q1. あなたは、現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q2. あなたは、現在どのくらい幸せですか。

1	2	3	4	5
幸せ	やや幸せ	どちらともいえない	やや不幸せ	不幸せ

Q3. あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q4. あなたは、現在お住まいの地域にどのくらい「住み続けたい」と思いますか。

1	2	3	4	5
ずっと住み続けたい	住み続けたい	まあ住み続けたい	どちらともいえない	機会があれば引っ越したい

Q5. あなたは、高槻市には地域ブランドと呼べるような特産品や観光地があると思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q6. あなたが買い物・食事・娯楽などで中心市街地(JR高槻駅・阪急高槻市駅周辺)に行く頻度は、5年前と比べて増加しましたか。それとも減少しましたか。

1	2	3	4	5	6
増加した	少し増加した	変わらな	少し減少した	減少した	5年前を知らない

Q7. あなたは、中心市街地（ＪＲ高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に関する以下の点について、５年前と比べて向上したと思いますか。それとも低下したと思いますか。

A. 防災面での安全性や快適性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	５年前を知らない

B. 防犯面での安全性や快適性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	５年前を知らない

C. 居住環境

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	５年前を知らない

D. 公共交通機関の利便性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	５年前を知らない

E. 歩行者にとっての歩きやすさ

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	５年前を知らない

F. 風紀や治安

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	５年前を知らない

Q8. あなたは、中心市街地（ＪＲ高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に関する以下の点について、５年前と比べて増加したと思いますか。それとも減少したと思いますか。

A. 文化活動

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

B. コミュニティ活動

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

C. 商店街の魅力

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

D. 百貨店などの大型店の魅力

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

E. 買い物やイベントでのにぎわい

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

F. 魅力的な飲食店

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

G. オフィスなど業務施設

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

H. 病院などの医療機関

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

I. 道路の渋滞

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

J. 駐輪場

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

K. 駐車場

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

L. 街なかの緑や潤い

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	５年前を知らない

Q9. 中心市街地（ＪＲ高槻駅・阪急高槻市駅周辺）を住み良い街にするために、あなたはどのような取り組みが必要だと思いますか。３つ以内にマルをつけてください。

1. 街路樹や植栽、公園の整備など、緑豊かな住居環境の向上を図る
2. 日常生活に困らないよう、スーパーマーケットや食料品店などの充実を図る
3. 休日や夜間の突然の病気やケガで困らないよう、病院など医療機能の充実を図る
4. 安心・安全に生活できるよう、治安・防犯の向上を図る
5. 高齢者等も安全・快適に生活できるよう、街のバリアフリー化を図る
6. 民間のマンションや公的住宅など、中心市街地での住宅の供給を促進する
7. その他（ ）
8. 今以上の取り組みは必要ない

Q10. 高槻市の交通手段におけるそれぞれの現状について、あなたはどのくらい満足していますか。

A. 【徒歩】：歩道の整備の状況

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

B. 【徒歩】：バリアフリー化

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

C. 【自転車】：通行するために必要なスペース

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

D. 【自転車】：駐輪場

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

E. 【自転車】：乗っている人々のマナー

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

F. 【バイク】：通行するために必要なスペース

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

G. 【バイク】：駐車場

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

H. 【バイク】：乗っている人々のマナー

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

I. 【バス】：路線・系統

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

J. 【バス】：ダイヤ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

K. 【バス】：バス停

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

L. 【バス】：乗り方の分かりやすさ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

M. 【鉄道】：駅の使いやすさ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

N. 【鉄道】：列車ダイヤ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

O. 【自動車】：道路の整備の状況

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

P. 【自動車】：駐車場

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

Q. 【タクシー】：利用しやすさ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

Q11. あなたは、1日に平均して何分くらい歩いていますか。

- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 10分未満 | 6. 50分以上60分未満 |
| 2. 10分以上20分未満 | 7. 60分以上70分未満 |
| 3. 20分以上30分未満 | 8. 70分以上100分未満 |
| 4. 30分以上40分未満 | 9. 100分以上 |
| 5. 40分以上50分未満 | |

Q 1 2. あなたの関心が高い、環境問題に関する話題は何ですか。3つ以内でマルをつけてください。

- | | | |
|---------------|----------------|-----------------|
| 1. 地球温暖化 | 8. 悪臭 | 15. 食の安全性 |
| 2. ヒートアイランド現象 | 9. 水質汚濁 | 16. 食品ロス |
| 3. 異常気象 | 10. 土壌汚染 | 17. ごみの減量、リサイクル |
| 4. 省エネルギー（節電） | 11. 生物多様性、外来生物 | 18. 不法投棄 |
| 5. 再生可能エネルギー | 12. 森林荒廃 | 19. その他（ ） |
| 6. 大気汚染、PM2.5 | 13. 景観保全 | |
| 7. 騒音、振動 | 14. 都市緑化 | 20. いずれにも関心がない |

Q 1 3へ

Q 1 3. あなたは「生物多様性」という言葉とその意味を知っていますか。

- | | | |
|-------------|------------------|------|
| 1 | 2 | 3 |
| 言葉も意味も知っている | 言葉は知っているが意味は知らない | 知らない |

Q 1 4. あなたは、この1年以内に、摂津峡・三好山周辺を訪れましたか。

- | | |
|--------|-----------|
| 1. 訪れた | 2. 訪れていない |
|--------|-----------|

Q 1 6へ

Q 1 5. 訪れた目的は何ですか。該当するものをいくつでもお選びください。

1. 花見（桜など）
2. 紅葉見物
3. ハイキング
4. 川遊び
5. 歴史散策（芥川山城跡など）
6. 自然観察（ホタルなど）
7. 環境活動（ボランティアなど）
8. 公園利用
9. キャンプ
10. 宿泊・温泉
11. カフェ・レストラン
12. その他（ ）
13. 特に目的はない

右上のQ 1 6へ

Q 1 6. 次に、現在の高槻市の環境に関するA～Dの項目について、あなたのお考えをおうかがいします。

A. 高槻市には、身近な自然環境とのふれあいがあると思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

B. 高槻市は、不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちだと思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

C. 高槻市には、良好な環境づくりを目指した活動が豊富にあると思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

D. 高槻市には、環境活動に関する情報や呼びかけが十分にあると思いますか。

- | | | | |
|------|--------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう思う | ややそう思う | あまりそう思わない | そう思わない |

Q17. 仮にいま、あなたがお住まいの地域の住民の間で、5年間かけて、森林レクリエーション活動※ができるように整備するという案がでてきたとします。この案を実施するために、地域住民でお金を出し合うとしたら、あなたはお金を負担しても良いと思いますか。

※森林レクリエーションとは、ハイキング・登山、森林浴など森林内で実施する保健・文化・教育的な活動のことです。

1 適切な金額ならば負担する
2 負担しない
3 わからない

Q18へ

Q19へ

Q18. この案を実施するにあたって、1年あたりの負担金額が、以下に示すA～Eのそれぞれの場合、あなたは案に賛成しますか。賛成しませんか。それぞれ選んでください。

年間負担金額

- | | | |
|-------------|---------|----------|
| A. 200円の場合 | 1. 賛成する | 2. 賛成しない |
| B. 400円の場合 | 1. 賛成する | 2. 賛成しない |
| C. 1000円の場合 | 1. 賛成する | 2. 賛成しない |
| D. 2000円の場合 | 1. 賛成する | 2. 賛成しない |
| E. 3000円の場合 | 1. 賛成する | 2. 賛成しない |

Q19. あなたは、障害のある・なし等にかかわらず、誰もが社会の一員としてお互いを尊重し、支え合って暮らすことを目指す「共生社会」という考え方を知っていますか。この中から1つだけお答えください。

1 知っている
2 言葉だけは聞いたことがある
3 知らない

Q20. あなたは、最近、気が沈んだり、気が重くなることがありますか。

1 全くない
2 少しだけある
3 ときどきある
4 たいいていある
5 いつもある

Q21. あなたは、いつも心配事が多く、不安になりやすい方だと思いますか。

1 そう思う
2 ややそう思う
3 どちらともいえない
4 あまりそう思わない
5 そう思わない

Q22. あなたは、初対面の相手との会話を楽しむことができる方だと思いますか。

1 そう思う
2 ややそう思う
3 どちらともいえない
4 あまりそう思わない
5 そう思わない

Q23. 自殺で亡くなる人の数は全国で年間約2万人となっています。あなたは毎年、このように多くの方が自殺で亡くなっていることをご存知ですか。

1. 知っている 2. 知らない

Q24. あなたは、自殺について相談できる機関があるのをご存知ですか。(例えば、保健所 ところの健康相談など)

1. 知っている 2. 知らない

Q25. あなたは、これまでの人生の中で本気で自殺したいと考えたことがありますか。

1. ある 2. ない

Q26. あなたは、もし身近な人から「死にたい」と打ち明けられたとき、どう対応するのが良いと思いますか。適切と思われるものをいくつかもお選びください。

1. 相談に乗らない、もしくは話題を変える
2. 「死んではいけない」と説得する
3. 「つまらないことを考えるな」と叱る
4. 「がんばって生きよう」と励ます
5. 「死にたいぐらい辛いんだね」と共感を示す
6. 「医師など専門家に相談した方が良い」と提案する
7. ひたすら耳を傾けて聞く
8. その他 ()
9. 適切と思われる対応はない

Q27. 今後の自殺対策について、おうかがいします。
今後、どのような自殺対策が求められるとあなたは思いますか。いくつかもお選びください。

1. 自殺の実態を明らかにする調査・分析
2. 危険な場所、薬品等の規制
3. インターネットにおける自殺関連情報の対策
4. 自殺に関する広報・啓発
5. 適切な精神科医療体制の整備
6. 職場におけるメンタルヘルス対策の推進
7. 自殺対策に関わる民間団体の支援
8. 様々な分野におけるゲートキーパー※の養成
9. 様々な悩みに対応した相談窓口の設置
10. 地域やコミュニティを通じた見守り・支え合い
11. 子どもの自殺予防
12. 自殺未遂者の支援
13. 自死遺族等の支援
14. その他（ ）
15. 特になし

※「ゲートキーパー」とは、悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聴いて、必要な支援につなげ、見守る人のことです。

Q28. 自殺したいという気持ち乗り越えるには、どのような方法が適切と思われますか。適切と思われるものをいくつかもお選びください。

1. 家族や友人、職場の同僚など身近な人に悩みを聞いてもらう
2. 医師やカウンセラーなど心の健康に関する専門家に相談する
3. 弁護士や司法書士、公的機関の相談員など、悩みの元となる分野の専門家に相談する
4. できるだけ休養を取るようにする
5. 趣味や仕事など他のことで気を紛らわすよう努める
6. 特に何もしない
7. その他（ ）
8. 適切と思われる方法はない

Q29. 次のa～sは、市の仕事のうち、生活に関係の深いものをあげています。

以下から、①あなたが、最近良くなってきたと思うもの（マルはいくつでも）、また、②あなたが、今後力を入れてほしいもの（マルは3つまで）をそれぞれ選んでください。

②力を入れてほしいもの（3つまで）		
① 良くなってきたもの（いくつでも）		↓
a. 学校教育の充実、青少年の健全育成	1	1
b. 図書館、博物館などの文化施設の整備	2	2
c. スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	3	3
d. 高齢者や障がい者等への福祉対策	4	4
e. 医療施設や救急医療体制の整備	5	5
f. 空気の汚れ、騒音などへの対策	6	6
g. 公園の整備や自然・緑の保全	7	7
h. 街並み・景観の整備	8	8
i. 駅前の整備、駐車・駐輪対策	9	9
j. ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	10	10
k. 下水道の整備	11	11
l. 水の安定供給、上水道整備	12	12
m. バス・鉄道などの公共交通機関の整備	13	13
n. 身のまわりの生活道路の整備	14	14
o. 交通安全・災害防止対策	15	15
p. 公営住宅の建設や住宅融資制度	16	16
q. 市の広報・窓口相談、情報公開の充実	17	17
r. 災害対策・防犯対策	18	18
s. 子育て支援	19	19
t. 特になし	20	20

Q30. あなたは、『「高槻市みらいのための経営革新」に向けた改革方針』をご存知ですか。

1	2	3
名前も内容も 知っている	名前だけ 知っている	知らない

Q31. あなたは、高槻市が20年後、30年後を見据えて行財政改革に取り組む必要性を感じますか。

1	2	3	4
感じる	やや 感じる	あまり 感じない	感じない

Q 3 2. あなたは普段、1日にどのくらいの時間、SNS (Twitter、Instagram、Facebook など)に触れていますか。

1. 全く使用しない
2. 20 分未満
3. 20 分以上 40 分未満
4. 40 分以上 1 時間未満
5. 1 時間以上 2 時間未満
6. 2 時間以上

Q 3 3. あなたは、友人や知人と雑談をする場合、以下のどのような手段を好みますか。あてはまるものをいくつでもお選びください。

1. 電子メール
2. LINE 等のメッセージングアプリでのテキストのやりとり
3. Facebook や Twitter 等の SNS でのテキストのやりとり
4. 音声電話 (LINE や Skype 等の無料通話アプリの利用を含む)
5. ビデオ通話 (Zoom、LINE、Skype など)
6. 対面での会話
7. 手紙
8. その他 ()
9. あてはまるものはない

Q 3 4. あなたは、現在の友人との関係に全体としてどのくらい満足していますか。

- | | | | | | |
|----|------|-----------|------|----|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 満足 | やや満足 | どちらともいえない | やや不満 | 不満 | 友人はいない |

Q 3 5. あなたは普段、新型コロナウイルスに感染するのではないかと不安を感じますか。

- | | | | |
|--------|---------|---------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 非常に感じる | ある程度感じる | あまり感じない | 全く感じない |

Q 3 6. あなたは、屋外にいて人がまばらな時、普段マスクを着用しますか。

- | | | | |
|--------|----------|----------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 常に着用する | たいてい着用する | あまり着用しない | 全く着用しない |

Q 3 7. あなたの過去 1 ヶ月間における就寝時間は、主に何時ごろでしたか。

1. 午後 9 時前 (正午以降)
2. 午後 9 時台
3. 午後 10 時台
4. 午後 11 時台
5. 午前 0 時台
6. 午前 1 時以降 (正午まで)

Q 3 8. あなたの過去 1 ヶ月間における眠りの深さは、次のどれにあたりますか。

- | | | | | |
|-------|-------|----|-------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 非常に深い | 比較的深い | 普通 | 比較的浅い | 非常に浅い |

Q 3 9. あなたは、子どもの頃 (15 歳以下)、どのような習い事をしていましたか。あてはまるものをいくつでもお選びください。

1. スポーツ系 (スイミング、野球、サッカー、体操など)
2. 武道・武術系 (柔道、剣道、空手、少林寺拳法など)
3. 芸術系 (ピアノ、バレエ、絵画、華道・茶道など)
4. 学習系 (学習塾、そろばん、書道、英会話など)
5. その他 ()
6. 習い事はしていなかった

執筆者紹介

阪口 祐介	(さかぐち ゆうすけ)	編集・はじめに・第1章	(関西大学総合情報学部教授)
松本 渉	(まつもと わたる)	編集・第1章	(関西大学総合情報学部教授)
西田 尚紀	(にしだ なおき)	第2章	(関西大学ティーチング・アシスタント)
岩元 心紀	(いわもとみのり)	第3章	(関西大学総合情報学部生)
井谷 勇輝	(いたに ゆうき)	第4章	(関西大学総合情報学部生)
中谷 聖哉	(なかたに せいや)	第5章	(関西大学総合情報学部生)
馬上 太一	(もうえ たいち)	第6章	(関西大学総合情報学部生)
今西 凜	(いまにし りん)	第7章	(関西大学総合情報学部生)
岸 凌太郎	(きし りょうたろう)	第8章	(関西大学総合情報学部生)
今村 勇哉	(いまむら ゆうや)	第9章	(関西大学総合情報学部生)

2022 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—

編集 関西大学総合情報学部、発行 関西大学総合情報学部、発行年月 2023 年 3 月

※ 関連する資料として、同時期に発行された『高槻市と関西大学による市民意識調査報告書—令和 4 年度—』（関西大学総合情報学部[編集], 高槻市・関西大学総合情報学部[発行]）があります。本報告書の 3 章～9 章が省略されたものになります。